

道上遺跡第3次・合野遺跡・
小林繁長遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

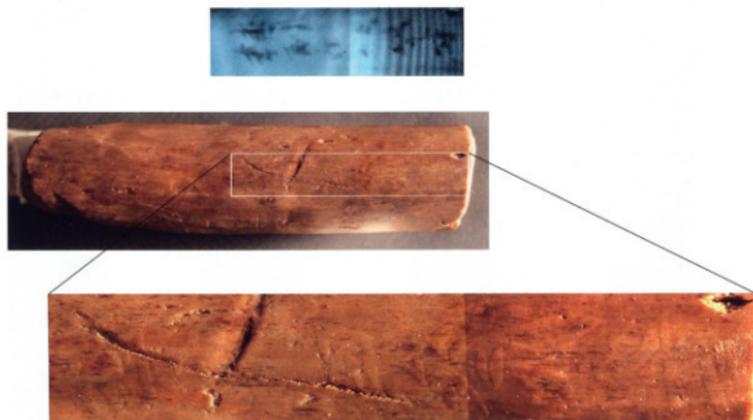


257

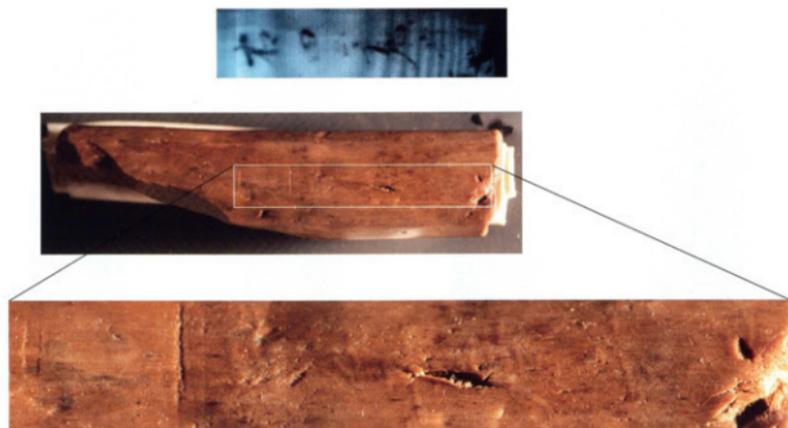
S=1:2

「禁制」木筒

1頁(1)

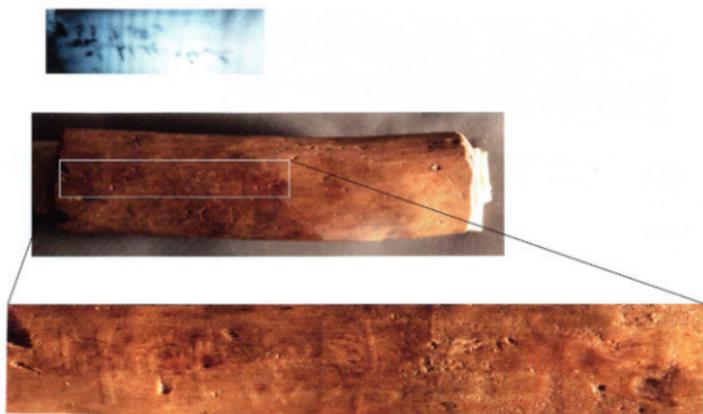


1頁(2)



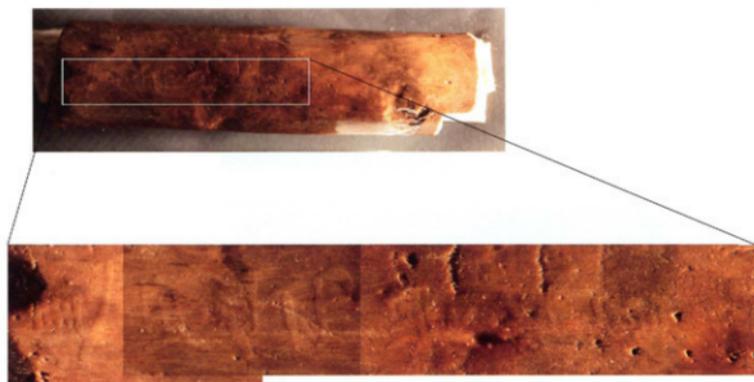
「禁制」木簡微細凹凸接写と赤外線写真(1)

12 木 (1)



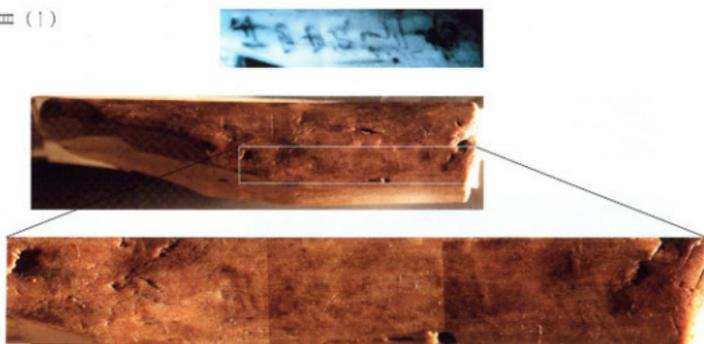
拡大…5倍50%、UV撮影150%、紫外線写真

13 木 (1)



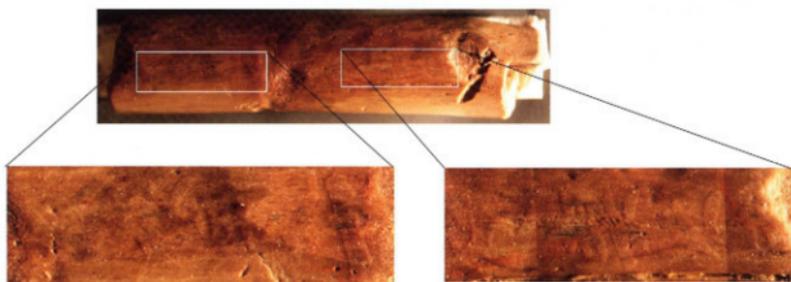
「禁制」木簡微細凹凸接写と赤外線写真(2)

三行目 (1)

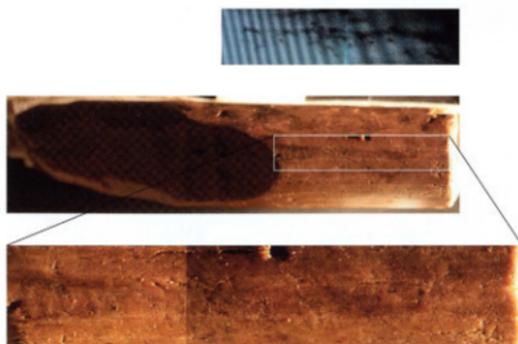


拡大・・・全体：50% 拡大撮影：100% 赤外線：不定

三行目 (1)



四行目



序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業白山地区に関連して平成19年度に発掘調査された奥州市前沢区道土遺跡第3次調査、合野遺跡、小林繁長遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、道土遺跡で平安時代の杭列が検出され、その構成材の一つに「禁制」木簡が転用されていたことが明らかとなりました。該期におけるこの種の木簡は極めて珍しく、2遺跡・3例目となります。また、「字」という表記も確認され、古代東北地方の地名呼称に関わる新知見となるものであります。このほか、木質遺物を大量に含む遺物包含層が確認され、木製品が多量に出土しました。いずれも当地方における該期の諸様相を考える上で極めて貴重な資料となるものであります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県南広域振興局農林部農村整備室、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成21年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧 雄

例 言

- 1 本報告書は、岩手県奥州市前沢区字白山前・字合野・字繁長に所在する道上遺跡第3次調査、合野遺跡、小林繁長遺跡の発掘調査結果を取録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業白山地区に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県南広域振興局農林部農村整備室と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、岩手県南広域振興局農林部農村整備室の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県南広域振興局農林部に農家負担分を補助している。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号および遺跡略号は以下の通りである。
道上遺跡第3次調査・・・遺跡番号NE47-0045/遺跡略号DU-07-03
合野遺跡・・・・・・・・遺跡番号ME47-0084/遺跡略号AN-07
小林繁長遺跡・・・・・・・・遺跡番号LE47-1046/遺跡略号KBSN-07
- 4 調査に関わる期間、面積、担当者は次のとおりである。
野外調査
道上遺跡第3次調査・期間：平成19年4月11日～8月30日
面積：1,889㎡（本調査1,499㎡、確認調査390㎡）担当者：丸山浩治、菊池昌彦
合野遺跡・・・・・・・・期間：平成19年7月2日～10月12日
面積：5,324㎡（本調査4,350㎡、確認調査974㎡）担当者：丸山浩治、菊池昌彦
小林繁長遺跡・・・・・・期間：平成19年4月16日～7月18日
面積：352㎡ 担当者：丸山浩治、菊池昌彦、吉田泰治
室内整理
道上遺跡第3次調査・・・期間：平成19年11月1日～平成20年3月31日 担当者：丸山浩治
合野遺跡・・・・・・・・期間：平成20年1月1日～平成20年1月15日 担当者：菊池昌彦
小林繁長遺跡・・・・・・期間：平成20年1月16日～平成20年2月15日 担当者：菊池昌彦
- 5 報告書の執筆は、第1章を岩手県南広域振興局農林部農村整備室、V章の一部を菊池が、それ以外は編集・構成を含め丸山が担当した。
- 6 木簡の訳読と分析は、国立歴史民族博物館の平川南氏と奥州市総合政策部政策企画課世界遺産登録推進室の石崎高臣氏にお願いし、玉稿を賜った（Ⅲ章3節）。
- 7 試料の分析・鑑定、保存処理は次の方々・機関・団体に委託した。
テフラ同定・・・・・・・・弘前大学 柴 正敏 石器石材鑑定・・・・・・・・花崗岩研究会
土壌分析・樹種同定・・・古代の森研究所 木製品・鉄製品保存処理・・・岩手県立博物館
放射性炭素年代測定・・・株式会社加速器分析研究所
- 8 空中写真撮影は、東邦航空株式会社に委託した。
- 9 調査および報告書作成にあたり、次の方々から御指導・ご助言をいただいた（順不同・敬称略）。
平川 南（国立歴史民俗博物館）、三上喜孝（山形大学）、名久井文明（物質文化研究所一芦舎）、及川真紀・石崎高臣（奥州市総合政策部）、佐藤良和・千田幸生・伊藤みどり（奥州市埋蔵文化財調査センター）
- 10 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 11 調査成果は当センターホームページ、調査概報等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡 例

1 遺構実測図の用例は下記のとおりである。

(1) 遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

杭列	1/30~1/40
遺物包含層・捨て場	1/60
整地層	1/50・1/150
掘立柱建物	1/50
土坑	1/50
溝	1/50~1/200
柱穴列・柱穴状土坑	1/60・1/100

(2) 推定線は破線で示した。

(3) 層位の表記には、基本層序にローマ数字、各遺構埋土にアラビア数字を使用した。

(4) 土層色調の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。混入物量(%)の目安もこれを参考にした。

(5) 図面中の土器は「p」、石器および礫は「s」の略号で表記した。

(6) 挿図中で使用した網掛けおよびスクリーントーンの主な用例は凡例図のとおりである。これ以外の使用箇所については各図に用例を表記した。

2 遺物実測図の用例は下記のとおりである。

(1) 各遺物の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

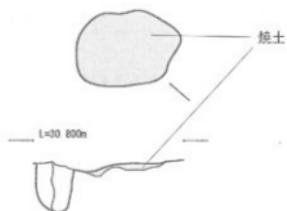
土師器・須恵器	1/3
土製品	1/2
木質遺物	1/2~1/8
鉄製品	1/1~1/2
縄文土器	1/3
石器	2/3~1/3
陶磁器	1/3

(2) 遺物の計測位置およびスクリーントーンの用例は凡例図のとおりである。計測値は、残存値の場合()で表記した。

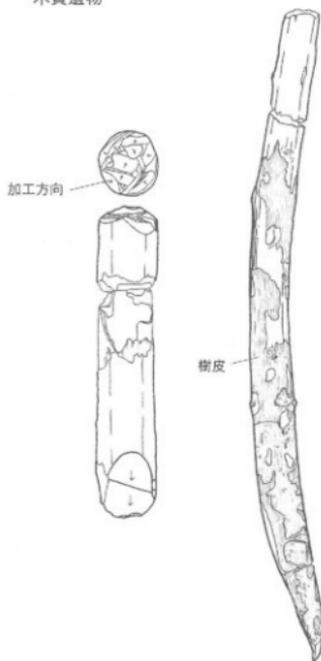
3 国土地理院発行の地形図を転載したものは、図中に図幅名と縮尺を付した。

4 引用・参考文献は各章末に記した。

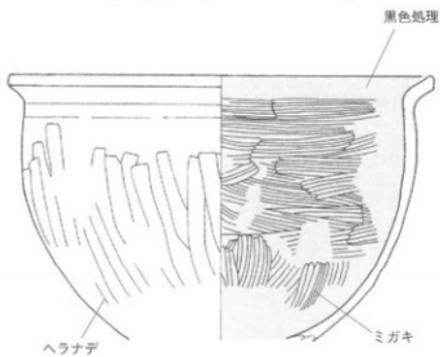
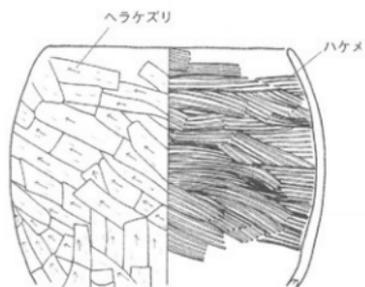
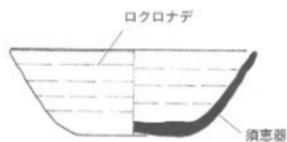
遺構



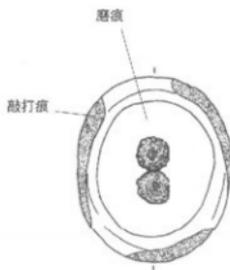
木質遺物



土器 (古代)



石器



目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 遺跡の位置	1
2 地理・地形的環境	1
3 基本土層	4
III 調査と整理の方法	7
1 野外調査	7
2 室内整理	11
IV 道上遺跡第3次調査	13
1 調査の概要	13
2 検出遺構	13
3 出土遺物	39
V 合野遺跡	101
1 調査の概要	101
2 検出遺構	101
3 出土遺物	122
VI 小林繁長遺跡	126
1 調査の概要	126
2 検出遺構	126
3 出土遺物	127
VII 自然科学的分析	133
1 道上遺跡第3次調査の放射性炭素年代測定 (AMS測定)	133
2 道上遺跡第3次調査出土の火山灰について	139
3 道上遺跡より出土した加工材と木製品の樹種	141
4 道上遺跡の平安時代頃の植生と生業	151

Ⅷ 総 括	159
1 ま と め	159
2 各事象の検討	160
3 道上遺跡第3次調査出土木簡の概要とその意義	165
報告書抄録	253

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第35図 木質遺物 (1)	61
第2図 遺跡周辺の標高と水系	3	第36図 木質遺物 (2)	62
第3図 基本土層	6	第37図 木質遺物 (3)	63
第4図 グリッド配置図	9	第38図 木質遺物 (4)	64
第5図 道上遺跡第3次調査遺構配置図 (1)	21	第39図 木質遺物 (5)	65
第6図 道上遺跡第3次調査遺構配置図 (2)	22	第40図 木質遺物 (6)	66
第7図 杭列 (1)	23	第41図 木質遺物 (7)	67
第8図 杭列 (2)	24	第42図 木質遺物 (8)	68
第9図 杭列 (3)	25	第43図 木質遺物 (9)	69
第10図 杭列 (4)	26	第44図 木質遺物 (10)	70
第11図 杭列 (5)	27	第45図 木質遺物 (11)	71
第12図 溝・整地層・土坑	28	第46図 木質遺物 (12)	72
第13図 柱穴列・柱穴状土坑	29	第47図 縄文土器 (1)	73
第14図 遺物捨て場	30	第48図 縄文土器 (2)	74
第15図 遺物包含層出土分布土師器・須恵器	31	第49図 縄文土器 (3)	75
第16図 遺物包含層出土分布縄文土器	32	第50図 縄文土器 (4)	76
第17図 遺物包含層木質遺物出土状況 (1)	33	第51図 縄文土器 (5)	77
第18図 遺物包含層木質遺物出土状況 (2)	34	第52図 縄文土器 (6)	78
第19図 遺物包含層木質遺物出土状況 (3)	35	第53図 縄文土器 (7)	79
第20図 遺物包含層木質遺物出土状況 (4)	36	第54図 縄文土器 (8)・土製品	80
第21図 遺物包含層木質遺物出土状況 (5)	37	第55図 石器 (1)	81
第22図 遺物包含層木質遺物出土状況 (6)	38	第56図 石器 (2)	82
第23図 土師器・須恵器 (1)	49	第57図 石器 (3)	83
第24図 土師器・須恵器 (2)	50	第58図 石器 (4)	84
第25図 土師器・須恵器 (3)	51	第59図 石器 (5)	85
第26図 土師器・須恵器 (4)	52	第60図 石器 (6)	86
第27図 土師器・須恵器 (5)	53	第61図 石器 (7)	87
第28図 土師器・須恵器 (6)	54	第62図 石器 (8)	88
第29図 土師器・須恵器 (7)	55	第63図 石器 (9)	89
第30図 土師器・須恵器 (8)	56	第64図 石器 (10)	90
第31図 土師器・須恵器 (9)	57	第65図 石器 (11)	91
第32図 土師器・須恵器 (10)	58	第66図 土製品・鉄製品・陶器	92
第33図 土師器・須恵器 (11)	59	第67図 合野遺跡遺構配置図 (1)	109・110
第34図 土師器・須恵器 (12)	60	第68図 合野遺跡遺構配置図 (2)	111

第69回	堅穴住居 (1)	112	第79回	出土遺物 (1)	123
第70回	堅穴住居 (2)	113	第80回	出土遺物 (2)	124
第71回	溝 (1)	114	第81回	出土遺物 (3)	125
第72回	溝 (2)	115	第82回	小林繁長遺跡遺構配置図	128
第73回	陥し穴・土坑 (1)	116	第83回	掘立柱建物	129・130
第74回	土坑 (2)	117	第84回	溝	131
第75回	掘立柱建物 (1)	118	第85回	出土遺物	132
第76回	掘立柱建物 (2)	119	第86回	土師器・須恵器形態分類図	160
第77回	柱穴列・柱穴状土坑 (1)	120	第87回	田に掲示された木簡 (1)	166
第78回	柱穴状土坑 (2)	121	第88回	田に掲示された木簡 (2)	167

目 次

第1表	層序関係対応表	4	第10表	合野遺跡土師器・須恵器観察表	125
第2表	道上遺跡土師器・須恵器観察表	92	第11表	合野遺跡陶磁器観察表	125
第3表	道上遺跡土製品観察表	96	第12表	合野遺跡縄文土器観察表	125
第4表	道上遺跡木質遺物観察表	96	第13表	合野遺跡石器観察表	125
第5表	道上遺跡鉄製品観察表	98	第14表	合野遺跡木質遺物観察表	125
第6表	道上遺跡縄文土器・土製品観察表	98	第15表	小林繁長遺跡柱穴観察表	131
第7表	道上遺跡陶器観察表	99	第16表	小林繁長遺跡縄文土器観察表	132
第8表	道上遺跡石器・石製品観察表	100	第17表	小林繁長遺跡石器観察表	132
第9表	合野遺跡柱穴・柱穴状土坑観察表	121	第18表	小林繁長遺跡須恵器観察表	132

写真図版目次

写真図版1	航空写真	173	写真図版21	完掘状況 (3)、調査風景	193
写真図版2	試掘風景	174	写真図版22	調査前風景、基本土層など	194
写真図版3	調査風景・基本土層 (1)	175	写真図版23	堅穴住居 (1)	195
写真図版4	基本土層 (2)	176	写真図版24	堅穴住居 (2)	196
写真図版5	1号杭列	177	写真図版25	溝 (1)	197
写真図版6	2号杭列 (1)	178	写真図版26	溝 (2)	198
写真図版7	2号杭列 (2)	179	写真図版27	溝 (3)	199
写真図版8	3号杭列 (1)	180	写真図版28	溝 (4)	200
写真図版9	3号杭列 (2)	181	写真図版29	土坑 (1)	201
写真図版10	3号杭列 (3)、1号杭	182	写真図版30	土坑 (2)	202
写真図版11	溝、盛り地層	183	写真図版31	掘立柱建物 (1)	203
写真図版12	土坑、柱穴状土坑、柱穴列 (1)	184	写真図版32	掘立柱建物 (2)、遺物出土状況	204
写真図版13	柱穴列 (2)	185	写真図版33	柱穴列、柱穴状土坑 (1)	205
写真図版14	遺物出土状況 (1)	186	写真図版34	柱穴状土坑 (2)	206
写真図版15	遺物出土状況 (2)	187	写真図版35	調査区全景、掘立柱建物 (1)	207
写真図版16	遺物出土状況 (3)	188	写真図版36	掘立柱建物 (2)	208
写真図版17	遺物出土状況 (4)	189	写真図版37	掘立柱建物 (3)	209
写真図版18	遺物出土状況 (5)	190	写真図版38	掘立柱建物 (4)、溝	210
写真図版19	完掘状況 (1)	191	写真図版39	道上遺跡出土遺物 (1)	211
写真図版20	完掘状況 (2)	192	写真図版40	道上遺跡出土遺物 (2)	212

写真図版41	道上遺跡出土遺物 (3)	213	写真図版62	道上遺跡出土遺物 (24)	234
写真図版42	道上遺跡出土遺物 (4)	214	写真図版63	道上遺跡出土遺物 (25)	235
写真図版43	道上遺跡出土遺物 (5)	215	写真図版64	道上遺跡出土遺物 (26)	236
写真図版44	道上遺跡出土遺物 (6)	216	写真図版65	道上遺跡出土遺物 (27)	237
写真図版45	道上遺跡出土遺物 (7)	217	写真図版66	道上遺跡出土遺物 (28)	238
写真図版46	道上遺跡出土遺物 (8)	218	写真図版67	道上遺跡出土遺物 (29)	239
写真図版47	道上遺跡出土遺物 (9)	219	写真図版68	道上遺跡出土遺物 (30)	240
写真図版48	道上遺跡出土遺物 (10)	220	写真図版69	道上遺跡出土遺物 (31)	241
写真図版49	道上遺跡出土遺物 (11)	221	写真図版70	道上遺跡出土遺物 (32)	242
写真図版50	道上遺跡出土遺物 (12)	222	写真図版71	道上遺跡出土遺物 (33)	243
写真図版51	道上遺跡出土遺物 (13)	223	写真図版72	道上遺跡出土遺物 (34)	244
写真図版52	道上遺跡出土遺物 (14)	224	写真図版73	道上遺跡出土遺物 (35)	245
写真図版53	道上遺跡出土遺物 (15)	225	写真図版74	道上遺跡出土遺物 (36)	246
写真図版54	道上遺跡出土遺物 (16)	226	写真図版75	道上遺跡出土遺物 (37)	247
写真図版55	道上遺跡出土遺物 (17)	227	写真図版76	道上遺跡出土遺物 (38)	248
写真図版56	道上遺跡出土遺物 (18)	228	写真図版77	道上遺跡出土遺物 (39)	249
写真図版57	道上遺跡出土遺物 (19)	229	写真図版78	道上遺跡出土遺物 (40)	250
写真図版58	道上遺跡出土遺物 (20)	230	写真図版79	合野遺跡出土遺物 (1)	251
写真図版59	道上遺跡出土遺物 (21)	231	写真図版80	合野遺跡出土遺物 (2)	252
写真図版60	道上遺跡出土遺物 (22)	232	写真図版81	小林峠長遺跡出土遺物	252
写真図版61	道上遺跡出土遺物 (23)	233			

I 調査に至る経過

道上、合野、小林繁長の3遺跡は、経営体育成基盤整備事業白山地区の施工に伴い事業区域内に位置することから、埋蔵文化財調査を実施することになったものである。

本事業は、前沢区白山地区の約270haをほ場整備するもので、大部分は昭和29年～31年の非補助土地改良事業により10a区画に整備されているが、農道幅員が2～3mと狭小で農作業の効率が悪く、水路は用排兼用土水路のため用水不足や排水不良をきたし維持管理に多大な労力を投じている現状である。よって本事業により営農規模拡大を目指した大区画ほ場とし、作業体系の受委託および農地の流動化を促進し経営規模拡大による担い手農家の育成を図ると共に、生産コスト低減のための整備を行い近代農業化による農業経営の安定を期するものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、ほ場整備事業主体の水沢地方振興局農政部農村整備室（県南広域振興局農林部農村整備室）が、平成15年12月3日付け水地農整第663—1号（道上遺跡）、平成16年9月30日付け水地農整第396—3号（合野遺跡）、平成17年9月30日付け水地農整第597号（小林繁長遺跡）で県教育委員会に試掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教育委員会は、平成15年12月24日付け教生第1550号（道上遺跡）、平成17年1月7日付け教生第1409号（合野遺跡）、平成17年12月20日付け教生第1368号（小林繁長遺跡）でそれぞれ回答を行い、いずれの遺跡も発掘調査が必要となった。これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することになった。

（岩手県南広域振興局農林部農村整備室）

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置（第1図）

道上遺跡、合野遺跡、小林繁長遺跡の3遺跡は、JR東北本線前沢駅から北東約4km、北上川（北西）岸の海拔30m前後の河岸段丘上にある。その位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「前沢」N J-54-14-14-2図幅に含まれており、北緯39度04分27秒、東経141度09分41秒付近（世界測地系）である。遺跡は胆沢扇状地の水沢高水位丘面東端部の中央付近に位置し、南東側を北上川、東西双方を小河川によって画された河岸段丘の微高地上および旧河道上に形成された低湿地上に広がっている。現状では微高地の大部分が宅地・畑地であり、低地部分は開墾されて水田となっている。なお、道上第3次調査区の北側微高地上には、平成17・18年度に当埋蔵文化財センターにより調査が行われた道上遺跡第1次・第2次調査区が接する。

2 地理・地形的環境（第2図）

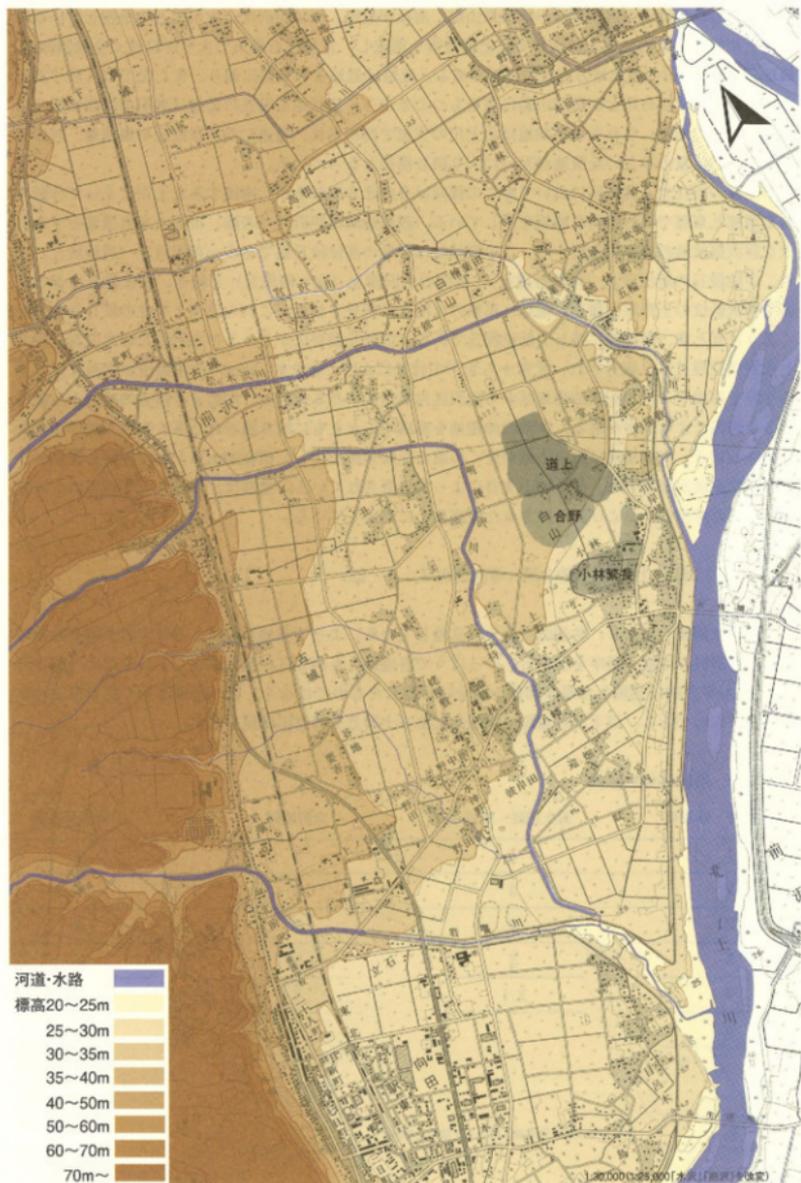
3遺跡は、岩手県奥州市前沢区白山字白山前・字合野・字繁長に所在する。奥州市は平成18年2月20日の市町村合併により、水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村の5市町村を集め新設された名称である。遺跡の所在する前沢区（旧前沢町）は岩手県南の内陸部に位置し、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地にある。この盆地は南流する北上川によって盛岡以北を上流域、盛岡～前沢間を中流域、前沢以南を下流域と3区域に区分されている。前沢区はこの中流域南

1 遺跡の位置



1:25,000 前沢

第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の標高と水系

端に位置し、北は水沢区、東は一関市東山町、南は平泉町、西は胆沢区、衣川区と境を接している。

北上川は岩手県内に南北に延びる北上低地帯を南流し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ全長249km、流域面積10,150km²の東北地方有数の河川である。流路は低地帯の東側に偏り、また北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どが奥羽山脈に源をもつことから、扇状地や段丘の発達は奥羽山脈側に接する西側で良好である。これらの扇状地は北上川の支流で開析され、発達した河岸段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互に入り組む構造となっている。

本遺跡の所在する前沢区においてもこの傾向はそのまま現れるが、南流する北上川によって分断される西部と東部では対照的な様相を示している。西部地域は胆沢区の若柳、市野々を扇頂部とする広大な胆沢扇状地の東部に位置する。この扇状地は南端の高位段丘面である一首坂段丘（西根段丘）から、中位段丘の胆沢段丘（村崎野段丘）、低位の水沢段丘（金ヶ崎段丘）と続き、中位段丘はその比高で順次低位の上野原、横道、堀切、福原の4段丘に細分される。これら高位と中位の段丘を取り巻くように北と南、扇端部に接して低位段丘である水沢段丘面が広がる。この水沢段丘は水沢高位段丘と水沢低位段丘に2細分され、北常から北下中付にかけて南北約1.5kmの沖積低地が東西に走り谷底平野を形成する。水沢区姉妹地区から前沢区白鳥川にいたる地区は、国道4号西方の段丘から流出する小河川による開析が進み、無数の沖積地を形成するとともに削り残された多くの微高地が存在する。いっぽう、東部地域は北上山地が近くに迫る丘陵地帯を呈し、標高90m以上の侵食面と標高50～90mの段丘面が認められ、多くの小支谷によって分断されている。遺跡は、これら大小河川によって開析された沖積面、および削り残された微高地上に立地している。

3 基本土層（第3図、写真図版3・4・22）

3遺跡は隣接しており、共通の段丘上に立地している。よって微地形差による特定の土層を除けば基本的に類似の土層・層序を呈する。いっぽうで各遺跡とも調査区が複数点在しているため（第4図参照）、水平方向に連続した層序関係を完全に確認したものではなく、その関係はあくまで推定の域を出ないものである。以下、各遺跡で記録した基本土層とその対応関係を示す。

第1表 層序関係対応表

道土遺跡・低湿地	道土遺跡・微高地	合野遺跡	小林繁長遺跡
I	I	I	I
II	II	II	II
III	III	III	III
IV	X	IV	IV
V	XI	V	V
VI			
VII			
VIII			
IX			

※低湿地IX層と微高地X層は上下関係未確認。

道上遺跡第3次調査 調査区は3箇所に分かれる(1~3区)。この範囲内には微高地と低湿地(旧河道)があり、Ⅳ~Ⅷ層は低湿地内限定(旧河道①)の堆積で、2区にのみ確認される。Ⅳ~Ⅷ層はすべて水成堆積層で、Ⅷ層以外のⅣ~Ⅷ層は基本的に静態で堆積した泥炭層である。堆積時期は、出土遺物およびⅤ層の存在から平安時代と判明している。Ⅴ層は十和田aテフラ(以降「To-a」と表記)で、Ⅷ-7~Ⅷ-13ライン付近および排特1号排水路南東壁付近では成層(層厚5cm以下)するものの、それ以外の地点は断続的な層状を呈するもしくは堆積しない。Ⅳ層とⅥ層はⅤ層のテフラを境に分層したものであるが、その生成要因は同一で、土質、色調とも非常に似通る。また、Ⅷ層は北西-南東方向の小規模な河道(旧河道②)により堆積した砂礫を含む泥炭層で、ⅧE6ライン付近にのみ分布する。本河道はⅧ層堆積中に発生したものである。なお、1区、2区の北端・南端、3区は微高地であり、Ⅳ~Ⅷ層は存在しない。削平も進んでおり、1区および3区は全域で現表土直下がⅩ層となる。ただしこのⅩ層について、1区および2区の北端はシルト質、2区の南端および3区は砂質が強いという違いがある。3区はより削平が強く、Ⅹ層上位も相当欠落しているものと考えられる。また、旧河道①内で確認したⅩ層とこのⅩ層との層序関係については、連続断面として確認していないため不明である。生成要因的には同一過程のものと考えられる。

合野遺跡 調査区は3箇所に分かれる(1~3区)。ただし、当センターの調査区外をつなぐように奥州市埋蔵文化財調査センターの調査区が存在しており、すべて連続した層序として確認している。当センター調査区の立地は微高地上にほぼ限定されており、さほど複雑ではない。ただし、開田時の地形改変が激しく、Ⅲ層が残存する地点は1区ⅥAグリッドの一部に限られる。その他は、すべてⅢ層が欠落し、現表土直下がⅣ層となる。

小林繁長遺跡 本遺跡は微高地上に立地している。調査区は2箇所に分かれるが(1・2区)、いずれも同一面に立地するため層序は同一である。道上のⅩ層、合野のⅣ層が本遺跡のⅤ層にあたるものと捉えられる。本遺跡周辺も開田時の地形改変が激しく、1区東半部および2区西半部で現表土直下がⅤ層となる。

Ⅲ 調査と整理の方法

1 野外調査

(1) 調査経過

年度当初の調査計画では、道上遺跡第3次調査が4月11日から5月15日、合野遺跡が5月16日から8月31日、小林繁長遺跡が9月1日から9月30日までというスケジュールが組まれていた。しかし、ほ場整備事業の設計変更に伴う調査範囲および面積の変更や、施工順序の入れ替えなどの要請が頻繁になされ、また道上遺跡第3次調査における想定外の遺構・遺物出土とそれに伴う調査面積増などにより、各遺跡の調査期間や面積等が大幅に変更となった。

- 4月11日 [道上] 調査開始。
- 4月12日 [道上] 調査範囲杭の設定および確認のため、県南広域振興局の当事業担当者2名、ほ場整備請負業者代表1名来跡。結果、一部に変更が生じ同部分は確定まで作業不可となる(排特1号排水路)。
- 4月16日 [道上] 重機搬入。検出面までの掘削開始。
[小林繁長]調査開始。常時調査はせず、降雨および湧水等により道上の作業が不可能な場合等、合間をみて作業実施。
- 4月20日 [道上] M F12dグリッドのM層 (To-aテフラ下位5~10cm) から木質遺物(掲載番号285)出土。
[道上・小林繁長]基準点打設。
- 5月1日 [道上] 試掘の結果、小排水路第74号中央付近は地表下2mでも無遺物層まで到達しないことが判明。調査掘削深度の件について岩手県教育委員会生涯学習文化課(以下、「県教委生文課」と表記)に指導を要請し、現地確認のため同課担当者3名来跡。
- 5月2日 [道上] 木質遺物等包含層の取り扱いおよび排特1号排水路等の調査範囲変更に関する現地協議(県教委生文課、県南広域振興局担当者各2名)。
- 5月15日 [道上] 排特1号排水路・小排水路第73号の調査範囲および面積変更、小排水路第74号の工法変更に伴う現地協議(県教委生文課、県南広域振興局担当者各1名)。
- 5月16日 [道上・小林繁長] 支線道路第50号・小排水路第73号、支線道路第49号の調査範囲について現地で確認(県南広域振興局、ほ場整備請負業者代表各1名)。
- 6月7日 [道上・小林繁長] 道上遺跡1区および2区の支線道路第46号、小林繁長遺跡2区の部分終了確認。
- 6月18日 菊池調査員が瀬原Ⅱ遺跡へ移動(～26日)。
- 6月19日 [小林繁長] 吉田調査員合流(～26日)。
[合野]現地確認。
- 7月2日 [合野] 調査開始。
- 7月13日 [道上・小林繁長] 終了確認。この際、新たに道上遺跡2区の西側96㎡の追加調査が決定。
- 7月18日 [道上] 当初調査区埋め戻し(～24日)。
[小林繁長]埋め戻し。調査終了。
- 7月23日 [合野] 基準点打設。

- 7月25日 [道上] 追加調査区の調査開始。合野遺跡との並行調査となり、調査員・作業員ともに分割。
- 8月3日 [道上] 追加された調査区のさらに西側に関する対応についての現地協議（県教委生文課担当2名、当センター調査第二課長）。
- [合野]支線道路第44号の調査に関わる現地協議(同上)。
- 8月29日 [道上] 終了確認。
- 8月30日 [道上] 調査終了。
- 9月25日 [合野] 終了確認。
- 9月26日 [道上・合野・小林繁長] 航空写真撮影。
- 9月27日 [合野]現地公開。併せて道上遺跡出土遺物も公開。奥州市立古城小学校6年生18名など、参加者計84名。
- 10月3日 [合野] 奥州市立白山小学校6年生8名が現場見学。
- 10月12日 野外調査の一切を終了。資材搬出、撤収。

(2) グリッド設定 (第4図)

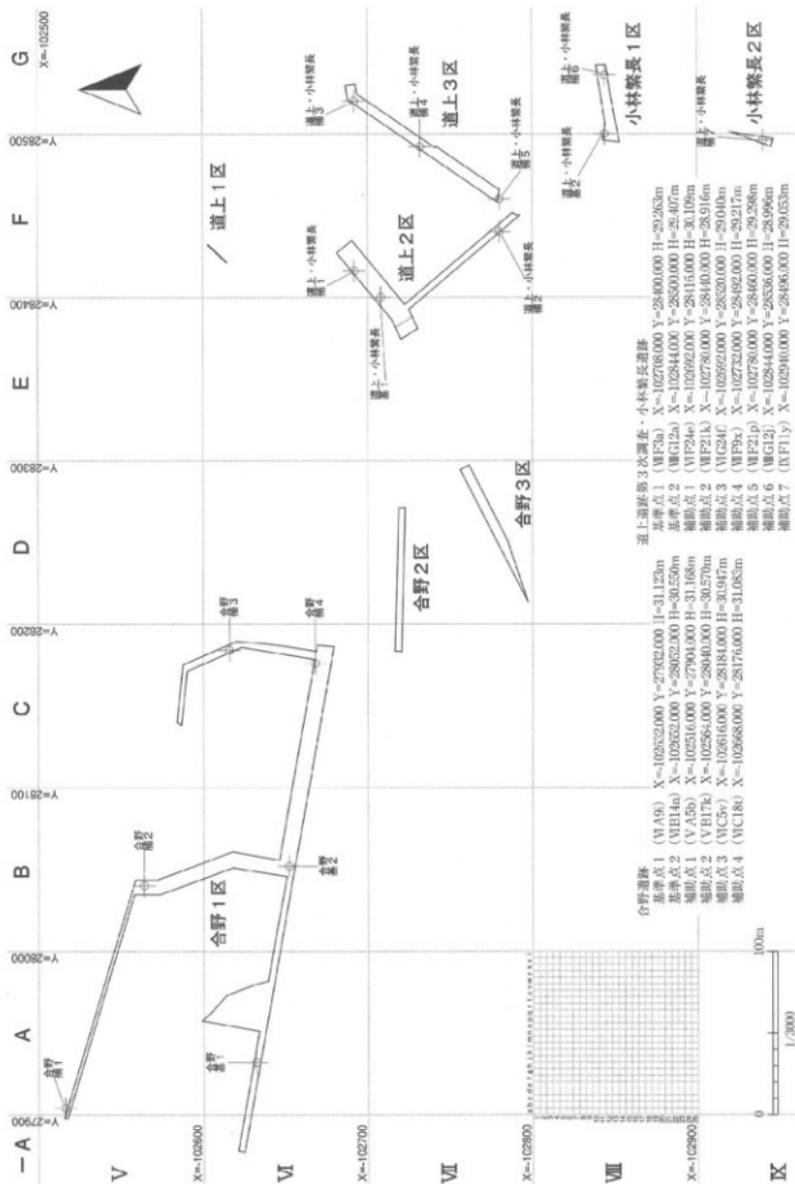
グリッド設定にあたっては、過去2次にわたる調査が実施された道上遺跡のグリッドをそのまま踏襲することとした。合野遺跡、小林繁長遺跡に関しても、道上遺跡と近接し、地形的にも大差ないことから、そのままこれを拡張する形でカバーしている。

ここで、改めてグリッドの設定方法について説明する。グリッドの軸には世界測地系の座標を用い、このメッシュに沿うよう設定した。起点は北西方向である。大グリッドの規模は100m角とし、北から南へ向かってⅠ～Ⅳのローマ数字、西から東へ向かってA～Fのアルファベット大文字を付した。ただし、合野遺跡の西部は大グリッドAの範囲よりさらに西側へ続くため、Aの西側を-Aとしてカバーした。各大グリッド内をさらに4m角で625分割し、北から南へⅠ～25のアラビア数字、西から東へa～yのアルファベット小文字を付し、小グリッドを設定した。小グリッドの呼称方法は、大・小グリッドの北南・西東名称の組み合わせにより「ⅠA1a」、「ⅣE7y」のようになる。本文中のグリッド呼称は基本的に小グリッド名を用いている。なお、道上遺跡の遺物捨て場に関しては、小グリッドをさらに1m角で16分割し、小グリッド名の後に- (ハイフン) とアラビア数字の連番(1～16)を付し、「ⅣF1e-1」のように呼称した。アラビア数字の連番の流れは、北西隅から東へ1～4、次に1段南へ下がり4～8というようになる。

なお、現場に打設し基点として用いた杭の名称、グリッド、座標値、標高値は第4図に記載のとおりである。

(3) 粗掘・遺構検出

最初に、県教委生文課により実施された試掘結果に基づき、その試掘坑(トレンチ)を再掘削し、遺構・遺物の検出層位と状態、堆積土層の確認と把握を行った。その上で、本試掘箇所にて新規にトレンチを設定し、同様の作業を実施している。作業に際しては、遺構・遺物検出箇所付近はその検出面まで、それ以外の部分は最終遺構検出面とされる褐～黄褐色土を目安に掘り下げ、層理面にて検出を順次行った。結果、合野遺跡および小林繁長遺跡に関してはほぼ全域で褐～黄褐色土の堆積が確認され、それ以下は部分的にさらに30cmまで掘り抜き、より下位に黒色土層がないか調査し、存在しないことを確認した。これにより、遺構・遺物検出面は、合野遺跡ではⅢ・Ⅳ層、小林繁長遺跡ではⅢ・



第4図 グリッド配図

IV・V層の各上面とし、それぞれ検出・精査を実施している。削平を受け黒～黒褐色土層以上が消失している箇所が非常に多く、大半は褐色土層以下での検出となった。

いっぽう道上遺跡においては、調査対象範囲の約半分が低湿地・旧河道（旧河道①）にあっており、堆積が極めて厚いことが判明した。事業名称でいうところの掛特1号排水路、小排水路第74号部分である。旧河道①範囲内における県教委生文課の試掘は、現地表面から30～50cm下までの掘削に止まっており、それより下位の状況が全く不明であった。このため、遺構・遺物の有無および最終検出面（褐色土面もしくは旧河道河床面）の確認を目的として、同試掘箇所のさらなる掘り下げを行った。結果、泥炭層中に木質遺物を包含することが確認された。最終検出面は、旧河道両岸にあたる南北端部において現地表面下1～1.5mで青灰色の粘土～砂層が確認され、これを部分的に約50cm下位まで掘削したものの遺構・遺物とも皆無であったことから同層上面と定めた。他方、旧河道中央部（小排水路第74号部分）は遺物を包含する泥炭層が現地表面下約1.5mよりさらに下位にも続き、最終検出面が確認できない状況であった。安全面からこれより下位の掘削は危険と判断し、また小排水路第74号の工事掘削深度が現地表面から約75cm下位、標高28.16～28.34mで収まることから、これに保護層分を加えた標高28.00mまでの調査に止め、以下は保存扱いとなった。

（4）遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

竪穴住居の調査は四分法を、その他の遺構については二分法を原則として、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、上層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影および実測を順次行った。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については遺構名と出土層位名または相対的層位（上位、中位、下位、床・底面直上、床・底面）を記し、このうち床・底面直上以下出土分については個々に出土位置を記録した。遺構外出土分のうち、木質遺物および鉄製品については基本的に個々の出土位置を記録している。それ以外はグリッド毎に層位を記して取り上げた。

（5）遺構の名称

呼称方法については、野外調査段階では「1号〇〇」のように呼称していたが、道上遺跡の過年度調査分に従い、竪穴住居…S I、柱穴列…S A、掘立柱建物…S B、土坑…S K、溝…S Dの冠名を用い、それにアラビア数字の連番号を付して「S I 01竪穴住居」のように変更した。これらに該当しない、杭列、整地層、遺物包含層については、「1号杭列」のように呼称している。なお、道上遺跡におけるアラビア数字の番号は、過年度調査分を引き継ぎず、改めて1もしくは01から開始している。

個々の遺構名については、野外調査時に欠番が生じたもの等に対し室内整理時に連番となるような名称変更を行った。変更した遺構の新旧名称の対応は以下のとおりである（合野遺跡のみ）。

野外名	→	報告名	野外名	→	報告名	野外名	→	報告名
9号溝	→	S D 04溝	16号溝	→	S D 11溝	2号土坑	→	S K 03土坑
10号溝	→	S D 05溝	17号溝	→	S D 12溝	3号土坑	→	S K 04土坑
11号溝	→	S D 06溝	18号溝	→	S D 13溝	4号土坑	→	S K 05土坑
12号溝	→	S D 07溝	19号溝	→	S D 14溝	5号土坑	→	S K 06土坑
13号溝	→	S D 08溝	20号溝	→	S D 15溝	6号土坑	→	S K 07土坑
14号溝	→	S D 09溝	1号陥し穴	→	S K 01土坑	7号土坑	→	S K 08土坑
15号溝	→	S D 10溝	1号十坑	→	S K 02土坑	8号土坑	→	S K 09土坑

掘立群 → S B01・02掘立柱建物

(6) 写真撮影

写真撮影は、35mmモノクローム・カラーリバーサル、および6×9判モノクロームの3種のフィルムを使用し、さらにコンパクトデジタルカメラをメモ的に使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。その他、全調査終了間際（合野遺跡調査時）にセソナ機による航空写真撮影を実施している（平成19年9月26日）。

2 室内整理

(1) 遺物整理の方法

遺物は、各種別に分類したのち出土地点ごとに重量計測を行い、接合作業を実施して掲載分と不掲載分に細分類し、前者については仮番号を付し登録を行った。登録にあたっては、種別ごとに異なる種類の番号を付している。その後、報告書掲載遺物が最終的に決定した段階で、新たに各種別共通となるアラビア数字の連番による掲載番号を付した。

なお、掲載遺物の選択に際しては、各遺物種別共通してまず第1に出土地点を優先し、1層あるいは掘立出土遺物は基本的に除外した。各遺物種別の掲載基準は下記のとおりである。

本報告書では、出土遺物量の記載を遺物種により3種類の方法で行っている。基本は「g」あるいは「kg」単位での重量表記で、土器・陶磁器類はすべてこの方法である。土器の計量は出土地点単位ごとに実施している。石器、鉄製品は点数記載を主とし、これに重量記載を併記している。石器類は事前にツールと剥片および素材に分類し、ツールについては個々に仮番号を付して登録台帳作成と計量を行っている。剥片および素材については個々の計量はせず出土地点単位で計量し、遺物数はカウントのみに留めた。木質遺物については、含水量に左右されるため重量表記は行わず、点数表記のみとしている。なお、各遺物における遺物種別毎の出土量については次章に記述している。

縄文土器

- a 掲載遺物の選択基準…文様および形態変化が集中するため口縁部が残存するものを優先している。胴部は器形を復元できるものおよび特徴的な文様を有するもの、底部は底径が復元できるものおよび底面に特徴的な痕跡が見られるものに限定して掲載している。
- b 実測…文様の表現については客観性を重要視し、拓本を多用した。径の推定可能なもの（1/4以上残存）は復元実測を行った。

石器

- a 掲載遺物の選択基準…遺構内出土分以外は完形品を優先して掲載した。点数の多い器種については、完形品であっても不掲載としたものもある。
- b 実測…調整部位や打面・打点など、最低限必要と判断した部位のみ展開し、省力化に努めた。

土師器・須恵器

- a 掲載遺物の選択基準…形態変化が集中する口縁部が残存するものを優先している。ただし、出土数の少なかった器種（壺・甕など）についてはその限りではない。底部は底径が復元できるものおよび特徴的な痕跡が見られるものに限定して掲載している。なお、墨書もしくは刻書が施されている

るものについては全点を掲載した。

b 実測…径の推定可能なもの（1/4以上残存）を優先している。

陶磁器

掲載遺物の選択基準…古代～中世に属するものは出土点数が少ないため全点掲載した。近世以降のものについては器形の復元できるもののみ選択している。

木質遺物

a 掲載遺物の選択基準…杭は、遺構に絡むものは全点掲載した（一部は写真のみの掲載）。板材や角材と推定されるものおよび伐採痕のみが確認されるものについては、加工痕や形状などの面で特徴的なもののみ選択している。それ以外（いわゆる木器・木製品）については基本的に全点掲載した。

b 実測…断面に木目を記載した。挽物の木器で径の推定可能なもの（1/4以上残存）は復元実測を行った。

鉄製品

掲載遺物の選択基準…煙管以外の製品を全点掲載した。

（2）写真撮影

当センター写真室において、専属の期限付職員がデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS1Mark II）を用い撮影した。木筒（掲載番号257）については、岩手県立博物館において赤外線カメラによる撮影を、また、墨書部分の微細な凹凸を撮影するため極端に陰影をつけた方法でのデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS5D）による接写を行っている。

（丸山）

IV 道上遺跡第3次調査

1 調査の概要

今次調査の当初対象面積は、本調査区1,698㎡、確認調査区300㎡の計1,996㎡であったが、調査途中で工事用地の設計変更による調査範囲変更や調査区域の追加などが複数回重なり、最終的に本調査区1,499㎡、確認調査区390㎡の計1,889㎡を調査した。なお、確認調査区とは、遺構もしくは遺物が検出された時点で掘削を中止し、その段階での記録を作成して調査終了とするもので、以下の未調査部分は保存されるというものである。

このほか、2区中央部の小排水路第74号北～中央部に関しては、Ⅲ章1節(3)で記述したとおり標高28,000mまでの調査に止め、以下は未調査・保存扱いとなった。

今回の調査で検出された遺構は、以下のとおりである。

本調査区・・・杭列3箇所、杭1本、溝2条、土坑1基、柱穴列1列、柱穴状土坑6個、整地層1箇所(23㎡)、遺物捨て場1箇所(20.5㎡)、遺物包含層2箇所(1号…585㎡、2号…8㎡)。

確認調査区・・・遺物包含層2箇所(1号…175㎡、2号…45㎡)。

2 検出遺構(第5・6図)

(1) 杭列

3箇所検出された。いずれも2区北半部から検出されたものである。ここは、旧河道①の北岸にあたる部分であり、低湿地の北端にあたる部分でもある。

1号杭列

遺構(第7図、写真図版5)

[位置・検出状況] M F 3 c グリッド付近に位置する。杭はすべてV層(To-a)下位のVI層中で検出された。

[微地形] 北東から南西に流れる旧河道①の北岸にあたる部分で、南東側に下る緩斜面である。本遺構付近は周囲より幾分窪む。

[規模・平面形・配置] 北西—南東3.1×南西—北東1.7mの範囲に立位状態の杭が7本確認された。垂直方向に直立しているものは半数で、他はいずれも様々な方向に傾いている。配置に規則性は見出せない。設置面が泥炭層で緩いため、欠落したものが存在する可能性が高い。また、調査区内に収まらず、区外南東側へさらに続くものと思われる。杭は、大半が直径4cm前後の丸木材で、樹皮が残存するもの、しないものが混在する。後者に関して、意図的な加工は確認されない。いずれも地表面側が朽ちて欠損しており、本来の長さは不明である。

[杭設置部分の土層と構築面] いずれも泥炭～粘土質のVI～VII層まで打ち込まれている。上端部の検出層はVI層中であるが、これはそのまま構築面を示すものではなく、詳細は不明である。ただし、調査区際の断面にかかって検出されたNo1の様相から、ある程度の判断が可能である。ここにはV層(To-a)が成層しており、それより約10cm下位から本遺物が検出されている。断面観察からはV層を切っている状態は確認されず、その降下前に打設されていた可能性が指摘できる。

遺物 (第35図、写真図版19)

〔木質遺物〕構成材7点すべてを掲載した(掲載No216~222 以下、「掲載No」省略)。ただし、No6(221)は写真のみの掲載である。

時期 各杭材の検出状況、特にNo1の上層断面観察から、To-aテフラ降下前に構築されたものと推定される。なお、No2に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。これによる年代値は、 ^{14}C 年代で $1130 \pm 30\text{yrBP}$ (Libby Age・ $\delta^{13}\text{C}$ の補正あり)、較正暦年代は14.7%の信頼度で885~905AD、53.5%の信頼度で910~975ADの可能性があるととしている(Ⅶ章1節参照)。これはあくまで杭材の伐採年代を示すものであるが、885~905ADという数値であれば、検出層位およびテフラの降下年代とも調和的である。よって、本遺構の構築時期も平安時代・9世紀末から10世紀初頭頃である可能性が高い。

2号杭列

遺構 (第8・9図、写真図版6・7)

〔位置・検出状況〕ⅤE5xからⅤE7vグリッド付近に位置する。杭上端部はⅣ層およびⅤ層中で検出された。本遺構西側には3号杭列が近接する。

〔微地形〕北東から南西に流れる旧河道①の北岸近くにあたる部分で、南東側に下る極緩斜面である。北西から南東へ流下した一時的な旧河道②と直交する。

〔規模・平面形・配置〕北東—南西方向に2条並列している。規模は、北東—南西10.4mで、条間隔は1.8~1.9m程度である。南西側にはこれと直交する北西—南東方向の1条が存在するが、その交点が調査区外であるためどのような交わり方をしているのか不明である。いずれにしても本遺構自体は南西側へさらに続く。なお、泥炭層に構築されているため、1・3号杭列と同様に構成杭がある程度欠落している可能性があるが、杭自体の規模が1・3号に比して大きく、先端が締まりの強いⅣ層中に到達している場合が多いことから抜け難く、比較的良好的な残存状態を呈しているものと思われる。杭は、幅10cm前後の割材が用いられており、いずれも直立状態に近く、20度以上傾くものはない。ただし主杭に沿うように補助的に設置されているNo19輪(242)のみ丸木材で、斜立している。長さは最長で114.5cmである。ただしいずれも地表面側が朽ちて欠損しており、本来の長さは不明である。なおNo22~24は、検出・平面実測までは行ったものの、大雨による水没と堆積土の崩壊・流出により消失したため、採取していない。

〔杭設置部分の上層と構築面〕先端は大半がⅣ層中まで打ち込まれている。一部は上端がⅣ層中で確認されているが、あくまで杭自体のレベルであるため構築面を示すものではない。また、本遺構付近は旧河道②の影響を受けⅤ層が欠落しており、後述する3号杭列のようにその状況から打設面を推定することも不可能であった。ただし、Ⅳ層中にⅤ層のくいこみが確認されるため、Ⅴ層以上からの打設といえる。

遺物 (第36・37図、写真図版50~52)

〔木質遺物〕構成材31点中、採取できた28点を掲載した(223~250)。ただし、No1~4・8~15・17・21・25~30(223~226・230~237・239・244~250)は写真のみの掲載である。

時期 各杭材の検出状況から、少なくともⅤ層堆積後の構築といえる。なお、No2に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、 ^{14}C 年代で $1130 \pm 40\text{yrBP}$ (Libby Age・ $\delta^{13}\text{C}$ の補正あり)、較正暦年代は68.2%の信頼度で885~975ADの可能性があるととしている(Ⅶ章1節参照)。これはあくまで杭材の伐採年代を示すものである。これらを加味すると、本遺構の構築時期は平安時代・9世紀

末葉から10世紀後葉頃といえる。

3号杭列

遺構 (第10・11図、写真図版8～10)

〔位置・検出状況〕 WE7u～7wグリッド付近に位置する。構成材の検出層は、確認できたものはすべてVI層中である。本遺構東側には2号杭列が近接する。

〔微地形〕 北東から南西に流れる旧河道①の北岸近くにあたる部分で、南側を下る極緩斜面である。

〔規模・平面形・配置〕 東西方向に細長く点在し、同方向に列を成していたものと考えられる。東側は比較的密集しており、単純な列状ではなかったことを示す。杭の確認された範囲は東—西8.6×南—北0.9mで、東側は調査区外へ、西側は確認調査区へさらに続く（西側は現行用排水路設置の際に破壊された可能性有り）。また、本遺構も泥炭層に構築されており、1号杭列と同様に構成杭がある程度欠落している可能性が高い。杭はすべて丸木材で、直径4cm前後のものが大半である。いずれも地表面削が朽ちて欠損しており、本来の長さは不明である。大半が垂直方向に直立しており、傾きの最も大きいものはNo7で約25度を測る。樹皮は残存するもの、しないものが混在するが、後者のうちNo7については精細な面取り加工が施されている。これ以外の個体には意図的な加工は確認されない。また、本杭列の東部では、杭列に沿うように径1cm以下の小枝が密集する状況が確認された。明らかに同一方向に並んでおり、意図的に設置されたものと考えられる。東—西2.4mの範囲で確認され、幅35cm程度のまとまりが2条並列している。中央部の杭No5付近でも東—西44×南—北15cmの範囲で確認されている。ただし、本来の形状をどこまで残しているかは不明である。

〔杭設置部分の上層と構築面〕 いずれも泥炭～粘土質のVI～VII層まで打ち込まれている。上端部の検出層はVI層中であるが、これはそのまま構築面を示すものではない。No9は確認・本調査区際の断面にかかって検出されたもので、杭材自体の検出層位はVI層中であるが、上位のV層（To-a）が杭幅分切れており、下位にめり込む状態が確認された。よって、これはTo-aテフラ層より上位から打設されたものといえ、テフラ降下後の構築といえる。

遺物 (第37～40図、写真図版52～56)

〔木質遺物〕 構成材14点すべてを掲載した（251～264）。なお、No7（257）には墨書が施されていることが確認された。墨書部分の状態および内容から推定して、元々は掲示用であったものが本杭列の一部として転用されたものと考えられる。これについては本章3節およびⅢ章2節で詳述する。

時期 No9の土層断面観察から、To-aテフラ降下後に構築されたものと推定される。なお、No5に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。これによる年代値は、 ^{14}C 年代で $1150 \pm 30\text{yrBP}$ （Libby Age・ $\delta^{13}\text{C}$ の補正あり）、較正暦年代は5.5%の信頼度で820～840AD、62.7%の信頼度で860～970ADの可能性があるととしている（Ⅲ章1節参照）。これはあくまで杭材の伐採年代を示すものであるが、上層の堆積年代と構築層位の関係、およびテフラの降下年代とも調和的である。これらを加味すると、本遺構の構築時期は平安時代・To-aテフラ降下後の10世紀初頭から後葉頃である可能性が高い。

(2) 杭

単独で存在する杭をここに登録した。2区・小排水路第74号南部から1本検出されている。

1号杭

遺構 (第22図、写真図版10)

[位置・検出状況] ⅧF16gグリッドに位置する。Ⅳ～Ⅵ層中で検出された。本遺構周辺では木質遺物が密集して出土している。

[微地形] 北東から南西に流れる旧河道①の南岸にあたる部分で、北西側に向下る極緩斜面である。

[杭設置部分の土層と構築面] 検出面は泥炭層にあたるⅣ～Ⅵ層である。旧河道南岸のこの付近ではⅤ層 (T₀-a) が成層しておらず、局所的にブロック堆積するのみである。本遺構付近にはその堆積も認められず、それを介しての構築面の判断は不可能であった。いっぽうで、杭はⅤ層 (砂) 中にほぼ垂直に約50cm刺さった状態で、縁には打設の際に貫入したと思われるⅥ層が確認される。なお、上端部は朽ちて欠損しており、本来の長さは不明である。

遺物 (第40図、写真図版56)

[木質遺物] 実測図、写真とも掲載した (265)。

時期 平安時代と推定される。

(3) 溝

S D O 1 溝

遺構 (第12図、写真図版11)

[位置・検出状況] 3区中央部のⅧG5bからⅧF10vグリッドに位置する。Ⅱ層直下のⅩ層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] 北東—南西方向に直線的に延びる。両端ともさらに調査区外へと続くため全形は不明である。調査長は約31mで、上幅は67cm以下、検出面からの深さは30cm以下である。断面形は逆台形状を呈する。

[埋土] 黒褐色土上の単層で、人為堆積の痕跡は認められない。

遺物 (第55図、写真図版71)

[縄文土器] 埋土から905.0g出土した。

[石器] 埋土1層から二次加工ある剥片 (441)、打製石斧? (442)、磨製石斧 (443) の3点・399.85gが出土し、すべて掲載した (442は写真のみ掲載)。その他、剥片が10点出土している。

時期 不明である。

S D O 2 溝

遺構 (第12図、写真図版11)

[位置・検出状況] 2区南端部のⅧF18hからⅧF20jグリッドに位置する。北部はⅩ層上面で、南部は1号整地層および旧河道①精査時に検出された。本遺構は北西—南東に延びる旧河道①の南岸に沿って構築されている。東側には1号整地層が隣接する。

[規模・平面形・断面形] 調査区際位置し、部分的な調査であるため全形は不明である。調査部分は北西—南東に延びており、両端部が西側へ屈曲し調査区外へと続く。調査長は約11.1mで、上幅は

67cm以下、検出面からの深さは21cm以下である。断面は椀～逆台形状を呈する。

〔埋土〕 溝単体の埋土は黒色の砂質土で、砂ブロックが所々に混じる。これより上位は1号整地層埋土と共通である。

遺物（第23・55図、写真図版39・71）

〔土師器・須恵器〕 埋土から土師器が185.6g、須恵器が124.9g出土した。うち、土師器破片1点を掲載している（1）。

〔石器〕 埋土から削器（444）、打製石斧（445）の2点・92.56gが出土し、いずれも掲載した。その他、剥片が3点出土している。

時期 1号整地層と同時期の構築と考えられることから、平安時代といえる。埋土出土遺物もこれと調和的である。

（4）整地層

1号整地層

遺構（第12図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕 2区南端部のⅧF18iからⅧF20kグリッドに位置する。現行水田床土直下のX層中で検出された。本遺構は北西—南東に延びる旧河道①の南東岸に沿って構築されている。西側にはSD02溝が隣接する。

〔規模・平面形〕 北東側が調査区外へ続くため全容は不明である。確認した面積は23㎡である。

〔埋土〕 X層に構築時の掘削痕が認められ、その内部には黄褐色砂と黒色土の混合土が堆積する。人為堆積である。これより上位には、自然堆積の黄褐色砂および粘土、黒褐色粘土が互層を成す。酸化鉄の集中が盛に確認されることから、水の影響下にあったことが窺える。

遺物（第23・55図、写真図版39・71）

〔土師器〕 構築上から496.0g出土し、土師器破片1点を掲載した（2）。

〔石器〕 構築上から石匙1点・6.56gが出土し、掲載した（446）。

時期 出土遺物から、平安時代と考えられる。

（5）土坑

SKO1土坑

遺構（第12図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕 VI G24eグリッドに位置する。II層直下のX層中で検出された。

〔規模・平面形〕 開口部径1.48×1.35mのほぼ円形を呈する。

〔埋土〕 黒褐色～褐灰色土の単層である。

〔壁・底面〕 断面はピーカー状を呈し、壁はほぼ垂直かオーバーハンクしている。検出面から底面までの深さは最深部で27cmを測る。

遺物 なし。

時期 不明である。

（6）柱穴列

開口部径が約50cm以下の小ビットで、配列の確認されたものを柱穴列として登録した。本来的には掘立柱建物の可能性もあるが、調査範囲の関係で全容が不明のため「柱穴列」との認識に止まる。

SAO1柱穴列

遺構 (第13図、写真図版12・13)

[位置・検出状況] 柱穴状土坑のうち、P P 4から10の7個が本遺構を構成する。VF 23 e から23 f グリッドに位置する。X層上面で検出された。

[規模・平面形・深さ] 詳細は第13図のとおりである。開口部は概ね20cm前後の円形を呈する。

[埋土] 黒褐色粘質土が主体で、X層がブロック状に混じるものがある。

遺物 なし。

時期 検出面から、平安時代以前と考えられる。

(7) 柱穴状土坑 (第13図、写真図版12)

開口部径が約50cm以下の小ピットを柱穴状土坑として登録した。明瞭な配置が見られず、また、柱痕および柱埋土も確認されないことから柱穴として機能したとは断定できない。総数は6個で、1区・VF 3 g グリッドで2個 (P P 1・2)、2区北東部・VF 23 d およびVF 24 e グリッドのSAO1柱穴列の周辺で3個 (P P 3・11・12)、同区南部VF 22 l グリッドで1個 (P P 13)を検出した。規模や埋土は第13図のとおりである。構築時期は、P P 3・11・12は検出面から平安時代以前と推定される。その他については、表土直下での検出のため時期不明である。

(8) 遺物捨て場

遺物の人為的な廃棄痕跡が明瞭に確認された範囲を遺物捨て場として登録した。

1号遺物捨て場

遺構 (第14図、写真図版14・15)

[位置・検出状況] VF 25 d から25 f、VF 1 e から1 f グリッドに位置し、Ⅱ層直下のⅢ層上面で確認された。ここは北東から南西に流れる旧河道①の北岸近くにあたる部分で、全体的に南東側に傾斜している。Ⅲ層は上位が水田造成の際に削平されており、北西側の削平度合いが強い。よって、本遺構も本来的にはさらに北西側へ延びていた可能性がある。

[規模・平面形・面積] 北東—南西7.5m×北西—南東4.0mの範囲に不整形に広がっており、面積は20.5㎡を測る。

[堆積土] Ⅲ層中に廃棄された状態で、基本層に比して炭化物量が多い。堆積厚は10cm程度である。

遺物 (第23・24・55・65図、写真図版39・40・71・77)

[土師器・須恵器] 土師器が8640.2g、須恵器が1026.4g出土している。埴1点(3)、埴19点(4～22)、高台埴1点(23)、甕6点(24～29)を掲載した。

[縄文土器] 1066.0g出土している。

[石器] 石鏃1点、二次加工ある剥片3点、打製石斧? 1点、台石・石皿片? 3点、および剥片89.23gが出土している。石鏃(447)、台石(522)の2点・480.58gを掲載した。

時期 廃棄された遺物の内容から、平安時代の所産と考えられる。

(9) 遺物包含層

遺構に伴わず、遺物が比較的集中して出土する範囲および層位を遺物包含層として登録した。同範囲に含まれるもので、人為的な廃棄状況を呈する場合は「遺物捨て場」として区別している。すなわ

ちここでいう「遺物包含層」とは、遺構に共存せず、自然営力により堆積したと考えられるもの、もしくは人為的廃棄と判断できないものを対象としている。

1号遺物包含層

遺構（第15～22図、写真図版14～18）

〔位置・検出状況〕2区で確認された。北東—南西方向に流れる旧河道①およびその周辺と上層に広がる低湿地部分に存在する。本調査区、確認調査区両方にまたがる。検出面はⅡ層直下のⅢ層である。

〔規模〕760㎡が確認された。内訳は、本調査区585㎡、確認調査区175㎡である。なお、後者は検出のみに止め、掘削は実施せず保存扱いとなっている。以降、本調査区分のみ記述する。

〔構成層・深さ〕Ⅲ～Ⅹ層のうち、Ⅴ層（To-a）を除く全層が遺物を包含している。Ⅱ章3節に記述したとおり、すべて水成堆積層で、基本的には静態で堆積した泥炭層である。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は、地点による欠落がほとんどない。Ⅴ層はⅦ-7～Ⅶ-13ライン付近および排特1号排水路南東壁付近では成層（層厚5cm以下）するものの、それ以外の地点は断続的な層状を呈するかもしれない。旧河道①の南岸付近にあたる小排水路第74号南部（ⅦF15～16gグリッド以南）では、Ⅶ層が欠落する。また、Ⅷ層は北西—南東方向の小規模な河道（旧河道②）により堆積した砂礫層で、ⅧE6ライン付近にのみ分布する。Ⅷ層堆積以降、常態的な流れではないものの流路自体はあったようで、同付近でⅤ層が突然切れ欠落する。

地点により下面のレベルや包含層厚が異なる。基本的に旧河道地形に沿っているので、南北両岸付近は浅く、河道中央が深い。地点ごとに見ると、河道北岸に並行する排特1号排水路部分では、中央部のⅦF3cグリッド付近で層下端が現地表面下約1.5m・標高約27.7mで、層厚は約1m、同西部のⅦE7xグリッド付近で現地表面下約1.25m・標高約28.0mで、層厚は70～90cmである。いっぽう、河道を横断する形の小排水路第74号部分では、河道中央付近と推定されるⅦF13～14ラインの場合、現地表面下1.5mのレベルはまだⅣ層である。

この小排水路第74号部分については、Ⅱ章1節（3）に記述のとおり、施工時の掘削高が標高28.16mまででそれ以下にはおよばないこと、調査・掘削時の安全面を考慮すると、すべての調査は危険であるとの判断から、工事掘削高に保護層分を加えた標高28.00mまでを今回の調査対象とし、それ以下は未調査のまま保存することとなった。

遺物（第24～34・40～66図、写真図版40～48・56～78）

土器類の平面的な遺物出土量の粗密状況は第15～18図で示した。旧河道②付近の遺物包含率が本遺跡中最も高い。層位による粗密状況も認められ、Ⅷ層を除けば、Ⅵ・Ⅶ層の包含量が多い。他の種別も同様である。

〔土師器・須恵器〕土師器が55,295.6g・須恵器が27,189.5g出土している。うち、土師器は坏78点、高台坏7点、鉢？3点、長頸壺1点、甕24点、須恵器は坏45点、長頸壺3点、広口壺2点、直口壺2点、壺類10点、壺甕類6点、高台部1点を掲載した（30～84・87～207）。

〔土製品〕上鎌が1点・15.6g出土している（215）。

〔木質遺物〕杭列類で確認された遺物を除けば、今回出土した木質遺物はすべて本包含層から出土しており、その数は201点である。このうち、皿5点、高台皿2点、高台碗1点、鉢1点、槽1点、曲げ物側板2点、同樹皮紐3片、容器蓋板3点、容器側板？1点、漆塗髹1点、斧柄1点、鋤先？1点、鉞柄1点、木錘1点、碇1点、棒状加工2点、板状加工品7点、端部加工品5点、杭13点、伐採痕ある木片7点、瓢箪果皮片1点を掲載した（266～324）。

〔縄文土器〕617,721.8g出土している。328～382・384～421・423～438の109点を掲載した。

〔石器〕剥片石器130点（石鏃、尖頭器、尖頭状石器、石錐、石匙、搔器、削搔器、削器、楔形石器、石筥、二次加工ある剥片、使用痕ある剥片、石器片）、石核32点、礫塊石器26点（打製石斧、磨製石斧、石斧未製品、石鏃、礫器類）、礫塊石器素材1点、礫石器97点（石皿、加工痕ある礫、磨石類（複合含む）、敲石、凹石（複合含む）、台石・石皿類、砥石）、石製品4点（石棒類、有孔石製品）、および剥片・素材12644.49gが出土している。うち、石鏃8点、尖頭器2点、石錐5点、石匙5点、搔器1点、削搔器1点、削器5点、楔形石器3点、石筥4点、使用痕ある剥片1点、石核6点、打製石斧2点、磨製石斧4点、片面礫器1点、両面礫器4点、加工痕ある礫1点、特殊磨石4点、敲石1点、凹石6点、台石・石皿類3点、石棒類3点、有孔石製品1点、石鏃2点、砥石1点の計28,345.60gを掲載した（448～521）。

時期 遺物の時期と出土層位を加味すると、本遺物包含層（Ⅲ～Ⅷ層）は平安時代前～中期に堆積したものと考えられる。また、Ⅳ層・Ⅵ層間にはTo-aテフラ（Ⅴ層）が介在することから、両層はその降下直後・直前の堆積層といえる。

2号遺物包含層

遺構（第5図）

〔位置・検出状況〕2区北部の微高地面で確認された。検出面はⅡ層直下のⅢ層である。本調査区、確認調査区両方に位置している。

〔規模〕53m²が確認された。内訳は、本調査区8m²、確認調査区45m²である。なお、後者は検出のみに止め、掘削は実施せず保存扱いとなっている。以降、本調査区分のみ記述する。

〔構成層・深さ〕Ⅲ層が平安時代の遺物を包含しており、層厚は10～15cmである。包含量は希薄である。Ⅲ層の下位にあたるⅣ層は無為物層となる。

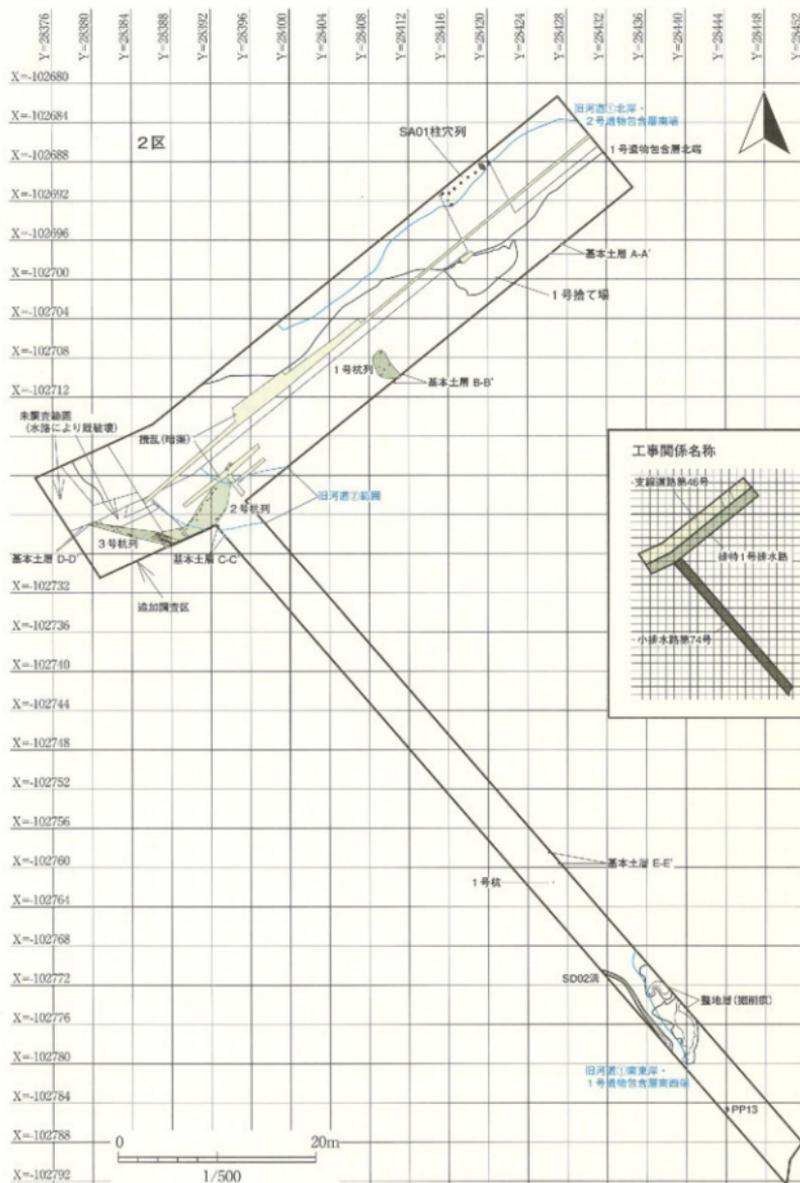
遺物

〔土師器〕151.1g出土している。

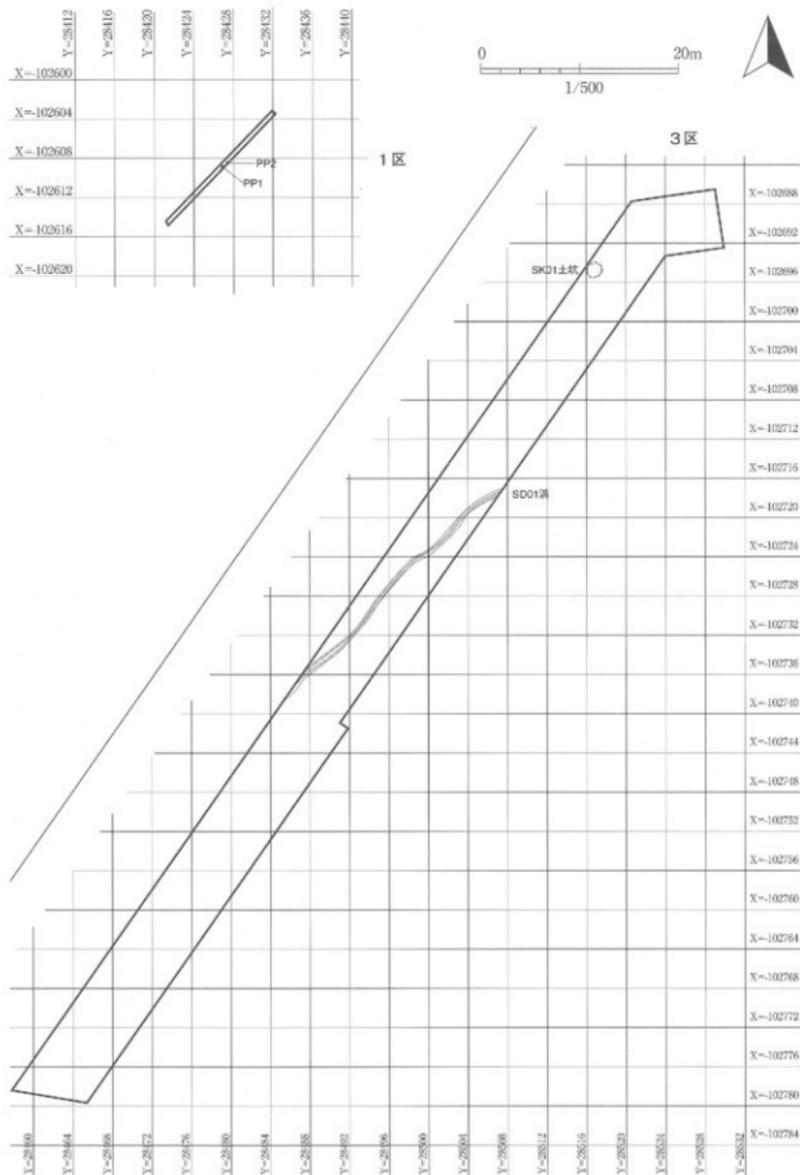
〔縄文土器〕114.0g出土している。

いずれも細片のため不掲載である。

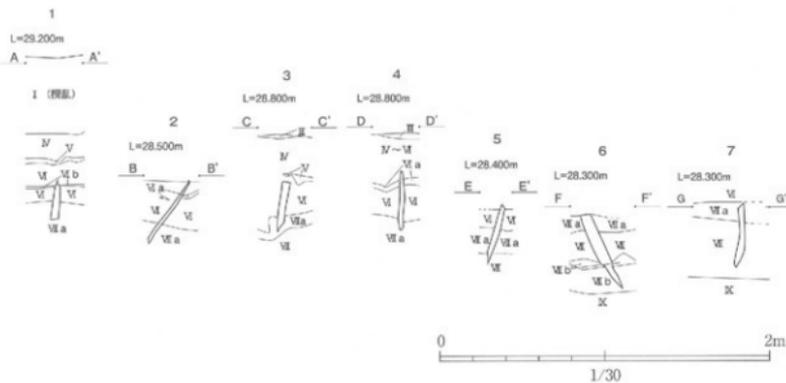
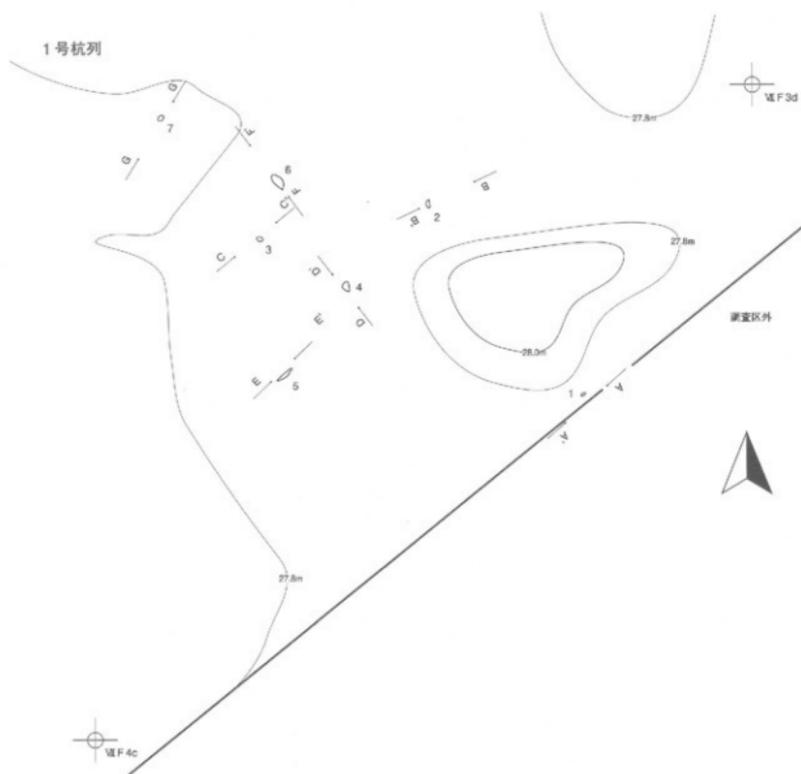
時期 出土遺物の時期から、平安時代に堆積したものと考えられる。



第5図 道上遺跡第3次調査遺構配置図(1)

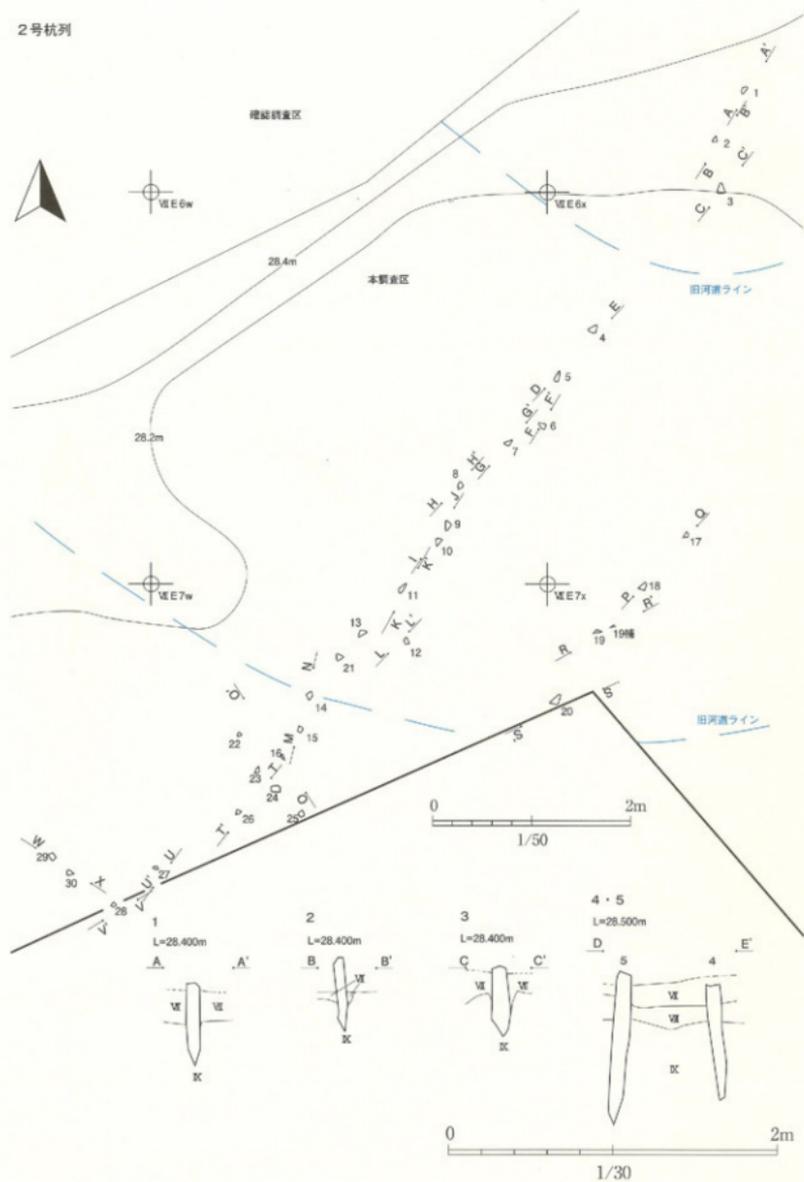


第6図 道上遺跡第3次調査遺構配置図(2)

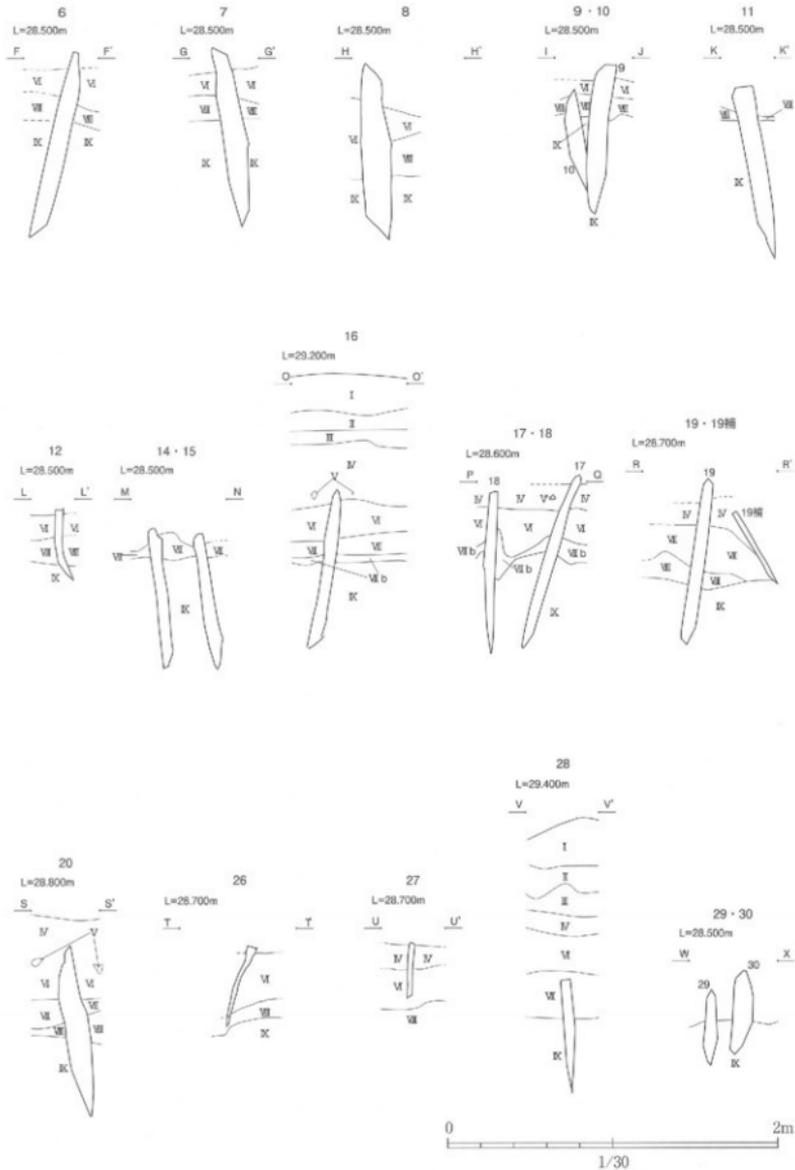


第7図 杭列(1)

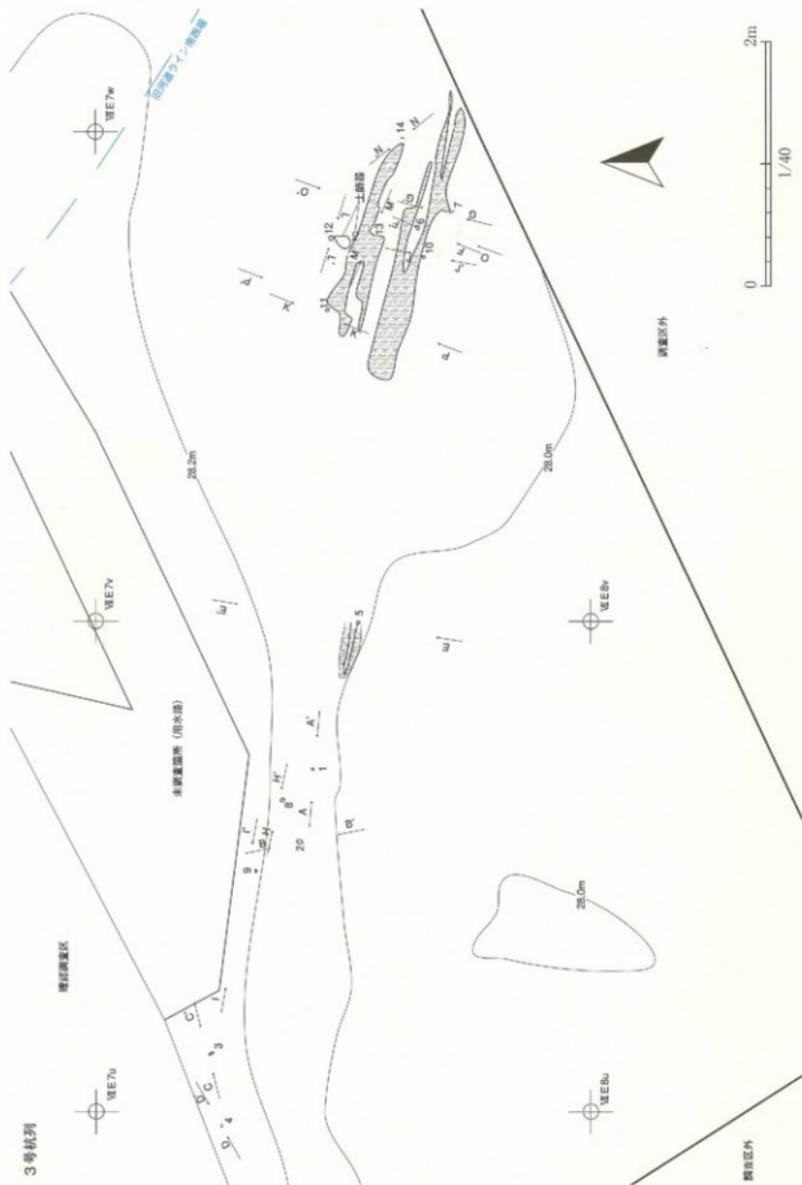
2号杭列



第8図 杭列(2)

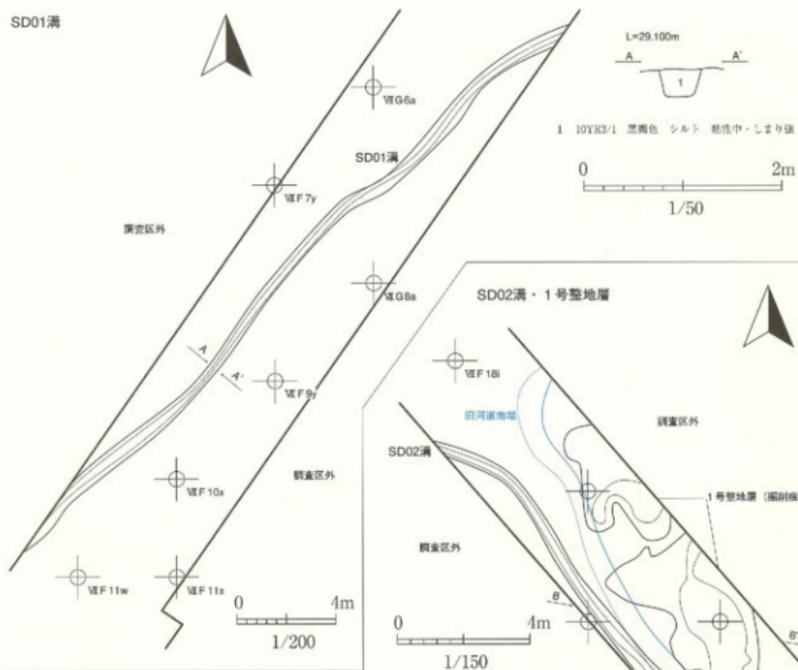


第9回 杭列 (3)

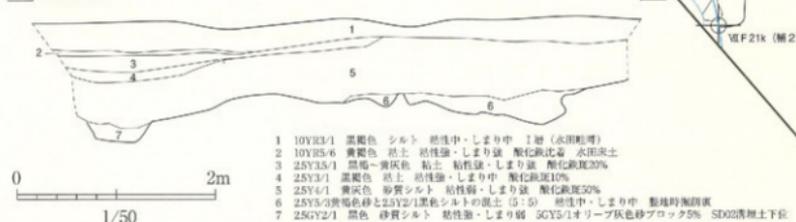


第10図 杭列(4)

SD01溝

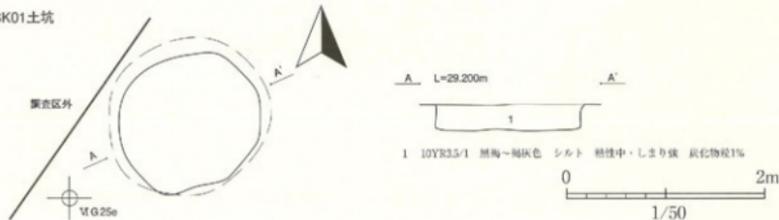


B. L=29.400m



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘液中・しまり強 1層 (水田耕作層)
- 2 10YR3/6 黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 酸化鉄比高 水田底土
- 3 2.5Y3.5/1 黒褐～黄灰色 粘土 粘性強・しまり強 酸化鉄比20%
- 4 2.5Y3/1 黒褐色 粘土 粘性強・しまり中 酸化鉄比10%
- 5 2.5Y4/1 黄灰色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 酸化鉄比50%
- 6 2.5Y3/2黄褐色砂と2.5Y2/1黒色シルトの混土 (土5) 粘液中・しまり中 膨脹時無腐食
- 7 2.5Y2/1 黒色 砂質シルト 粘性強・しまり強 3GY5/1青灰色砂ブロック5% SD02溝溝土下位

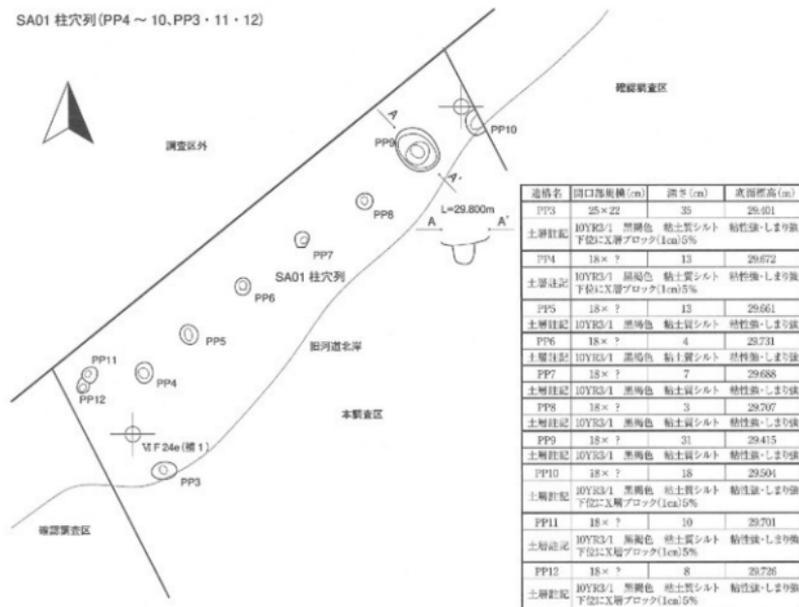
SK01土坑



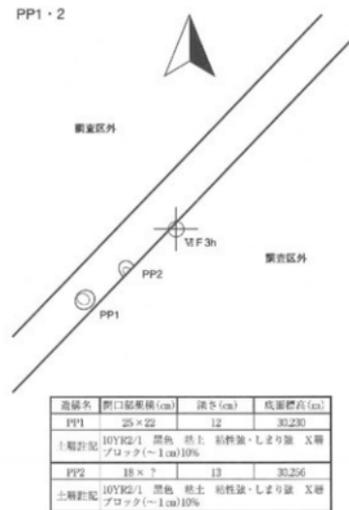
- 1 10YR3.5/1 黒褐～暗灰色 シルト 粘液中・しまり強 炭化物比1%

第12図 溝・整地層・土坑

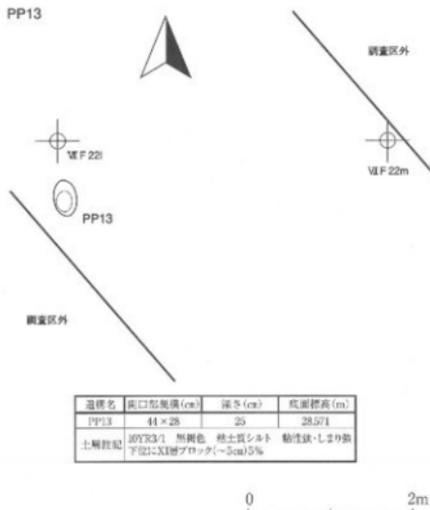
SA01 柱穴列 (PP4 ~ 10, PP3・11・12)



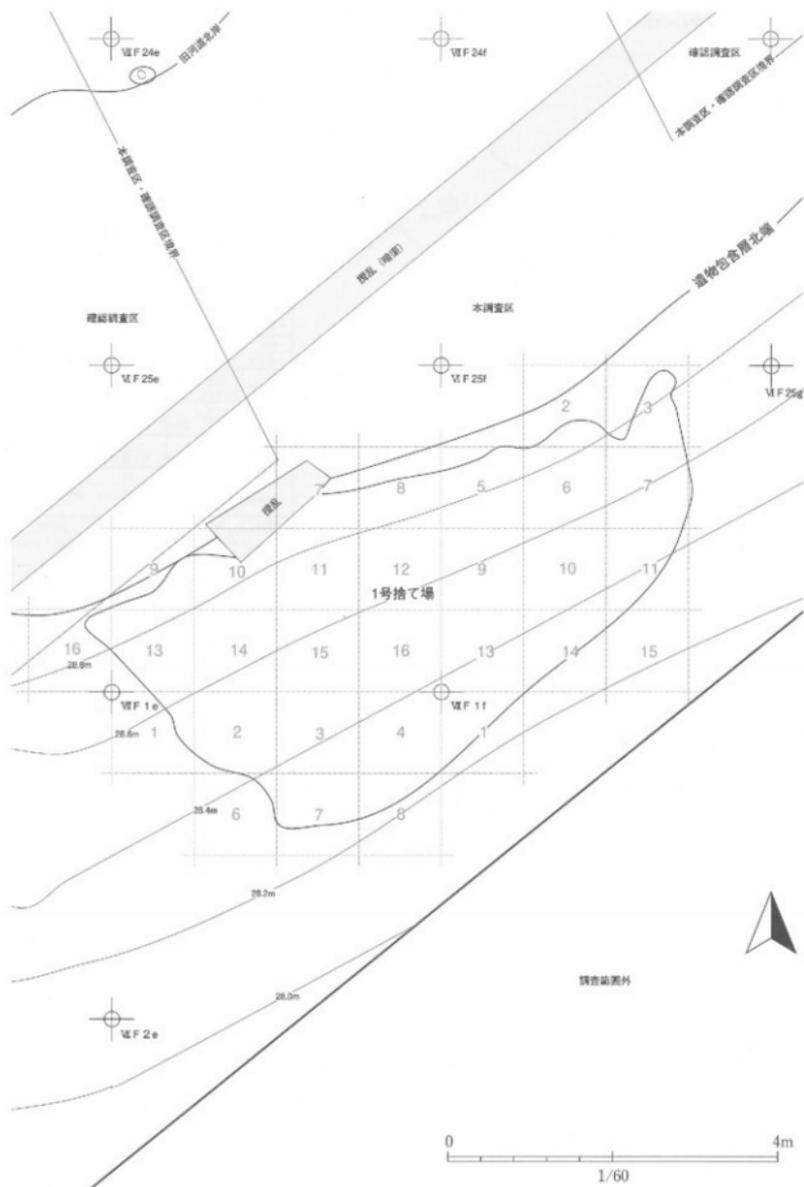
PP1・2



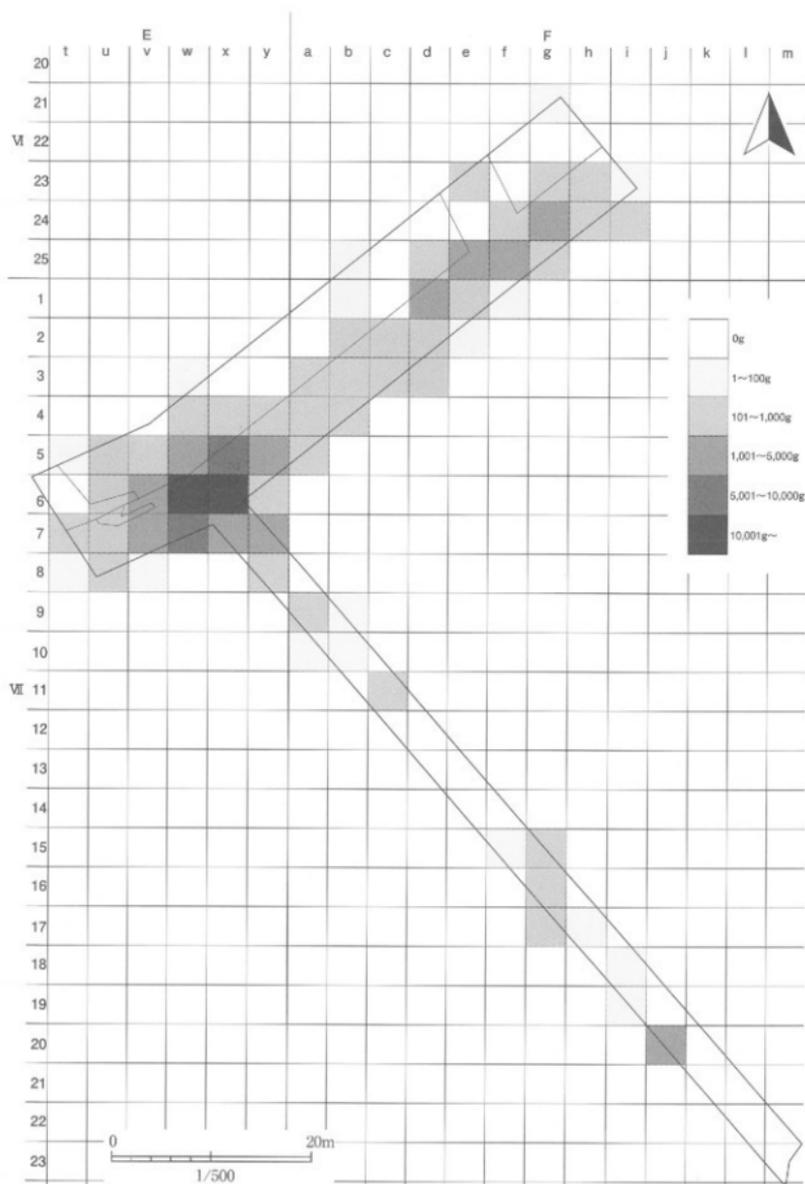
PP13



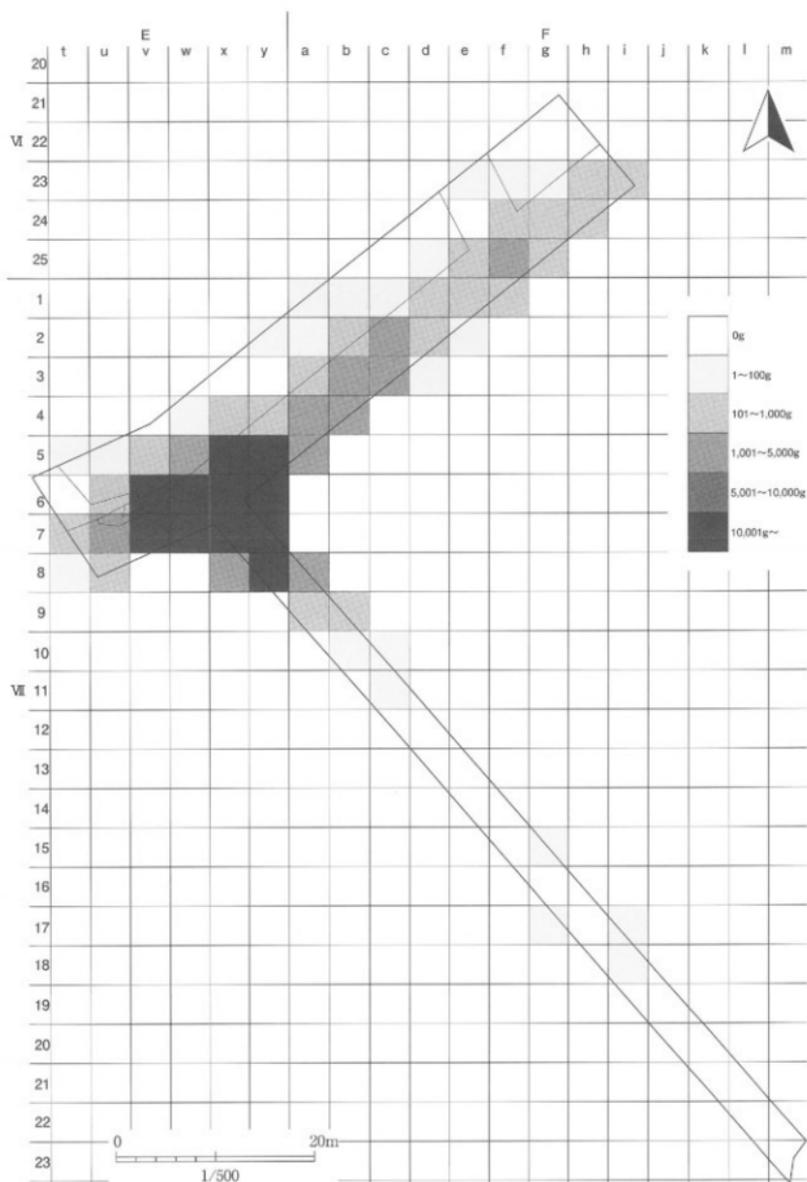
第13図 柱穴列・柱穴状土坑



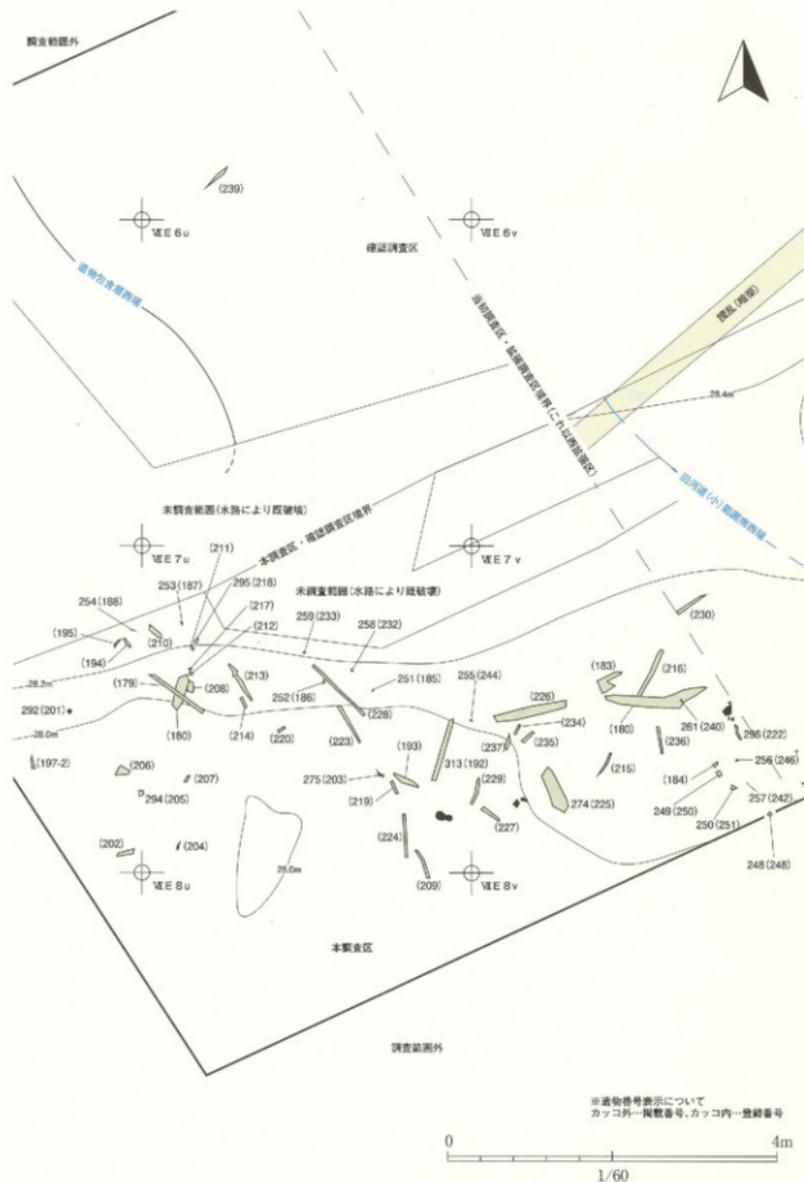
第14図 遺物捨て場



第15図 遺物包含層出土分布土師器・須恵器

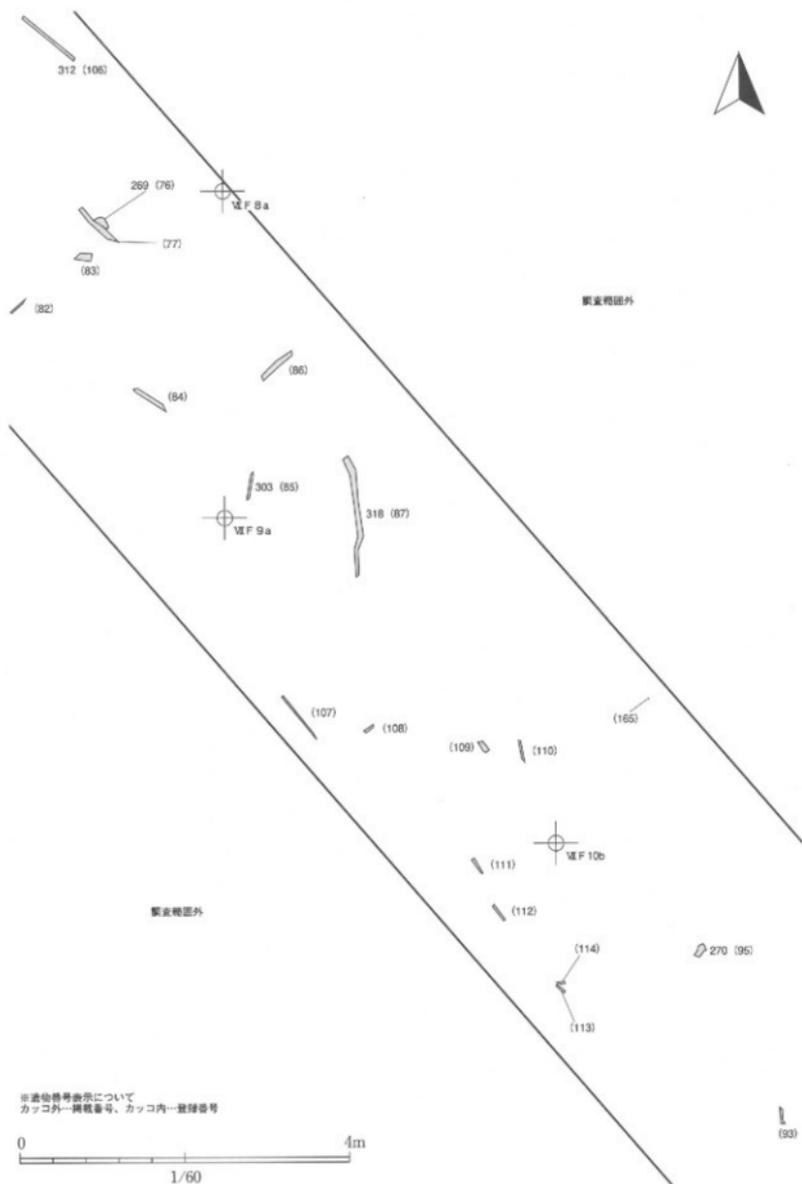


第16図 遺物包含層出土分布縄文土器

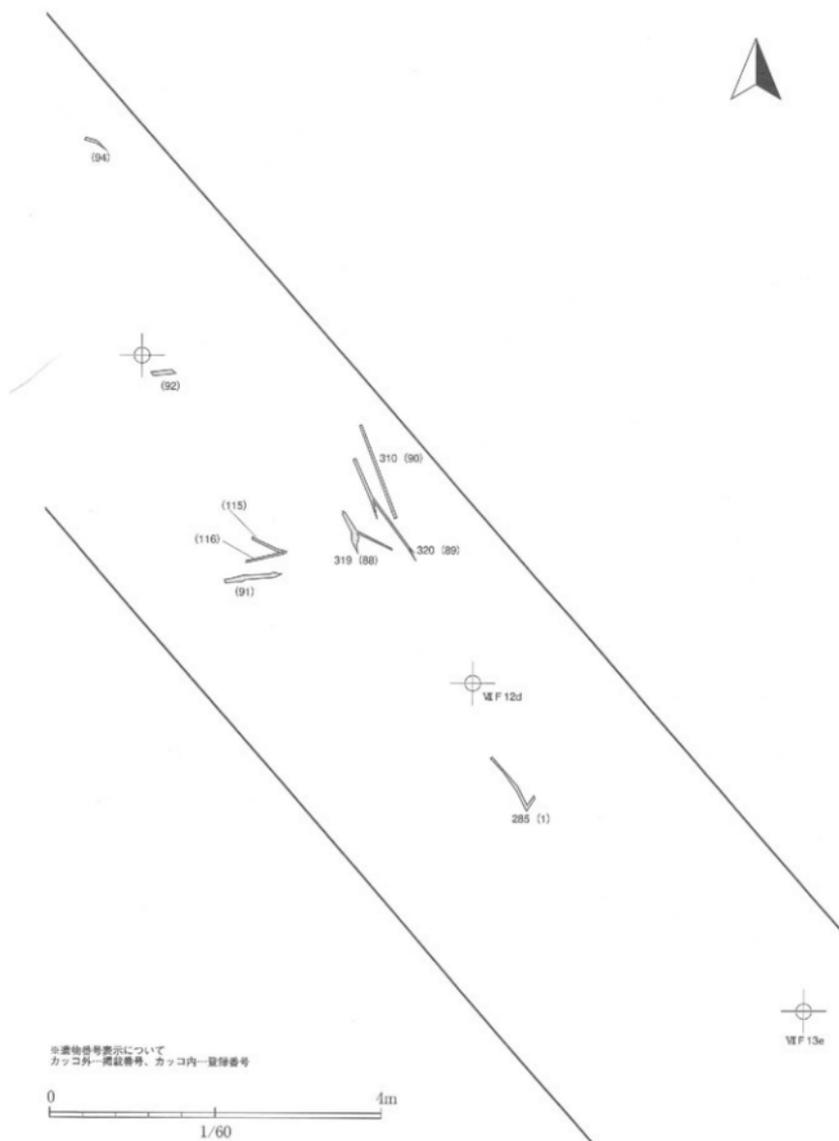


第19図 遺物包含層木質遺物出土状況 (3)

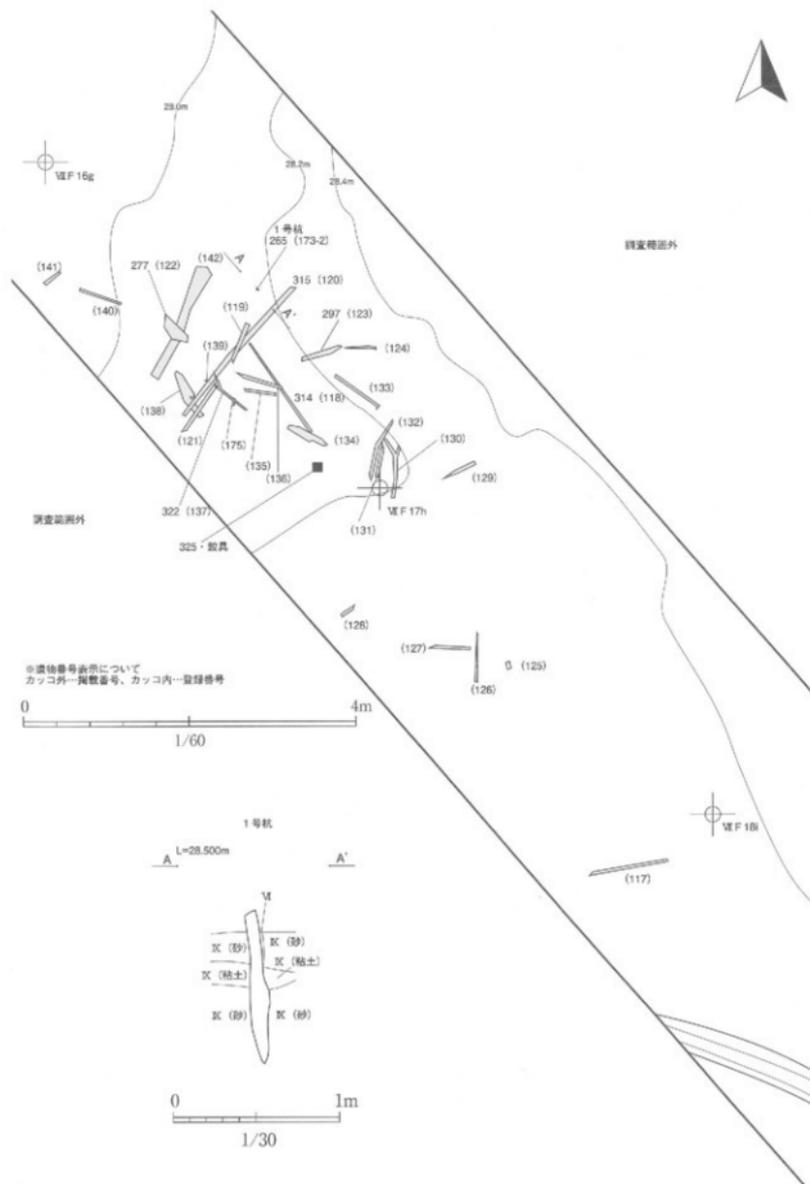
2 検出遺構



第20図 遺物包含層木質遺物出土状況(4)



第21図 遺物包含層木質遺物出土状況 (5)



第22図 遺物包含層木質遺物出土状況 (6)

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器約73kg（42×32×30cmコンテナ換算約3.4箱）、須恵器約32kg（同約1.5箱）、縄文土器約652kg（同約30.2箱）、石器（ツール）329点、剥片・素材約4.8kg、木質遺物250点、鉄製品3点、陶磁器239.8gである。このほか、自然遺物（トチ、オニグルミ等の種実類多数、骨片79.0gなど）が出土している。

以下、図の掲載方法について述べておく。

掲載基準

Ⅲ章2節（1）「遺物整理の方法」を参照のこと。

掲載順序

第一に出土地点を問わず大まかな時代ごとに遺物種別で分類し、平安時代の遺物（土師器→須恵器→土製品→木質遺物→鉄製品（時期不明のものも含む）、縄文時代の遺物（縄文土器→土製品→石器（時期不明のものも含む）、近世の遺物（陶磁器）の順に掲載することとした。次に各種別内で出土地点（遺構内・外）ごとに分類し、それぞれ出土層位を優先して下位から（遺構内であれば床面・底面から）順に掲載した。遺構の掲載順は、前節の記述順である。ただし、縄文土器と石器については、明らかに塵・遺棄時の原位置を失っており、出土地点および層位の持つ重要性が低いことから、器種分類および型式・形態分類を優先し、そのグループごとに掲載した。

記述方法

個々の遺物についての記述は、各種別とも遺物観察表（属性表）にて行っている。これに加え、本節にて代表的・特徴的な遺物を抽出し、補足的に記述を行う。

（1）土師器・須恵器（第23～34図、第2表、写真図版39～48）

a) 概要

出土総量は、土師器が73,393.8g、須恵器が31,972.8gである。本報告書では、総量の約17%にあたる17,778.3g・214点を掲載している。なお、製作年代についてはⅢ章2節で述べる。

b) 詳細の記載

SDO2溝（1）

非ロクロ整形、内面ミガキ調整・黒色処理の甕が1点出土している。口縁が直立する器形である。

1号整地層（2）

ロクロ整形、内面ミガキ調整・黒色処理の甕が1点出土している。底部切り離し技法は回転糸切りで、周縁部にヘラケズリの再調整が入る。

1号遺物捨て場（3～29）

本遺構では土師器のみ出土し、須恵器は共伴していない。3は内面黒色処理の施された甕で、ロクロ使用が認められない。外面はヘラナデ、内面はミガキ調整がなされる。4～22は甕である。すべてロクロ整形で、内面に黒色処理が施されるもの（以降、「内黒」と呼称。4～15）と施されないもの（以降、「非内黒」と呼称。16～22）の二者がある。内黒のうち、4は外面にケズリ調整が、内面にヘラナデ調整が施される。他は内面にミガキ調整が入るのみである。底部切り離し技法は大半が回転糸切り後無調整であるが、4と6には再調整が入る。7の底部には十字刻書が施されている。非内黒のう

ち、底部切り離し技法が判明するものはすべて回転系切りで、22のみナデの再調整が入り、十字刻書が施される。器形は内黒に類するが外傾が幾分強く、16のように外反するものも見られる。23はロクロ整形・非内黒の高台坏である。体部以上が欠損しており全体形は不明である。24～29は甕類である。全体形が判別できるまで復元されたものはない。24・25・28は非ロクロ整形の長胴甕である。口縁部が短く、外反する。26・27はロクロ整形で、頸部が窄まる。

1号遺物包含層

(旧河道②以外出土分 30～86)

出土層位ごとに記載する。本包含層の堆積はすべて水成であり、人為による動きの後、自然営力によるある程度の移動を経て、現地点に落ち着いたものと考えられる。よって、層の堆積時期より古期の遺物が混入する可能性は大いにある。ただし、その逆は基本的に考えられない。それを踏まえた上で、To-aテフラ降下前・後期の土器様相を考える資料群の1つになるものと思われる。

Ⅶ層 (30～34)

土師器坏は内黒で、底部にヘラケズリによる再調整が入る (30・31)。須恵器坏は胎土が白っぽく、比較的焼成が弱いようである (32・33)。底径が広く、底部切り離し技法はヘラ切りである。33は体部に「三」の墨書がある。本層出土の坏類は、土師器・須恵器問わずいずれも比較的底径が広い。34はロクロ使用の甕で、口縁部は垂直気味に立ち上がる。

Ⅵ層 (35～42)

To-aテフラの直下層にあたる。35・36・39は内黒の、37・38は非内黒の土師器坏である。35は底部内面に炭化物が多量に付着している。36・39の底部はヘラケズリによる再調整がなされる。内黒・非内黒問わず、底部切り離し技法の判断できるものはいずれも回転系切りである。40・41は須恵器坏である。40は底部に一部再調整が入る。42は須恵器直口壺の口縁部で、口唇形態は角張る。

Ⅴ層 (43～54)

To-aテフラの直上層にあたる。須恵器も出土しているが、全体形の確認できるものがなく掲載していない。43～50は内黒の坏・高台坏である。47のように底部再調整の入るものも見られる。本遺物は十字刻書も施されている。52はロクロ不使用の土師器甕で、口縁部の外反はきわめて弱い。53・54はロクロ使用の土師器甕である。53は口唇が若干内彎し、54は変化しない。

Ⅳ～Ⅲ層 (55～67)

旧河道①南岸から出土した一群である。To-aテフラが成層しておらず、Ⅳ・Ⅴ層のちょうど中間付近にあたるため、あえて分層せずⅣ～Ⅵ層としている。須恵器も出土しているが、全体形の確認できるものがなく掲載していない。55～65は土師器坏で、うち55～63は内黒、65は内・外黒64は非内黒である。55の底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。63は回転系切りで、底部から体部下半がヘラケズリで再調整されている。そのほかの底部切り離し技法は、すべて回転系切りである。56と57の体部には墨書がなされており、前者は「朧 (おけら)」の下に「一」、57は「二万」と読める。66・67は非ロクロの土師器甕で、同一個体と考えられる。口縁部は短く外反する。

Ⅲ層 (68～84)

下位層に比して須恵器坏の出土比率が高い。68～72は内黒の土師器坏・高台坏である。68～70はいずれも底部側縁が窪む。73～76は非内黒の土師器坏・高台坏である。坏はいずれも器高が3cm前後と低い。77～81は須恵器坏である。77～80の器形は直線的で、微妙に内彎する。81は底部に墨書が施されているが破片のため判読不能である。84は非内黒の甕で、ロクロ目が顕著である。

(旧河道②出土分 87～207)

ⅢE 6 v～6 y ライン付近に広がる旧河道②堆積土およびその上部堆積層から出土したものを一括した。約50㎡と狭い範囲ながら、遺物出土量は今次調査中最大である。

Ⅷ層 (87～112)

砂礫を含んだ河川堆積層である。坯は、内黒土師器の出土比率が低く、須恵器が多い。89～91は内黒で、90は底部に「中」の刻書が、89・91は十字刻書が施されている。92は非内黒で、体部に墨書があるが欠損のため判読不能である。94～105は須恵器坯である。94～100は胎土が白く焼成が弱い一群。器形は、95のみ底径が狭く立ち上がりは内彎気味であるが、他は底径が広く、直線的に外傾して立ち上がる特徴を有する。また、底部切り離し技法は回転ヘラ切りが多く、97は精細な回転ヘラケズリによる再調整がなされる。墨書が多いのも特徴として挙げられ、96・97は底部にそれぞれ「得」、「火」？の一字が書かれている。99・100は破片のため不明である。101～105は胎土が青灰色を呈する一群で、いずれも口縁部が外反するという特徴が看取される。底部切り離し技法は、回転糸切りである。105の底部には墨書が施されるが、破片のため判読不能である。106～112は須恵器壺類である。106・107は長頸壺で、106の口唇部は一端外形した後、先端が痛み出される。112は広口壺で、口唇部が角張る。Ⅷ層 (113～157)

坯は、内黒土師器、須恵器が満遍なく出土している。非内黒土師器は比較的少ない。113～122は内黒である。底部切り離し技法は回転糸切りが主体であるが、121のように回転ヘラ切りも存在する。再調整(手持ち調整)されるものも一定数みられる(113・116・119～121)。118は体部下半がヘラケズリ調整されている。器形は、体部が緩やかに内彎し、113～116のように底径の広いものが多い。115・116は体部に墨書が施される。115は判読不能、116は「匠」？とも読める。また、117は内面に「の」字状の暗文が書かれている。123～127は非内黒である。いずれも器高が低く、底径が広い点で共通している。125・126は体部が直線的に外傾し、128・129の器形と近似する。底部の摩滅が激しく再調整の有無は不明であるが、回転糸切りではない。123の体部墨書は判読不能である。128～144は須恵器である。128～134は胎土が白く焼成が弱い一群で、相対的に器高が低く底径が広い。体部は、128・129が直線的に外傾する器形で、他は緩やかに内彎する。底部切り離し技法もしくは再調整技法は、127・131・134が回転糸切り、128・129が回転ヘラ切り、130が回転ヘラケズリである。墨書の施されるものも比較的多い(128・129・132～134)。128は96と同じ「得」で、胎土、器形とも近似する。他は欠損のため判読不能である。135～144は胎土が青灰色を呈する一群で、器形は胴部がゆるく内彎し、口唇が直線的に外傾もしくは外反するものが多い。底部は回転糸切りのまま再調整されないものが多いが、手持ちのヘラナデ(135・141)や回転ヘラナデ(138)もみられる。135は体部に、143は底部に墨書が施されている。ただし破片のため判読不能である。145～149は非ロクロの上師器である。146～148は内黒で、内面はミガキ調整が入る。148は底部側縁が窪む。149は底部側縁が突出する。墨書が施されるが、破片のため判読不能である。

Ⅷ層 (158～180)

158・159は非ロクロ・内黒の上師器坯で、内外面ともミガキが入る。今次調査における非ロクロ坯の出上はこの2点のみである。160～166は内黒の土師器で、多様な器形・底面調整のものが混在している。167・168は非内黒で、体部は緩やかに内彎する。前者は底部切り離し技法が回転ヘラ切りである。169～172は須恵器である。体部が緩やかに内彎するものも多く、口唇部形態はさまざまである。174～180は壺頸類である。175は非ロクロで、口縁部が長く外反する。158・159に伴う可能性がある。174・176・177は内面にミガキが入り、黒色処理されている。後二者はロクロ調整である。

IV層 (181~185)

181・182は内黒・非内黒の土師器坏で、いずれも器高が低い。器形はいずれも底部側縁が微妙に窪み、体部はゆるやかに内彎している。183は墨書のある土師器坏。破片のため判読不能である。

III層 (186~207)

本層も比較的出土量が多い。186~194は内黒の土師器坏である。いずれも器高が高い。186~191・193・194は底部が再調整されている。190は体部に墨書が施されるが、破片のため判読不能である。193・194の底部には十字刻書が施されている。195は非ロクロの土師器甕で、内外面ともミガキが入り黒色処理されている。201~205は須恵器坏である。体部が若干内彎し、器高の深いものが多い。

(確認調査区出土分 209~213)

209・210はIV層から、211はII層から、212・213はI層から出土したものである。212・213の非内黒土師器坏はいずれも器高が低く、212は口径10cmと小形である。213は体部に「毛」?の墨書が施されている。

様相の異なる須恵器 (214)

214は低い台部を有する壺類の底部片で、I層から出土したものである。生文課が行った試掘(第2次調査区北部付近)の際に表土から出土した破片と接合し、底部が1周する段階まで復元された。灰釉陶器に似るが、胎土に黒色粒を多量に含む点が異なる。このような特徴をもつ資料は、福島県会津大戸窯産の須恵器と近似する。

(2) 土製品(平安時代)(第66図、第3表、写真図版78)

土錘が1点出土している(215)。

(3) 木質遺物(第35~46図、第4表、写真図版49~62)

250点出土した。内訳は、杭156点、皿4点、高台皿2点、高台椀1点、鉢1点、槽1点、曲げ物測板2点、同皮紐3点、容器蓋板3点、容器?1点、櫛1点、斧柄1点、鋤?1点、鋸柄1点、木錘1点、砧1点、棒状加工品2点、板状加工品22点、端部加工品5点、伐採痕ある木片37点、不明1点である。このほか、自然遺物3点を採取した。出土地点はすべて2区の旧河道①・②内の低湿地、つまり1号遺物包含層範囲内である。

1号杭列(216~222)

杭列に使用された杭材が7点出土している。221以外はすべて丸木材で、径は2.5~6.0cmを測る。221は割材である。杭先(下端)は1面のみ上方から加工されており、注射針のような形態を呈する。216は未加工である。表面に削痕の確認されるものはなく、218は樹皮が残存している。長さは上端がすべて欠損しているため不明であるが、残存値は最長で53.5cmである。4は上端が炭化している。樹種は、カエデ属、タラノキ、ガマズミ属、モモ、オニグルミ、ニレ属が用いられている。

2号杭列(223~250)

杭列に使用された杭材が31点出土している。うち、大雨による水没と堆積土の崩壊・流出により消失した3点を除く28点を採取した。大半がミカン割の分割材である。長さは残存値で最長114.5cm、幅は最大14.3cmと、他の杭列構成材に比べ大形である。233・237・249・250は樹皮が残存する。加工は、材分割痕以外は基本的に杭先のみで、分割の際に鋭角となった1~2辺を上方から削削している。唯一、243は材半截の後、外周部分を全面削削している。樹種は、オニグルミ、ケヤキ、サクラ属、カエデ属、クマシデ属イヌシデ節、ミズキ、クリ、ヤマザクラ、グミ属が用いられている。いっぽう、

1号杭 (265)

径約9cmの丸木材である。杭先調整のほか、幹の伐採痕も認められる。樹種はオニグルミである。

1号遺物包含層 (266~324)

上記遺構以外から出土した木質遺物は、すべて1号遺物包含層のものである。器種ごとに記述する。

皿・高台皿 (266~271)

刳物の皿である。口径はいずれも16~19cmの範疇に収まる。266・267・269の断面は薄い逆台形状を呈する。267は底部側縁が窪む。268・271は高台部が作出され、後者は体部が短くほとんど立ち上がらない。266・271の底部にはロクロ爪痕が確認される。267の底部には「〇」状の刻印がある。樹種はすべてケヤキである。

高台碗 (272)

刳物である。口径は不明で、底径は8cmを測る。樹種はケヤキである。

高台鉢 (273)

刳物である。残存状態が悪く、10数片の破片状態であった。体部は直線的に外傾し、断面は逆台形状を呈し、底部側縁が窪む。樹種はケヤキである。

槽 (274)

刳物である。残存状態が悪く、10数片の破片状態であった。口径は約60×20cmで、器高は9cmを測る。平面形は長楕円形状を呈し、体部は緩やかに内彎している。樹種はシナノキ属である。

容器 (275~283)

275・276は曲げ物側板である。275は結合部の皮紐が残存している。内面側には、ほぼ等間隔に並行して縦位の刻みが入る。276には、外面側に黒漆が塗布されている。樹種はいずれもスギである。277~279は円形の板で、側板を結合した形跡がみられないことから容器蓋板と推定した。279は皿破片の可能性もある。樹種はすべてケヤキである。280~282は曲げ物の結合に用いる皮紐で、樹種はカバもしくはサクラである。

283は板状で、厚さは2.1cmを測る。緩やかに彎曲するが、木取りの状態からみて取縮により変形したのではなく、元々この形態であったようである。何らかの大形容器の側板の可能性もある。樹種はケヤキである。

櫛 (284)

細片である。木質自体は全く残っていないが、赤漆が全面に塗布されており、外縁部分のみ形状を残す。縄文時代の櫛にも似るが、そこまで遡るかは不明である。

斧柄 (285)

「レ」の字状の自然木(丸木材)を利用し、先端を円錐状に加工している。その形状から、袋状鉄斧の柄と推定される。長さ83.5cm・径6.0cmで、完形品である。樹種はウコギ属である。

鋤先? (286)

片面は割材のまま平坦で、反対面はカマゴコ状に削割されている。樹種はケヤキである。

鋤柄 (287)

組み合わせの鋤の柄である。握り部は3.2×2.8cmの楕円形で、鋤身に接続する部分が山形状に幅広となる。柄孔に挿入される部分は突出している。樹種はオニグルミである。

木錘 (288)

径約4cmの丸木材の中央に括れを作出したもので、長さが15.2cmと短いことから木錘と推定した。樹種はトネリコ属である。

砧 (289)

丸木材の一端側を細く加工し、持ち手部分を作成している。長さは36.5cm、使用部径は3.9cm、持ち手部径は3.0cmである。樹種はカエデ属である。

棒状加工品 (290・291)

折損しており、器種は判別できない。側面はすべて面取りされており、290は横断面が方形になる。貫通孔も穿たれている。樹種はクロモジ属である。

板状加工品 (292～298)

板材状のものを一括した。292は厚さ0.9cmで、平面形を成形した痕跡がある。樹種はヒノキである。293～296は側縁に何らかの加工痕がみられるものである。樹種はケヤキ、キハダ、広葉樹樹皮、ヤナギ属である。298は本群中最長で、4分割材である。樹種はクリである。

端部加工品 (299～303)

一端部に入念な加工が入り成形されているものを一括した。299は径6cm前後の丸木材(股木)を素材とし、一端部に角取り調整が施される。反対側は尖化され杭状を呈する。長さ154.8cmと長い。樹種はウコギ属である。300・301も同様に一端が尖化されている。

杭 (304～316)

一端部が杭先状に加工されているものを一括した。本群の範疇に含まれるもので、他所にも加工痕のあるものは除外している(299～301)。径が10cmを超えるものはほとんどなく、5cm以下が多い。樹種はヤナギ属が多いが、多様である。

伐採痕ある木片 (317～323)

調整加工痕が見られず、伐採痕跡のみ確認されるものを一括した。319・320・322は枝付きの状態である。

(4) 鉄製品(各時期)(第66図、第5表、写真図版78)

3点出土し、すべて掲載した。325は1号遺物包含層・IV～VI層出土の鉸具である。保存状態が非常に良好で、留針部が可動する。全体的に丸みを帯び、比較的古手の印象を受けるが、出土層位からこの地点に廃棄もしくは遺棄された時期は平安時代といえる。馬用と推定される。326は仏飯器と考えられるもので、製作時期は不明である。327は銭貨で、祥符元寶である。北宋銭で、初鑄は1009年である。16世紀後期から17世紀前期にかけての模鑄銭が存在するという。本遺物は模鑄銭の可能性が高い。

(5) 縄文土器(第47～54図、第6表、写真図版63～70)

a) 概要

出土総量は651,875.7gである。総量の約2%にあたる13,600.8g・113点を掲載している。

今次調査では縄文時代の遺構が検出されておらず、本来的な意味で遺構に伴う遺物は皆無である。大半は1号遺物包含層から出土したものであり、土師器・須恵器と共存状態であった。

なお、既存の土器型式から比定される時期は、前期初頭、中期末葉、後期中葉～末葉、晩期前葉～中葉である。

b) 詳細の記載

328は胎上に織維を含むことから、早期末から前期初頭頃の深鉢片と思われる。

329～332は「ノ」の字状の隆帯と沈線を有する一群で、中期末葉頃の深鉢片と思われる。

333～355は後期に属すると思われる一群である。333は文様帯が弧状沈線のみで形成される小形鉢、334は区画沈線と磨消縄文の施された壺、335は小形の貼瘤が付された注口部である。336～339は鉢である。339は櫛目状の沈線が平行・弧状に施される。340～355は深鉢である。平行および弧状沈線（入組文）の施されるものが多い。341は口唇外面に精細な刻目を有する。345～347は平行沈線内に刻目を充填している。347～351は貼瘤が付されており、349～351のそれは小形である。352の沈線は比較的細い。353・354の櫛目状沈線は339と同様のものである。

356～385は晩期に属すると思われる一群である。356～359は壺である。磨消による雲形文が施される。360は浅鉢、361～374は鉢である。連続する刻目の施されるもの（361など）、平行沈線+刻目のもの（368など）、平行沈線のみのも（367など）などがみられる。375は台付鉢である。直線的に立ち上がる器形で、文様帯（磨消・雲形文）は口縁部付近に限定される。376～385は深鉢である。口縁部が窄まるものは、同部が無紋となる。376は胴部上半に磨消縄文（雲形文）が施され、口縁にはA突起が付く。381～385は口唇部が指頭で摘まれたような状態で、水平方向に波状を呈する。

386～390は、後期から晩期に属すると思われるものの詳細不明の一群である。386～388は器面が丁寧に磨かれている。390は透かしの施された台部である。

391～414は、地紋のみもしくは無紋の鉢・深鉢を一括した。中期から晩期の範疇に収まるものであるが、詳細時期についての言及は困難である。391は器形および原体の様相から、中期頃の所産と考えられる。393～395は結節回転が入る。406～414は無紋で、炭化物の付着率が極めて高い。

415～436には地紋の施文されない底部をまとめた。うち、431～434の底面には網状痕が、435・436には木葉痕が認められる。

437は突起状の形態を呈するもので、弧状沈線が平行に施文される。土器突起部もしくは上製品の一部分と考えられる。438は外面に赤漆が塗布された土器片である。

(6) 土 製 品 (縄文時代) (第54図、第6表、写真図版70)

2点出土し、いずれも掲載した。439は中空土偶の脚部である。平行沈線が施されているが、摩滅が著しくそれ以上は不明である。440は耳栓である。

(7) 石 器 (第55～65図、第8表、写真図版71～77)

a) 概要

石器（ツール）の出土総数は329点で、このほか剥片および素材が4,822.32g出土している。大半は1号遺物包含層からの出土で、地点および層位別の出土状況は土師器、須恵器、縄文土器と同様の傾向を示す。よって原位置を保ったものは皆無といってよい。

縄文時期に関して、521の砥石および522の台石は古代と推定される。また519・520の石鎌は、縄文と古代いずれの可能性も考えられる。いずれについても、古代の場合は他の遺物の様相から平安時代のものである可能性が高い。これら以外は、すべて縄文時代に帰属するものと考えられる。

なお、本報告書では82点を掲載した。これは出土総数（ツール）の約25%にあたる。

b) 石器石材

今次調査で確認された石器石材は、頁岩、赤色頁岩、緑色頁岩、チャート、めのう、玉髄、流紋岩、安山岩、ホルンフェルス、デイサイト、凝灰岩、赤紫色凝灰岩、緑色片岩、片麻岩、花崗閃緑岩、砂岩、珩岩の17種である。

c) 詳細の記載

SDO1 (441~443)

埋土1層から3点出土した。441は削器で、縦長剥片の背面右側縁下半および腹面両側縁に刃部調整がなされている。442は打製石斧である。443は撥形の磨製石斧で、敲打調整痕が残る。

SDO2 (444・445)

埋土から2点出土した。444は縦長剥片を素材とした削器で、刃部調整は背面側はほぼ全域におよぶ。縦型石匙未成品の可能性ある。445は打製石斧である。片面は調整が浅く、自然面を広く残す。

1号整地層 (446)

1点出土した。縦長石匙で、背面全域を覆う深い調整が施されている。右側縁腹面側のごく浅い調整は刃つぶり加工と思われる。

1号遺物捨て場 (447)

石鏃で、平基無茎である。

1号遺物包含層 (448~522)

器種ごとに記載する。

448~456は石鏃である。凹基、平基、凸基の無茎鏃と、平基、凸基の有茎鏃が出土している。

457は尖頭器である。調整が荒く、未成品と思われる。基部側が若干抉れており、茎部を作出する意図があったことを窺わせる。

458~462は石鏃である。棒状(458・459)とスポイト状(460~462)の2種が見られる。

463~467は石匙である。縦型(463~465)と横型(466・467)が見られる。前者のうち、463は尖頭状を呈する。これ以外はおおよそ片面調整である。

468~474はスクレイパー類である。調整縁・面を問わず、連続する剥離調整が1辺の2分の1以上におよぶものを木類として登録した。さらに、刃部角(60°を境界とする)および刃部調整位置・形態により、削器、搔器に分類している。468は搔器である。黒曜石製で、小形である。469は刃部角が混在する削器である。470~474は削器である。472は刃部調整面が中央付近で逆転する。

475~477は楔形石器?である。475は黒曜石製で、円縁面を残置する。477は頁岩製で、やはり円縁面を残置する。いずれも、素材が小形であったことを物語るものである。石核の可能性もあるが、その場合の目的剥片は極めて小さいものとなり、既知の縄文石器にはない。

478~481は石筥である。478は赤色頁岩製で、小形である。意図的な石材選択が窺える。他はすべて頁岩製である。調整は、479のみ片面調整である。

482は二次加工ある剥片である。刃部調整が1辺の2分の1に満たないもの、もしくは連続しないもの、微細なものをここに登録した。定型的な石器ではないが、刃器として最も一般的に用いられていたものと考えられる。

483~488は石核である。石材は、頁岩、チャート、めのう、黒曜石がある。黒曜石の場合、素材が径数cmの円礫であるため、石核の大きさは当然これより小さくなる。大半は両極剥離がなされる。他の石材は、通常剥離と両極剥離が混在する。板状を呈するものもある。

489・490は打製石斧である。未成品が多い。489は唯一全域に調整がおよぶもので、極めて細長い。490は赤紫色凝灰岩製で、縁辺の調整はあるもののいわゆる石斧形に成形されていない。同石材の石鏃が存在することから、その未成品の可能性がある。

491～494は磨製石斧である。491は小形で非実用的なものである。492は剥離調整痕が広く残る。

495は片面礫器である。裏面の剥離は連続せず、刃部調整とは言えない。頁岩の扁平礫が素材である。

496～499は両面礫器である。496は495とほとんど同形態で、長軸両端に刃部が形成される。498は泥粒状を呈する扁平素材の先端部に刃部が形成される。

500は剥離加工痕のある礫である。何らかの未成品と考えられる。

501～504は縁辺を用いた磨石で、503・504はいわゆる特殊磨石である。501・503は剥離痕が際立っており、「磨る」だけでなく「敲く」行為も頻発していた可能性がある。

505は多面体敲石である。チャート製である。

506～511は凹石である。506・507は磨・敲石との複合石器である。

512～514は台石・石皿類である。512・513は碗状を呈する。513は安山岩（軽石）製である。

515～518は石製品である。515～517は石棒片と考えられるが判然としない。

519～522に古代（平安時代）に属するものとその可能性があるものを一括した。519・520はいわゆる石鏃である。刃部に磨耗は観察されず、未使用の可能性がある。521は鉄器用の砥石である。522の台石は被熱しており、金床石の可能性がある。

(8) 陶 磁 器 (第66図、第7表、写真図版78)

陶磁器は、239.8g出土した。ただし、出土地点はすべて1層もしくは擾乱土で、遺構に伴うものは皆無である。製作時期は、すべて近世～近代である。

近世の陶器資料を2点掲載した。523・524は瀬戸産の播鉢片で、製作時期は18世紀である。

(9) 白 然 遺 物

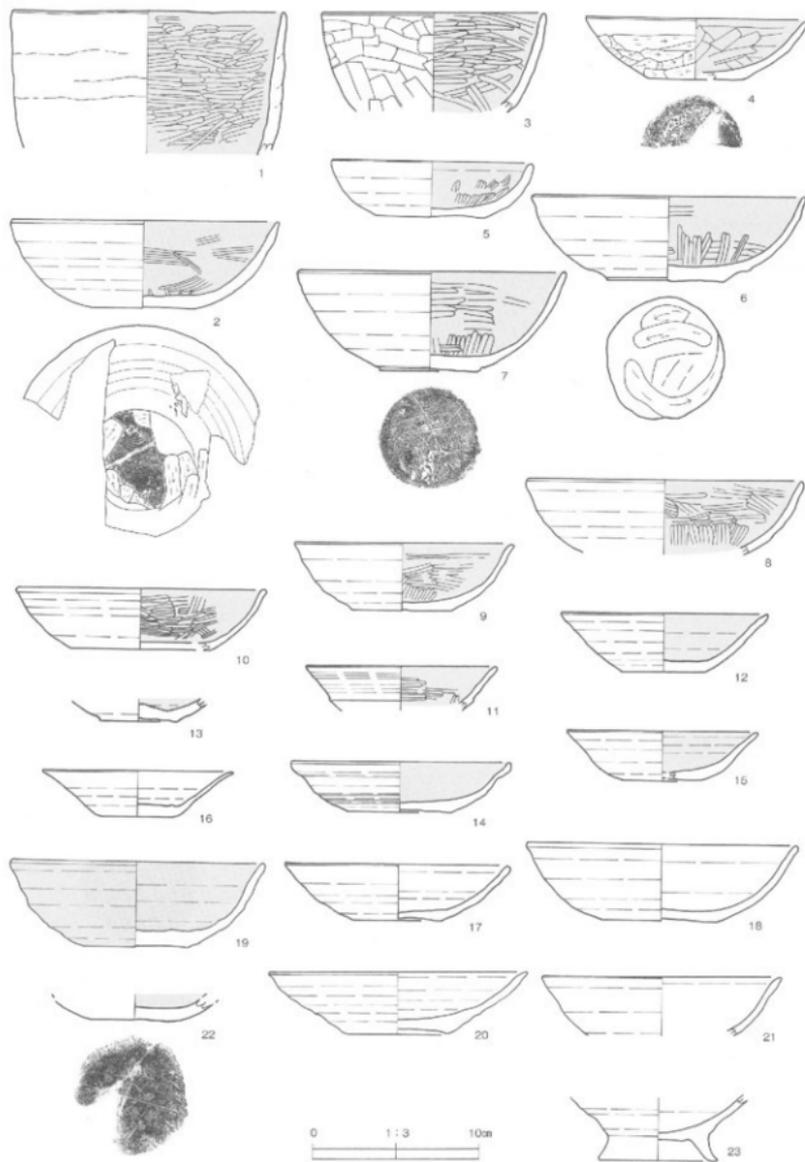
種実類や骨片が出土している。

骨片

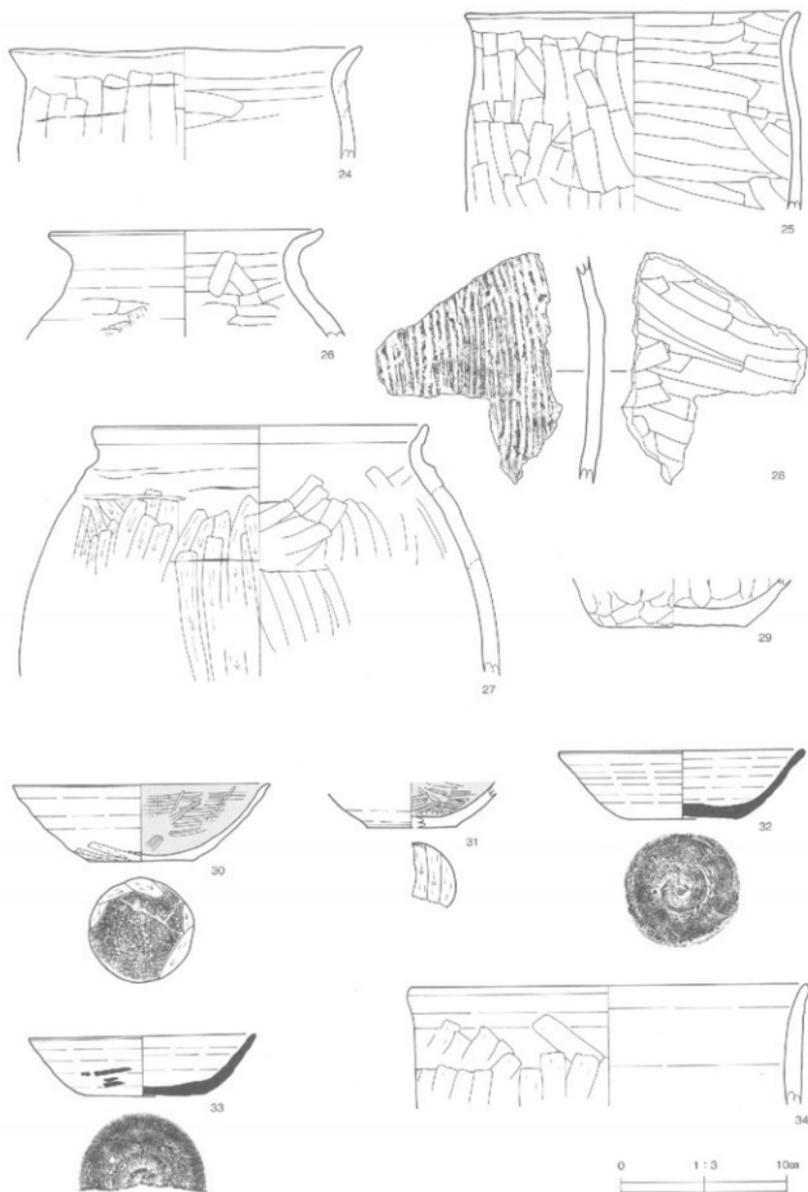
79.0g出土した。獣骨である。出土地点は、出土地点不明分以外はすべて1号遺物包含層である。碎片のため同定は実施していない。

種実類

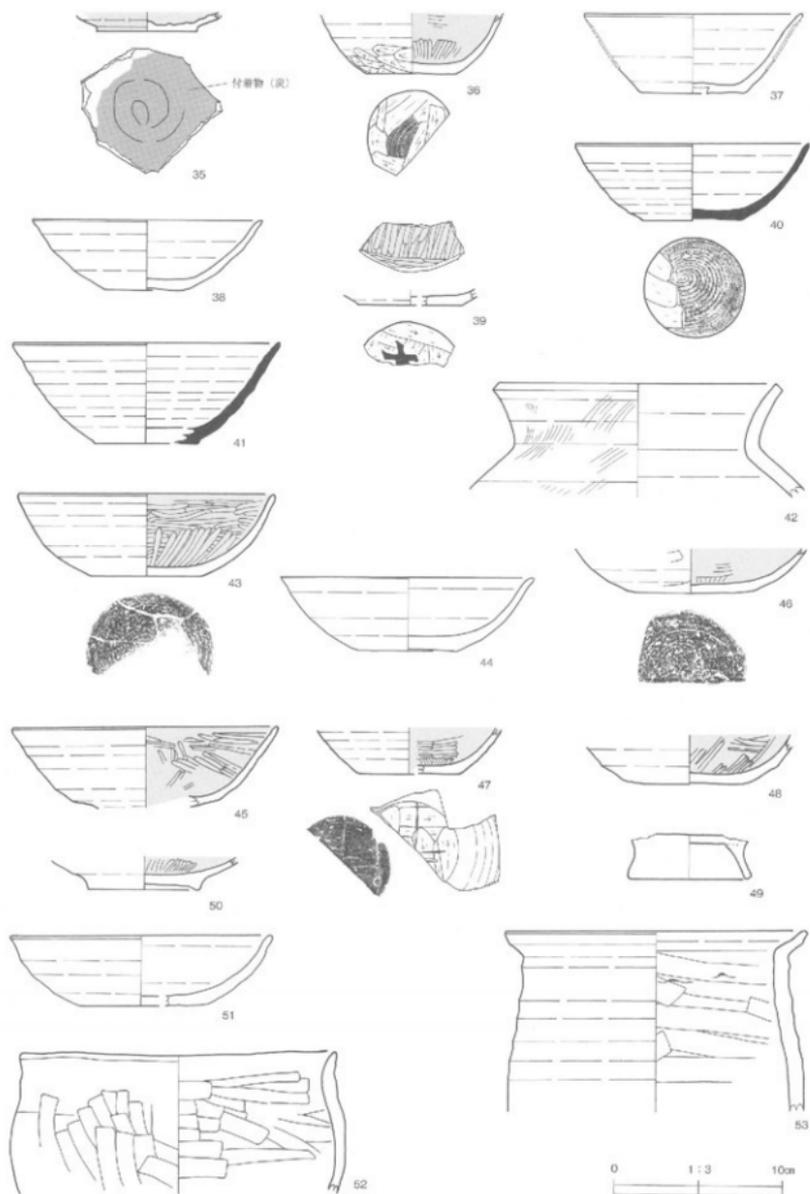
低湿地部分からトチ、オニグルミ、コナラなどが多数出土した。ただし、人為的な廃棄の様相を呈するものではなく、自然堆積したものと考えられる。今回、自然遺物は全量採取を行っていないため、総量は不明である。



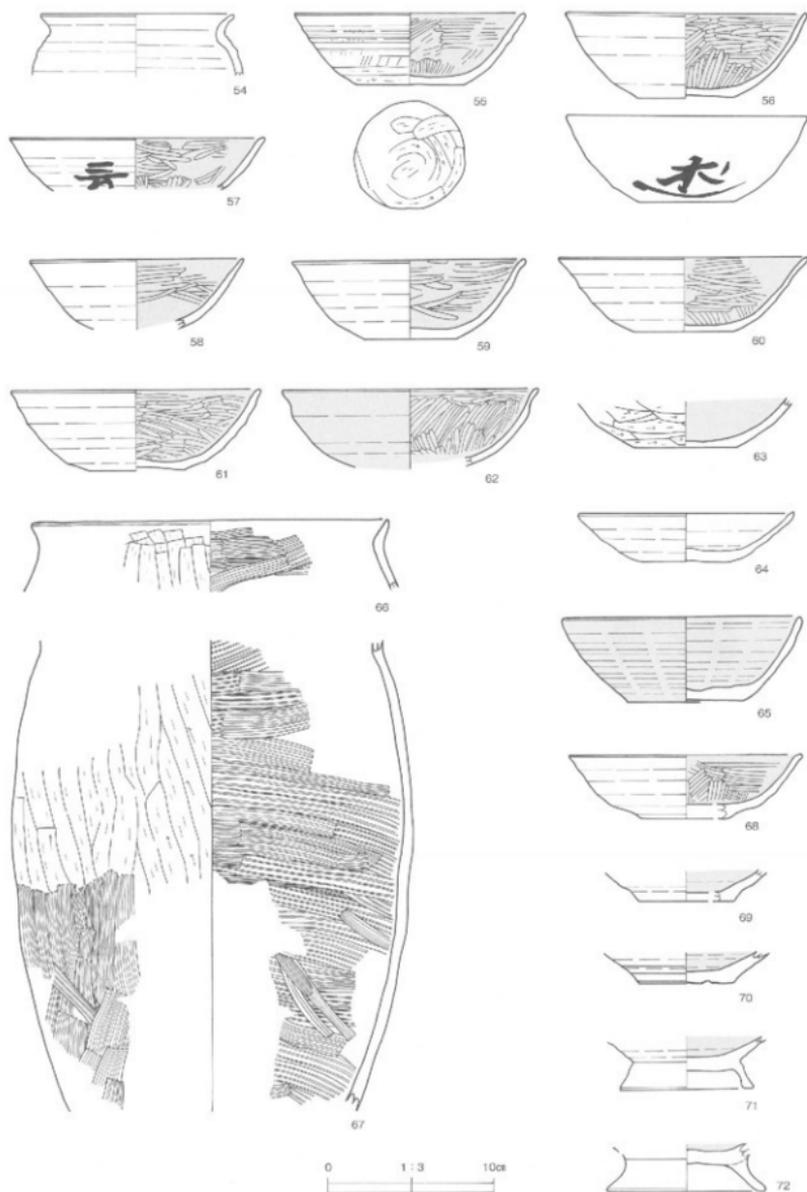
第23図 土師器・須恵器 (1)



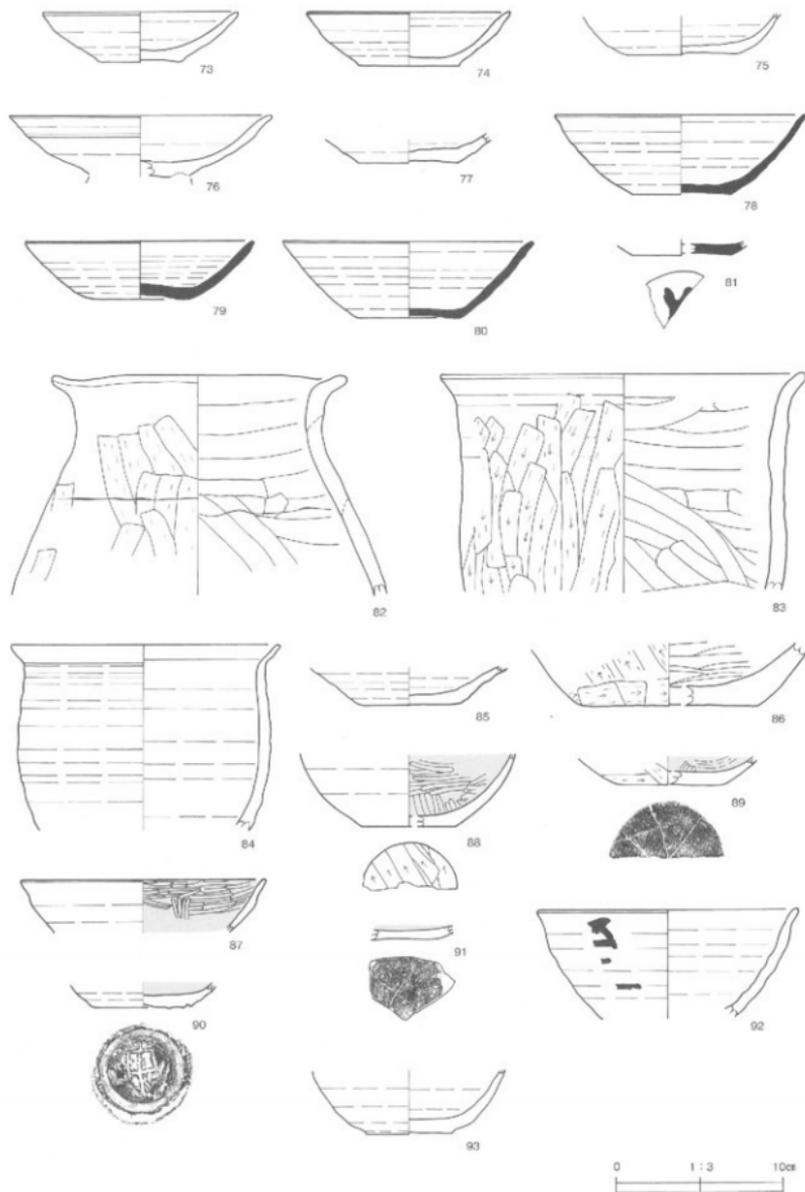
第24図 土師器・須恵器(2)



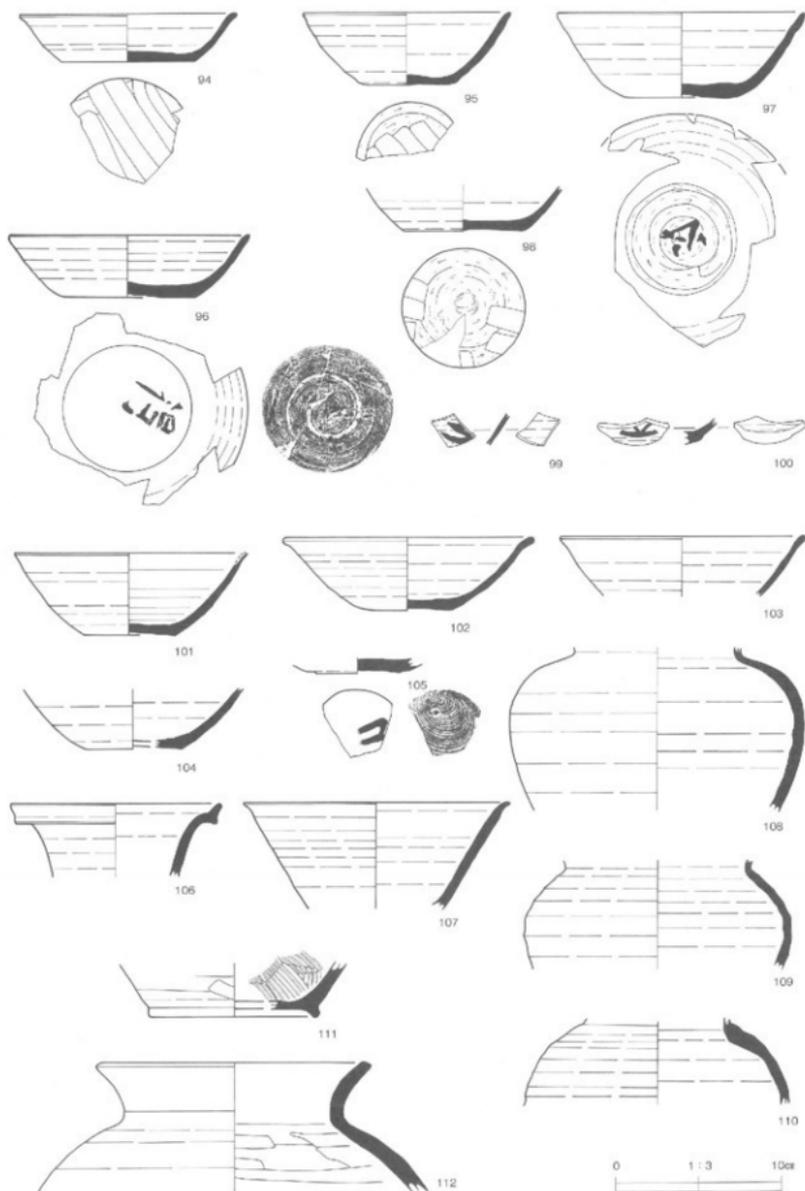
第25図 土師器・須恵器 (3)



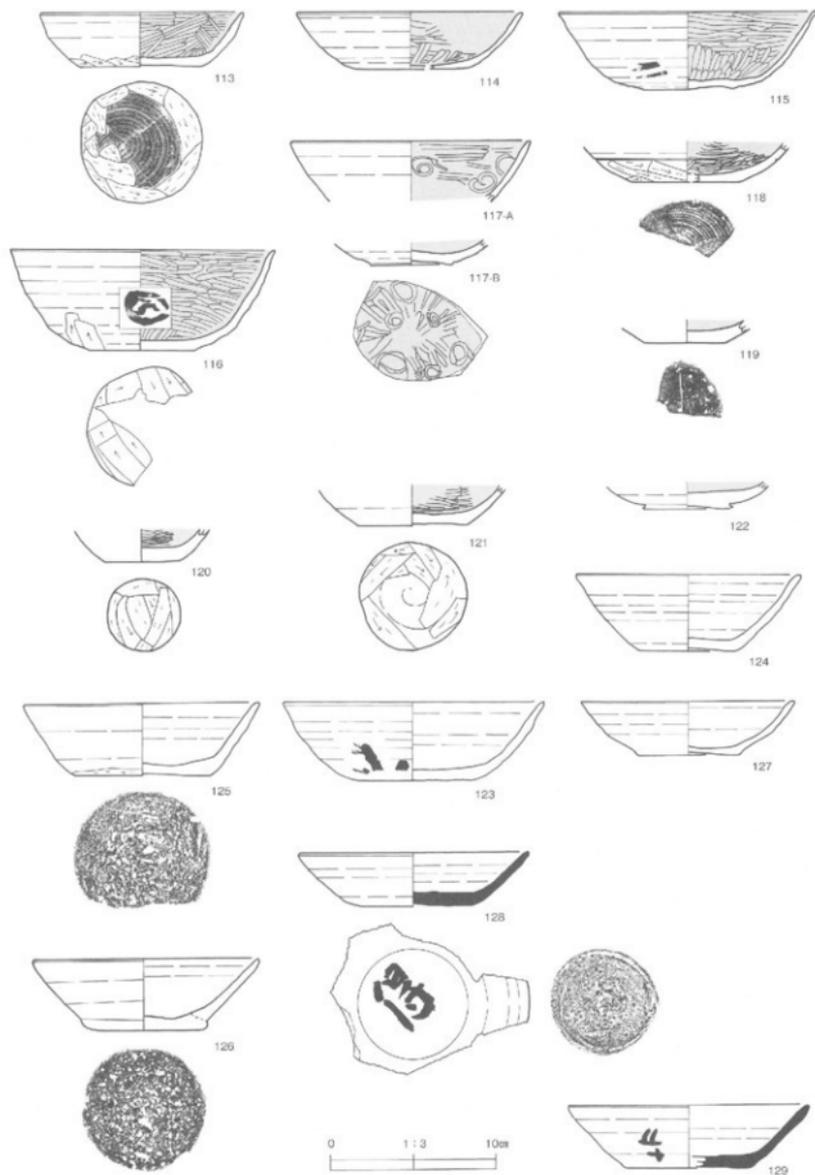
第26図 土師器・須恵器(4)



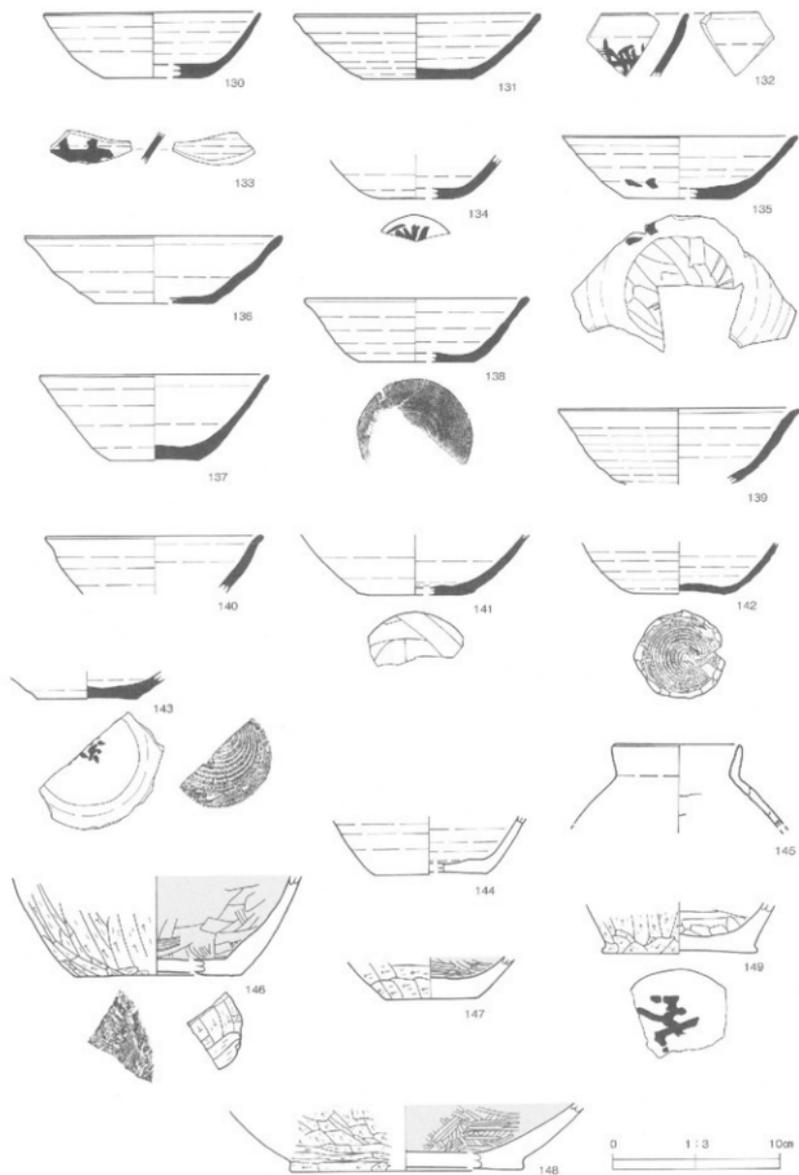
第27図 土師器・須恵器 (5)



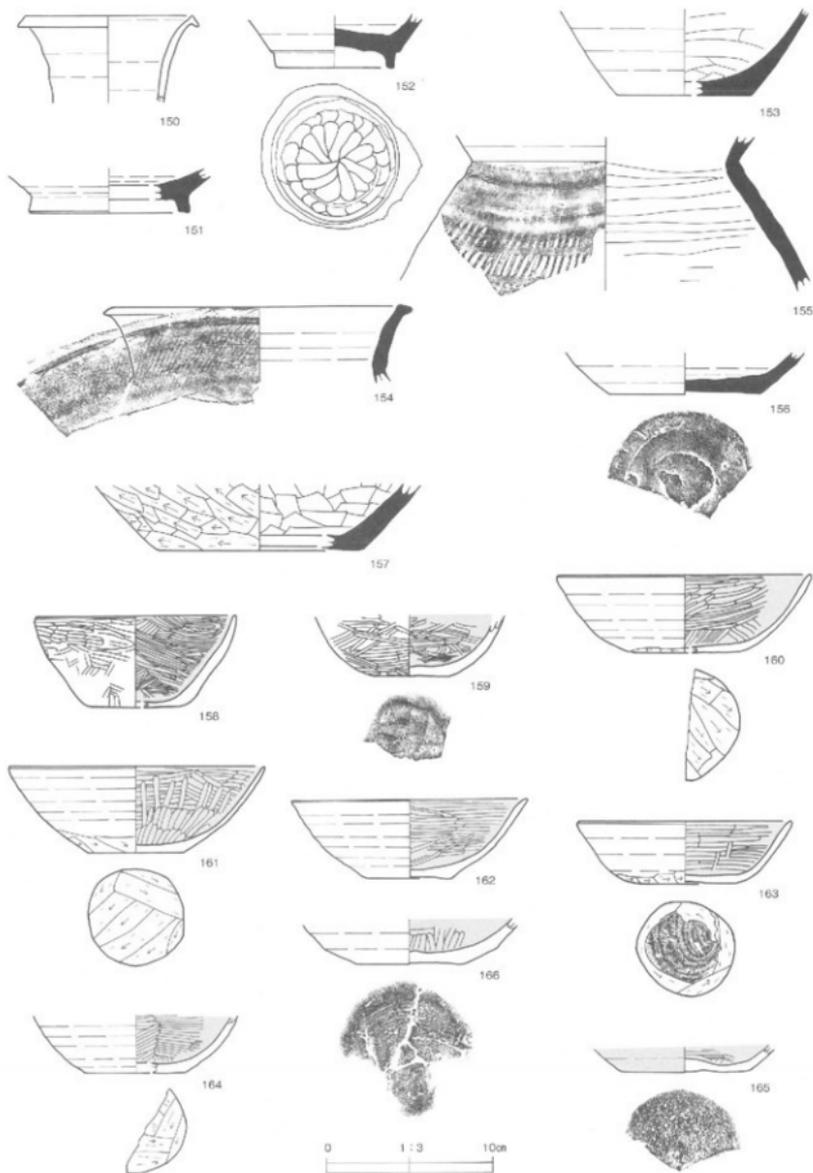
第28回 土師器・須恵器 (6)



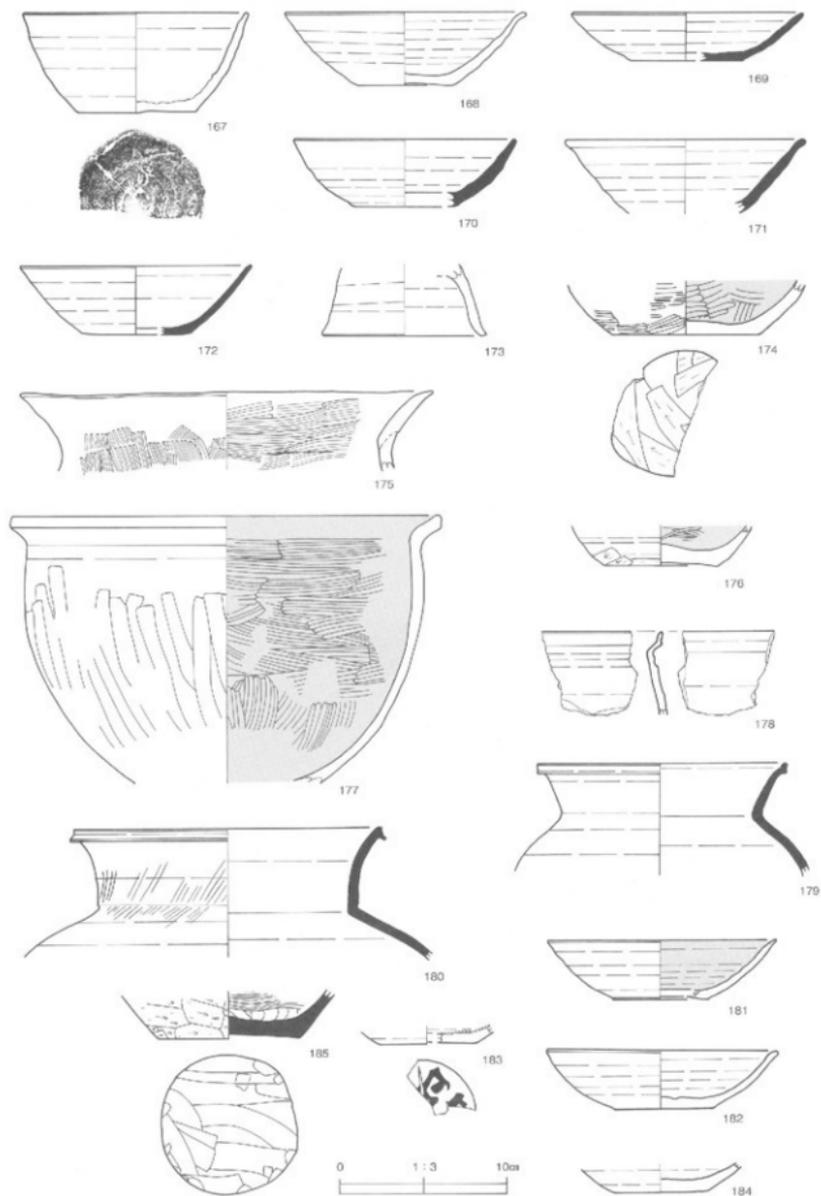
第29図 土師器・須恵器（7）



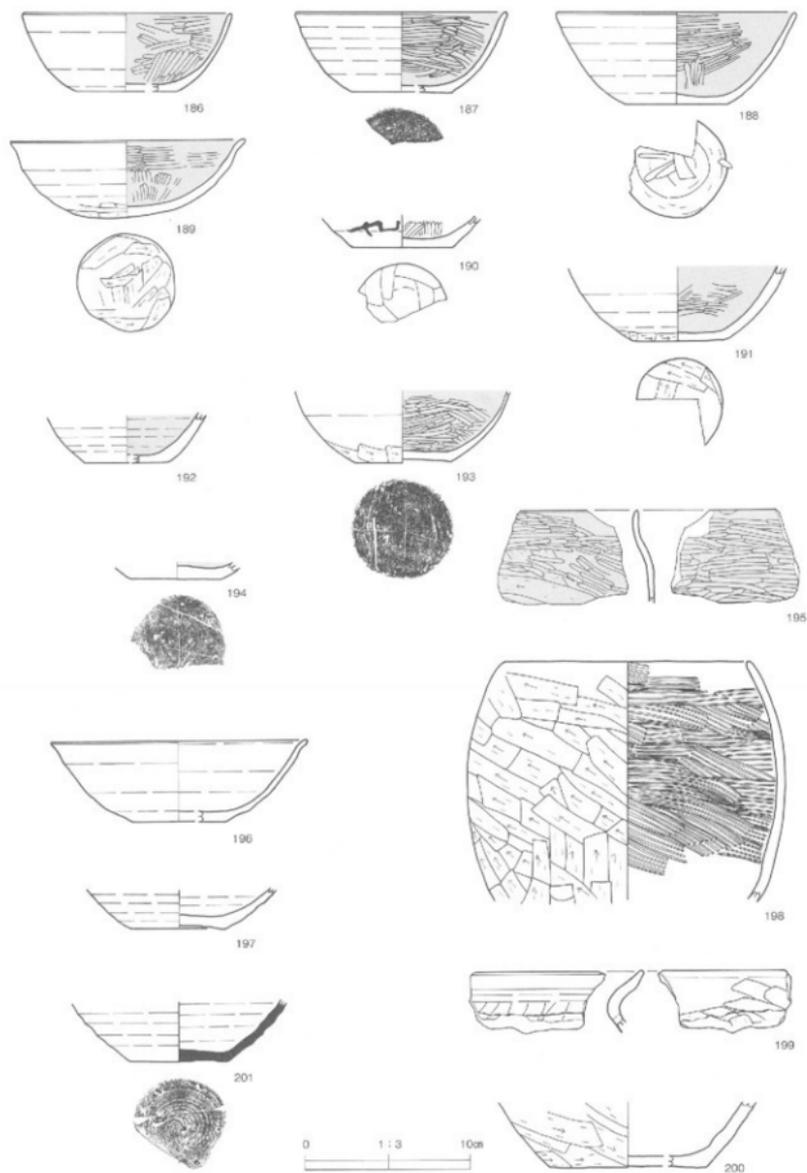
第30図 土師器・須恵器(8)



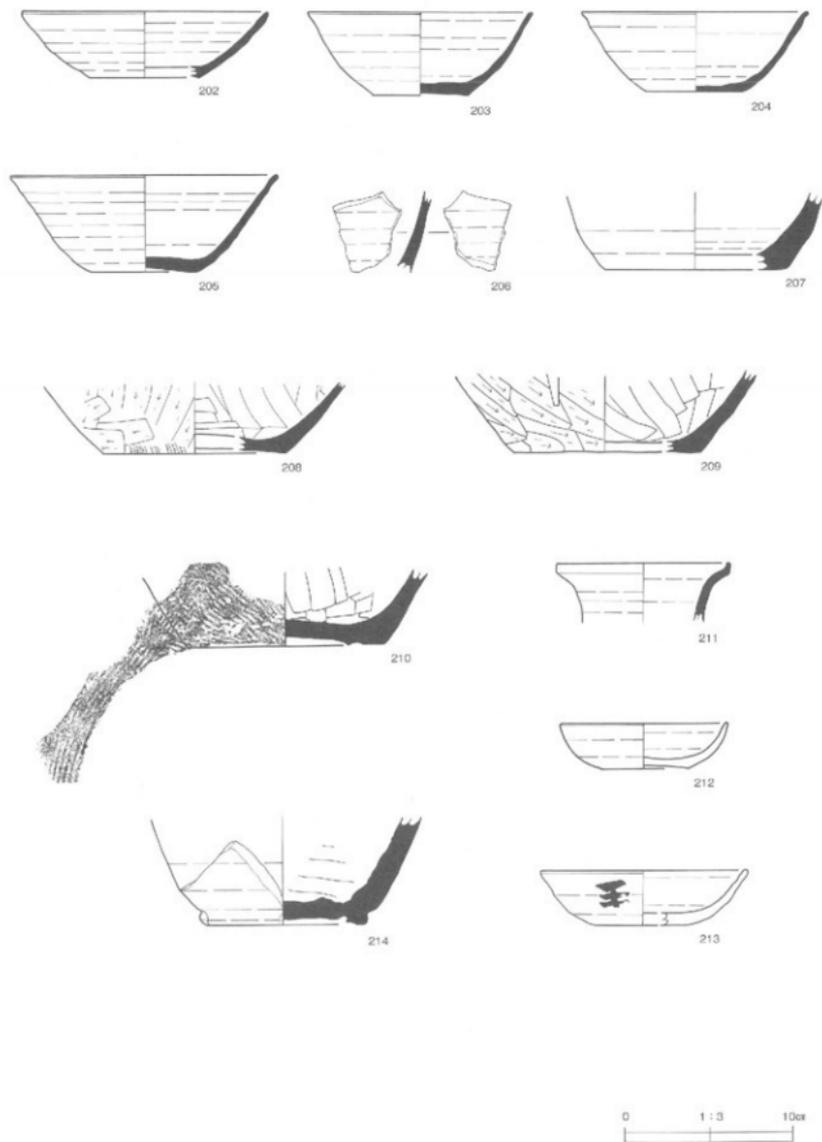
第31圖 土師器・須恵器(9)



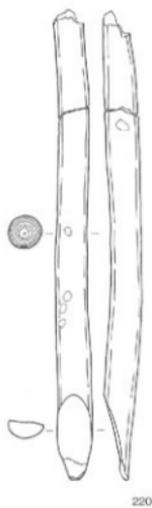
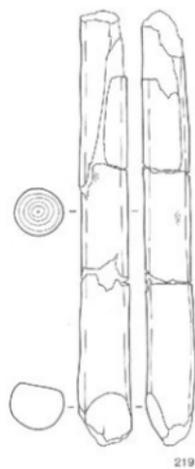
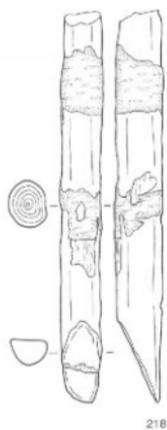
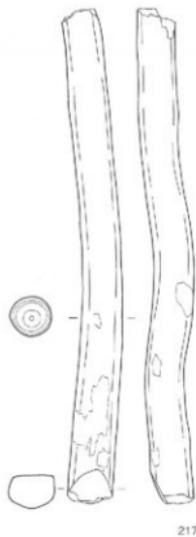
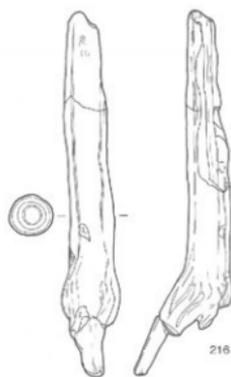
第32図 土師器・須恵器 (10)



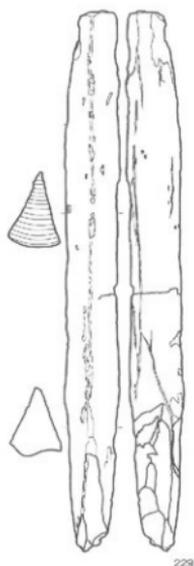
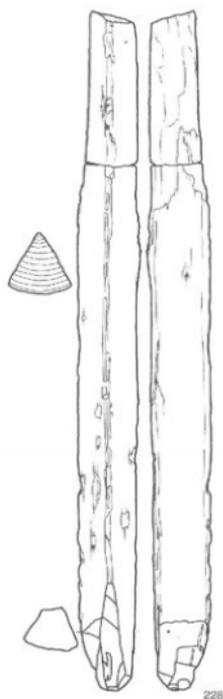
第33図 土師器・須恵器 (11)



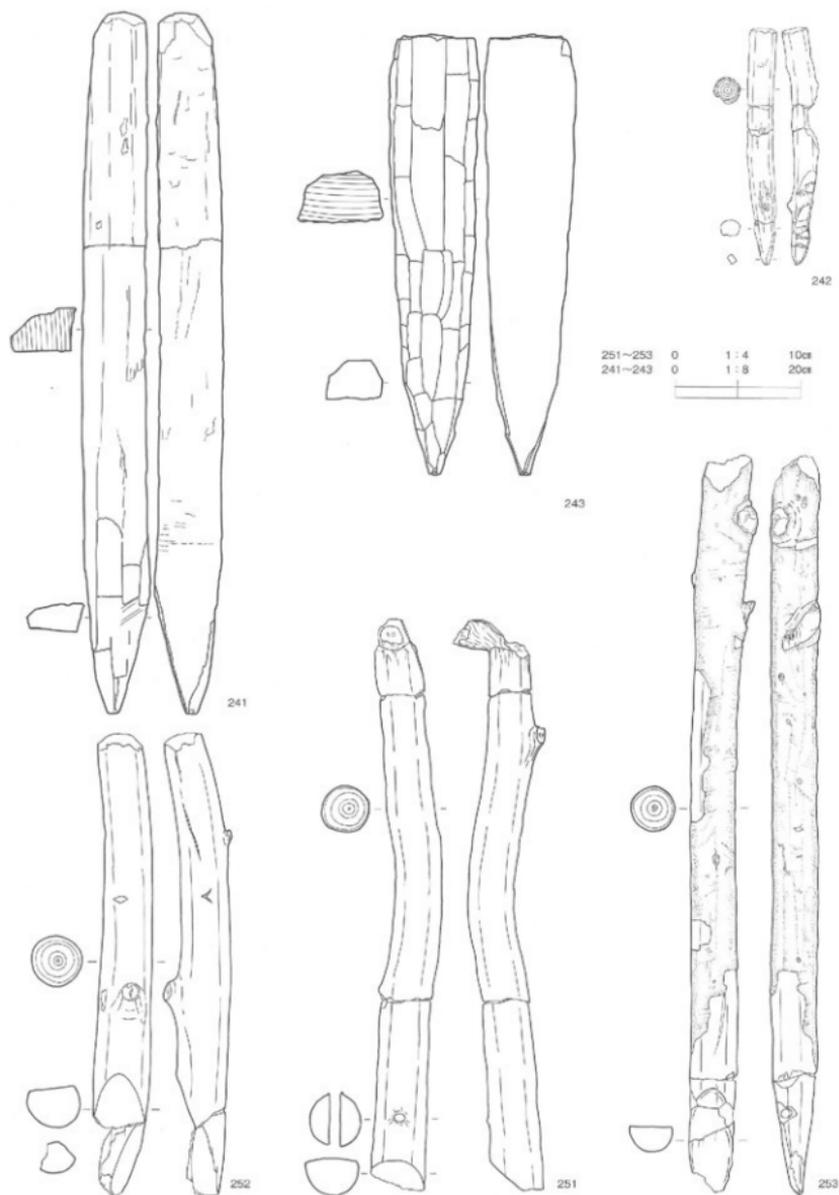
第34回 土師器・須恵器 (12)



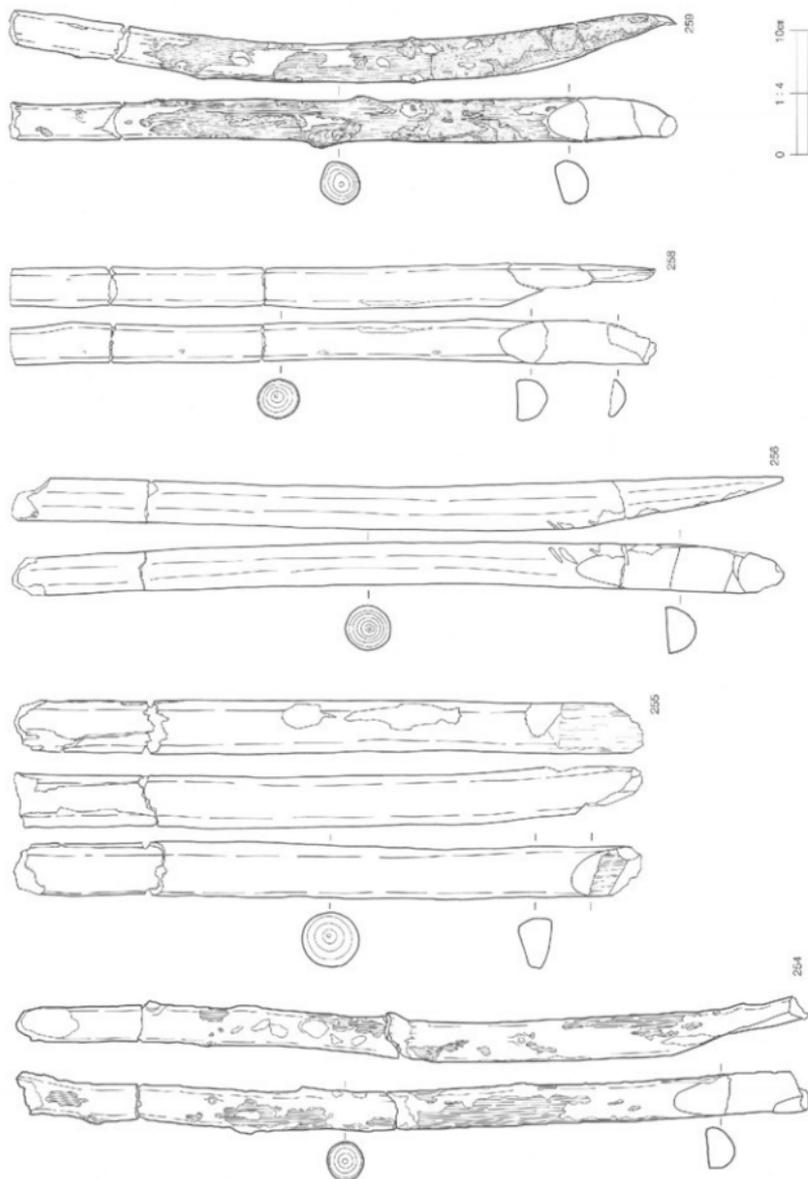
第35圖 木質遺物 (1)



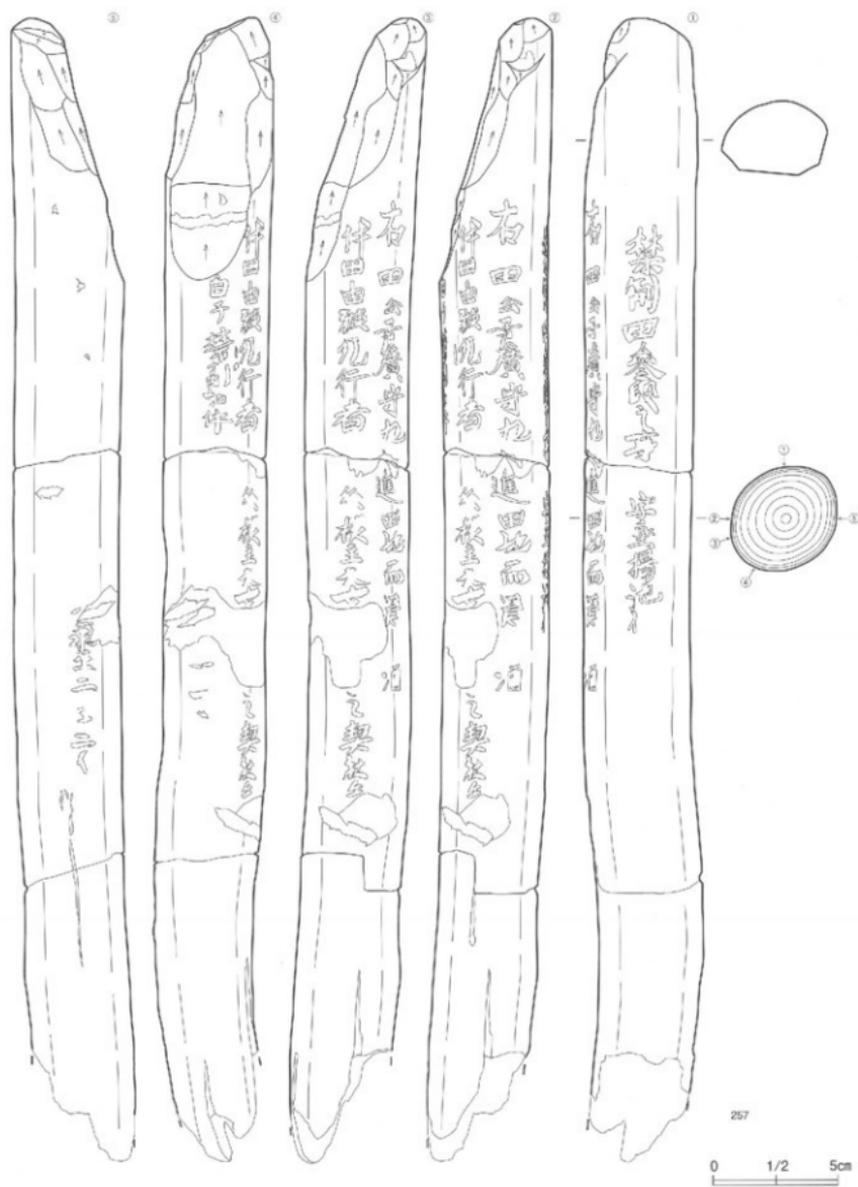
第36図 木質遺物(2)



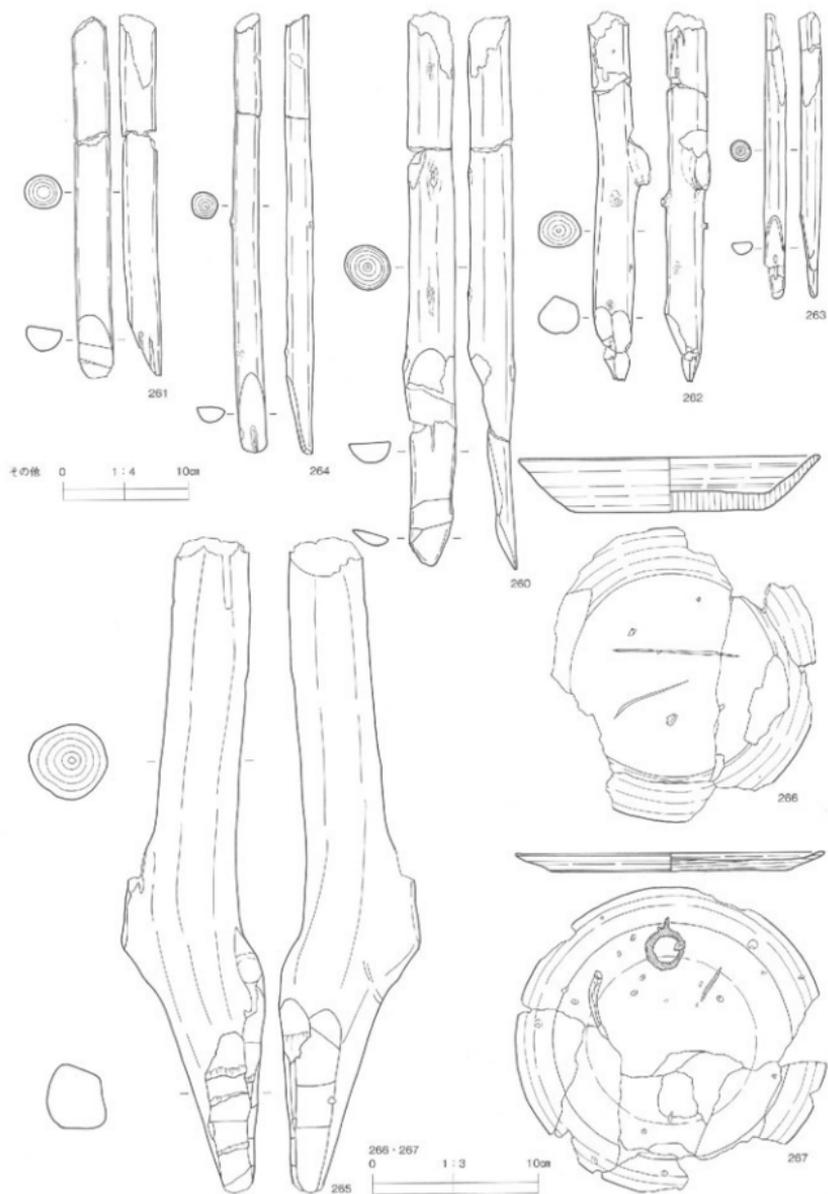
第37図 木質遺物(3)



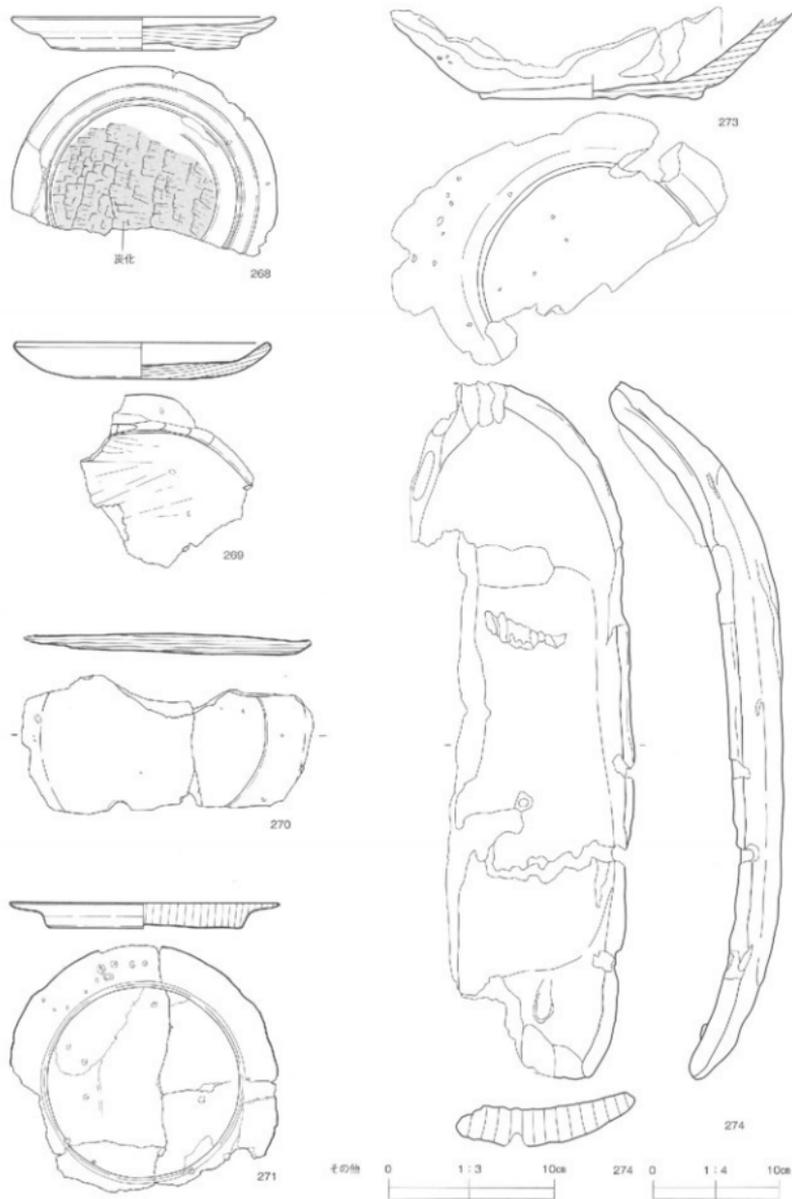
第38圖 木質遺物(4)



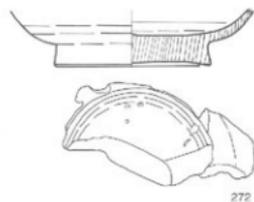
第39図 木質遺物 (5)



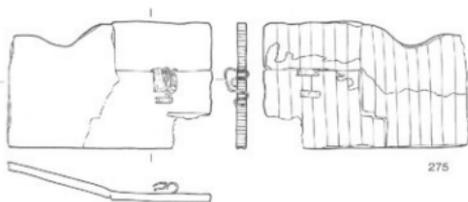
第40図 木質遺物 (6)



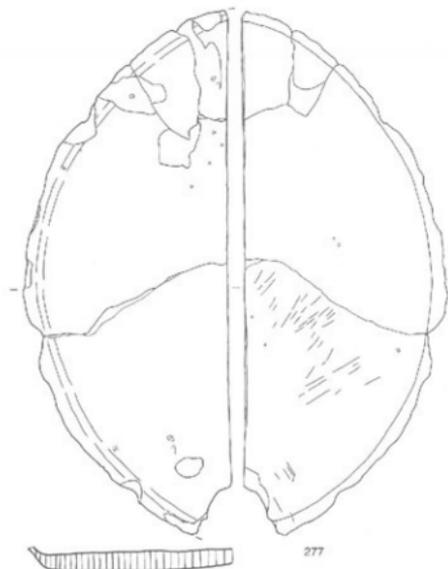
第41図 木質遺物 (7)



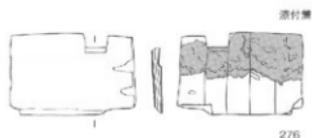
272



275



277



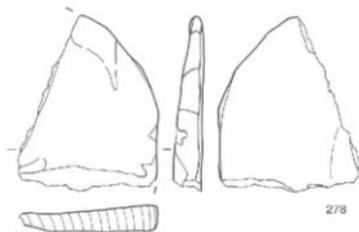
漆付層

276

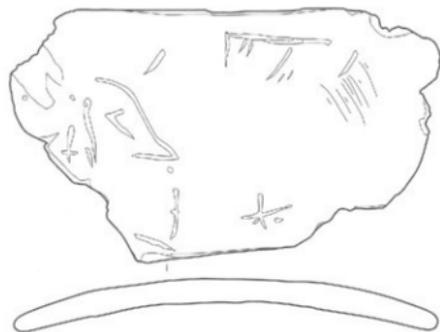
その他 0 1:3 10cm



277・283 0 1:4 10cm

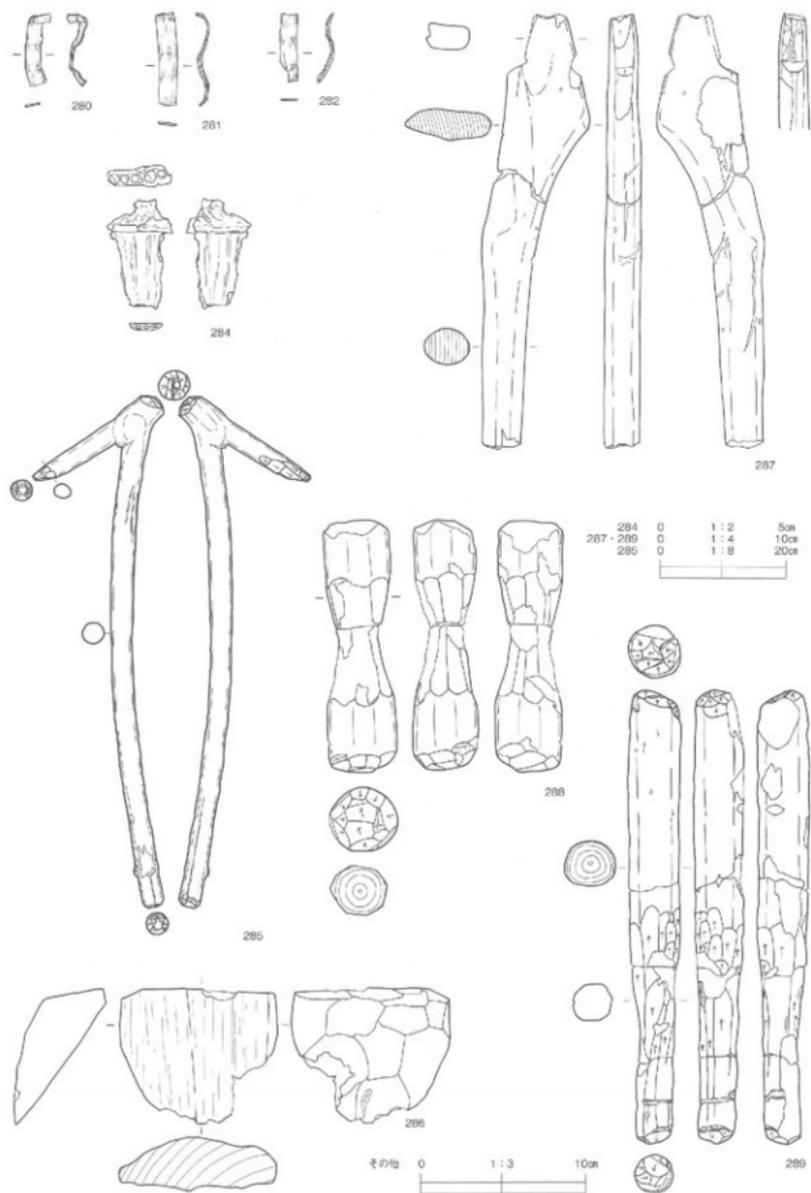


278



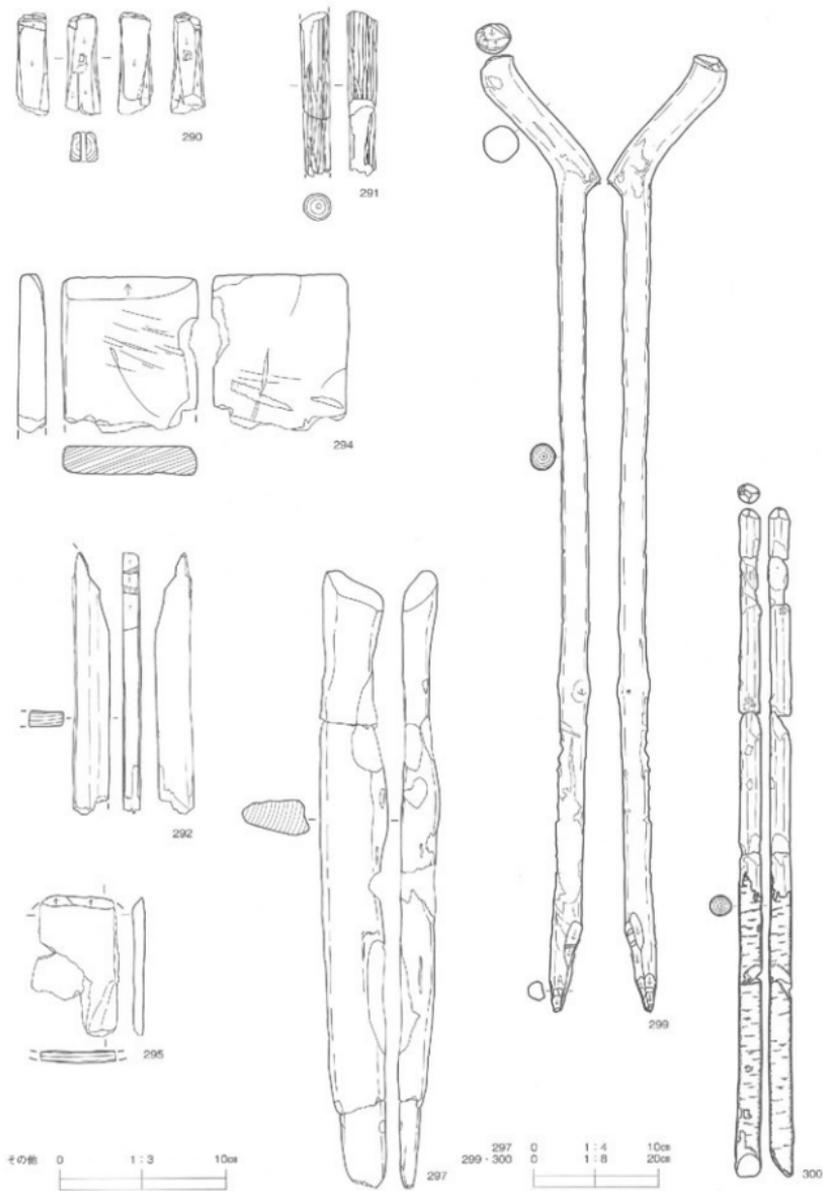
283

第42図 木質遺物(8)

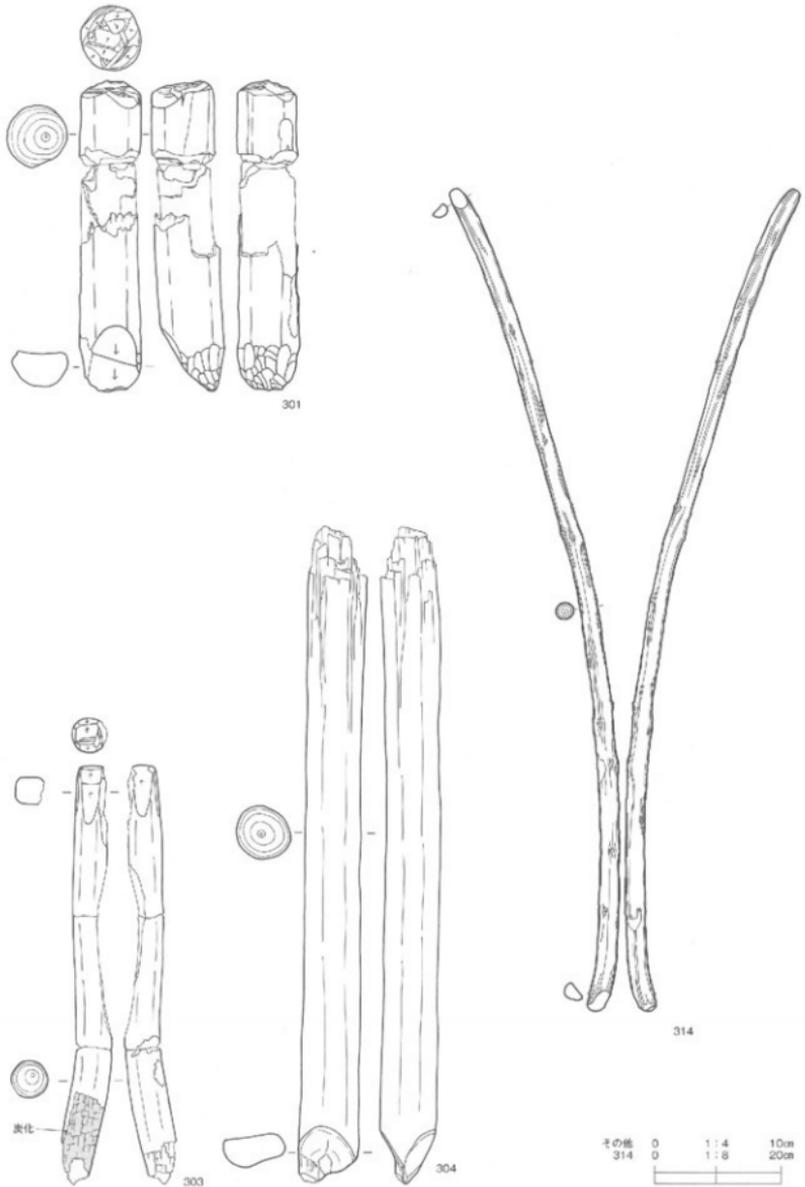


第43図 木質遺物 (9)

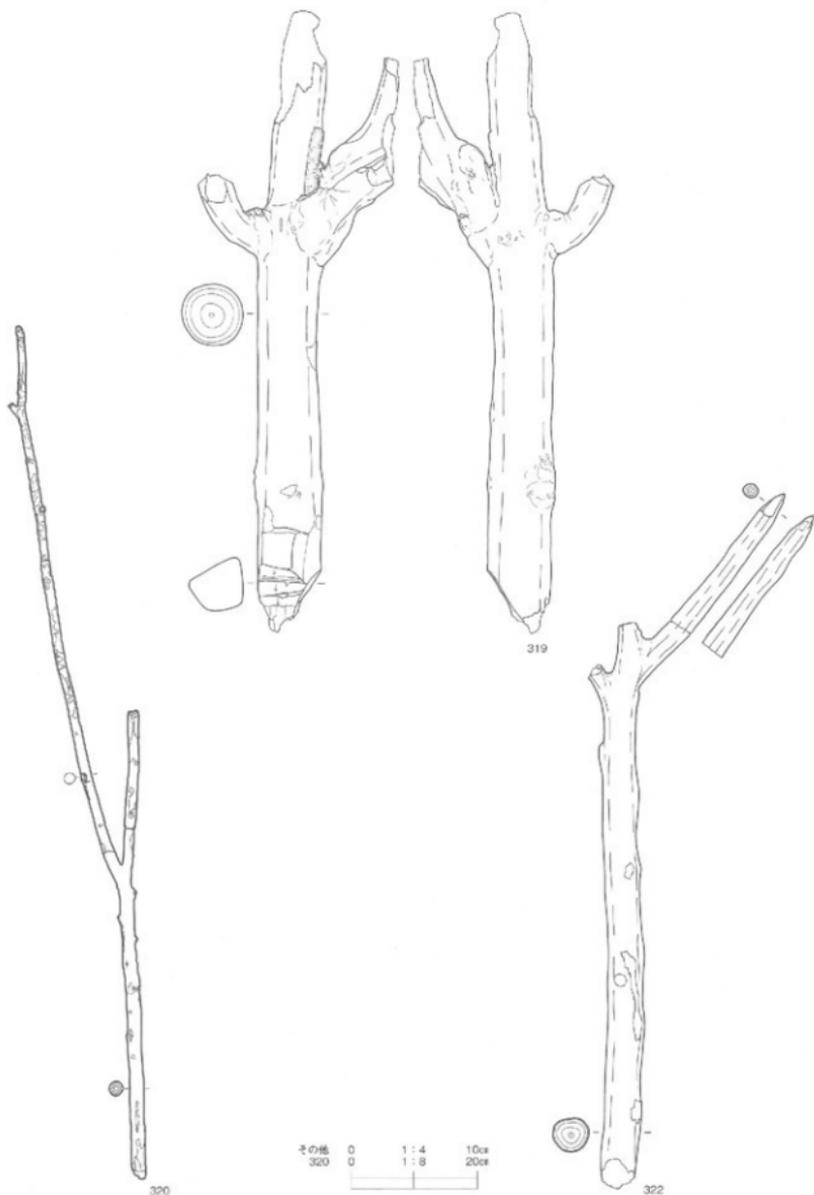
3 出土遺物



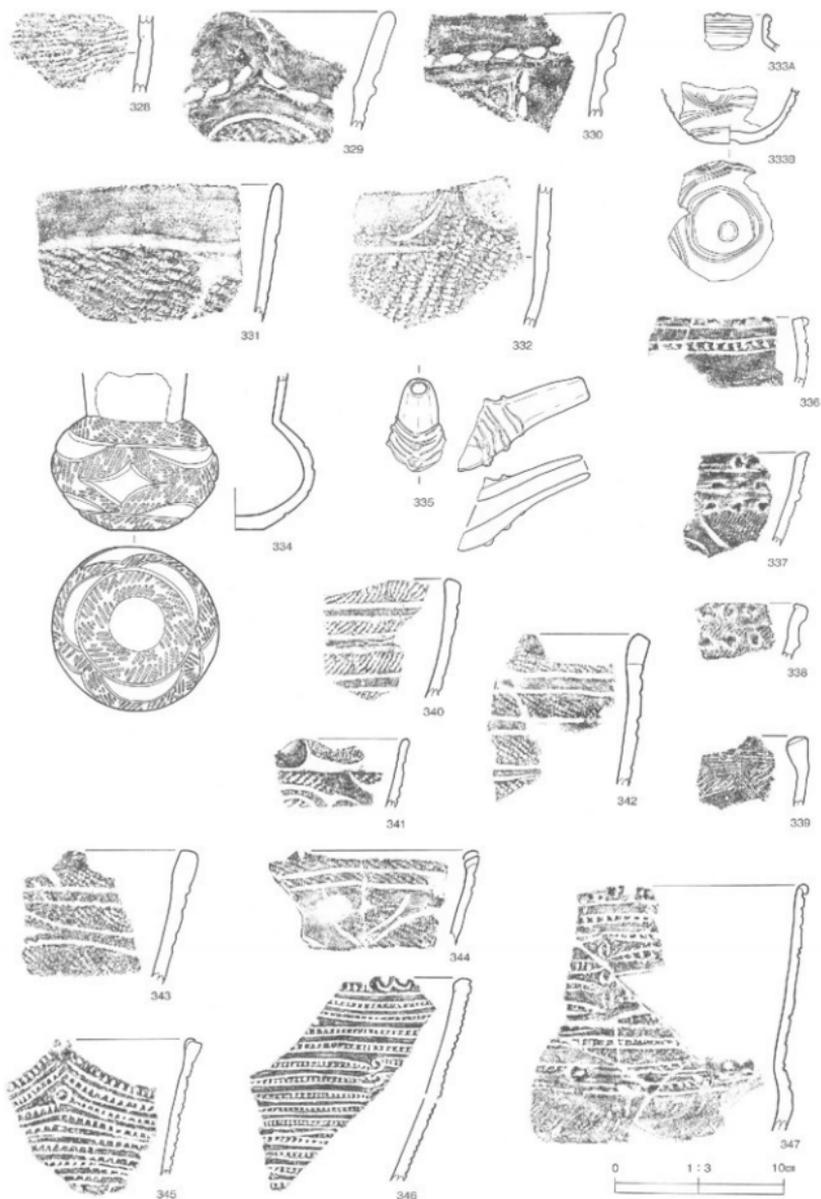
第44図 木質遺物 (10)



第45図 木質遺物 (11)



第46図 木質遺物 (12)



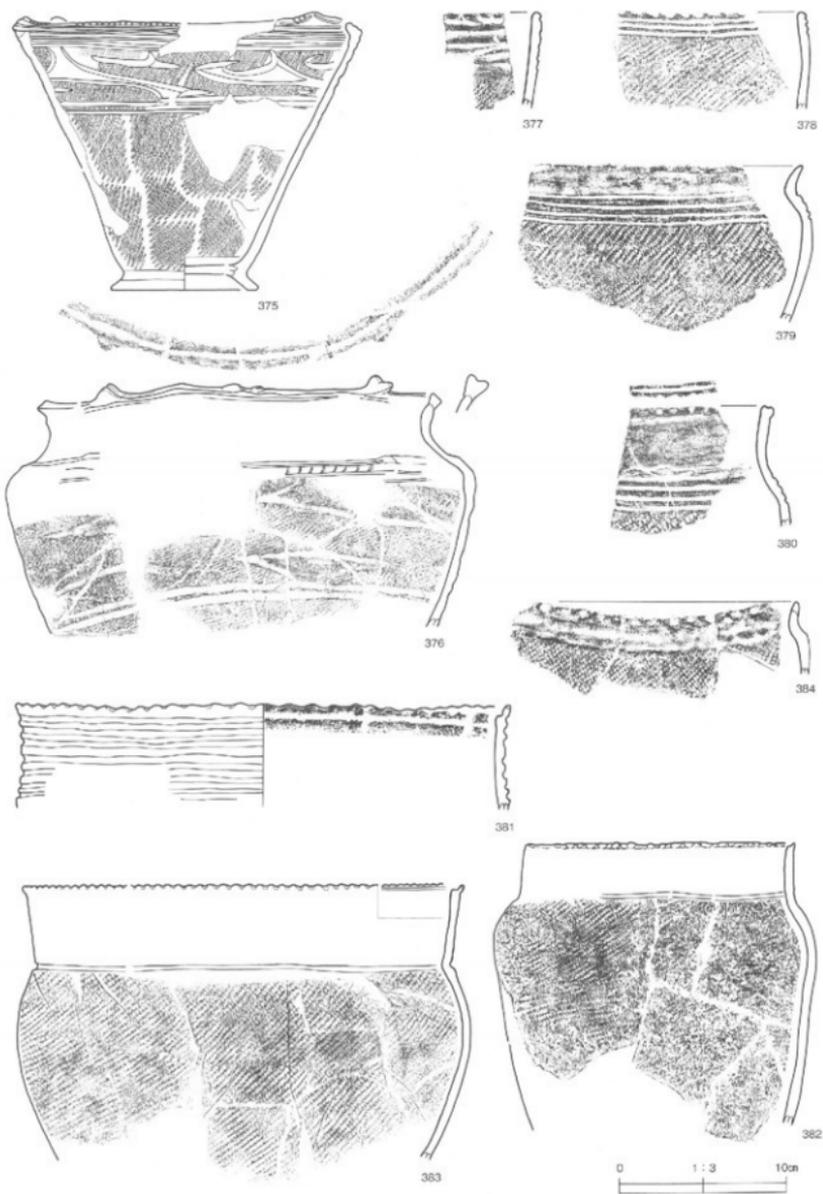
第47図 縄文土器 (1)



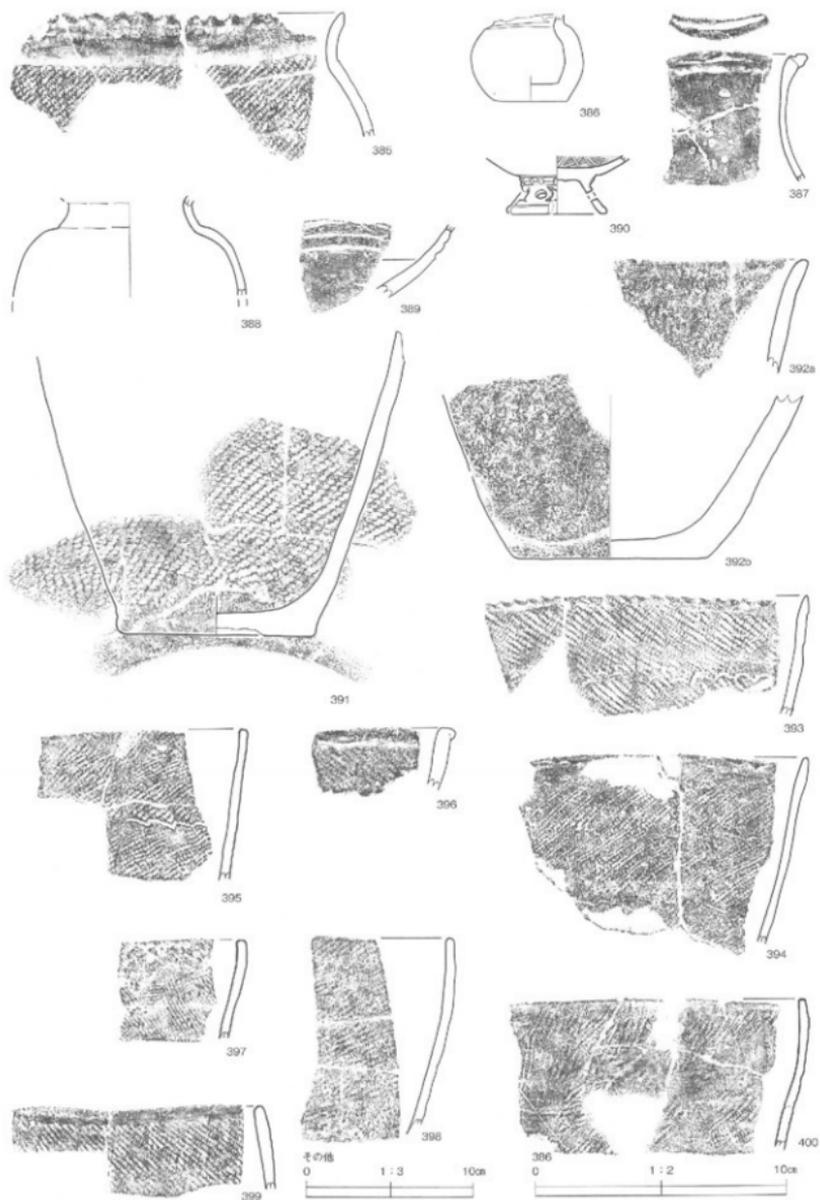
第48図 縄文土器 (2)



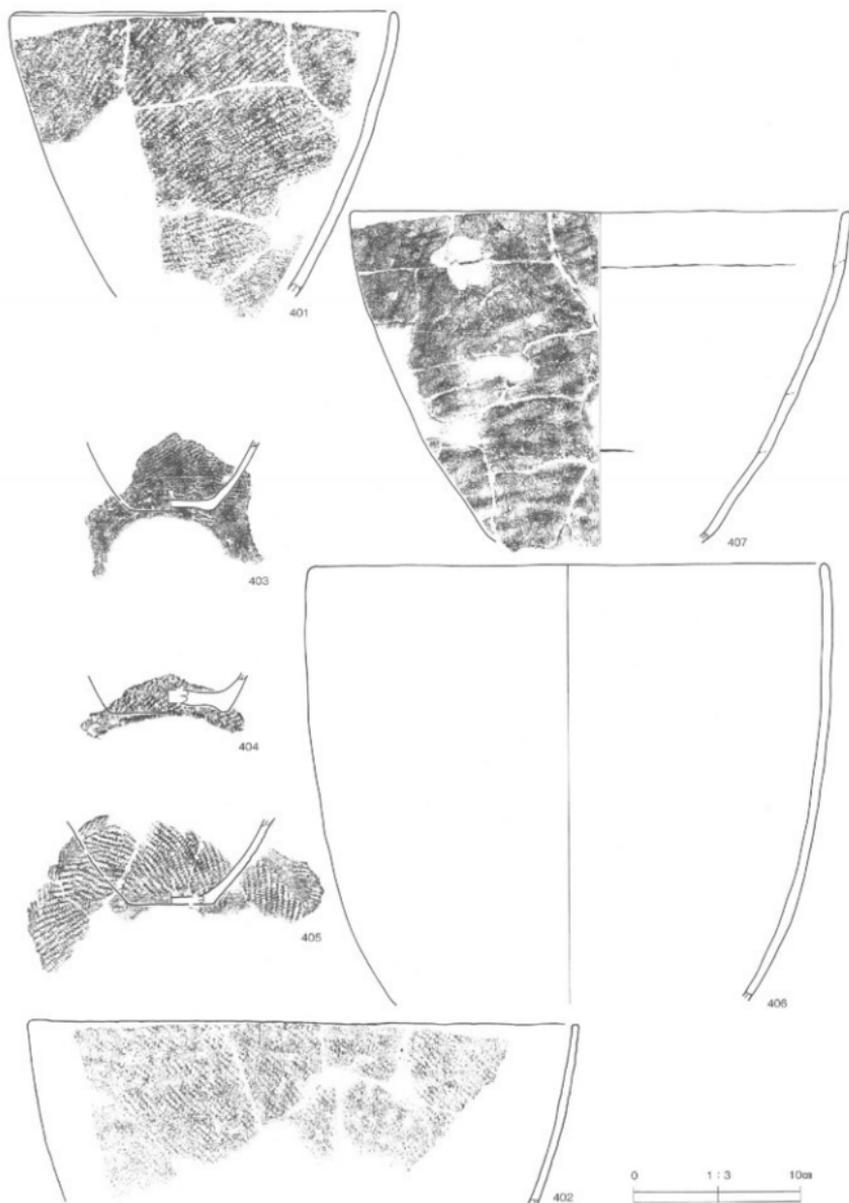
第49図 縄文土器 (3)



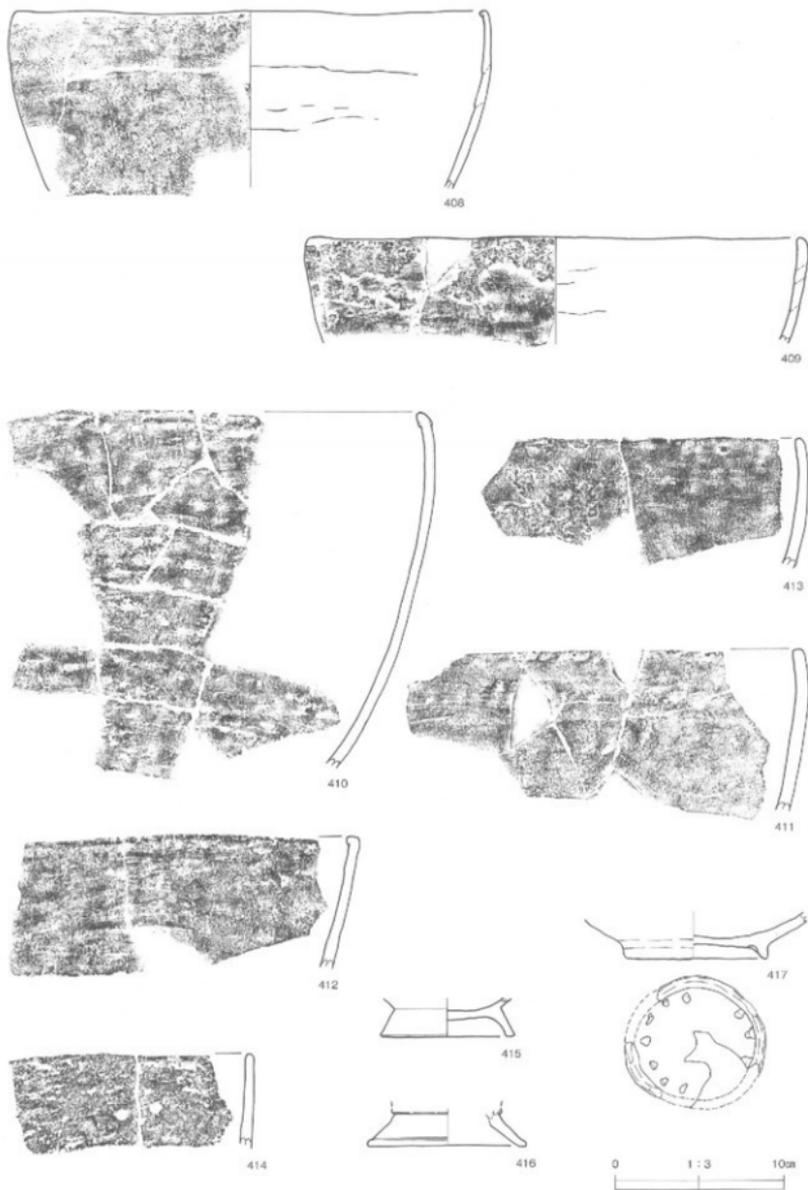
第50図 縄文土器 (4)



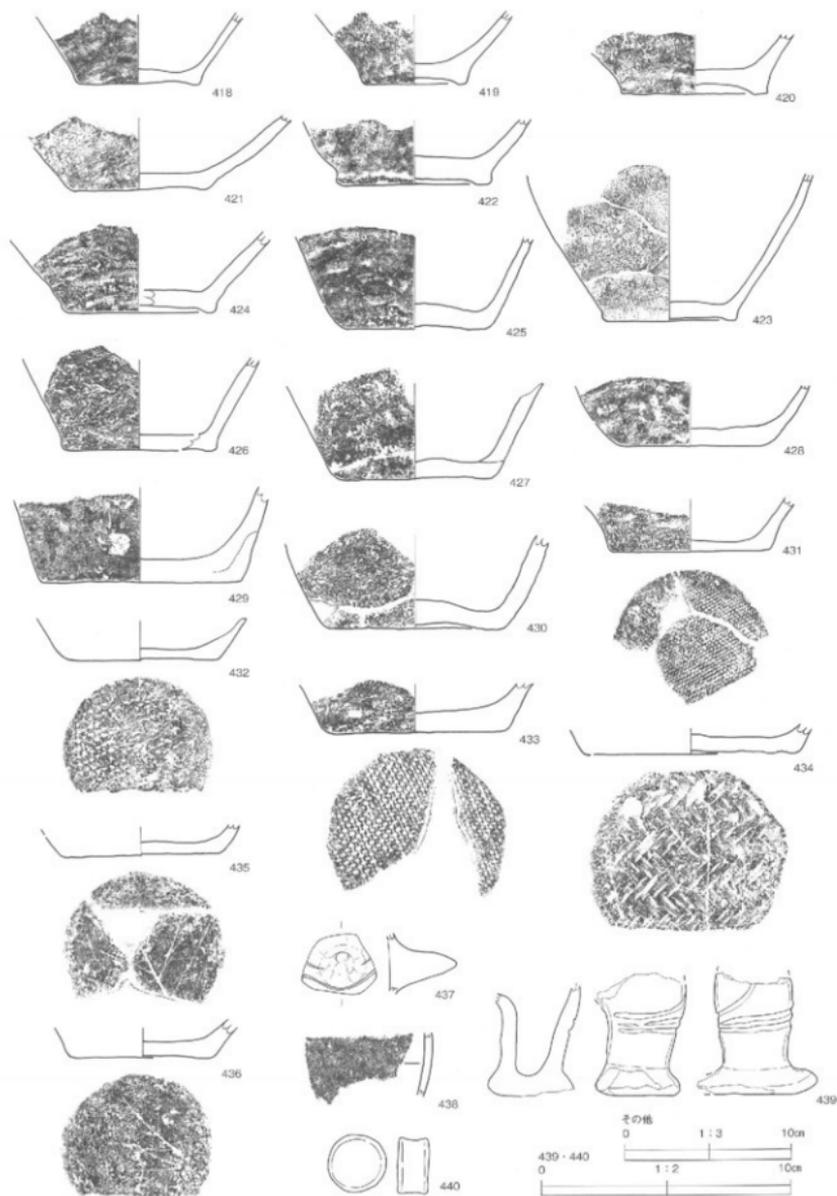
第51図 縄文土器 (5)



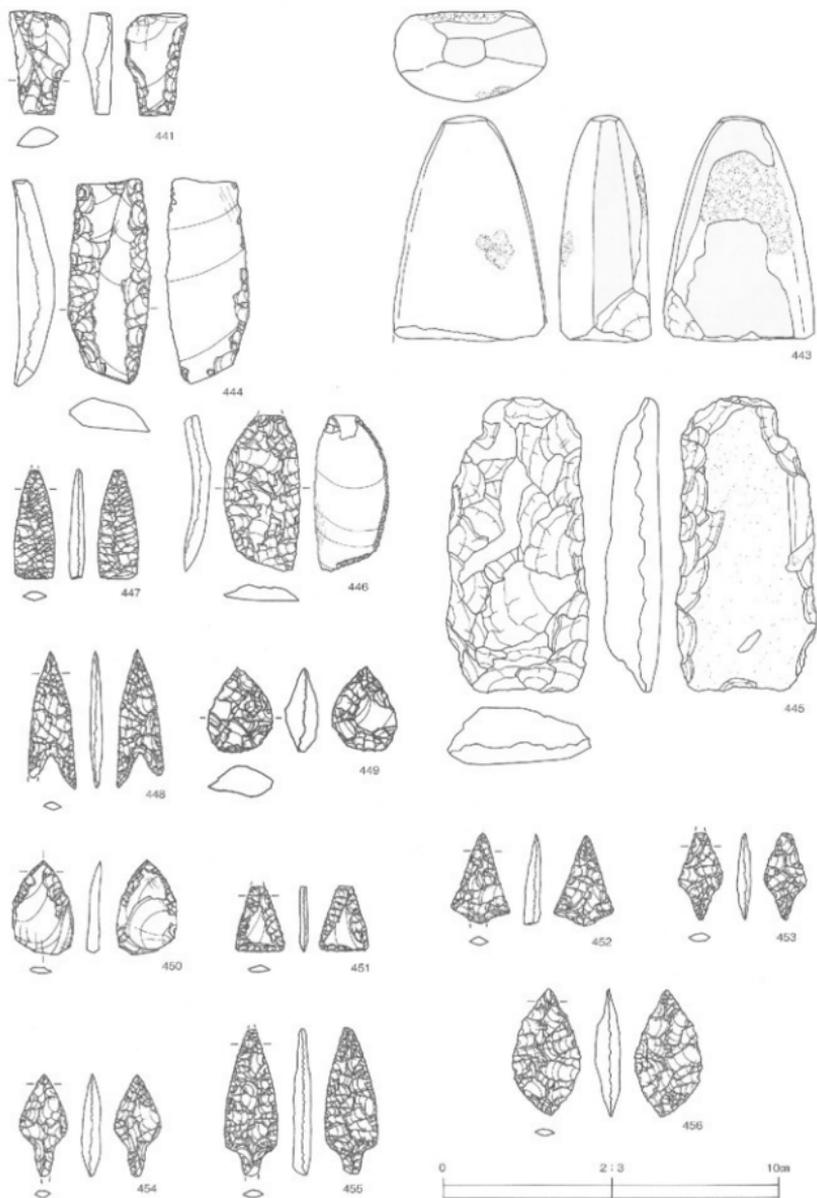
第52図 縄文土器 (6)



第53図 縄文土器(7)



第54図 縄文土器(8)・土製品



第55圖 石器 (1)



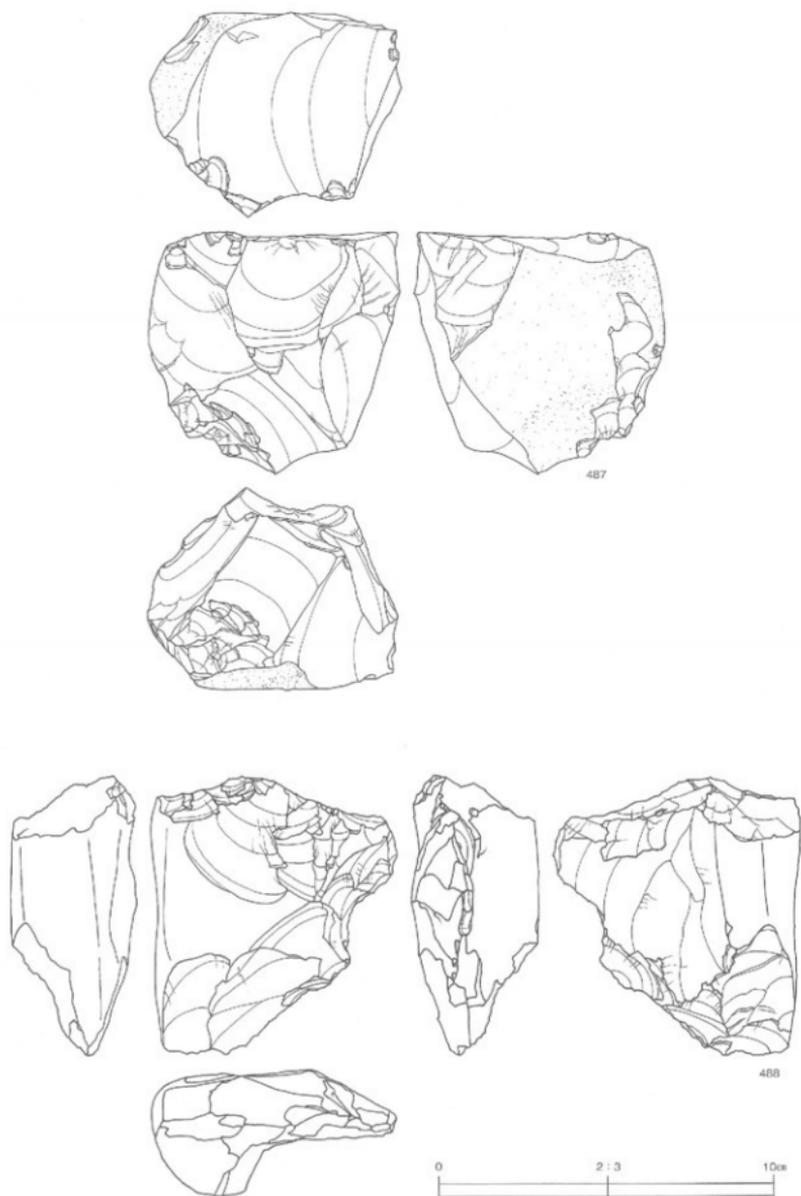
第56圖 石器(2)



第57圖 石器 (3)



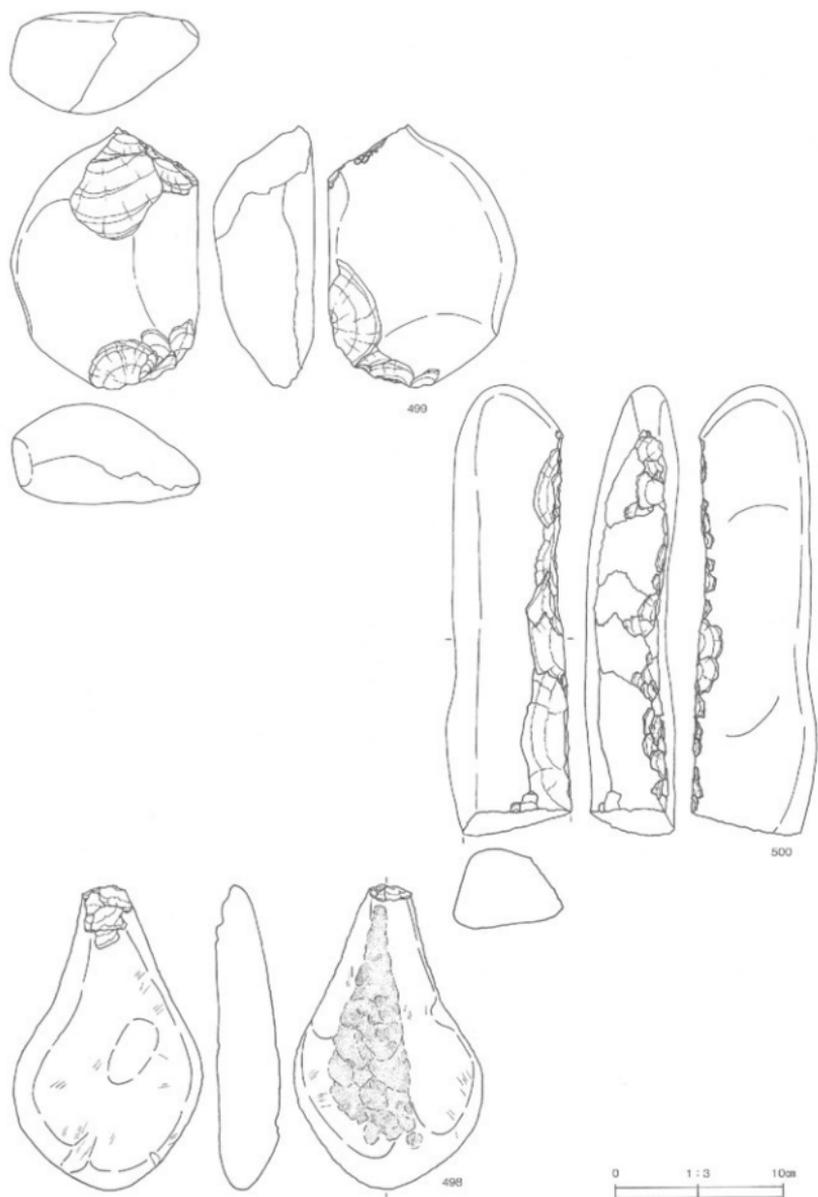
第58圖 石器(4)



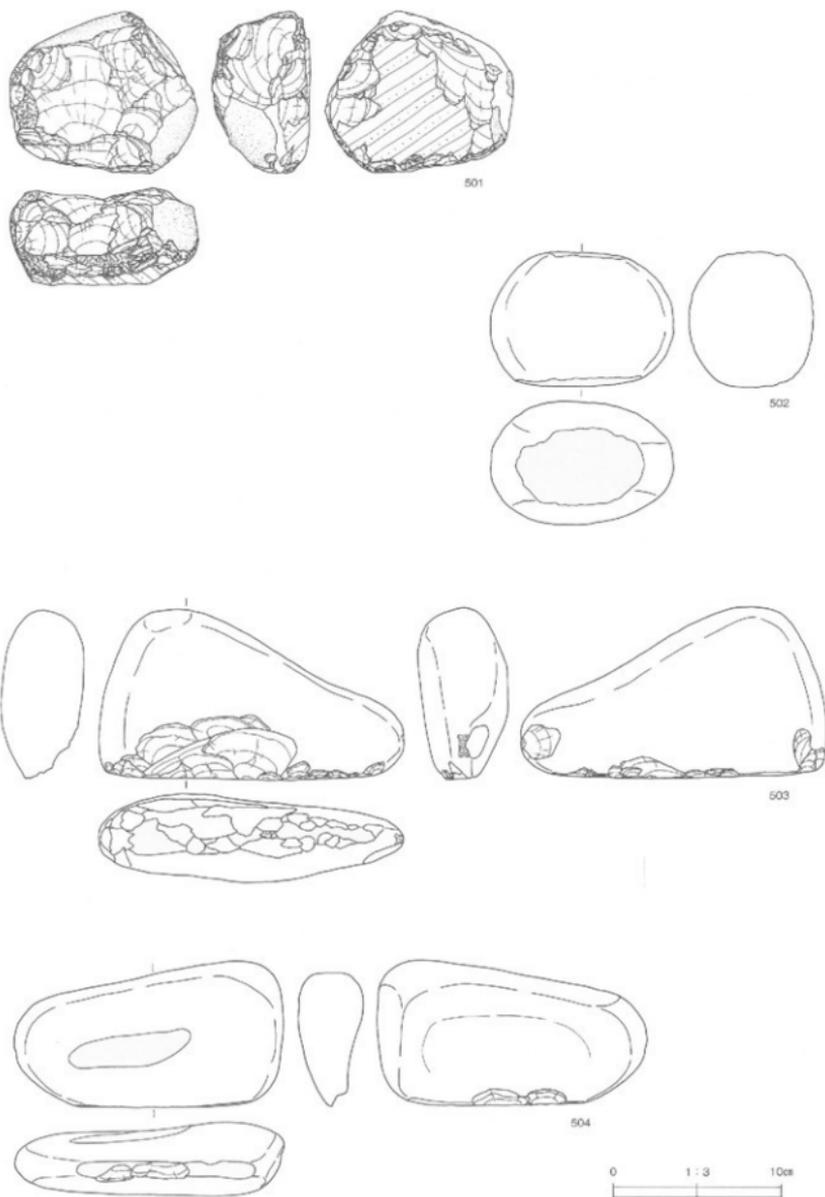
第59圖 石器 (5)



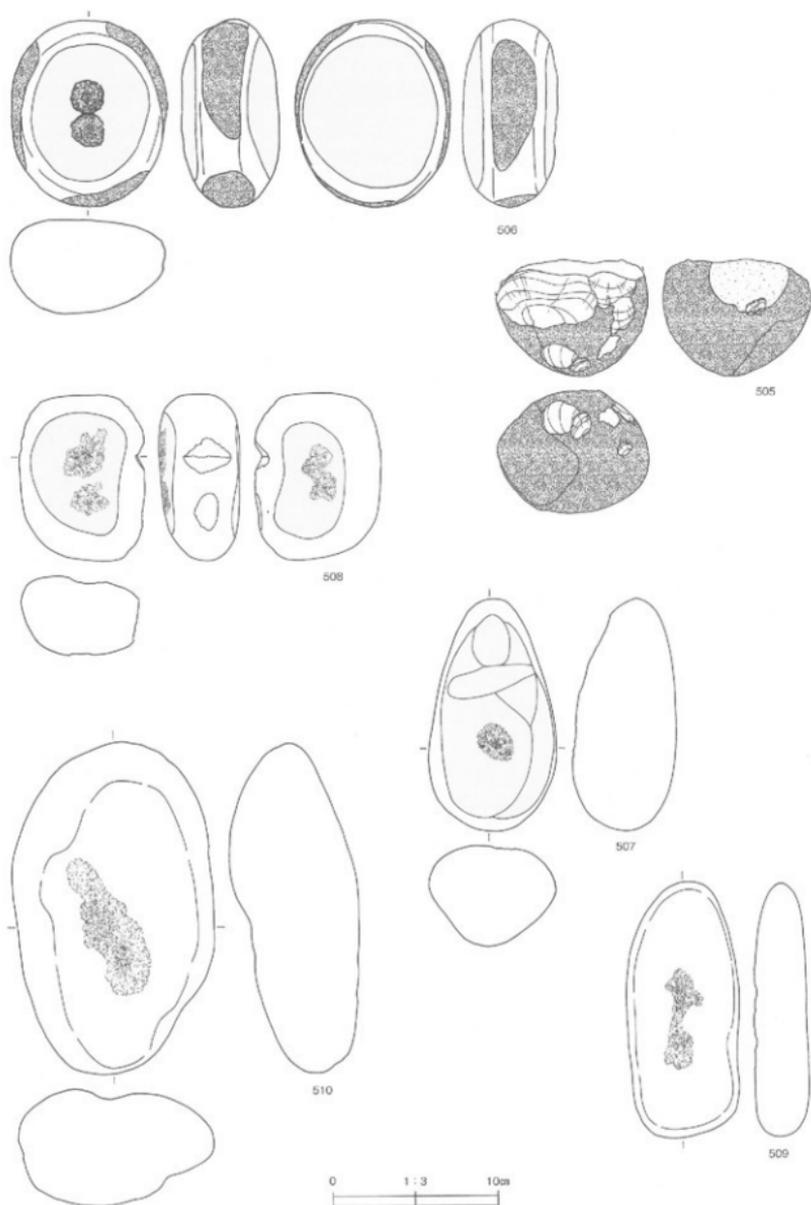
第60図 石器(6)



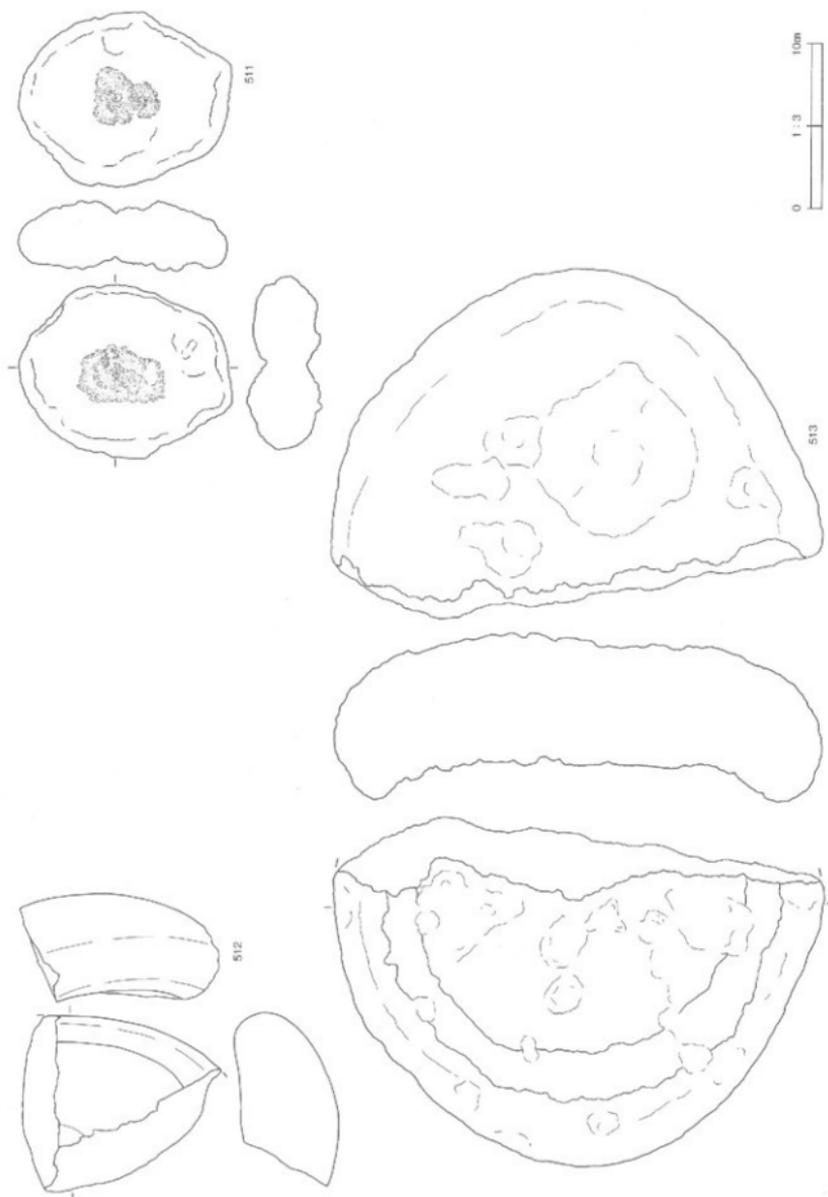
第61圖 石器 (7)



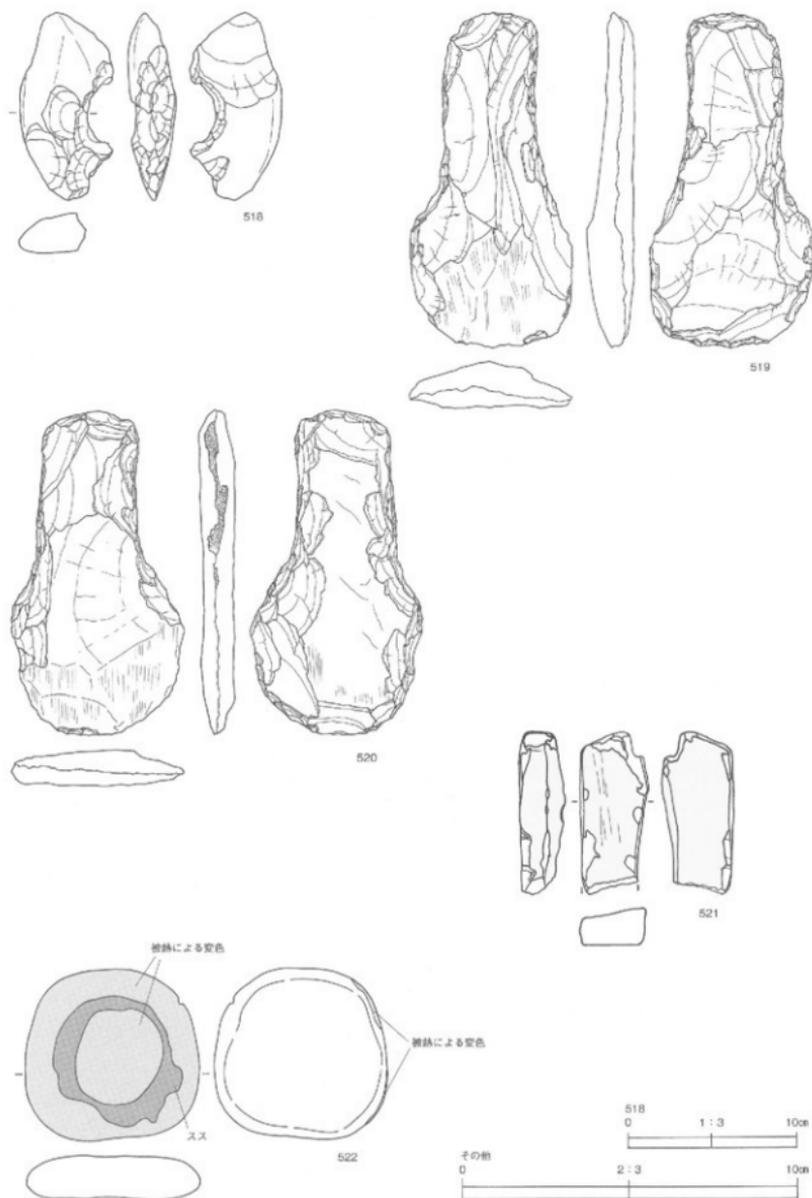
第62圖 石器 (8)



第63圖 石器 (9)

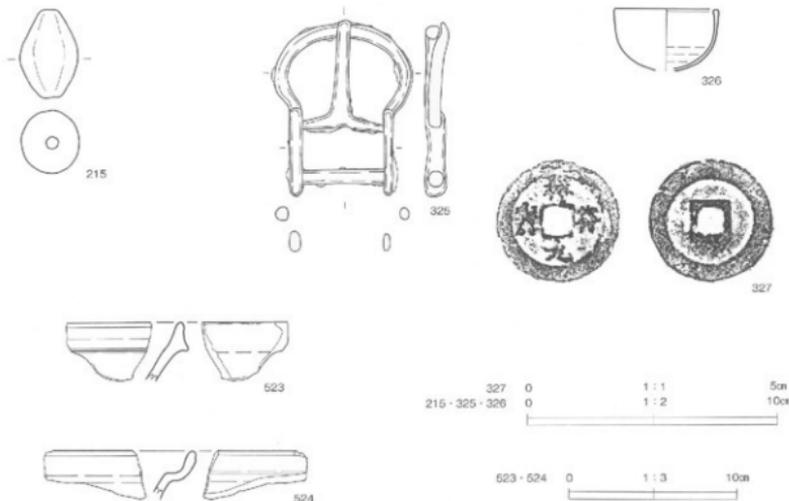


第64圖 石器 (10)



第65図 石器 (11)

3 出土遺物



第66図 土製品・鉄製品・陶器

第2表 道上遺跡土師器・須恵器観察表(1)

調査 年次	区	写真	出土地点	種類・形状	部位	調査			色澤	法相(cm)			口縁 比	重量 (g)	分類	備考
						外面	内面	底面		口径	器高	底径				
1	23	39	SD002 埋土	土師器碗	口縁	ナデ	ミダキ	—	暗灰黄	(16.2)	—	—	—	—	—	輪郭不明
2	23	39	1号壺油瓶(ⅡP196)	土師器杯	口縁	ワタロナデ, 下縁ケズリ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子, ハラケズリ	に灰い黄焼	(16.0)	5.4	6.0	2.7	116.4	IA2	外側一部に漆 残存
3	23	39	1号鉢て場(ⅡP2565)	土師器碗	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	—	に灰い黄焼	(13.4)	—	—	—	61.4	—	—
4	23	39	1号鉢て場(ⅡP162)	土師器杯	口縁	ワタロナデ, 体縁ケズリ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系系 ナデ 体縁ケズリ	に灰い黄焼	(13.3)	3.7	(5.8)	2.3	41.7	IA1	—
5	23	39	1号鉢て場(ⅡP2549)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	12.0	3.4	6.4	1.9	80.7	IA2	—
6	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543) ⅡP2543a	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	(16.0)	6.1	5.8	2.8	167.1	IA2	底縁割常(十)
7	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543) ⅡP2543b	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	(16.6)	—	—	—	40.3	IA	口縁割常(十)
8	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	(13.1)	4.2	(6.2)	2.1	77.7	IB	内外黒
9	23	39	1号鉢て場(ⅡP2547)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	(15.0)	3.6	(8.4)	1.8	22.2	IB1	内外黒?
11	23	39	1号壺油瓶(ⅡP163) ⅡP163a	土師器杯	口	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(11.4)	—	—	—	17.6	IB	完全に灰づく
12	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(12.4)	3.5	5.0	2.5	67.4	IB1	—
13	23	39	1号鉢て場(ⅡP163) ⅡP163a	土師器杯	底	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	灰黄焼	—	(5.4)	—	—	26.9	I2	—
14	23	39	1号壺油瓶(ⅡP2543) ⅡP2543a	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	(13.2)	(3.1)	6.0	2.2	51.3	IB1	—
15	23	39	1号鉢て場(ⅡP2546)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(11.4)	3.0	(4.6)	2.5	43.6	IB1	—
16	23	39	1号鉢て場(ⅡP2549)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(11.8)	2.8	(3.0)	2.3	32.8	ED1	—
17	23	39	1号鉢て場(ⅡP2549)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(13.8)	3.5	5.4	2.6	73.2	EA2	—
18	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ, ミダキ	阿形系切子	に灰い黄焼	(16.2)	4.7	6.8	2.4	116.4	EA1	—
19	23	39	1号鉢て場(ⅡP2546)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(13.3)	5.2	(6.1)	2.4	106.8	EB2	内外黒?
20	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	灰白	(15.6)	3.8	(6.3)	2.5	74.7	EA2	—
21	23	39	1号鉢て場(ⅡP2543)	土師器杯	口縁	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子	に灰い黄焼	(14.4)	—	—	—	73.6	EB	—
22	23	39	1号鉢て場(ⅡP2546)	土師器杯	底	ワタロナデ	ミダキ	ナデ	に灰い黄焼	—	(5.6)	—	—	48.9	EB1	底縁割常(十)
23	23	39	1号壺油瓶(ⅡP2543) ⅡP2543a	土師器油瓶	底	ワタロナデ	ワタロナデ	阿形系切子 ハラケズリ?	灰白	—	—	—	7.2	—	87.5	EB
24	24	40	1号壺油瓶(ⅡP2549) ⅡP2549a	土師器壺	口	ナデ	ナデ	—	に灰い黄焼	(21.0)	—	—	—	154.1	—	—

第2表 道上遺跡土師器・須恵器観察表(2)

調査No	図	序	出土地点	種別・器種	部位	陶器			色別	法量(cm)			口径	重量(g)	分類	備考
						外面	内面	底面		1層	器高	底径				
25	34	40	1号捨て場(VF1e3)	土師器鉢	口~体	ナメ	ナメ	---	灰白	16.4	---	---	167.0	---	口縁反り強い	
26	21	40	1号捨て場(VF256)	土師器鉢	口	ロクロナテ・ナメ	ロクロナテ・ナメ	---	灰白	16.4	---	---	97.7	---	---	
27	21	40	1号捨て場(VF25c13+24)	土師器鉢	口~体	ナメ	ナメ	---	灰青濁	10.0	---	---	300.5	---	---	
28	24	40	1号捨て場(VF25c10+14)	土師器鉢	体	ナメ	ナメ	---	灰白	---	---	---	120.0	---	---	
29	24	40	1号捨て場(VF1e2)	土師器鉢	底	ナメ	ナメ	---	灰白	---	---	8.8	---	230.4	---	
30	24	40	第4号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ・ナメ	ロクロナテ・ナメ	---	灰白	15.6	4.7	6.3	25	106.2	IA1	
31	24	40	第5号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ナメ	---	灰白	---	---	---	---	30.1	---	
32	21	40	第5号遺跡・西側	須恵器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	14.7	4.2	7.0	21	95.7	BC1	
33	24	40	第5号遺跡	須恵器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	13.6	3.8	7.6	1.8	87.9	BC3	
34	24	40	VF24g遺跡・西側	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	---	---	---	---	15.6	---	
35	25	40	第4号遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	---	---	6.0	---	48.3	1.2	
36	25	40	第5号遺跡	土師器鉢	体~口	ナメ	ナメ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	5.4	---	41.4	
37	25	40	第5号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	12.0	4.8	6.3	21	25.1	BC1	
38	25	40	第5号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	13.8	4.3	5.0	2.8	80.9	BA1	
39	25	40	第5号遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ナメ	---	灰白	---	---	---	---	12.5	1	
40	25	40	第5号遺跡・西側	須恵器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	11.0	4.7	6.0	2.3	132.0	BA1	
41	25	40	第5号遺跡	須恵器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰	14.8	6.0	6.0	2.5	41.8	BA1	
42	25	40	第1号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰	16.6	---	---	---	138.5	---	
43	25	41	VF3a遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	砂土	灰白	15.4	5.0	6.8	2.3	122.8	1A1	
44	25	41	第5号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	15.1	4.5	6.0	2.5	207.5	1A1	
45	25	41	VF24g遺跡・西側	土師器鉢	口~体	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	16.0	4.9	---	---	60.1	1B2	
46	25	41	第3号遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ナメ	---	灰白	---	---	---	7.4	---	45.2	
47	25	41	第5号遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ナメ	---	灰青濁	---	---	---	6.0	---	35.6	
48	25	41	第5号遺跡・5a遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ナメ	---	灰青濁	---	---	---	6.0	---	90.7	
49	25	41	第3号遺跡	土師器高台鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	7.0	---	49.3	
50	25	41	第1号遺跡	土師器高台鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	6.8	---	73.8	
51	25	41	第3号遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	15.8	4.3	7.4	21	56.9	BA2	
52	25	41	VF24b遺跡	土師器鉢	口~体	ナメ	ナメ	---	灰白	19.0	---	---	---	116.6	---	
53	25	41	VF24g遺跡	土師器鉢	口~体	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	18.0	11.0	---	---	130.5	---	
54	26	41	第2号遺跡	土師器鉢	口	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	11.6	---	---	---	22.8	---	
55	26	41	VF16g遺跡	土師器鉢	口	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	13.8	4.4	6.6	21	90.3	1A1	
56	26	41	VF16g遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	14.1	5.3	5.8	2.5	175.2	1A1	
57	26	41	VF17g遺跡	土師器鉢	口~体	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	15.2	---	---	---	22.1	1A	
58	26	41	VF16g遺跡	土師器鉢	口~体	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	12.8	---	---	---	28.0	1A	
59	26	41	VF17g遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	14.0	4.8	5.0	2.6	91.9	1B1	
60	26	41	VF17g・17b遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	15.0	4.6	6.0	2.5	56.9	1B1	
61	26	41	VF16g遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	14.9	4.9	5.7	2.6	170.4	1B2	
62	26	41	VF16g遺跡	土師器鉢	口~体	ロクロナテ	ロクロナテ	---	灰白	15.4	---	---	---	39.2	1B	
63	26	41	VF20g遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ナメ	---	灰白	---	---	---	6.0	---	39.3	
64	26	41	VF20g遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	13.0	3.0	5.2	2.5	51.6	BC1	
65	26	41	VF17g遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	14.4	5.1	6.8	2.1	203.1	1A1	
66	26	42	VF15g遺跡	土師器高台鉢	口	ナメ	ナメ	---	灰白	21.4	---	---	---	23.1	---	
67	26	42	VF16g遺跡	土師器高台鉢	口	ナメ	ナメ	---	灰白	---	---	---	---	41.9	---	
68	26	42	VF25g遺跡	土師器鉢	口	ロクロナテ	ナメ	---	灰白	14.0	3.9	5.4	2.6	42.4	1B2	
69	26	42	VF25g遺跡	土師器鉢	口	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	---	---	---	---	3.8	---	
70	26	42	VF3a遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	---	5.6	---	
71	26	42	VF24g遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰青濁	---	---	---	---	8.0	---	
72	26	42	VF25g遺跡	土師器高台鉢	底	---	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	---	9.6	---	
73	27	42	VF4b遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	11.7	2.1	5.2	2.3	46.0	BA2	
74	27	42	VF4b遺跡	土師器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	12.2	3.3	5.8	2.1	67.0	BA2	
75	27	42	VF2a遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	---	6.4	---	
76	27	42	VF25a遺跡	土師器高台鉢	口~体	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	13.6	---	---	---	50.8	BA	
77	27	42	VF2b遺跡	土師器鉢	底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰白	---	---	---	---	6.2	---	
78	27	42	VF5a遺跡	須恵器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰	13.0	4.8	6.0	2.5	116.7	BA2	
79	27	42	VF5a遺跡・北土層	須恵器鉢	口~底	ロクロナテ	ロクロナテ	陶輪ヘラ切	灰	13.7	3.3	5.8	2.1	95.5	BC1	

第2表 道上遺跡土師器・須恵器観察表(3)

編年 No.	図	図号	出土地点	種類・名称	部位	調整			色調	法量(cm)			口径	重量 (g)	分類	備考
						外面	内面	底面		口縁	胎体	底径				
80	27	42	第25号遺跡・鹿島	須恵器杯	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	ロクロナテ	灰白	(150)	49	6.2	24	82.9	ⅡC	
81	27	42	第25号遺跡	須恵器杯	底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り	灰	—	—	6.0	—	94	Ⅱ	底部磨書
82	27	42	第25号遺跡	須恵器盃	口一底	クズリ	クズリ	クズリ	にんい黄緑	(174)	—	—	—	276		
83	27	42	第25号遺跡	須恵器盃	口一底	ロクロナテ クズリ	ロクロナテ クズリ	クズリ	にんい黄緑	(238)	—	—	—	211.6		
84	27	43	第25号遺跡・第25号遺跡	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰白	(166)	—	—	—	101.7		
85	27	43	第25号遺跡	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り	にんい黄緑	—	—	6.0	—	106.8		Ⅱ B
86	27	43	第25号遺跡	須恵器盃	底	クズリ	クズリ	クズリ	にんい黄緑	—	—	(84)	—	110.0		
87	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	にんい黄緑	(166)	—	—	—	164	Ⅱ	
88	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	クズリ	クズリ	クズリ	にんい黄緑	—	—	(58)	—	73.2	Ⅱ	
89	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	クズリ	クズリ	クズリ	にんい黄緑	—	—	6.4	—	49.3		底部磨書(十)
90	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰白	—	—	6.0	—	56.1		底部磨書(中)
91	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	—	クズリ	クズリ	灰青	—	—	—	—	111.1		底部磨書(十)
92	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	にんい黄緑	(166)	—	—	—	35.5	Ⅱ B	底部磨書
93	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り	にんい黄	—	—	5.2	—	70.9	Ⅱ	
94	27	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	にんい黄緑	(130)	29	9.0	1.6	41.7	Ⅱ C	
95	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅ヘラケ クズリ	灰白	(124)	4.4	6.0	2.4	35.7	Ⅱ A	
96	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅ヘラケ クズリ	灰青	(141)	3.7	7.6	1.9	166.8	Ⅱ C	底部磨書(特)
97	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅ヘラケ クズリ	にんい黄緑	(149)	5.2	6.8	2.2	143.1	Ⅱ C	底部磨書
98	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅ヘラケ クズリ	灰白	—	—	(72)	—	71.9	Ⅱ	
99	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	—	—	—	—	1.9	Ⅱ	底部磨書
100	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰白	—	—	—	—	3.0	Ⅱ	底部磨書
101	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り	灰青	(138)	5.0	3.5	2.5	75.3	Ⅱ B	
102	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	クズリ	クズリ	クズリ	にんい黄緑	150	4.5	3.4	2.8	107.5	Ⅱ B	
103	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(147)	—	—	—	23.2	Ⅱ D	
104	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り	黒ヘラケ クズリ	—	—	(58)	—	68.8	Ⅱ	
105	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	—	ロクロナテ	黒紅糸切り	灰白	—	—	(51)	—	38.2	Ⅱ	底部磨書
106	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(126)	—	—	—	33.3		
107	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(160)	—	—	—	86.8		
108	28	43	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰	—	—	—	—	181.5		底部磨書
109	28	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰	—	—	—	—	51.6		
110	28	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰	(86)	—	—	—	66.6		
111	28	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	クズリ	クズリ	クズリ	灰	—	—	(102)	—	44.1		
112	28	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(136)	—	—	—	165.7		
113	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り クズリ	灰青	(122)	3.3	7.2	1.7	110.7	Ⅰ A	
114	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	黒紅糸切り	にんい黄緑	(136)	3.5	6.6	2.1	33.0	Ⅰ A	
115	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	にんい黄緑	(154)	4.7	5.6	2.8	73.2	Ⅰ A	底部磨書
116	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(157)	6.1	6.4	2.5	103.7	Ⅰ A	底部磨書
117A	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(142)	—	—	—	196	Ⅰ A	底部磨書
117B	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(142)	—	—	—	196	Ⅰ A	底部磨書
118	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	—	—	(64)	—	309	Ⅰ	
119	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	—	クズリ	クズリ	灰	—	—	(48)	—	15.0	Ⅰ	底部磨書(十)
120	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	—	クズリ	クズリ	灰青	—	—	—	—	4.2	Ⅰ	
121	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	—	—	—	—	6.5	Ⅰ	
122	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	—	—	—	—	5.4	Ⅰ	底部磨書
123	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	にんい黄緑	(156)	4.8	6.6	2.4	69.6	Ⅰ A	底部磨書
124	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(134)	4.6	5.8	2.3	37.3	Ⅱ C	
125	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	にんい黄緑	141	4.5	8.0	1.8	170.3	Ⅱ C	底部磨書
126	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(136)	4.4	7.5	1.8	138.2	Ⅱ C	底部磨書
127	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(128)	3.1	6.1	2.1	37.1	Ⅱ A	
128	29	44	田河遺2(第25号遺跡)	須恵器盃	口一底	ロクロナテ	ロクロナテ	クズリ	灰青	(138)	3.2	6.6	2.1	87.1	Ⅱ C	底部磨書(特)

第2表 道上遺跡土師器・須恵器観察表(5)

探検 No.	図号	出土地点	種類・器名	部位	測寸			色澤	法容(cm)		1層 高さ	2層 高さ	分類	備考	
					外周	内径	底径		口徑	底径					
183	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	底	ロクロナダ	ロクロナダ 底径4.5cm	ナダ?	黄灰	—	—	(8.5)	—	206G		
186	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	に灰い黄焼	(12.5)	4.7	(6.2)	2.0	283	A1	
187	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	に灰い黄焼	(12.8)	4.8	(6.0)	2.1	374	A1	
188	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	(14.4)	5.6	(5.8)	2.5	632	A1	
189	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	灰白	(14.0)	4.8	5.8	2.4	1117	B1	
190	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	灰白	—	—	6.0	—	283	B1	
191	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	底一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	(5.2)	—	546	B1	
192	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	(5.0)	—	227	B1	
193	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	5.8	—	673	B1	
194	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	(5.4)	—	296	B1	
195	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	—	—	289	B1	
196	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	(15.4)	4.9	(8.6)	288	B1
197	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	—	—	56	B1	
198	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	(14.8)	—	—	157	B1
199	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	—	—	32	B1	
200	32	47 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	土師器 鉢	口一底	ロクロナダ	ナダ?	ナダ?	黄灰	—	—	(8.8)	—	—	721	B1
201	32	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	底一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰白	—	—	(15.8)	—	—	727	B1
202	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	(14.8)	2.9	(6.4)	2.3	362	B1	
203	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	(13.4)	5.0	5.8	2.3	1191	B1	
204	24	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	(13.5)	4.8	(6.0)	2.3	572	B1	
205	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	(16.0)	5.9	(6.2)	2.6	1140	B1	
206	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	—	—	—	—	163	B1	
207	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	—	—	(11.2)	—	—	384	B1
208	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	—	—	(10.0)	—	—	101.5	B1
209	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	—	—	(11.0)	—	—	83.3	B1
210	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	—	—	11.8	—	—	545.5	B1
211	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	(10.3)	—	—	—	—	148	B1
212	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	10.0	2.8	5.2	1.9	81.0	B1	
213	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	(12.1)	3.1	(5.0)	2.5	48.6	B1	
214	34	48 田河邊2(ⅡE5a-Ⅱ層)	須恵器 甕	口一底	ロクロナダ	ロクロナダ	須恵器切手	灰	—	—	10.0	—	—	65.2	B1

第3表 道上遺跡土製品観察表

探検 No.	図号	出土地点	種類	残存状態	長さ			重量 (g)	特記事項
					口	底	厚		
215	66	78 須恵器	土師器	完整	3.00	2.30	2.50	15.66	変形

第4表 道上遺跡木質遺物観察表(1)

探検 No.	図号	出土地点	種類	木取り	樹種	長さ			備考	
						口徑	底径	厚		
216	4	35 49	1号枕形木1(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	タラノキ	(26.4)	(6.0)	4.4	丸木炭化
217	5	35 49	1号枕形木2(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オモミ	(40.2)	4.4	3.1	
218	6	35 49	1号枕形木3(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	マモ	(51.6)	3.7	3.2	炭化付
219	7	35 49	1号枕形木4(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(39.5)	4.4	4.6	
220	10	35 49	1号枕形木5(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(33.4)	2.8	2.8	
221	252	49	1号枕形木6(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	分銅	オニグルミ	(55.5)	10.5	(7.2)	樹材片?
222	162	35 49	1号枕形木7(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(42.0)	3.0	2.5	
223	143	39	2号枕形木1(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(54.3)	8.5	8.7	
224	144	39	2号枕形木2(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(46.9)	9.5	9.0	
225	143	50	2号枕形木3(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(42.6)	9.5	8.2	
226	146	50	2号枕形木4(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	分銅	タリ	(64.8)	8.1	5.3	
227	147	36 50	2号枕形木5(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(9.0)	13.5	8.1	
228	148	36 50	2号枕形木6(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(110.5)	11.0	8.5	
229	149-2	36 50	2号枕形木7(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(88.8)	11.8	7.8	
230	130	39	2号枕形木8(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(77.2)	11.0	9.5	
231	131	39	2号枕形木9(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(78.5)	13.0	9.2	
232	152	50	2号枕形木10(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(72.7)	9.1	7.4	
233	153	51	2号枕形木11(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	分銅	オニグルミ	(103.0)	12.8	6.5	炭化付
234	154	51	2号枕形木12(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(47.7)	9.1	7.8	
235	156	51	2号枕形木13(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(86.5)	12.3	7.9	
236	156	51	2号枕形木14(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(96.5)	11.4	11.0	
237	156	51	2号枕形木15(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(68.5)	9.0	6.9	炭化付
238	156	51	2号枕形木16(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(93.3)	10.0	6.0	
240	160	36 51	2号枕形木17(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(119.9)	9.2	6.2	
241	161	37 51	2号枕形木18(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	分銅	オニグルミ	(100.5)	12.7	8.2	
242	164	37 52	2号枕形木19(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	丸木	オニグルミ	(38.2)	4.3	4.2	
243	164	37 52	2号枕形木20(ⅡE7a-Ⅱ層)	枕	分銅	オニグルミ	(104.0)	14.3	8.5	樹材片? 炭化付 変形

第4表 道上遺跡木質遺物観察表(2)

相数	No.	図	写図	出土地点	種類	本取り	動植物	長さ		厚さ	備考	
								口径	断面			
								mm				
244	162			2号坑内No.1(埋込7号層)	杭	みかん割(4分)	オニグルミ	(99.0)	10.0	7.2		
245	249	52		2号坑内No.2(埋込7号層)	杭	みかん割(4分)	ミカド	(107.4)	8.6	8.3		
246	250	52		2号坑内No.3(埋込7号層)	杭	みかん割(4分)	オニグルミ	(58.8)	8.3	5.5		
247	247	52		2号坑内No.7(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	35.0	5.5	2.8		
248	248	52		2号坑内No.8(埋込7号層)	杭	みかん割(4分)	ミカド	(72.4)	10.3	8.3		
249	250	52		2号坑内No.9(埋込7号層)	杭	みかん割(4分)	オニグルミ	(42.7)	8.0	6.9	腐敗付	
250	251	52		2号坑内No.10(埋込7号層)	杭	みかん割(4分)	サクラ属	(35.2)	11.6	6.8	腐敗付	
251	183	37	52	3号坑内No.1(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	(46.4)	7.4	4.1		
252	186	37	52	3号坑内No.2(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	37.5	4.7	4.3		
253	187	37	53	3号坑内No.3(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	29.8	4.8	3.9	腐敗付	
254	188	38	53	3号坑内No.4(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	63.0	3.3	3.3		
255	211	38	53	3号坑内No.5(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	(90.2)	4.3	4.3		
256	210	38	53	3号坑内No.6(埋込7号層)	杭	又木	ウシノミ属	(91.1)	3.3	3.8		
257	212	39	53	3号坑内No.7(埋込7号層)	杭	又木	カヌカ属	46.3	4.1	4.3	腐敗	
258	232	38	53	3号坑内No.8(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	61.7	3.3	3.3		
259	233	38	53	3号坑内No.9(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	53.3	3.2	3.4	腐敗付	
260	241	40	53	3号坑内No.10(埋込7号層)	杭	又木	ヤマダク	45.0	3.6	3.9		
261	240	40	53	3号坑内No.11(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	29.1	3.1	2.8		
262	343	40	53	3号坑内No.12(埋込7号層)	杭	又木	ヤナギ属	30.1	3.4	3.0		
263	245	40	53	3号坑内No.13(埋込7号層)	杭	又木	ヤマダク	23.3	1.8	1.6		
264	213	40	53	3号坑内No.14(埋込7号層)	杭	又木	カヌカ属	52.3	3.1	3.1		
265	175-9	40	56	坑底1(埋込14号V層)	杭	又木	オニグルミ	(53.8)	5.7	8.1		
266	31	40	56	1号遺跡南側溝(埋込17号層)	掘	板目板本取り	ケヤキ	18.0	5.8	12.4	外田塚部出土	
267	32	40	56	埋込17号層	掘	板目板本取り	ケヤキ	19.0	1.2	1.9		
268	74	41	56	埋込17号層	高倉組	板目板本取り	ケヤキ	16.2	1.9	1.0		
269	76	41	56	埋込17号層	掘	板目板本取り	ケヤキ	(10.5)	2.1	(10.3)		
270	95	41	56	埋込17号層	掘	板目板本取り	ケヤキ	(17.5)	(0.9)	(11.5)		
271	37	41	57	埋込17号層	掘	板目板本取り	ケヤキ	16.5	1.6	(6.3)	腐敗の可能性有	
272	173	42	57	埋込17号層	高倉組	板目板本取り	ケヤキ	—	—	(2.4)		
273	32	41	57	埋込17号層	高倉組	板目板本取り	ケヤキ	(22.2)	—	(12.5)		
274	235	41	57	埋込17号層	掘	板目板本取り	シノノキ属	61.2	(18.8)	9.0	板取(10)	
275	205	42	57	埋込17号層	掘	板目板本取り	スギ	(7.7)	(2.3)	0.6		
276	33	42	57	埋込17号層	掘	板目板本取り	スギ	(7.5)	(14.9)	0.5	片面腐敗	
277	122	42	57	埋込16号層	穿通管板	板目	ケヤキ	(42.3)	(16.1)	1.8		
278	41	42	58	埋込16号層	穿通管板	板目	ケヤキ	(10.4)	(8.1)	2.2		
279	42	42	58	埋込16号層	穿通管板	板目	ケヤキ	(7.4)	(3.8)	0.1	腐敗片?	
280	257	53	58	埋込16号層	皮板	—	サクラ科樹皮	(4.4)	1.0	0.1		
281	258	53	58	埋込16号層	皮板	—	サクラ科樹皮	(5.6)	1.1	0.1		
282	259	43	58	埋込16号層	皮板	—	サクラ科樹皮	(4.2)	1.0	0.1		
283	105	42	58	埋込16号層	掘	板目板本取り	ケヤキ	(35.2)	20.8	2.1		
284	254	43	58	埋込16号層	掘	—	—	(1.6)	(2.5)	(0.7)	表面腐敗 木質残存なし	
285	1	43	58	埋込16号層	穿通	又木(段木)	ウツギ属	83.3	28.1	6.9		
286	12	43	58	埋込16号層	掘	又木	ヤナギ	35.5	(9.7)	(3.1)		
287	45	43	58	埋込16号層	掘	又木	オニグルミ	(32.1)	(7.6)	3.3		
288	176	43	58	埋込16号層	木津	トネリコ属	13.2	3.9	3.9			
289	44	43	58	埋込16号層	掘	志持丸木	サユエ属	36.5	3.9	3.7		
290	255	44	59	埋込16号層	掘	志持丸木	クロモジ属	(6.1)	(2.0)	(2.0)	朝?腐孔	
291	256	41	59	埋込16号層	掘	志持丸木	クロモジ属	(10.0)	(1.7)	(1.7)		
292	201	41	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	ヒノキ	(15.8)	2.1	0.9	形?	
293	15	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	板目	ケヤキ	(36.9)	8.3	3.7	一面腐食	
294	203	41	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	板目	ケヤキ	(9.4)	8.1	1.6	腐食の一部?
295	218	41	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
296	222	41	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
297	123	41	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
298	30	39	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
299	186	44	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
300	3	44	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
301	63	45	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
302	65	45	59	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
303	85	45	60	埋込16号層(V層直下)	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
304	37	45	60	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(53.9)	5.0	4.8		
305	34	60	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(42.5)	4.7	4.0	両面腐		
306	45	60	埋込16号層	掘	又木	コシアブラ	(74.2)	3.2	2.8			
307	64	60	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(78.1)	9.2	8.0			
308	75	60	埋込16号層	掘	みかん割(6分)	ケヤキ	(111.8)	6.7	1.4			
309	89	60	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(119.0)	3.6	3.5			
310	90	60	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(119.0)	4.5	2.6			
311	102	60	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	65.5	5.1	4.3	一部残存		
312	106	61	埋込16号層	掘	又木	サクラ属	(81.7)	1.4	3.7			
313	132	61	埋込16号層	掘	又木	ヤマダク	78.5	3.8	3.1	小段中直下から出土		
314	118	65	61	埋込16号層	掘	又木	マタビ	(136.0)	3.2	2.9		
315	130	63	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(196.0)	4.8	4.8			
316	97	61	埋込16号層	掘	又木	ウツギ属	(101.0)	3.5	3.2			
317	83	60	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	(73.1)	4.3	3.4		
318	37	61	埋込16号層(V層直下)	掘	板目板本取り	—	—	(118.0)	6.5	5.3		
319	88	46	61	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
320	89	46	61	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
321	99	62	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	—	腐食	
322	137	46	62	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	腐食	
323	100	62	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	—	腐食	
324	93	62	埋込16号層	掘	板目板本取り	—	—	—	—	—	腐食	

第5表 道上遺跡鉄製品観察表

掲載No	図	写真	出土地点	種別	保存状態	長さ	幅	厚さ	重量	特記事項
325	66	78	埴田2(Ⅱ)層	鍔片	欠形	7.1	3.4	0.9	25.90	残存状態良好 厚さ:面幅4.0-6.0cm, 基部3.0-3.9cm
327	66	78	埴田2Ⅰ層	鍔片	欠形	2.5	2.5	0.1	2.81	軽薄片状(北東向き) 新暦1609年?

掲載No	図	写真	出土地点	種別	保存状態	口径	径高	底径	重量	特記事項
326	66	78	埴田2Ⅱ層	仏鍔片	1/8	4.2	—	—	4.65	

第6表 道上遺跡縄文土器・土製品観察表

掲載No	図	写真	出土地点	器種	部位	文様の種類	地紋	寸法(cm)		重量(g)	備考
								口径	径高		
328	47	63	埴田2層	漆鉢	胴	口: 突起状 肩: 内面線条 胴: 光面	LR織	—	—	34.5	粘土織物混入
329	47	63	埴田2(ⅡB5y)層	漆鉢	口	口: 突起状 肩: 内面線条 胴: 光面	LR織	—	—	98.6	
330	47	63	埴田2層	漆鉢	口	口: 突起状 肩: 内面線条	LR織	—	—	74.5	
331	47	63	埴田2層	漆鉢	口	口: 突起状	LR織	—	—	113.4	
332	47	63	埴田2層	漆鉢	胴	隆起状	LR織	—	—	101.9	外周スリコグ
333A	47	63	埴田2(ⅡB7A)層	小形 陶	口	平行状線(弧状)	LR織	—	—	2.5	90.3 小形
333B	47	63	埴田2(ⅡB7A)層	小形 陶	口	平行状線	LR織	—	—	4.3	小形
334	47	63	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	3.3	29.1 小形
335	47	63	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	46.6	
336	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	30.5	
337	47	63	埴田2(ⅡB7a)層下位	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	22.7	
338	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	15.9	厚織
339	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	口: A突起 口: 平行状線(横1)	LR織	—	—	19.0	内周スリコグ
340	47	63	埴田2(ⅡB7a)層下位	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	42.1	
341	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	20.6	
342	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	68.7	
343	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	69.1	
344	47	63	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	48.7	
345	47	63	埴田2(ⅡB7a)層下位	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	59.0	
346	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	口: 突起状 口: 平行状線(横1) 胴: 光面	LR織	—	—	90.6	
347	47	63	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	118.5	厚織
348	48	64	埴田2(ⅡB7a・7b・7c)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	80.7	内周スリコグ多
349	48	64	埴田2(ⅡB7a)層下位	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	33.4	
350	48	64	埴田2(ⅡB7a)層下位	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	55.5	
351	48	64	埴田2(ⅡB7a)層下位	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	62.1	外周スリコグ
352	48	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	114.0	厚織/内周スリコグ多
353	48	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	34.4	
354	48	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	210.0	外周スリコグ多
356	48	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	61.9	厚織
356	48	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	74.9	
357	48	64	埴田2(ⅡB7a・7b・7c)層	漆鉢	口	突起状	LR織	15.4	—	243.8	
358	48	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	23.2	内外面線条
359	48	64	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	10.2	14.7	214.2	
360	49	64	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	43.9	厚織
361	49	64	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	33.3	
362	49	64	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	22.7	厚織
363	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	22.8	
364	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	22.4	外周スリコグ
365	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	55.3	
366	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	38.5	内外周スリコグ
367	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	18.8	—	141.6	
368A	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	17.2	—	65.2	
368B	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	4.6	41.8
369	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	42.7	内周スリコグ
370	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	85.3	
371	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	3.0	
372	49	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	20.9	内外周スリコグ
373	49	65	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	30.5	
374	49	65	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	42.9	内周スリコグ
375	50	65	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	19.0	27.0	110.0	116.5
376	50	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	26.0	—	210.5	
377	50	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	20.6	厚織
378	50	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	56.6	外周スリコグ
379	50	66	埴田2(ⅡB7a)層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	126.2	
380	50	66	埴田2層	漆鉢	口	突起状	LR織	—	—	46.1	

第6表 道上遺跡縄文土器・土製品観察表(2)

採集 No	図	写真	出土地点	器種	部位	文様の特徴	造法	高さ (cm)		重量 (g)	備考	
								口縁	器高			
381	50	66	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口	1等:小底状内面沈線 11:平行沈線	—	—	—	1128		
382	50	66	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	11-割	口唇:小底状(手捻り)	11:無紋 割:上沈線	160	—	5003		
383	50	66	旧土地点不明	深鉢	口~胴	口唇:小底状内面沈線	口:無紋 胴:上沈線	26.0	—	5820		
384	50	66	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口~胴	1等:小底状(割突)	割:上沈線 口:無紋	—	—	578		
385	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層・埋層下位)	深鉢	口~胴	1等:小底状(割突)	口:無紋 割:上沈線	—	—	1311		
386	51	67	V125 (直層)	土瓶?	底部	無文	—	—	—	478		
387	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層)	土瓶	口	口唇:突起平行沈線内面沈線	無紋	—	—	405		
388	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層下位)	土瓶	胴~口	—	無紋	—	—	189		
389	51	67	V13c埋層	鉢?	11-割	平行沈線	無紋	—	—	30.7	内外面磨面盛	
390	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層)	土瓶?	合	滑らか 磨面	—	(6.1)	—	34.3	内面1号車	
391	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	割~底	—	上沈線	—	(120)	88.3		
392A	51	67	埋E27a埋層 埋層下位埋層	深鉢	胴~底	—	不明	—	—	805.9	磨滅	
392B	51	67	V12c埋層	深鉢	口	—	不明	—	11.6	61.9	摩滅	
393	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口	口唇:小底状(割突)	上沈線	—	—	100.9		
394	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口~胴	—	上沈線	—	—	136.7		
395	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口	—	上沈線	—	—	68.1		
396	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層下位)	鉢	口	磨面	上沈線	—	—	32.6	磨滅	
397	51	67	旧河原2 (埋E27a埋層下位)	深鉢	口	—	上沈線	—	—	34.7	外底スコガ多	
398	51	67	V125a埋層	深鉢	口~割	—	上沈線?	—	—	50.3	摩滅	
399	51	68	旧河原2 (埋E27a埋層下位)	深鉢	口	—	上沈線	—	—	62.6		
400	51	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口~胴	磨面	上沈線	—	—	114.8		
401	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口~胴	—	上沈線	23.3	—	153.9		
402	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口	—	上沈線	33.7	—	177.5		
403	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢	底	—	上沈線	—	(5.0)	48.3	上沈線	
404	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢	底	—	上沈線	—	(7.2)	38.6	ごく浅い内付	
405	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢	胴~底	—	上沈線	—	(5.2)	66.9		
406	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口~割	—	無紋	31.5	—	247.3		
407	52	68	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口~割	—	無紋	30.2	—	240.1		
408	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口	—	無紋	28.5	—	123.8		
409	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	口	—	無紋	29.9	—	104.7	外底スコガ多	
410	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層・埋層下位埋層)	深鉢	口~胴	—	無紋	—	—	290.0		
411	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層下位)	深鉢	口	—	無紋	—	—	172.9	外底スコガ	
412	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層・5m埋層下位)	深鉢	口	—	無紋	—	—	145.4	外底スコガ	
413	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層・7m埋層下位)	深鉢	口	—	無紋	—	—	134.3	外底スコガ	
414	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢	口	—	無紋	—	—	72.0	外底スコガ多	
415	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢	口	口唇	無紋	—	(8.0)	51.7		
416	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	土瓶?	合	—	無紋	—	(9.5)	21.9		
417	53	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	土瓶?	底	表面に磨面	無紋	—	—	8.5	85.7	
418	54	69	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	7.4	101.8	ごく浅い内付	
419	54	69	V13b埋層	鉢	底	—	無紋	—	5.1	136.0	ごく浅い内付	
420	54	69	旧河原2 (2号検出部6付近埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	9.0	188.9	ごく浅い内付	
421	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	8.0	197.0	ごく浅い内付	
422	54	70	不明	深鉢	底	—	無紋	—	9.4	283.6	ごく浅い内付	
423	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢	割~底	—	無紋	—	8.1	138.5	ごく浅い内付	
424	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層下位)	深鉢	底	—	無紋	—	9.2	124.1	内面スコガ ごく浅い内付	
425	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	8.9	210.6		
426	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	9.3	70.2	ごく浅い内付	
427	54	70	V13埋層	深鉢	底	—	無紋	—	9.2	180.7	ごく浅い内付	
428	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	9.0	238.6		
429	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	—	121	437.4	
430	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	10.6	254.3	ごく浅い内付	
431	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	9.8	100.9	底部磨面	
432	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	9.2	110.1	底部磨面	
433	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層・埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	11.0	218.3	底部磨面	
434	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	13.0	151.1	底部磨面	
435	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	9.6	93.3	底部本葉取	
436	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	深鉢	底	—	無紋	—	8.6	125.8	底部本葉取	
437	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢?	文	沈線	—	—	—	28.6		
438	54	70	旧河原2 (埋E27a埋層)	鉢?	胴	—	無紋	—	—	17.3	外底磨面	

採集 No	図	写真	出土地点	器種	部位	文様の特徴	高さ (cm)	重量 (g)	備考		
439	54	70	V125 (直層)	土瓶	胴	沈線	(5.0)	(4.8)	45.2	本葉	
440	54	70	V13埋層	深鉢	割	—	2.3	2.3	1.3	8.1	

第7表 道上遺跡陶器観察表

採集 No	図	写真	出土地点	器種	残存率	文様	調性	胎土	胎色・胎付	産地	時期	重量 (g)
523	66	78	小鉢本葉取7号工層	鉢	10%以下	—	—	—	灰褐色	—	古墳	21.2
524	66	78	土器遺跡第30号工層	鉢	10%以下	—	—	—	灰褐色	—	古墳	18.3

第8表 道上遺跡石器・石製品観察表

民衆	回	塚型	出土地点	器種	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量	特徴事項
							cm	cm	mm	g	
441	55	71	SD100層1	二次加工ある石片	1/2欠	頁岩	3.10	1.85	0.05	4.40	両面調整 尖頭状の加工
442	55	71	SD100層1	二次加工石片	完形	安山岩	8.65	1.94	3.40	272.97	片削調整
443	55	71	SD100層1	調整石片	片削調整1/2欠	安山岩	(6.85) (1.65)	(2.70)	1.24	148	片削調整
444	56	71	SD100層1	調整石片	欠部欠	頁岩	6.25	2.20	1.25	16.88	調整石片の可能性有
445	56	71	SD100層1	調整石片	完形	ホルンフェルス	8.93	2.25	1.75	75.68	調整石片の可能性有
446	55	71	1号発掘地(塚下254)	石片	調整欠	頁岩	4.70	2.25	0.80	6.36	調整
447	55	71	1号発掘地(塚下254)	石片	欠部欠	頁岩	3.30	1.20	0.50	1.21	
448	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(4.20) (1.85)	(0.40)	1.68	19.88	調整
449	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.35	1.50	0.95	3.70	調整
450	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.85	1.80	0.45	3.42	調整
451	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	1.95	1.50	0.30	0.81	調整
452	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.75	1.80	0.50	1.57	調整
453	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(2.65) (1.30)	(0.45)	1.08	1.65	調整
454	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(3.10) (1.45)	(0.60)	1.70	1.70	調整
455	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(4.45) (1.60)	(0.60)	2.30	1.70	調整
456	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.90	2.00	0.80	4.82	調整
457	55	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.00	2.75	1.20	15.44	調整(部分あり) 未成品?
458	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.00	0.90	0.55	1.88	調整
459	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.00	1.35	1.05	3.28	調整
460	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.35	1.55	0.55	1.42	
461	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(3.35)	1.85	0.80	4.10	
462	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	5.20	2.65	0.35	4.98	調整(部分あり)
463	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	5.75	3.30	0.50	3.52	調整
464	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	6.00	1.90	0.80	8.74	調整
465	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.20	2.45	0.95	7.30	調整(部分削調整)
466	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.60	3.45	0.55	2.40	調整 未成品
467	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	4.85	6.00	1.30	23.65	調整
468	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	1.60	2.00	1.25	2.93	調整
469	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.20	3.30	1.00	9.54	調整(部分あり) 調整(部分あり) 調整(部分あり)
470	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	7.25	1.85	1.10	8.97	調整(部分あり) 調整(部分あり) 調整(部分あり)
471	56	71	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	6.00	3.25	1.00	13.14	調整(部分あり) 調整(部分あり) 調整(部分あり)
472	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	7.00	3.55	1.90	25.28	調整(部分あり) 調整(部分あり) 調整(部分あり)
473	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	4.25	7.35	1.40	48.01	調整(部分あり) 調整(部分あり) 調整(部分あり)
474	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	4.30	1.27	1.68	14.98	調整(部分あり) 調整(部分あり) 調整(部分あり)
475	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	1.65	3.15	0.75	2.38	
476	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.15	2.60	1.00	6.73	
477	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.30	1.55	0.90	3.51	1削1削
478	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.70	2.10	0.60	2.60	調整
479	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	6.50	4.00	1.60	36.10	調整
480	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	8.85	4.50	1.70	63.33	調整(部分削調整)
481	57	72	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	5.80	3.80	1.80	45.66	調整(部分削調整)
482	58	73	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	5.70	3.20	1.50	18.06	調整(部分削調整) 調整(部分削調整)
483	58	73	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.50	1.40	1.05	4.42	調整(部分削調整) 調整(部分削調整)
484	58	73	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	2.90	5.95	3.00	70.45	
485	58	73	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	3.30	4.60	2.30	66.47	
486	58	73	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	4.85	7.50	2.90	296.91	
487	59	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	7.10	7.50	6.30	252.79	
488	59	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	8.45	3.80	1.70	54.20	
489	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(13.10) (3.45)	(1.30)	39.60	調整	
490	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	12.70	9.30	2.60	443.75	
491	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(3.20) (1.90)	(0.85)	8.36	調整	
492	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	13.90	3.63	3.10	299.81	
493	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(11.05) (4.60)	(2.45)	180.10		
495	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	8.80	4.60	2.30	131.91	
496	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	12.85	6.75	1.85	271.01	
497	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	16.25	8.30	1.80	439.47	
498	60	74	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	13.70	8.70	3.90	391.85	
499	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	18.50	11.40	3.50	879.80	
500	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	15.80	11.30	6.10	1342.01	
501	62	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(27.50) (7.45)	(5.65)	1617.90		
502	62	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	9.70	3.10	5.80	833.67	
503	62	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	8.30	10.90	7.30	969.57	
504	62	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	10.35	13.30	5.45	1206.00	
505	62	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	8.80	16.25	4.50	888.90	
506	63	76	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	8.92	(7.47)	7.30	616.13	
507	63	76	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	11.20	9.55	5.85	885.70	
508	63	76	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	14.05	7.65	6.20	836.07	
509	63	76	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	10.15	7.50	4.80	520.07	
510	63	76	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	15.50	6.75	3.20	320.09	
511	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	20.30	12.10	7.75	3065.25	
512	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	12.86	10.30	6.55	396.50	
513	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	11.90	10.70	6.35	708.01	
514	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(28.90) (20.00)	(10.30)	2596.61		
515	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	31.70	22.90	9.35	6400.00	
516	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(3.38)	(2.80)	(1.21)	17.06	
517	61	75	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(4.60)	(4.6)	(2.53)	35.38	
518	65	77	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(5.90) (2.81)	(1.28)	22.78		
519	65	77	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	5.60	2.80	1.50	17.62	
520	65	77	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	20.30	9.70	2.85	192.96	
521	65	77	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	19.70	10.35	2.15	503.53	
522	65	77	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(9.80) (2.20)	(2.30)	138.70		
523	65	77	田向遺2(塚下254)	石片	完形	頁岩	(10.10) (10.15)	(2.60)	478.77		

V 合野遺跡

1 調査の概要

当初対象面積は、本調査区4,522㎡、確認調査区1,146㎡の計5,668㎡であったが、調査途中で工事用地の設計変更による調査範囲変更や、既破壊範囲（地下埋設物、水路）が調査範囲から除外されるなどしたため、最終的に本調査区4,350㎡、確認調査区974㎡の計5,324㎡を調査した。

今回の調査で検出された遺構は、以下のとおりである。

本調査区・・・堅穴住居（カマド、ピットのみ）2棟、溝15条、土坑8基（陥し穴状土坑含む）、掘立柱建物3棟、柱穴状土坑39個。

確認調査区・・・掘立柱建物3棟（本調査区分と同一）、土坑1基、柱穴状土坑3個。

2 検出遺構（第67・68図）

（1）堅穴住居

S I O 1 堅穴住居

遺構（第69・70図、写真図版23・24）

〔位置・重複関係〕2区ⅦD 5 b～cグリッドに位置する。I層直下のIV層中で検出された。S I O 2 堅穴住居と重複しており（建て替えと推定）、S I O 2→S I O 1の順に構築されている。なお、範囲の南・北側一部は調査区外に続くものと考えられる。

〔規模・平面形〕水田造成時の削平によって大半が消失しており、カマド燃焼部の一部、煙出し底部、貼り床の一部とピットが残存するのみである。よって規模については不明である。平面形は北東側に辺を持つ方形基調と推定される。

〔埋土〕貼り床およびピット埋土のみ確認可能であった。にぶい黄褐色粘土ブロックを含む黒～黒褐色シルトを主体として構成される。

〔壁・床面〕貼り床を部分的に検出した。壁は残存しない。

〔カマド〕北東壁に構築されている。本体は削平により失われており、65×51cm・厚さ3cm強の赤褐色焼土範囲が確認されたのみである。

〔ピット〕S I O 2カマドとの重複関係から、P 1は本遺構に伴うピットと判断される。P 2～7はS I O 2に属するものとの分離が明確でないため、ここで一括して取り扱う。なお、明確に柱穴と判断されたものはない。規模等は第69図を参照されたい。

遺物（第79・80図、写真図版79・80）

S I O 2に所属する遺物との区別がカマド出土分などを除き不可能であるため、ここで一括して取り扱う。

〔土師器・須恵器〕土師器2705.9g、須恵器182gの合計2724.1gが出土し、このうちの土師器坏片4点・同壳片4点、須恵器齶壳片1点の9点・372.3gを掲載した（1～9）。

〔縄文土器〕P 1埋土から15.3g出土した。細片のため不掲載である。

〔石器〕埋土から石鏃1点・2gが出土した（19）。

時期 出土した土師器・須恵器から平安時代といえる。

S I O 2 竪穴住居

遺構 (第69・70図、写真図版23・24)

[位置・重複関係] 2区ⅧD5b～cグリッドに位置する。I層直下のIV層中で検出された。S I O 1 竪穴住居と重複しており (建て替えと推定)、本遺構のほうが古い。なお、範囲の南・北側一部は調査区外に続くものと考えられる。

[規模・平面形] 水田造成時の削平により大半が消失し、カマド燃焼部の一部、煙出し底部が残存するのみで、規模については不明である。平面形は北～北東側に辺を持つ方形基調と推定される。

[埋土] 貼り床埋土についてはS I O 1と共通であった可能性がある。

[壁・床面] 貼り床を部分的に検出した。壁は残存しない。

[カマド] 北～北東壁に構築されている。本体は削平により失われており、24×12cm・厚さ1cmの暗赤褐色焼土の範囲と本体構築上の残骸が確認されたのみである。

[柱穴・ピット] S I O 1カマドとの重複関係から、P 8・9は本遺構に伴うピットと判断される。

遺物 (第79図、写真図版79)

[土師器・須恵器] カマド煙出し埋土から233.9g出土し、うち須恵器瓷片1点・28.4gを掲載した(10)。

時期 出土した土師器・須恵器から平安時代といえる。

(2) 溝

S D O 1～03溝

遺構 (第71図、写真図版25)

[位置・検出状況] 1区ⅤB11a～13eグリッド付近に並列する。II層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] いずれも両端が調査区外南北へ続くため、全形は不明である。最大上幅および検出面からの深さは、S D O 1が1.80m・28cm、S D O 2が1.48m・37cm、S D O 3が2.60m・34cmである。断面形はそれぞれ、皿状、葉研状、皿状を呈する。

[埋土] いずれも水成の黒褐色粘土主体で、人為堆積の痕跡は認められない。S D O 3は下位に褐色粘土が堆積している。

遺物 (第81図、写真図版80)

[磁器] S D O 3の埋土から磁器 (椀底部) 1点・76.6gが出土した(24)。

時期 出土遺物から、近世以降と考えられる。

S D O 4溝

遺構 (第71図)

[位置・検出状況] 1区のⅥA6～7・t～vグリッドに位置する。I層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] 北西—南東方向に直線的に伸びる。両端とも調査区外へと続き全形は不明である。上幅は最大で1.04m、検出面からの深さは最深部で10cmである。断面形は皿状を呈する。

[埋土] オリブ黒色粘土主体の草層である。

遺物 埋土から土師器片が18.7g出土した。細片のため掲載である。

時期 埋土の様相から近世以降と推定される。

S D O 5溝

遺構 (第71図、写真図版25)

〔位置・検出状況〕 1区のⅥA 7～8 c グリッドに位置する。Ⅱ層直下のⅣ層中で検出された。

〔規模・平面形・断面形〕 南北方向に直線的に伸びる。両端とも調査区外へと続き全形は不明である。上幅は最大で64cm、検出面からの深さは最深部で6cmである。断面形は皿状を呈する。

〔埋土〕 黒色粘土主体の単層である。

遺物 1層から陶磁器（小鉢）が出土した。不掲載である。

時期 出土遺物から、近世以降と推定される。

SD06～08溝

遺構（第71図、写真図版25・26）

〔位置・検出状況〕 1区のⅥA 8～9・g～j グリッドに並列する。Ⅱ層直下のⅣ層中で検出された。

〔規模・平面形・断面形〕 いずれも南北方向に伸びるが、SD06・SD07は直線的、SD08は東側へ屈曲する。いずれも両端が調査区外へ続き全形は不明である。最大上幅および検出面からの深さは、SD06が52cm・10cm、SD07が36cm・11cm、SD08が1.28m・12cmである。断面形はいずれも皿状を呈する。

〔埋土〕 黒～黒褐色シルト主体で、SD06とSD08にはにぶい黄褐色粘土ブロックが多量に混じる。これらについては人為堆積と考えられる。

遺物 なし。

時期 埋土の様相から近世以降と推定される。

SD09溝

遺構（第72図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕 1区のⅥA 6 n～11 u グリッド付近に位置する。Ⅳ層上面で検出された。

〔規模・平面形・断面形〕 北西～南東方向に緩やかな弧状に伸びる。両端ともさらに調査区外へと続き全形は不明である。上幅は最大で1.54m、検出面からの深さは最深部で40cmである。断面形は逆台形状を呈する。

〔埋土〕 黒～黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

遺物（第79・80図、写真図版79・80）

〔土師器・須恵器〕 埋土から土師器片が32.8g、底面および埋土上位から須恵器片が144.4g出土した。うち、須恵器片2点・133.6gを掲載している（11・12）。

〔陶磁器〕 埋土上位から常滑産の大甕片1点・69.5gが出土し、掲載した（13）。

〔縄文土器〕 埋土から9.9g出土した。細片のため不掲載である。

〔石器〕 埋土から削器1点が出土し、掲載した（20）。

時期 底面出土遺物から、平安時代といえる。

SD10溝

遺構（第72図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕 1区のⅥA 4 n～6 s グリッド付近に位置する。Ⅳ層上面で検出された。

〔規模・平面形・断面形〕 ⅥA 3 p グリッド付近で屈曲し、南西～南東方向へ伸び「く」字状を呈する。両端ともさらに調査区外へと続き全形は不明である。上幅は最大で70cm、検出面からの深さは最深部で32cmである。断面形は、西部が南側に段を有し北側が1段深くなる形態、東部は皿状を呈する。

[埋土] 黒～黒褐色土主体である。自然堆積と思われる。

遺物 なし。

時期 不明である。ただし、埋土の様相から近世以前と推定される。

SD11溝

遺構 (第71図、写真図版27)

[位置・検出状況] 3区のⅧD16u～17uグリッドに位置する。Ⅱ層直下のⅣ層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] 北西～南東方向に伸びており、途中やや屈曲する。南東側は削平のため消失しており、北西側は調査区外へと続いたため全形は不明である。上幅は最大で20cm、検出面からの深さは最深部で15cmである。断面形は椀状を呈する。

[埋土] 黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積と思われる。

遺物 埋土から土師器片が9g出土し、土師器坏1点・4.8gを掲載した(14)。

時期 底面出土遺物がないため、不明である。

SD12・13溝

遺構 (第71図、写真図版27・28)

[位置・検出状況] 2区のⅧD5～6cグリッドに2条並列しており、西側にS101・02堅穴住居が隣接する。Ⅱ層直下のⅣ層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] SD12は途中で「く」字状に屈曲し、北東・南東方向に伸びる。SD13はSD12の南半部に並行して南東方向に伸びている。いずれも端部が調査区外へ続いたため全形は不明である。最大上幅および検出面からの深さは、SD12が45cm・19cm、SD13が41cm・26cmである。断面形はいずれも椀状を呈する。

[埋土] いずれも黒褐色粘土主体である。SD13の下位には褐色粘土が多量に混じっており、人為堆積の可能性がある。

遺物 (第80図、写真図版79)

[土師器] SD13北端部の埋土から土師器甕底部1点・608.7gが出土した(15・掲載量は503.5g)。意図的に設置したものと思われる。

時期 SD13は出土遺物から平安時代といえる。SD12はこれと完全に並行することから、SD13と同時期の所産と考えられる。

SD14溝

遺構 (第72図、写真図版28)

[位置・検出状況] 2区のⅧD5xグリッドに位置する。Ⅱ層直下のⅣ層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] 南北方向に伸びる。南側は削平により消失しており、北側は調査区外へと続いたため全形は不明である。上幅は最大で24cm、検出面からの深さは最深部で4cmである。断面形は皿状を呈する。

[埋土] 黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積と思われる。

遺物 なし。

時期 不明である。

SD15溝

遺構（第72図、写真図版28）

[位置・検出状況] 1区のVIC16c～17dグリッド付近に位置する。II層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形・断面形] 北西—南東方向に直線的に伸びる。北西側は削平のため消失しており、南東側は調査区外へと続くため全形は不明である。上幅は最大で24cm、検出面からの深さは最深部で6cmである。断面形は皿状を呈する。

[埋土] 黒色シルト主体の単層である。自然堆積と思われる。

遺物 なし。

時期 不明である。

(3) 土 坑

SKO1陥し穴状土坑

遺構（第73図、写真図版30）

[位置・検出状況] 1区のVIA6sグリッド付近に位置する。IV層上面で検出された。

[規模・平面形] 開口部は長軸3.34×短軸0.62mの溝形を呈する。底部の幅は最大14cmである。

[埋土] 上位は黒色土主体で、下位は壁崩落土と思われるにぶい黄褐色粘土が主体となる。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 断面は漏斗状を呈する。底面までの深さは最深部で62cmを測る。

遺物 なし。

時期 形態から、縄文時代と考えられる。

SKO2土坑

遺構（第73図、写真図版29）

[位置・検出状況] 1区のVIA9jグリッドに位置する。I層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形] 開口部径1.0mのほぼ円形を呈する。

[埋土] III層起源と思われる黒褐色土主体で、自然堆積と思われる。

[壁・底面] 断面はピーカー状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から底面までの深さは最深部で49cmを測る。

遺物 なし。

時期 不明である。

SKO3土坑

遺構（第73図、写真図版29）

[位置・検出状況] 1区のVIA2oグリッドに位置する。IV層上面で検出された。

[規模・平面形] 開口部径1.7×1.1mの楕円形を呈する。

[埋土] 上位はIII層起源と思われる黒褐色・暗褐色土主体で、下位になるにつれ褐色土となり、粘性も強まる。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 断面はピーカー状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面までの深さは最深部で74cmを測る。

遺物 なし。

時期 不明である。

SK04土坑

遺構 (第73図、写真図版29)

[位置・検出状況] 3区のⅧD20pグリッドに位置する。本遺構周辺は段丘縁にあたり、南側による緩斜面である。I・II層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形] 開口部径64×52cmの楕円形を呈する。

[埋土] 黒褐色シルト主体で、下位に褐色粘土粒が混じる。

[壁・底面] 断面は逆台形状を呈し、壁は外傾する。検出面から底面までの深さは最深部で33cmを測る。

遺物 底面に礫が2点出土したが、自然礫である。

時期 不明である。

SK05土坑

遺構 (第74図、写真図版29)

[位置・検出状況] 3区のⅧD18rグリッドに位置する。I層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形] 開口部径1.16×0.88mの楕円形を呈する。

[埋土] 黒～黒褐色シルト主体で、中位以下に濃い黄褐色シルトが多量に混じる。崩落か人為堆積か不明である。

[壁・底面] 断面はピーカー状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から底面までの深さは最深部で64cmを測る。底面中央から、開口部径16×14cm、深さ8cmの副穴が検出された。

遺物 なし。

時期 形態から縄文時代の可能性があるものの、積極的な根拠がなく、不明である。

SK06土坑

遺構 (第74図、写真図版30)

[位置・検出状況] 3区のⅧD19rグリッドに位置する。本遺構周辺は段丘縁にあたり、南側による緩斜面である。I・II層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形] 開口部径1.02×0.72mの楕円形を呈する。

[埋土] 黒～黒褐色シルト主体である。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 断面はピーカー状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から底面までの深さは最深部で60cmを測る。

遺物 なし。

時期 形態から縄文時代の可能性があるものの、積極的な根拠がなく、不明である。

SK07土坑 (確認調査区)

遺構 (第74図、写真図版30)

[位置・検出状況] 1区のⅥB9nグリッドに位置する。I層直下のIV層中で検出された。

[規模・平面形] 開口部径82×68cmの円形を呈する。

遺物 (第80図、写真図版80)

[石器] 検出面で石礫1点が出土した(21)。このほか中央に自然礫が検出されたが、人為的なものは不明である。

時期 不明である。

SKO8土坑**遺構** (第74図、写真図版30)

[位置・検出状況] 2区のⅣD5aグリッドに位置する。I層直下のⅣ層中で検出された。

[規模・平面形] 開口部径2.68×0.74mの長楕円形を呈し、長軸中央が陥れる。

[埋土] 黒褐色シルト主体で、下位に褐色粘土ブロックが混じる。人為堆積の可能性がある。

[壁・底面] 底面は丸みを帯び、長軸中央が盛り上がる。北半部が南半より幾分深い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から底面までの深さは最深部で42cmを測る。

遺物 なし。

時期 不明である。

SKO9土坑**遺構** (第74図、写真図版30)

[位置・検出状況] 1区のⅥC17eグリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出された。

[規模・平面形] 南側が調査区外へかかるため全容は不明である。不整な長楕円形を呈するようで、短軸は1.16cmを測る。

[埋土] 暗褐色シルト主体である。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 断面は椀状を呈する。底面までの深さは最深部で63cmを測る。

遺物 なし。

時期 不明である。

(4) 掘立柱建物**SB01掘立柱建物****遺構** (第75・76図、写真図版31・32)

[位置・検出状況] 1区ⅤC25～ⅥC1グリッド付近に位置し、西調査区外へ続く。検出面はⅡ層直下のⅣ層中である。

[平面形式] 全域を調査していないため不明であるが、桁筋きは4.85m以上、梁間は4.79m以上である。確認された柱穴は14個である。

[建物方位] 桁筋の方向はN-22°-Eである。

[柱間寸法] 梁桁の柱間は97cm(3.2尺)である。桁筋の柱間は96cm(3.17尺)である。

遺物 (第80図、写真図版80)

[石器] P P 1埋土から礫石が1点出土した(22)。

時期 出土遺物から近世と考えられる。

SB02掘立柱建物**遺構** (第75・76図、写真図版31)

2 検出遺構

〔位置・検出状況〕1区VIC1 t グリッド付近に位置し、東・西調査区外へ続く。検出面はⅡ層直下のⅣ層中である。

〔平面形式〕全域を調査していないため不明であるが、桁桁きは3.85m以上、梁間は3.88m以上である。確認された柱穴は9個である。

〔建物方位〕桁桁の方向はN-23°-Eで、SB01とはほぼ同方向である。

〔柱間寸法〕梁桁の柱間は3.88m (12.8尺)である。桁桁の柱間は0.97m (3.2尺)である。

遺物 なし。

時期 SB01と近時期と考えられる。

SB03 掘立柱建物

遺構 (第75・76図、写真図版31)

〔位置・検出状況〕1区VIC1 t グリッド付近に位置し、調査区外東へ続く。検出面はⅡ層直下のⅣ層中である。

〔平面形式〕全域を調査していないため不明であるが、桁桁きは3.75m以上、梁間は1.75m以上である。確認された柱穴は6個である。

〔建物方位〕桁桁の方向はN-26°-Eで、SB01・02とはほぼ同方向である。

〔柱間寸法〕梁桁の柱間は1.75m (5.78尺)である。桁桁の柱間は1.15m (3.8尺)である。

遺物 なし。

時期 SB01・02と近時期と考えられる。

(5) 柱 穴 列

SA01 柱穴列

遺構 (第77図、写真図版33)

〔位置・検出状況〕1区VIA8 c～e グリッドに位置し、南調査区外へと続く。検出面はⅠ層直下のⅣ層中である。

〔規模・形状〕径39～25cm、検出面からの深さ13～41cmの柱穴が4基等間隔の列状に並び、1基がこれに並列する。検出長6.63m (21.9尺)、柱間寸法2.21m (7.3尺)で、並列するPP4～5間は73cm (2.4尺)である。

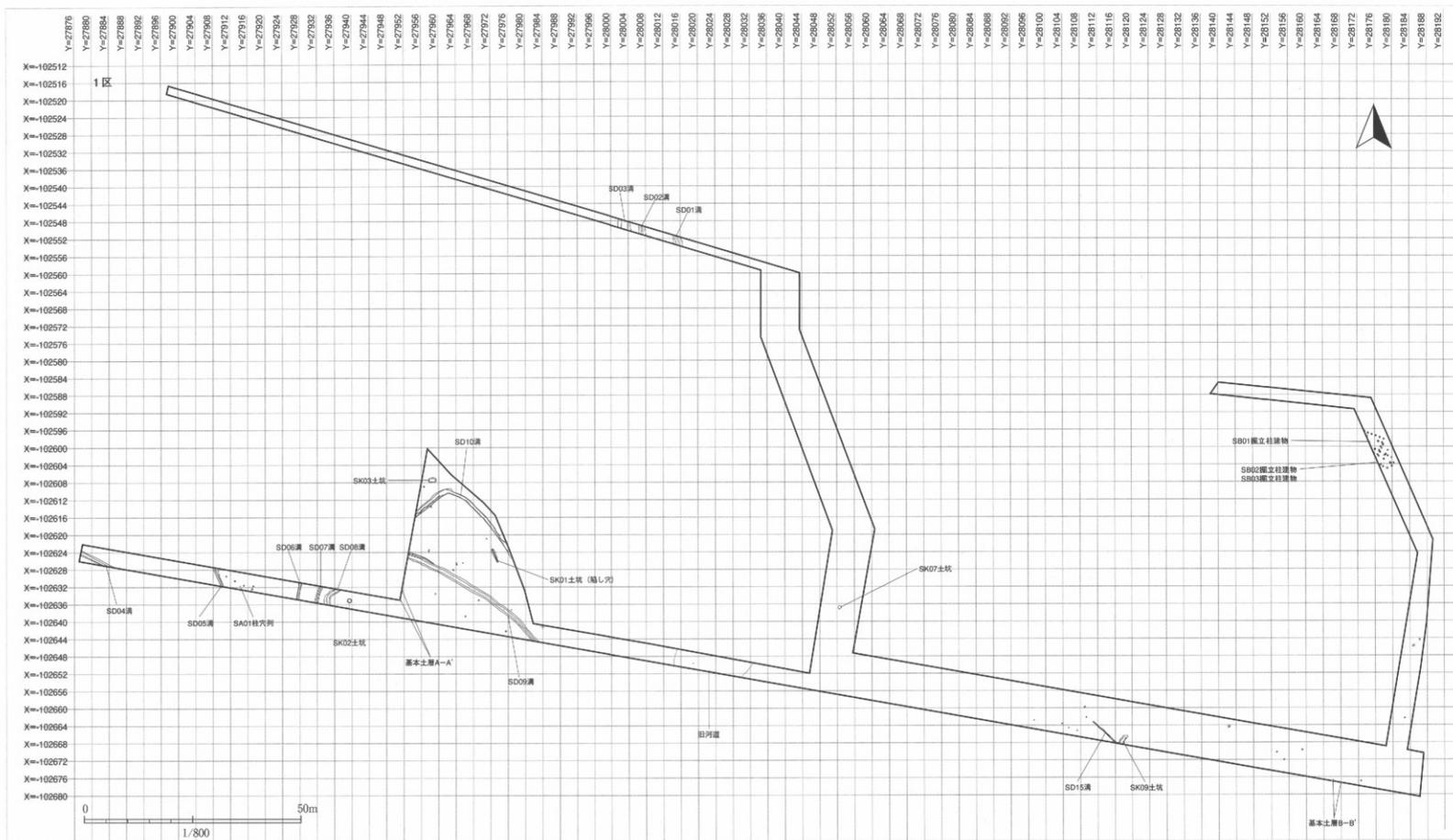
〔埋土〕いずれも灰オリープ色粘土と黒色粘土の混土である。人為堆積と考えられる。

遺物 なし。

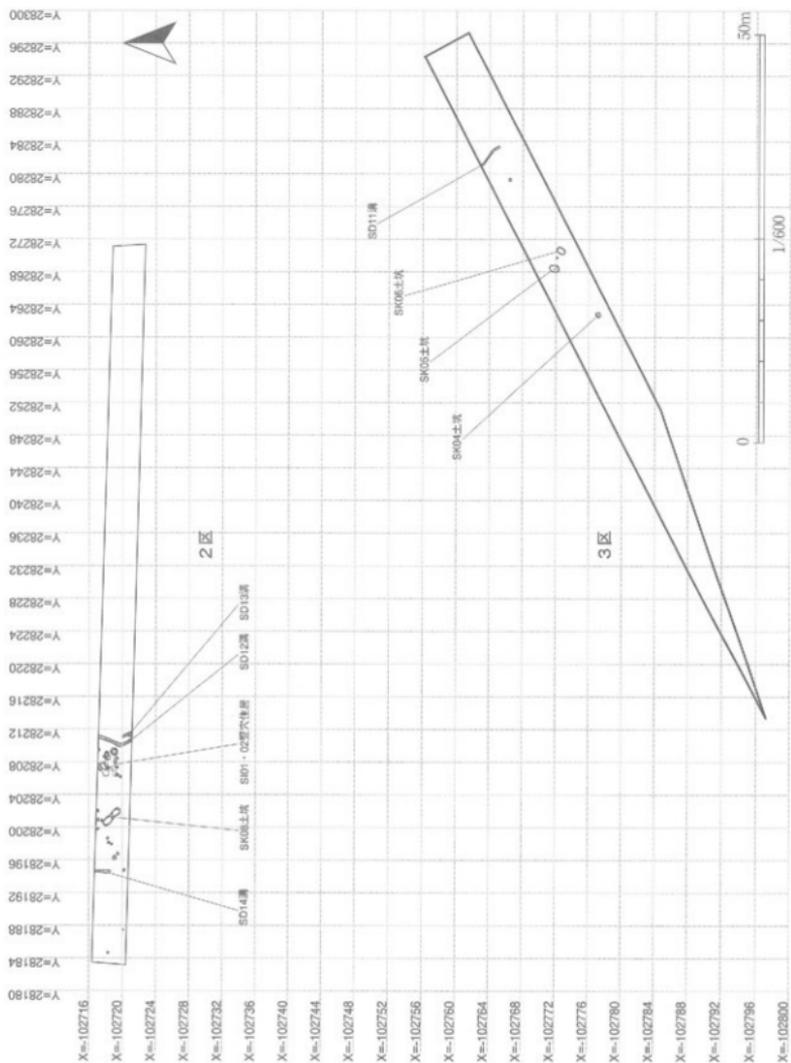
時期 不明である。

(6) 柱 穴 状 土 坑 (第77・78図、写真図版33・34)

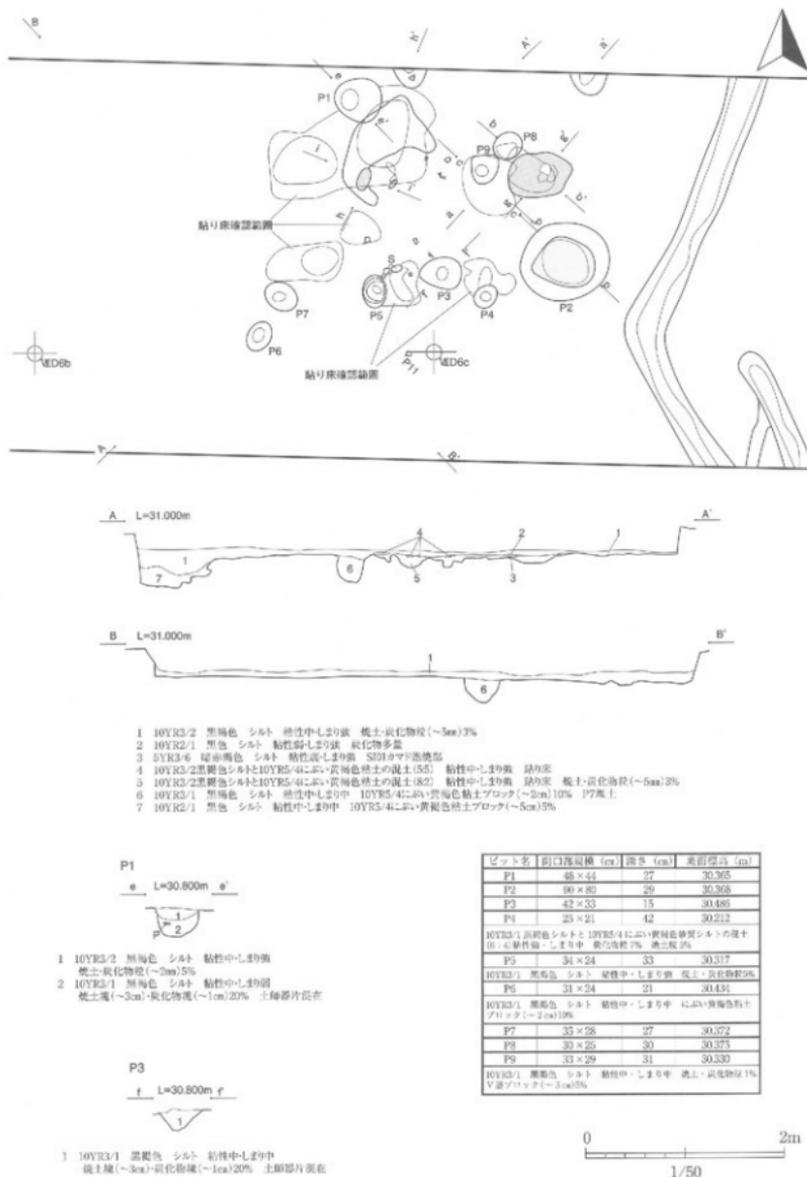
調査区全域から合計42個が検出されている。規模は開口部径64～12cm、検出面からの深さ98～15cmと幅広く、一様ではない。埋土等については第9表を参照していただきたい。時期は不明である。



第67図 合野遺跡遺構配置図(1)



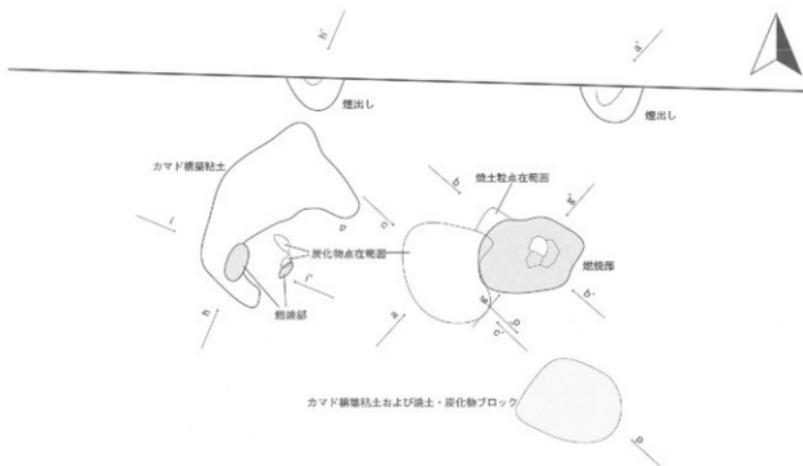
第68図 合野遺跡遺構配置図(2)



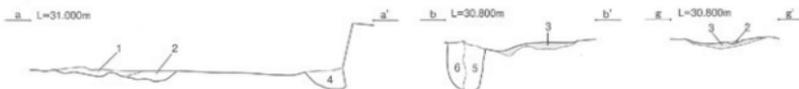
第69図 竪穴住居(1)

2号カマド

1号カマド

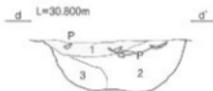
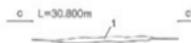


1号カマド



a-a' b-b' c-c' d-d'

- 1 10YR3/1 赤褐色 シルト 粘性中-しじり中 炭化物粒20% 焼土粒5%
 2 10YR3/1 赤褐色 シルト 粘性中-しじり中 焼土炭化物粒20%
 3 5YR4/6 赤褐色 シルト 粘性中-しじり強 焼土
 4 10YR2.5/1 黒-黒褐色 シルト 粘性中-しじり中 10YR3/2黒褐色シルトブロック(〜3cm)10% 焼土粒7%
 炭化物粒3% 深凹し
 5 10YR2/2 赤褐色 シルト 粘性中-しじり中 10YR4/6褐色粘土ブロック(〜1cm)10% P2塵土
 6 10YR4/4 褐色 焼土 粘性中-しじり強 10YR2/2黒褐色シルトブロック(〜3cm)20% P2塵土



d-d'

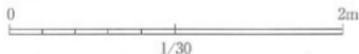
- 1 10YR3/1黒褐色シルトと2.5Y5/4赤褐色粘土の混土(6:4) 粘性中-しじり中
 焼土塊(〜2cm)炭化物粒10% 土部多量 カマド構築土の残骸
 2 10YR2.5/1 黒-黒褐色 シルト 粘性中-しじり中 10YR5/4(〜1)赤褐色粘土粒10% 焼土炭化物粒5%
 P2塵土
 3 10YR2.5/1 黒-黒褐色 シルト 粘性中-しじり中 10YR5/4(〜1)赤褐色粘土ブロック(〜3cm)20%
 焼土炭化物粒炭粒 P2塵土

2号カマド

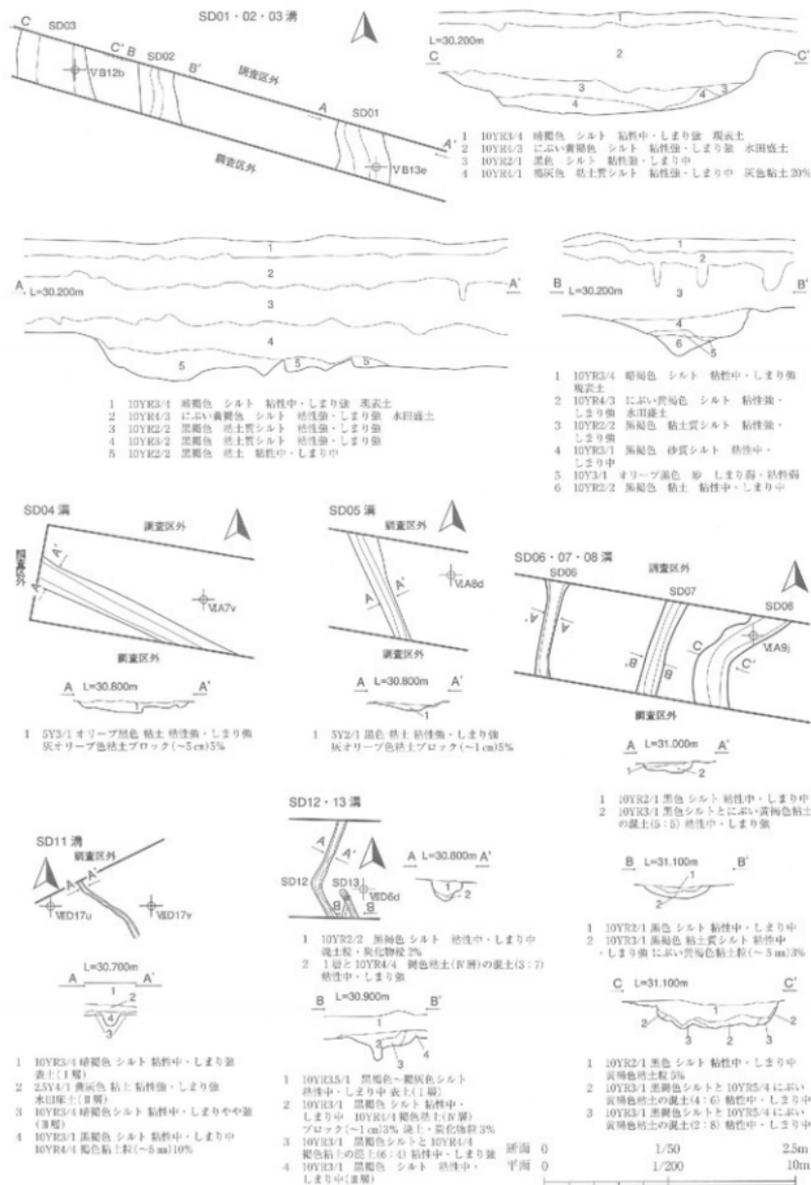


h-h' i-i'

- 1 5YR3/3 黄赤褐色 シルト 粘性弱-しじり中 焼土
 2 10YR5/4 にいり黄褐色 粘土 粘性中-しじり強 10YR3/1黒褐色シルト粒20% カマド構築土の残骸
 3 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中-しじり強 10YR5/4(〜1)黄褐色粘土ブロック(〜1cm)10% 焼土炭化物粒5% 粉塵
 4 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中-しじり中 粘土粒20% 炭化物粒5% 粉塵



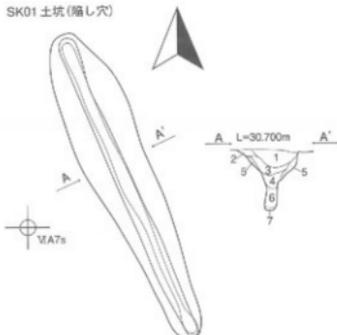
第70図 竈穴住居(2)



第71図 溝(1)

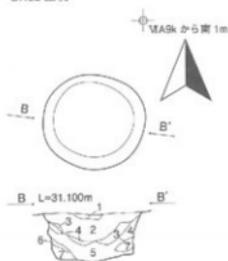
2 検出遺構

SK01 土坑(陥し穴)



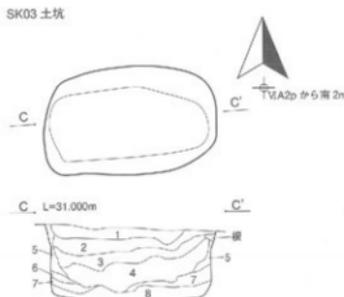
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 褐色シルト粒(～5mm) 2%
- 2 10YR2.5/1 黒～黒褐色 シルト 粘性中・しまり強 褐色シルト粒(～5mm) 2%
- 3 10YR2.1 黒色 シルト 粘性中・しまり弱 褐色粘土粒(～5mm) 5%
- 4 10YR2.2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり弱 褐色粘土粒(～1cm) 7%
- 5 10YR2.1 褐色シルトと10YR4.4褐色粘土の混土(7:3) 粘性中・しまり中
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまり中 褐色シルト粒(～5mm) 3%
- 7 10YR5.2 黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり弱

SK02 土坑



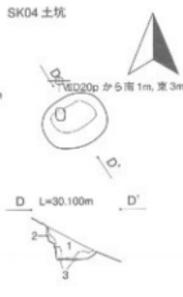
- 1 10YR2.1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
- 2 10YR3.1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 褐色シルト粒(～5mm) 3%
- 3 10YR3.1.2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 褐色シルト粒 7%
- 4 10YR2.5/1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり強
- 5 10YR5.1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり強 褐色シルト粒(～1cm) 10%
- 6 10YR2.5/1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり強
- 7 10YR4.4 褐色粘土と 10YR3.1 褐色シルトの混土(7:3) 粘性強・しまり弱

SK03 土坑



- 1 10YR2.1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
- 2 10YR2.5/1 黒～黒褐色 粘土 粘性強・しまり強
- 3 10YR2.5/1 黒～黒褐色粘土と 10YR2.2 黒褐色粘土の混土 粘性強・しまり強
- 4 10YR3.3 黒褐色 粘土 粘性強・しまり強
- 5 10YR4.4 褐色 シルト 粘性中・しまり強
- 6 10YR4.6 褐色 シルト 粘性強・しまり強 褐色シルト粒 5%
- 7 10YR4.3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 灰褐色粘土 20%
- 8 10YR4.3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 灰褐色粘土 40%

SK04 土坑



- 1 10YR3.1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中
- 2 10YR3.2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 褐色粘土粒(～1cm) 10%
- 3 10YR3.5/1 黒褐～灰褐色 シルト 粘性中・しまり中 褐色粘土粒(～1cm) 7%

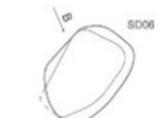


第73図 陥し穴・土坑(1)

SK05・06土坑



A L=30.400m A'



B L=30.200m B'

SK07土坑
(確認調査区のため検出のみ)

MB10n

SK05

- 10YR2/1 黒色 シルト 粘液中・しまり中 褐色粘土殻 (~5mm)・炭化微粒各1%
- 10YR4/3 に近い黄褐色 砂質シルト 粘液中・しまり中
- 10YR2/1 黒褐色シルトと 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトの混土(6:4) 粘液中・しまり中
- 10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトの混土(8:2) 粘液中・しまり中
- 10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトの混土(8:4) 粘液中・しまり中 褐色炭粒2%
- 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粘性強・しまり弱
- 10YR4/3 に近い黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり弱
- 10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトの混土(8:2) 粘液中・しまり中

SK06

- 10YR3/3 緑褐色 シルト 粘液中・しまり中
- 10YR2/1 黒色 シルト 粘液中・しまり中
- 10YR3/1 黄褐色 シルト 粘液中・しまり中
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂質シルト 粘液中・しまり中 褐色粘土プロック(~1cm)3%
- 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 粘液中・しまり中
- 10YR3/3 緑褐色 シルト 粘液中・しまり中 褐色粘土プロック(~1cm)3%

SK08土坑

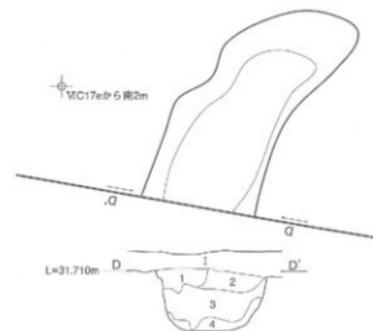


C L=30.700m C'



- 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘液中・しまり強 褐色粘土殻3%
- 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘液中・しまり強 褐色粘土プロック(~2cm)30%

SK09土坑



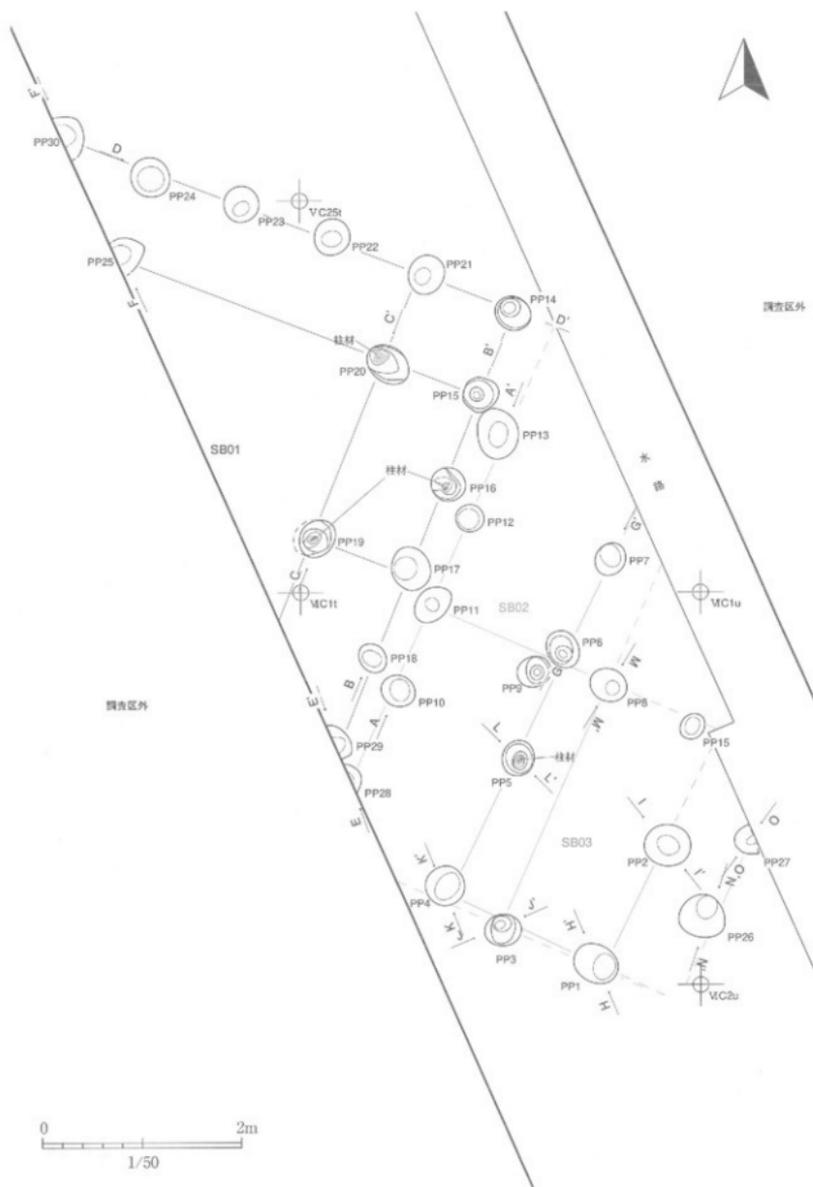
MC17eP-5南2m

D L=31.710m D'

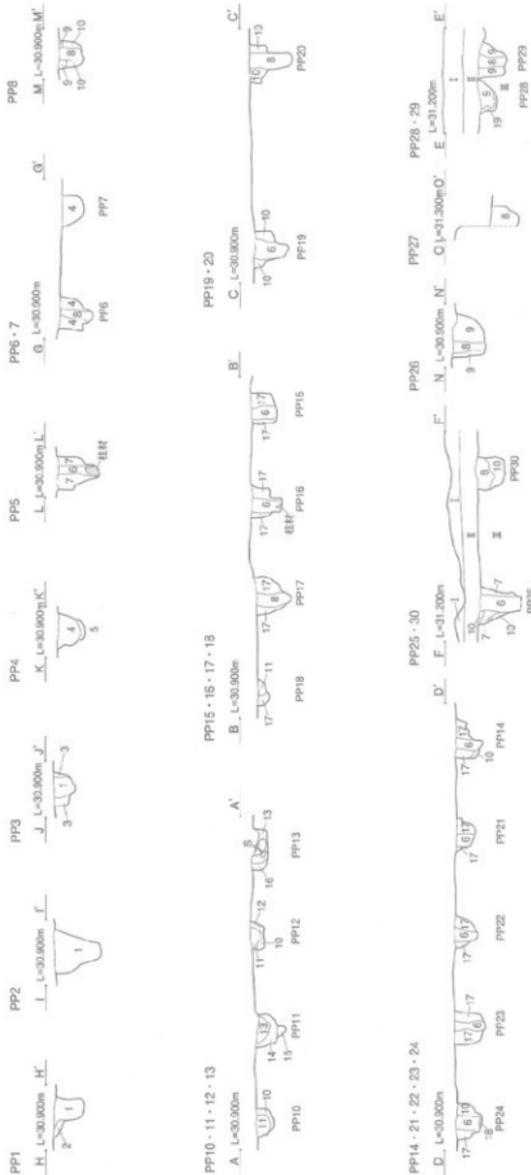


- 10YR3/1 暗褐色 シルト 粘液中・しまり強 型に黄褐色シルト殻20%
- 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘液中・しまり中
- 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性强・しまり強 型に黄褐色シルト殻5%
- 10YR4/4 褐色 シルト 粘性強・しまり強



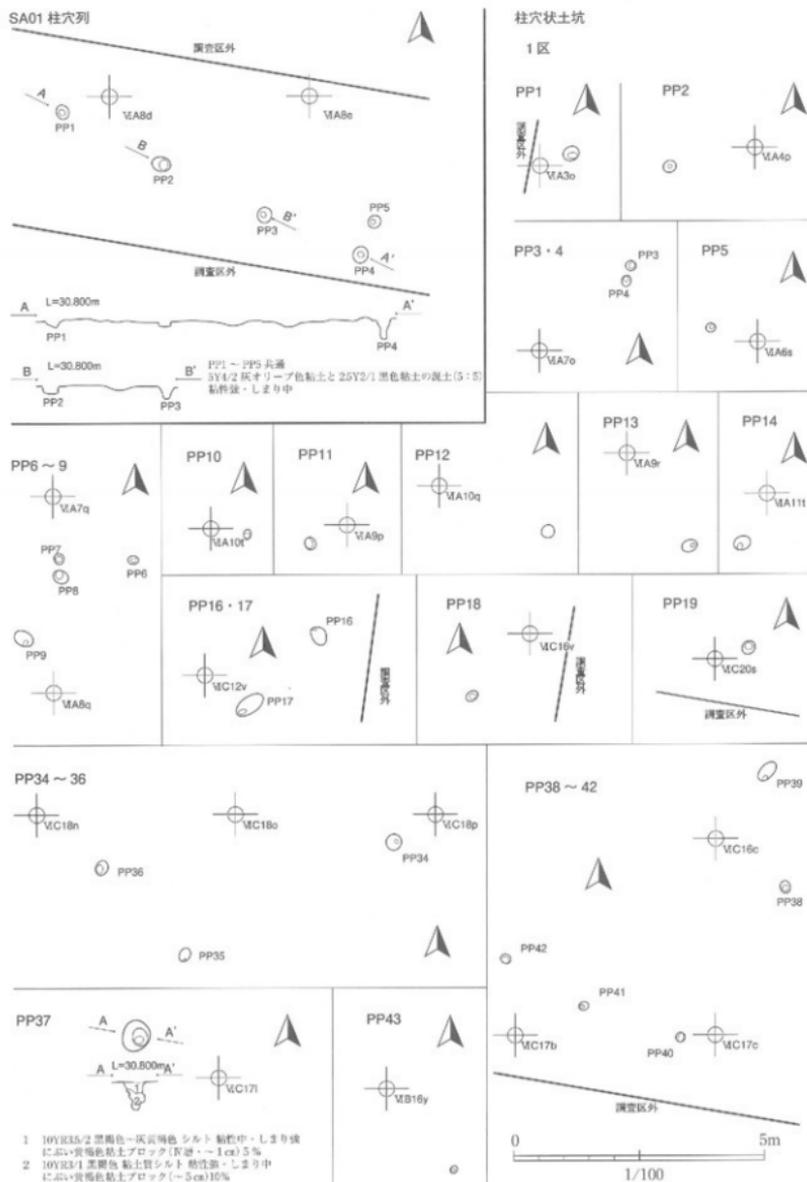


第75図 掘立柱建物 (1)



- 1 10YR5.2/2 黒褐色、シルト、粘性強、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層)、フロック (-5cm) 10%
- 2 10YR5.2/2 黒褐色シルトと10YR4.4/褐色粘土(V層)の混上(3:7) 粘性中、しまり強
- 3 10YR5.2/2 黒褐色シルト、粘性中、しまり強
- 4 10YR5.2/2 黒褐色シルトと10YR4.4/褐色粘土(V層)の混上(6:4) 粘性中、しまり強
- 5 10YR5.2/2 黒褐色シルトと10YR4.4/褐色粘土(V層)の混上(3:7) 粘性中、しまり強
- 6 10YR5.2/2 黒褐色シルト、粘性中、しまり強
- 7 10YR5.2/2 黒褐色シルト、粘性中、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層) フロック (-2cm) 10%
- 8 10YR5.2/2 黒褐色シルト、粘性中、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層) フロック (-2cm) 10%
- 9 10YR5.2/2 黒褐色シルト、粘性中、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層) フロック (-1cm) 3%
- 10 10YR5.2/2 黒褐色シルトと10YR4.4/褐色粘土(V層)の混上(5:5) 粘性中、しまり強
- 11 2.5Y4.1 赤褐色、シルト、粘性中、しまり強、粘性中に酸化鉄
- 12 10YR6.1 黒褐色、シルト、粘性中、しまり強
- 13 10YR6.1 黒褐色、シルト、粘性中、しまり強
- 14 10YR6.1 黒褐色、粘土、粘性強、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層) フロック (-3cm) 10%
- 15 10YR6.1 黒褐色、シルト、粘性中、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層) フロック (-2cm) 10%
- 16 10YR6.1 黒褐色、シルト、粘性中、しまり強
- 17 10YR6.1 黒褐色、シルト、粘性中、しまり強、10YR4.4/褐色粘土(V層) フロック (-1cm) 3%
- 18 10YR6.1 黒褐色、粘土、粘性強、しまり強
- 19 10YR5.2/2 黒褐色、赤褐色、シルト、粘性中、しまり強

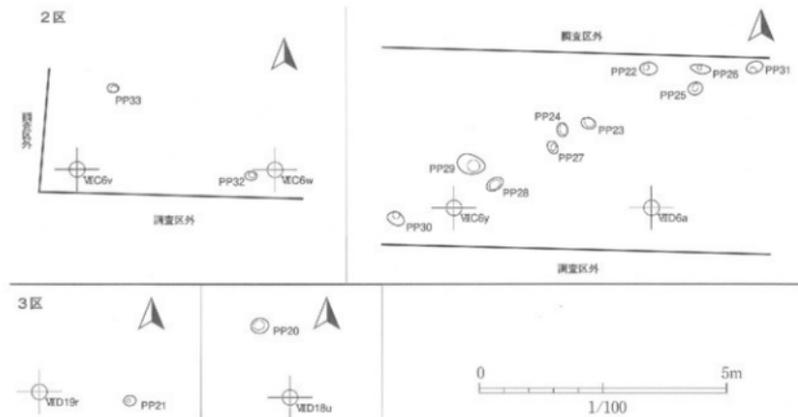
第76図 掘立柱建物(2)



第77図 柱穴・柱穴状土坑(1)

第9表 合野遺跡柱穴・柱穴状土坑観察表

SB01・02・03				柱穴状土坑				
No.	頂口径(cm)	底径(cm)	底径深(cm)	No.	頂口径(cm)	底径(cm)	底径深(cm)	
PP1	45×37	32	30.488	1	WA2a	32×30	34	30.640
PP2	48×41	49	30.328	2	WA4a	28×23	18	30.880
PP3	39×33	23	30.576	3	WA6a	23×21	15	31.324
PP4	40×40	29	30.480	4	WA6b	22×17	23	30.636
PP5	38×32	48	30.292	5	WA5c	19×18	22	30.640
PP6	39×31	38	30.384	6	WA7a	23×18	18	30.960
PP7	34×30	24	30.480	7	WA7b	23×19	22	30.818
PP8	37×31	26	30.480	8	WA7p	30×27	34	30.864
PP9	36×31	33	30.444	9	WA7q	40×30	35	30.848
PP10	35×31	30	30.528	10	MA10a	20×14	16	30.864
PP11	42×32	34	30.384	11	WA9a	25×21	20	31.000
PP12	29×29	14	30.636	12	WA10a	26×26	(破損)	—
PP13	52×42	17	30.600	13	WA9p	30×23	27	30.896
PP14	27×34	27	30.504	14	MA11a	34×27	34	30.744
PP15	38×33	35	30.432	15	(欠番)	—	—	—
PP16	35×34	34	30.136	16	WC10a	39×26	97	29.880
PP17	45×39	40	30.360	17	WC11a	62×32	98	29.880
PP18	31×25	12	30.380	18	WC16a	24×18	18	30.688
PP19	42×34	38	30.364	19	WC19a	28×24	24	30.600
PP20	46×35	41	30.360	20	MD17b	36×32	21	30.696
PP21	42×36	20	30.576	21	MD18a	23×18	16	30.666
PP22	39×36	29	30.180	22	WC3y	34×24	16	30.480
PP23	27×35	27	30.412	23	WC3y	39×30	27	30.368
PP24	40×39	24	30.412	24	WC3y	38×22	27	30.384
PP25	—	—	—	25	MD5a	36×26	30	30.424
PP26	47×45	44	30.360	26	MD6a	41×17	26	30.360
PP27	38×22	30	30.540	27	WC3y	25×20	18	30.448
PP28	—	—	—	28	WC3y	35×23	18	30.418
PP29	—	—	—	29	WC3y	55×38	35	32.254
PP30	—	—	—	30	MD4	34×24	33	30.296
				31	MD5a	31×22	33	30.328
				32	WC6v	35×18	29	30.368
				33	WC6v	22×18	16	30.336
				34	MC18a	32×31	29	30.328
				35	WC18a	29×21	45	30.328
				36	MC18a	29×24	38	30.400
				37	WC16a	61×54	37	30.916
				38	MC16a	28×30	22	30.624
				39	WC15a	44×26	76	30.988
				40	MC17b	19×17	23	30.664
				41	MC16a	19×14	38	30.320
				42	MC16a	21×18	31	30.688
				43	WC16a	15×12	10	30.616



第78図 柱穴状土坑(2)

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器約3.6kg、須恵器約0.7kg、縄文土器約0.7kg、石器約2.9kg（うちトール5点・約0.5kg）、木質遺物1点、陶磁器69.5gである。

図の掲載方法については道上遺跡第3次調査と同様である。（IV章3節参照）

(1) 土師器・須恵器（第79・80図、第10表、写真図版79）

出土量は土師器3690.2g、須恵器733.5gの計4423.7gで、全体量の約25%にあたる16点・1087.7gを掲載した。出土地点の内訳では、S I 01・02出土分が全体の約67%を占めている。遺構外出土分の大半はI層あるいは攪乱中から出土したものである。

1～10はS I 01・02出土分である。1・6～8は土師器坏で、いずれもロクロ成形である。前3者は内面にミガキ調整と黒色処理が施される。6の口縁は微妙に外反する。8の底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。2・4・5・9・10は土師器甕で、4・9・10はロクロ成形である。口縁部は外反し、10は口唇が積み上げられる。3は須恵器の壺甕類である。調整は土師器と変わらない。11・12はS D 09出土の須恵器坏・壺甕類である。後者は波状文が施される。14はS D 11出土の土師器坏である。ロクロ成形で、内面はミガキ調整と黒色処理が施される。15はS D 13出土の土師器甕底部で、体部外面調整はヘラケズリである。16・17は遺構外IV層出土の土師器坏である。前者はロクロ成形で、内面はミガキ調整と黒色処理が施される。体部は丸みを帯び、口縁が微妙に外反する。後者は底部片で、十字刻書が施される。

(2) 陶磁器（第79・81図、第11表、写真図版79・80）

出土量は848.2gで、全体量の約17%にあたる2点・146.1gを掲載した。不掲載分はすべて細片で時期不明のものおよび近代以降のものである。13はS D 09埋土上位から出土した常滑産大甕の体部で、12世紀後半のものと推定される。24はS D 03埋土から出土した磁器の碗で、近世・大塚相馬産と推定される。

(3) 縄文土器（第80図、第12表、写真図版79）

出土量は713.0gと少ない。掲載量は全体の約49%にあたる1点・352.3gである（18）。遺構外の攪乱中から出土したものである。地紋のみ施文された深鉢の胴部片で、詳細な時期は不明である。

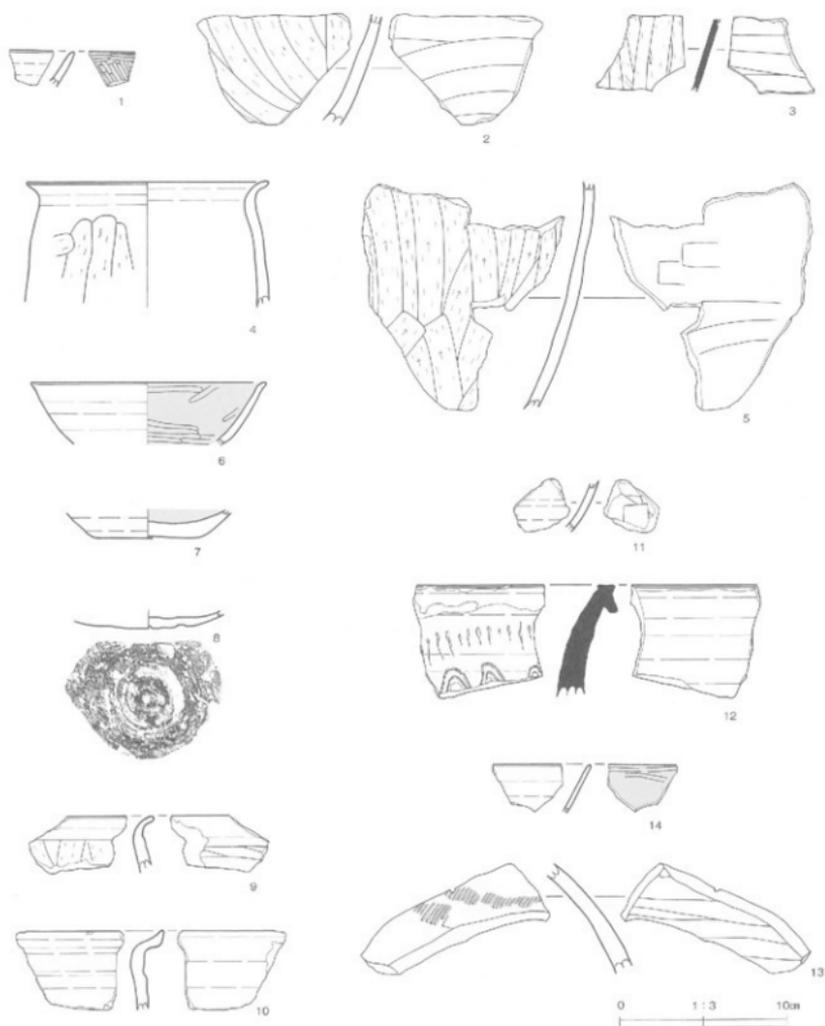
(4) 石器（第80・81図、第13表、写真図版80）

出土数量は剥片・素材を含め19点・2,878.9gで、うち5点・456.2gを掲載した。19はS I 01埋土出土の凹基無茅蕨で、頁岩製である。20はS D 09埋土出土の石器で、右側縁腹面側に浅形の刃部調整が入る。頁岩製である。21はS K 07埋土出土の凸基有茅蕨で、頁岩製である。22はS B 01 P P 1埋土出土の扁平な長方形を呈する砥石で、凝灰岩製である。23は遺構外攪乱出土の磨製石斧で、砂岩製である。22は古代以降（おそらく近世）のもので、これ以外はすべて縄文時代の所産である。

(5) 木製品（第14表、写真図版80）

1点のみ出土した（25）。挽物の高台碗で、黒漆が塗布されている。出土地点はVI Bグリッドの旧

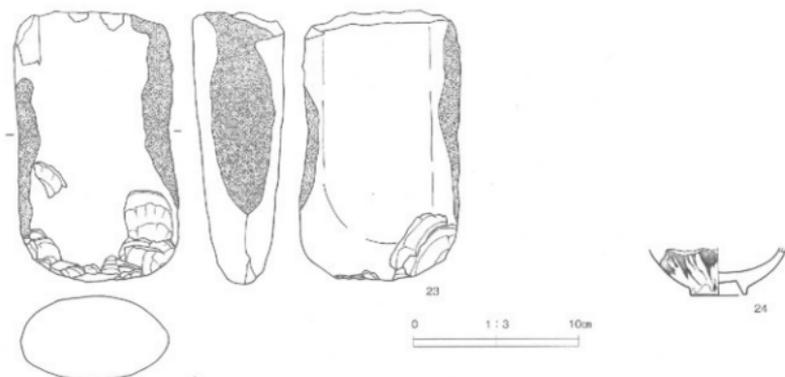
河道内で、この河道は近世～近代頃まで存在していたものと推定されることから、本遺物も同時期の所産と考えられる。



第79図 出土遺物(1)



第80図 出土遺物(2)



第81図 出土遺物(3)

第10表 合野遺跡土師器・須恵器観察表

図録No	図	写写	出土地点	器別・器種	部位	調査		法量(cm)		重量(g)	備考	
						外面	内面	口径	器高			
1	79	S80	壱次佐治Q 2塚東	土師器杯	口	回転ナデ	ミゴキ	—	(2.1)	—	3.3	内照
2	79	S80	壱次佐治Q 2塚東	土師器碗	体	ヘラケズリ	ヘラナデ	—	—	—	58.1	
3	79	S80	壱次佐治南面P 3	須恵器曲頸甕	体	ヘラケズリ	ヘラナデ	—	(5.5)	—	11.6	
4	79	S80	壱次佐治南面魚沼土集中内	土師器蓋	口→体	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	(14.4)	(7.6)	—	47.8	
5	79	S80	壱次佐治南面魚沼土集中内・P31(壱土上位)	土師器碗	体	ヘラケズリ	ヘラナデ	—	(13.7)	—	134.1	
6	79	S80	壱次佐治P 3 1層(壱土上位)	土師器杯	口→体	回転ナデ	ミゴキ	(14.0)	(3.8)	—	26.9	内照
7	79	S80	壱次佐治P 3 1層(壱土上位)	土師器杯	底	回転ナデ	—	—	(1.7)	(5.8)	36.1	内照
8	79	S80	壱次佐治P 3 1層(壱土上位)	土師器杯	底	—	回転ヘラケズリ	—	(1.1)	54.9	38.2	
9	79	S80	壱次佐治P 3 1層(壱土上位)	土師器碗	口	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・ヘラナデ	—	(3.5)	—	13.2	
10	79	S80	壱次佐治P 3 1層(壱土上位)	土師器蓋	口	回転ナデ	—	—	(4.8)	—	28.4	
11	79	S80	塚東土師2	須恵器平	体	回転ナデ	ヘラナデ	—	(3.2)	—	5.5	
12	79	S80	塚東土上位土師4	須恵器曲頸甕	口	回転ナデ・流紋文	回転ナデ	—	—	—	138.1	
14	79	S81	塚東土	土師器	口	回転ナデ	ミゴキ	—	(2.9)	—	4.8	内照
15	80	S79	S11塚1層	土師器蓋	体→底	ヘラケズリ	ヘラナデ	(19.5)	(7.4)	12.0	303.5	内照
16	80	S79	V1013F南	土師器杯	口→体	回転ナデ	ミゴキ	(13.4)	(5.4)	—	25.3	内照
17	80	S79	V1013F南	土師器杯	底	—	ヘラケズリ	—	(8.8)	—	19.8	流紋網罟(十字)

第11表 合野遺跡陶磁器観察表

図録No	図	写写	出土地点	器別	器種	部位	調査		法量(cm)		重量(g)	備考
							外面	内面	口径	器高		
13	79	S80	塚東土上位土師3	陶器	曲頸甕	体	平行文タケキ	ナデ	—	—	69.5	常楽堂 12世紀後半
21	81	S80	塚東土	青磁	台付碗	底	内外面ともに貫入	—	—	3.5	76.6	相良堂 18世紀後半

第12表 合野遺跡縄文土器観察表

図録No	図	写写	出土地点	器種	部位	文飾の種類	重量(g)	備考
18	80	S79	塚171層(壱土)	漆器	柄	LR柄	302.3	

第13表 合野遺跡石器観察表

図録No	図	写写	出土地点	器種	残存状態	石質	長さ			重量(g)	特記事項
							長さ	幅	厚さ		
19	80	S80	壱次佐治Q 6塚土	石錐	完形	貫石	4.26	1.54	0.44	200	凹溝無事
20	80	S80	壱次佐治Q 6塚土	石錐	完形	貫石	5.46	4.64	1.40	221.0	右側縁幾何的に浅い凹溝
21	80	S80	SKE7 1層	石錐	完形	貫石	2.79	1.10	0.40	9.80	凸縁有
22	80	S80	壱次佐治Q 6塚土	砥石	1/2欠	燧石	9.00	7.20	2.80	251.30	扁平長方形
23	81	80	S 塚西端1層土	燧石片	1/2欠	燧石	8.10	4.80	2.80	169.00	

第14表 合野遺跡木質遺物観察表

図録No	図	写写	出土地点	器種	未取り	残存状態	長さ			特記事項
							長さ	幅	厚さ	
25	81	80	V1012-13a→1014F南内	高木輪	榎木取り	略定形	15.0	5.7	6.9	内外黒漆塗布底面にロウ系

VI 小林繁長遺跡

1 調査の概要

当初対象面積は674㎡であったが、調査途中で工事用地の設計変更による調査範囲変更が生じ、最終的には332㎡に関して調査を実施した。検出された遺構は、掘立柱建物1棟と溝1条である。

2 検出遺構(第82回)

(1) 掘立柱建物

S B O 1 掘立柱建物

遺構(第83回、写真図版35~38)

〔位置・検出状況〕1区のⅧG12ラインに位置し、調査区外北側へ続く。また、東側は地形改変のため消失している。検出面はⅡ層直下のⅢ層中である。

〔平面形式〕桁桁は19.33m(63.8尺)以上、梁行き36.0m(11.9尺)以上である。確認した柱穴は29個である。

〔建物方位〕桁桁の方向はN-76°-Eである。

〔柱間寸法〕梁桁の柱間は100cm(3.3尺)、115cm(3.8尺)の2種がみられる。桁桁の柱間は121cm(4.0尺)、155cm(5.1尺)、190cm(6.3尺)、236cm(7.8尺)、260cm(8.6尺)と多様である。

遺物(第85回、写真図版81)

〔土師器〕P P 141層から土師器片(坏?)が出土した。細片のため不掲載である。

〔須恵器〕P P 3底面直上から坏底部が1点出土した(1)。

〔石器〕P P 131層からめのう製の剥片1点が出土した。不掲載である。

〔鉄片〕P P 9底面から1点出土した。細片のため不掲載である。

時期 近世と思われる。

(2) 溝

S D O 1 溝

遺構(第84回、写真図版38)

〔位置・検出状況〕2区のⅨF10yグリッド付近に位置する。Ⅱ層直下のⅢ層中で検出された。

〔規模・平面形・断面形〕南北方向に直線的に伸びる。両端ともさらに調査区外へと続き全形は不明である。幅は最大で1.22m、検出面からの深さは最深部で32cmである。断面形は薬研状を呈する。

〔埋土〕上位から褐灰色、灰黄褐色、黒褐色の粘土で構成される。自然堆積と考えられる。

遺物(第85回、写真図版81)

〔縄文土器〕底面から108.6g出土し、うち2点・29.0gを掲載している(2・3)。

時期 不明である。

3 出土遺物(第85図、第15～17表、写真図版81)

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器片17点・1,005.9g、石器6点・20.3g、土師器片3点・114.1g、須恵器片3点・123.4g、細片のため時期不明の上器・粘土塊3点・15.2g、陶磁器片1点・20.6g、鉄製品3点・81.5gである。

(1) 縄文土器

縄文土器は、SD01底面及び埋土内のほか、遺構外Ⅰ～Ⅳ層から出土している。いずれも破片で摩滅・風化が著しく、時期の判別できるものはほとんどない。地紋や胎土の様子から、中期以降のものと推定されるが、詳細は不明である。5点・154.8gを掲載した(2～6)。2・3はSD01底面から出土したもの。ただし遺構に伴うものではなく、二次的に堆積したものと推定される。4～6は遺構外出土で、4はⅣ層、5・6はⅢ層から出土した。

(2) 石器

石鎌2点、剥片4点が出土した。出土地点はすべて遺構外である。うち石鎌2点・1.8gを掲載している(7・8)。出土層位はいずれもⅢ層である。7は頁岩製で基部にアスファルトが付着している。8はめのう製である。

(3) 土師器・須恵器

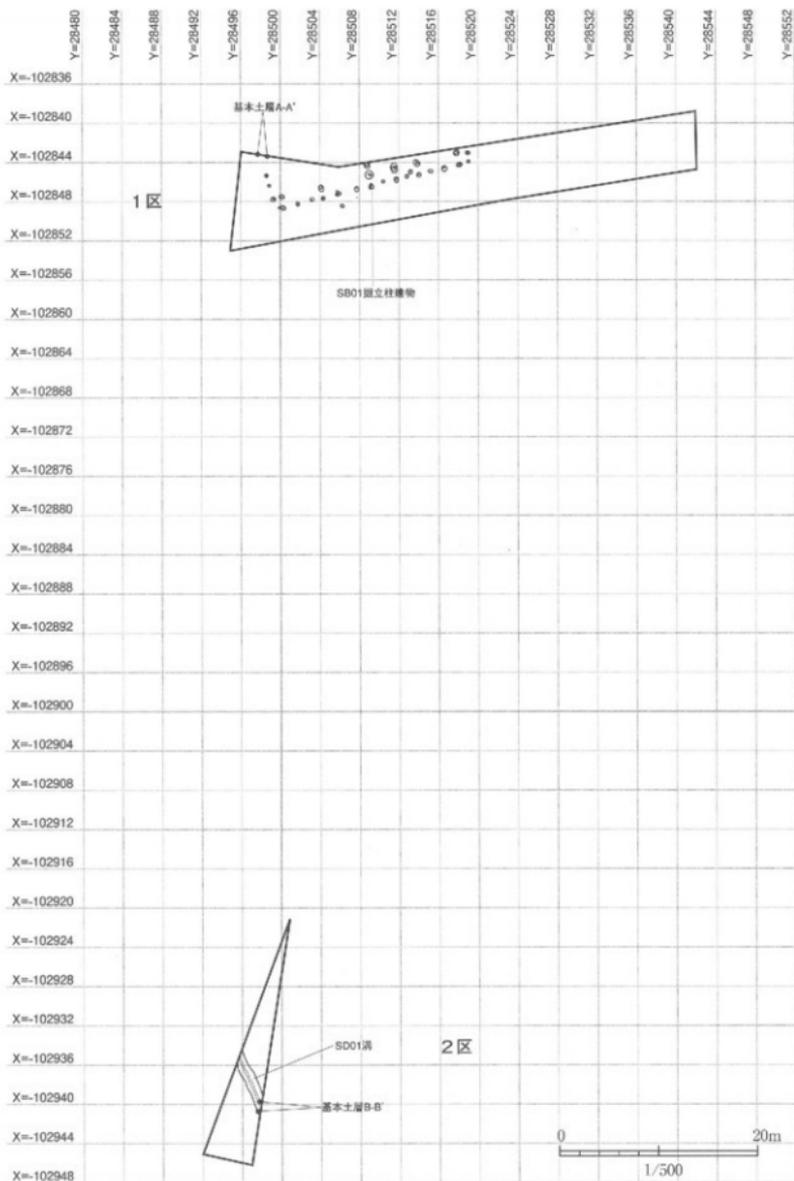
掲載点数・量は、須恵器2点・105.4gである(1・9)。1はSB01掘立柱建物PPP3の底面直上から出土したもの。これ以外に遺構内出土はなく、他はすべてⅠ層あるいは攪乱出土である。9は壺甕類の体部片である。

(4) 陶磁器

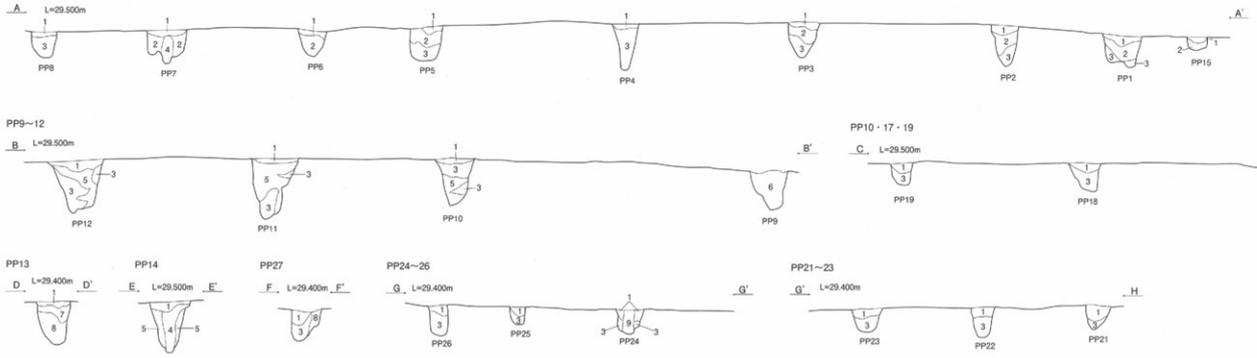
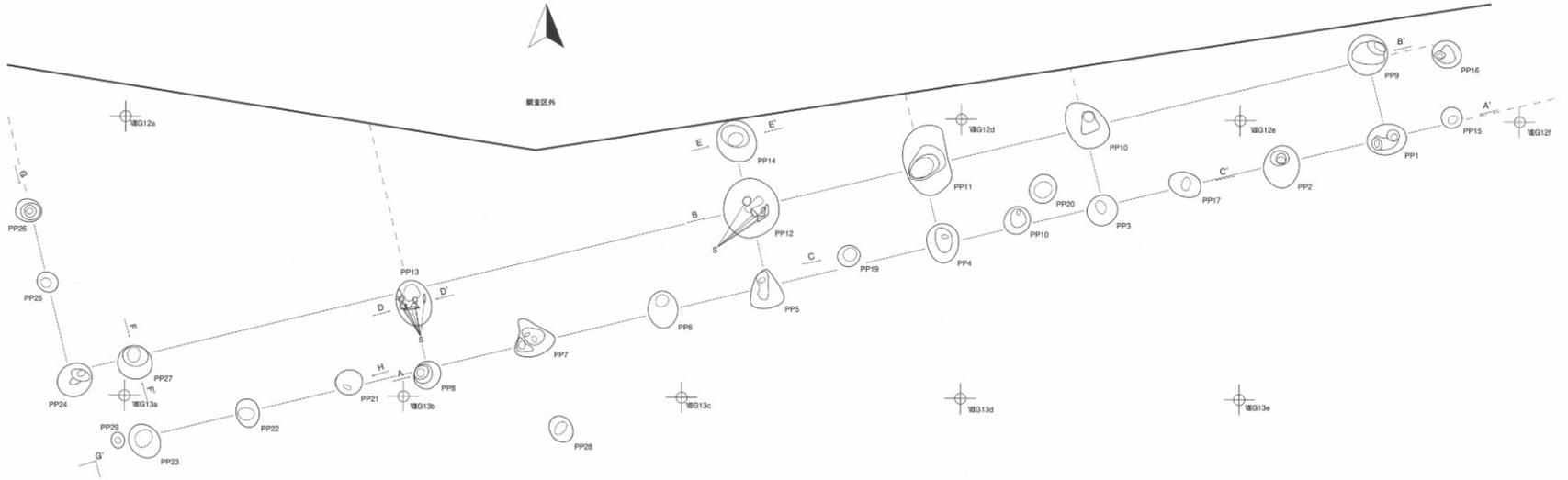
調査区外で18世紀後半から19世紀のものと思われる肥前産の陶磁器片を表採している。

(5) 鉄製品

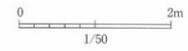
SB01PPP9底面から細片が、遺構外Ⅰ層中から鋤片?と試掘トレンチ中から細片がが出土している。



第82図 小林繁長遺跡遺構配置図

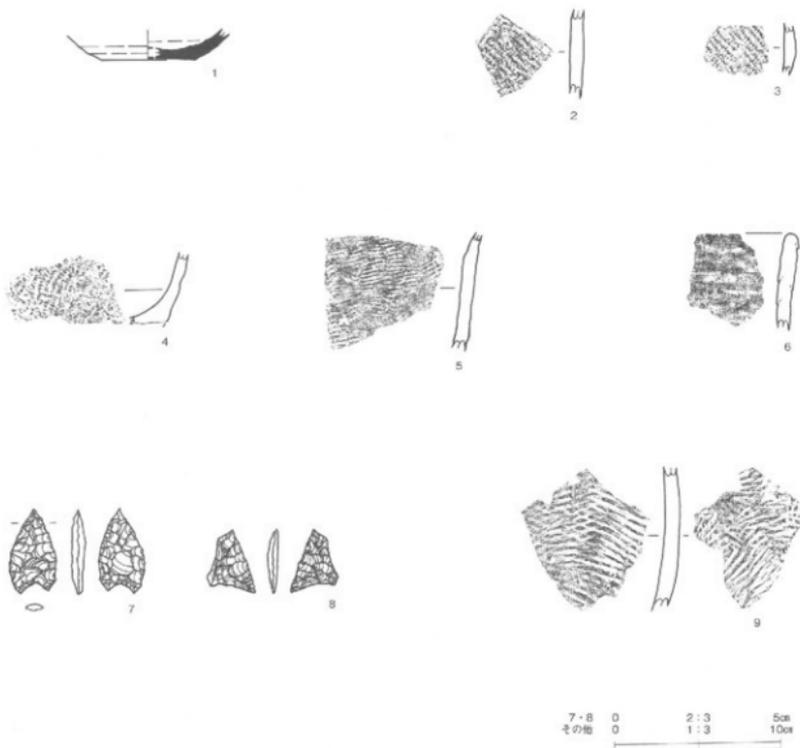


- 1 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト 粘粒中-少粘
 - 2 10YR3/1 黄褐色シルト・フロンタル・50-65-10% 基本土層上部 粘粒中-少粘
 - 3 10YR4/2 に近い黄褐色シルト・10YR3/1 黄褐色シルトの混じり層 粘粒中-少粘
 - 4 10YR3/2 黄褐色 シルト 粘粒中-少粘
 - 5 10YR3/1 黄褐色シルト・2YR4/1 黄褐色粘土・10YR3/2 黄褐色砂質シルトの混じり層 粘粒中-少粘
 - 6 3層と5層の混じり層 粘粒中-少粘
 - 7 10YR3/1 黄褐色シルト・10YR3/2 黄褐色シルト・10YR4/2 に近い黄褐色砂の混じり層 粘粒中-少粘
 - 8 10YR3/1 黄褐色シルト・10YR4/2 に近い黄褐色砂・10YR3/2 黄褐色シルトの混じり層 粘粒中-少粘
- ※PP16 上段から1-2,3の層
 PP20 上段から1,3の層
 PP28 3の層
 PP29 3の層



第83図 掘立柱建物
- 129 - 130 -

3 出土遺物



第85図 出土遺物

第16表 小林繁長遺跡縄文土器観察表

図版 No.	図	写真	出土地点	器種	部位	文様の母線	重量(g)	備考
2	85	81	SD01底面土器1	鉢皿	胴	RL直	168	
3	85	81	SD01底面土器2	鉢皿	胴	RL直	102	
4	85	81	RF9y首脛	鉢皿	胴	LR直	373	
5	85	81	RF7y首脛	鉢皿	口縁	LR斜	55.6	
6	85	81	RF10x首脛	鉢皿	口縁	斜文	32.9	

第17表 小林繁長遺跡石器観察表

図版 No.	図	写真	出土地点	器種	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量	特記事項
							(cm)	(cm)	(g)		
7	85	81	RF G 1 2e 非罫	石鏃	定形	頁岩	2.47	1.41	0.30	1.2	無定形鏃
8	85	81	RF 1 0 x 非罫	石鏃	1/3欠	めのう	(1.91)	(1.38)	0.28	0.5	石鏃

第18表 小林繁長遺跡須恵器観察表

図版 No.	図	写真	出土地点	器種	部位	裏面			重量 (g)	備考
						外面	内面	底面		
1	85	81	S B 0 1 PP3底面直上	杯	底	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸罫り	28.6	
9	85	81	RF G 1 1 1 1 網眼瓦	須恵器	缶	膝子杖タタキ	膝子杖アテダ		76.8	

Ⅶ 自然科学的分析

1 道上遺跡第3次調査の放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

道上遺跡は、岩手県奥州市前沢区白山字白山前（北緯39° 04' 27"、東経141° 09' 41"）に所在する。北上川西岸の沖積平野の後背湿地に位置し、泥炭層が広がる土地である。

(2) 測定の意義

遺物と遺構の年代を明らかにしたい。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、Ⅵ層検出の木質遺物No. (116) (1:IAAA-71559)、Ⅳ層検出の木質遺物No.273 (52) (2:IAAA-71560)、Ⅵ層検出の1号杭列No.2の木質遺物No.217 (5) (3:IAAA-71561)、Ⅳ層検出の2号杭列No.14の木質遺物No.236 (156) (4:IAAA-71562)、Ⅵ層検出の3号杭列No.5の木質遺物No.255 (244) (5:IAAA-71563)、合計5点である。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る ^{14}C 年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_Sまたは ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_S

$^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_Rまたは ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{A}_N$) に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age : yrBP) が次のように計算される。

$$\begin{aligned} T &= -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C}/1000) + 1] \\ &= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100) \end{aligned}$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 校正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv3.10校正プログラム (Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(7) 測定結果

^{14}C 年代は、木質遺物 (116) (1 : IAAA-71559) が $1220 \pm 30\text{yrBP}$ 、木質遺物273 (52) (2 : IAAA-71560) が $1070 \pm 30\text{yrBP}$ 、1号杭列No.2の木質遺物217 (5) (3 : IAAA-71561) が $1130 \pm 30\text{yrBP}$ 、2号杭列No.14の木質遺物236 (156) (4 : IAAA-71562) が $1130 \pm 40\text{yrBP}$ 、3号杭列No.5の木質遺物255 (244) (5 : IAAA-71563) が $1150 \pm 30\text{yrBP}$ である。

暦年校正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、木質遺物 (116) が770~880AD、273 (52) が890~920AD (16.1%)・960~1020AD (52.1%)、217 (5) が885~905AD (14.7%)・910~975AD (53.5%)、236 (156) が885~975AD、255 (244) が820~840AD (5.5%)・860~970AD (62.7%) に含まれる年代である。

杭列から出土した3点の測定結果は近似し、化学処理および測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2) , 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A) . 353-363
 Bronk Ramsey C, van der Plicht J, and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A) , 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

※試料番号について

本節の遺物番号表記に関して、カッコ () 付きは登録番号を、カッコなしは掲載番号を示す。

[調査担当者のコメント]

(116) と273 (52) はTo-aテフラ層を挟んで下位のVI層と上位のIV層から出土したものであり、降下年代を西暦915年とすればこの年代観と一致する。1~3号杭列の構成材である217 (5)、236 (156)、255 (244) については、1号がTo-a降下前、2号が前後不明、3号が降下後の構築と捉えているが、測定結果と概ね合致する。

1 道上遺跡第3次調査の放射性炭素年代測定 (AMS測定)

IAA

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-71559 #1950-1	試料採取場所 : 岩手県奥州市前沢区白山字白山前 道上遺跡	Libby Age (yrBP) : 1230 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -22.47 ± 0.71
	試料形態 : 木片 試料名(番号) : 1	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -140.5 ± 3.4 pMC(%) = 85.95 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -136.0 ± 3.2 pMC(%) = 86.40 ± 0.32 Age (yrBP) : 1170 ± 30
IAAA-71560 #1950-2	試料採取場所 : 岩手県奥州市前沢区白山字白山前 道上遺跡	Libby Age (yrBP) : 1070 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -28.14 ± 0.78
	試料形態 : 木片 試料名(番号) : 2	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -125.1 ± 3.5 pMC(%) = 87.49 ± 0.35
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -130.7 ± 3.2 pMC(%) = 86.93 ± 0.32 Age (yrBP) : 1130 ± 30
IAAA-71561 #1950-3	試料採取場所 : 岩手県奥州市前沢区白山字白山前 道上遺跡	Libby Age (yrBP) : 1130 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -25.51 ± 0.74
	試料形態 : 木片 試料名(番号) : 3	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -131.3 ± 3.4 pMC(%) = 86.87 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -132.2 ± 3.1 pMC(%) = 86.78 ± 0.31 Age (yrBP) : 1140 ± 30
IAAA-71562 #1950-4	試料採取場所 : 岩手県奥州市前沢区白山字白山前 道上遺跡	Libby Age (yrBP) : 1130 ± 40 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -23.17 ± 0.94
	試料形態 : 木片 試料名(番号) : 4	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -130.9 ± 4.1 pMC(%) = 86.91 ± 0.41
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -127.6 ± 3.7 pMC(%) = 87.24 ± 0.37 Age (yrBP) : 1100 ± 40
IAAA-71563 #1950-5	試料採取場所 : 岩手県奥州市前沢区白山字白山前 道上遺跡	Libby Age (yrBP) : 1150 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -24.59 ± 0.62
	試料形態 : 木片 試料名(番号) : 5	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -133.2 ± 3.6 pMC(%) = 86.68 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -132.5 ± 3.5 pMC(%) = 86.75 ± 0.35 Age (yrBP) : 1140 ± 30

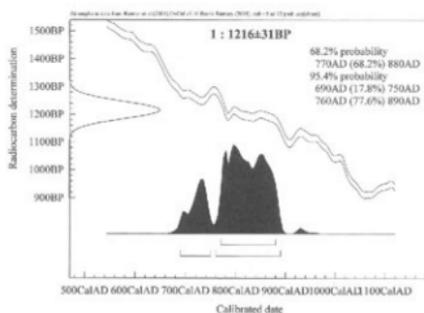
IAA

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71559	1	1216 ± 31
IAAA-71560	2	1073 ± 32
IAAA-71561	3	1130 ± 31
IAAA-71562	4	1126 ± 37
IAAA-71563	5	1148 ± 33

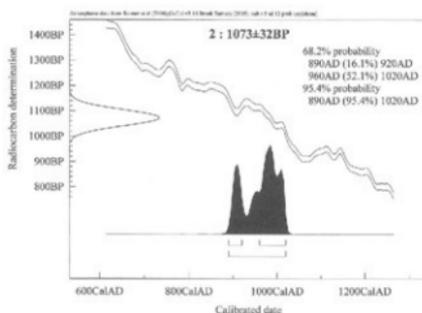
ここに記載するLibby Age(年代値)と誤差はF1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



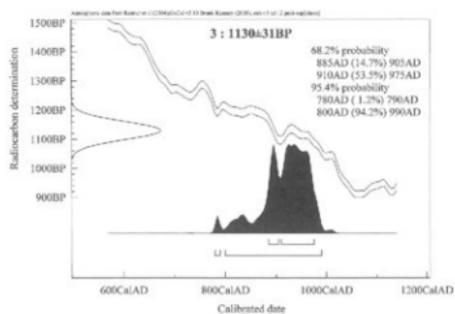
東京大学大学院 - OnCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



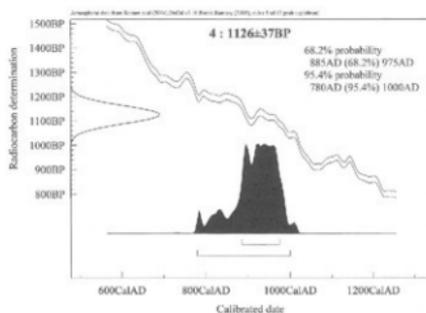
東京大学大学院 - OnCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



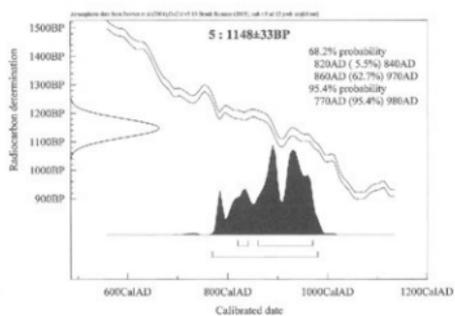
東京大学大学院 - 古学部 19-10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



東京大学大学院 - 古学部 19-10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



東京大学大学院 - 古学部 19-10

2 道上遺跡第3次調査出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

道上遺跡より採集された、火山灰サンプル2試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる (Machida, 1999; 町田・新井, 2003; 青木・町田, 2006)。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー (以てEPMA) が用いられるようになってきた。本報告では、2試料の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15kV、試料電流 1×10^{-8} アンペアである。その結果を表2に示した。

ガラスの形態及び共存鉱物 (表1) 及びEPMA分析値 (表2) より、2試料ともに、十和田aテフラ起源のガラスからなる。これら試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、褐色ガラス (オブシディアン) を含む。斑晶鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石及び鉄鉱である。

〔参考文献〕

- 青木おどり・町田 洋 (2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 — K₂O-TiO₂図によるテフラの識別。地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258。
- Machida, H. (1999). Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194-201。
- 町田 洋・新井ゆか (2003)、新編火山灰アトラス — 日本列島とその周辺 —。東京大学出版会、pp.336。
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 (2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成 (1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19。
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 (2001)、十和田火山、跡下軽石の化学組成変化 — 宇樽部の「霧頭」を例として —。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。

〔調査担当者のコメント〕

分析2資料の採取地点は、道上遺跡2区の基本土層記録地点B-B' およびC-C' のV層である。今回の分析結果は、To-aテフラの降下年代が10世紀初頭であるとするれば、本遺跡出土土質遺物に対して実施した放射性炭素年代測定結果と調和的である。

2 道上遺跡第3次調査出土の火山灰について

表1 道上遺跡(第3次)出土のテフラ

試料No	採取場所	層位	ガラス及び鉱物		火山灰の種類	特記事項
			ガラス(pm>bw)	顕色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱		
1*	基本土層 C	V	ガラス(pm>bw)	顕色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	70818
2*	基本土層 D	V	ガラス(pm>bw)	顕色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	70729

* : EPMA分析を行った試料。pm : 粒径値、bw : パワルウォール型、> : より多い、To-a : 十和田aテフラ

表2 道上遺跡(第3次)、火山ガラスのEPMA分析値

十和田aテフラ		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	N	Total	EPMA
試料No.1	最小	76.37	0.30	12.53	1.72	0.00	0.28	1.87	3.70	1.26			
	最大	77.60	0.47	13.33	2.09	0.19	0.48	2.15	4.21	1.48			
V層	平均	76.90	0.35	12.98	1.89	0.01	0.40	2.00	3.99	1.38	19	102.49	WDS
	標準偏差	0.326	0.044	0.209	0.103	0.045	0.053	0.086	0.146	0.062			
試料No.2	最小	76.32	0.27	12.79	1.73	0.05	0.30	1.86	3.57	1.27			
	最大	77.38	0.50	13.33	2.24	0.15	0.45	2.06	4.08	1.49			
V層	平均	76.98	0.38	13.00	1.99	0.11	0.35	1.98	3.84	1.38	16	102.71	WDS
	標準偏差	0.225	0.063	0.163	0.132	0.035	0.049	0.063	0.162	0.069			
香木・町田(2006)	To-a	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.28	1.81	3.90	1.37	19	98.41	WDS
	STD 35												
	To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	18	92.89	WDS
	STD 37												

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO*は全鉄をFeOとして計算したことを表す。Nは分析の点数を示す。WDSは、液相分散型EPMAを表す。

3 道上遺跡より出土した加工材と木製品の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

(1) はじめに

道上遺跡は奥州市前沢区の北上川西岸の沖積平野に位置し、調査区内の湿地部から平安時代の杭列と木質遺物を含む遺物包含層が確認された。当時の木材利用を解明する目的でこれら加工材及び木製品107点の樹種を調査した。加工材は湿地内の杭列から杭67点、板状材7点、加工材6点、伐採痕ある木片7点で、木製品は曲げ物や皿などの器が15点、斧柄などの農具を含む生活具5点である。試料からは剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、ガムクロラルでプレパラートを作成し生物顕微鏡で観察、同定を行った。

(2) 同定結果及び考察

同定結果の一覧を表1に、樹種別・用途別に集計した結果を表2に示した。総数107点中、28分類群と1樹皮が認められた。全107点のうち19%をケヤキが占め、それにオニグルミ、ヤナギ属、カエデ属、サクラ属、ウルシ属、ヤマグワ、トネリコ属などの落葉広葉樹が大半を占め、スギなど針葉樹は4%と少ない。107点中で杭が67点を占めるため、全体の傾向は杭の樹種選択にかなり影響されているといえる。

杭は、オニグルミ、ヤナギ属が10点と多く、次いでカエデ属、ケヤキ、ウルシ属、サクラ属などで、24種の分類群が利用されていた。この中にはマタタビやタラノキなど、蔓植物やかなりもろい樹種まで用いているため、周辺で調達できる材で杭列を補ったとみられる。東北地方では建築関連の杭などにはブナ属、クリ、コナラ節などが使われる傾向がある（山田1993）が、湿地に作られる杭列には周囲に生育する細い材を併用することが多い。ケヤキ、オニグルミは浜畔に多い樹種であり、ヤナギ属は湿地に多く生育すること、クロモジ属やマタタビ、グミ属、タラノキ、ウコギ属、ガマズミ属など中低木の分類群が多いことから、付近の湿地や微高地の木材を利用したと考えられる。また、杭の中には樹皮つきのモモが1点確認された。モモは祭祀との関連が指摘され、材はお札や絵馬などに使われることが延喜式に書かれているが、本遺跡では特に意識されずに周辺に生育していた他の樹種と同様に用いられたようである。

斧柄などには、オニグルミ、トネリコ属、クロモジ属、ウコギ属とカエデ属がつかわれており、東北地方の平安時代において農具などに一般的に使われるコナラ節材（山田1993）が1試料も確認されなかったことから、道具類の用材としてごく近辺の木材が選択されていた可能性がある。

器は、皿や容器蓋板にケヤキ、キハダを用いており、曲げ物や漆塗りの板にはスギが使われていた。槽にはシナノキ属が使われている。シナノキ属は河畔林に比較的多く生育し、大径木になるが弱いため建築材には用いられないため遺跡での出土例は少ない。

(3) 同定された分類群の木材解剖学的記載

以下に同定された28分類群の木材解剖学的記載を示す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn.fil.) D.Don) : 早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、1分野に2~3個ある。

3 道上遺跡より出土した加工材と木製品の樹種

表1 奥州市道上遺跡出土加工材と木製品の樹種

遺物番号	種類	分類群	その他	遺物番号	種類	分類群	その他
1	空柄	クニギルミ		145	杭	オニグルミ	4分割
3	杭	スギ		146	杭	ケヤキ	
4	杭	カラノキ	先端炭化	147	杭	カエデ属	
5	杭	ガマズミ属		148	杭	オニグルミ	
6	杭	モミ	榫状	149	杭	ケヤキ	全面炭化
7	杭	オニグルミ		149-2	杭	サクラ属	
9	杭	カエデ属		150	杭	オニグルミ	4分割
10	杭	カエデ属		151	杭	カニデ属	6分割
10-2	杭	ニレ属		152	杭	オニグルミ	4分割
12	鋸架?	ケヤキ		153	杭	イヌシデ属	2分割榫状
15	板状加工品	ケヤキ		154	杭	サクラ属	4分割
30	板状加工品	クリ	4分割	155	杭	クマシデ属	4分割
31	皿	ケヤキ	一部炭化	156	杭	イヌシデ属	4分割
32	皿	ケヤキ		158	杭	イヌシデ属	4分割榫状
33	榫状側板	スギ	黒色塗り	158-2	杭	ヤマザクラ	
35	榫柄	オニグルミ		159	杭	ケヤキ	
37	高台皿?	ケヤキ		160	杭	ケヤキ	
41	空欄蓋板	ケヤキ		161	杭	ケヤキ	
42	空欄蓋板	ケヤキ		162	杭	ケヤキ	
44	皿	カコゾ属		163	杭	オニグルミ	4分割
45	杭	コシアブラ		164	杭	ヤマザクラ	
49	杭	ウルシ属		173	高台皿	ケヤキ	
60	伏拝痕ある木片	トネリコ属		173-2	杭	オニグルミ	
62	高台皿	ケヤキ		176	木槌	トネリコ属	
54	杭	ウルシ属	両尖り	185	杭	ヤナギ属	
57	杭	ウコギ属		186	杭	ヤナギ属	
63	溜皿加工品	ケヤキ	両尖り	187	杭	ヤナギ属	榫状
64	杭	ウルシ属		188	杭	ヤナギ属	
71	高台皿	ケヤキ		192	杭	ヤマザクラ	
73	杭	ケンボナシ属	6分割	201	板状加工品	ヒノキ	
76	皿	ケヤキ		203	曲げ物側板	スギ	
80	杭	クロモジ属		205	板状加工品	キハダ	
81	溜皿加工品	サクラ属		218	板状加工品	沈葉樹樹皮	
85	溜皿加工品	トネリコ属	先端炭化	221	木	カマズミ属	
87	伏拝痕ある木片	サクラ属		222	板状加工品	シナノキ属	
88	伏拝痕ある木片	サクラ属	榫状	225	榫	シナノキ属	
89	伏拝痕ある木片	カエデ属	榫状	232	榫	ヤナギ属	
90	杭	ニゴロキ属	榫状	233	榫	ヤナギ属	榫状
95	皿	ケヤキ		240	杭	ヤナギ属	
96	溜皿加工品	ウコギ属		241	杭	ヤマザクラ	
97	杭	ウルシ属		242	杭	カニデ属	表面炭化
99	伏拝痕ある木片	オニグルミ		243	杭	ヤナギ属	
100	伏拝痕ある木片	クリ		244	杭	ヤナギ属	
102	杭	カニデ属		245	杭	カマズミ属	
105	空欄側板?	ケヤキ		246	杭	ウルシ属	
106	杭	サクラ属		247	杭	ヤナギ属	
115	杭	マタタビ		248	杭	ミズキ	4分割
120	杭	サワラ属		249	杭	ミズキ	4分割
122	空欄蓋板	ケヤキ		250	杭	カエデ属	4分割榫状
123	板状加工品	トネリコ属		251	杭	サクラ属	
137	伏拝痕ある木片	ヤマザクラ	榫状	252	杭	カニデ属	
143	杭	オニグルミ	4分割	253	杭	オニグルミ	4分割
144	杭	オニグルミ	4分割	255	榫状加工品	クロモジ属	
				256	榫状加工品	クロモジ属	

ヒノキ (*Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc.) Endl.) : 早材から晩材への移行は急で、晩材部が少なく不明瞭である。樹脂細胞が晩材部付近に散在する。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個ある。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) : 中型の道管がほぼ単独で散在し、径は晩材にむけて徐々に減じる環孔材。木部柔組織が線線状で、晩材部で顕著である。

道管の穿孔は単一でチロースが多い。放射組織は同性で3-5細胞幅程度の細い紡錘形。

サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.) : やや小型の管孔が散在し、晩材部に向けて徐々に減じる半環孔材でオニグルミに似る。放射組織は同性で2細胞幅。

ヤナギ属 (*Salix*) : 年輪内に小さな管孔が単独ないし2,3個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、晩材部で管孔が小さくなる。放射組織は単列で異性である。

クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus sect. Eucarpinus*) : 小さい管孔が単独ないし3,4個放射方向に

複合し配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で3細胞幅くらいのもとの集合放射組織がある。

ク リ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.): 年輪のはじめに大きな道管が2-3列集合し、その後径が急減して火炎状に小管孔が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は単列で同性である。

ニレ属 (*Ulmus*): やや大型の管孔が単独ないし2,3個複合して1-2列ならび、晩材部では小型で薄壁の角張った管孔が斜めから接線方向に集合して帯をなす環孔材。道管は単線光で内壁にらせん肥厚が認められる。放射組織は縁が滑らかな紡錘形で、同性で1-4細胞幅。中団子状に2,3個つながった結晶細胞がある。

ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino): 年輪はじめにやや大きい道管が1-2列配列し、小道管が斜めから接線状に配列する環孔材。穿孔板は単一で小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性でややごつごつした紡錘形で、端に結晶細胞があることが多い。

ヤマグワ (*Morus australis* Poir.): 中型の道管が放射方向ないし斜めに2個複合し、径を減じて小道管が塊状に複合し斜めに配列する環孔材。穿孔板は単一で小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で4,5細胞幅の紡錘形。

クロモジ属 (*Lindera*): 小型でやや角張った管孔が単独ないし2,3個放射方向に複合して散在する散孔材。道管は単穿孔と数段の階段状。放射組織は異性で2細胞幅。

マタタビ (*Actinidia polygama* Planch. ex Maxim.): 大型の管孔と中型の管孔が混在して散孔状となる環孔材。道管は単穿孔で、道管側壁に階段壁孔と対列壁孔が見られ、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で3細胞幅くらい、サルナシほど背が高くなく、2mm以下。

ヤマザクラ (*Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz.): 小型で丸い管孔が単独ないし数個複合して斜めにつらなりやや密に分布する散孔材。晩材部で道管径がやや減少する。道管は単穿孔でらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-5細胞幅。

モモ (*Prunus persica* Batsch): 年輪はじめに中型の管孔がほぼ単独で2列くらい集合しその後径を減じて単独ないし数個放射方向に複合して晩材部に向けて径を減じる半環孔材。道管は単穿孔でらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性で1-4細胞幅。

サクラ属 (*Prunus*): 小型で丸い管孔が単独ないし数個複合してややまばらに分布する散孔材。晩材部で道管径がやや減少する。道管は単穿孔でらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-5細胞幅。

キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.): 大型の管孔が単独ないし2,3個複合して2,3列配列し、晩材部では小型の角張った管孔が多数集合して接線方向に帯をなす環孔材。道管は単穿孔で小道管に

表2 道上遺跡出土木材の用途別樹種集計

	板状	加工材	欠損のある木片	杭	生活具	箸	総計
ケヤキ	1	1	-	5	1	12	20
オニグルミ	-	-	1	10	1	-	12
ヤナギ属	1	-	-	10	-	-	11
カエデ属	-	-	1	8	1	-	10
サクラ属	-	1	2	4	-	-	7
ウルシ属	-	-	-	5	-	-	5
ヤマグワ	-	-	1	3	-	-	4
トネリコ属	1	1	1	-	1	-	4
スギ	-	-	-	1	-	2	3
クリ	1	-	1	1	-	-	3
クロモジ属	-	2	-	1	-	-	3
ウコギ属	-	1	-	1	1	-	3
ガマズミ属	-	-	-	3	-	-	3
イヌシゲ節	-	-	-	3	-	-	3
ミズキ	-	-	-	2	-	-	2
ヒノキ	1	-	-	-	-	-	1
ザワグルミ	-	-	-	1	-	-	1
ニレ属	-	-	-	1	-	-	1
ヤマザクラ	-	-	-	1	-	-	1
モモ	-	-	-	1	-	-	1
キハダ	1	-	-	-	-	-	1
マタタビ	-	-	-	1	-	-	1
シナノキ属	-	-	-	-	1	-	1
ケンボクサ属	-	-	-	1	-	-	1
グミ属	-	-	-	1	-	-	1
タラノキ	-	-	-	1	-	-	1
コシアブラ	-	-	-	1	-	-	1
エゴノキ属	-	-	-	1	-	-	1
五葉樹樹皮	1	-	-	-	-	-	1
合計	7	6	7	67	5	14	107

はらせん肥厚があり道管内に濃褐色物質がたまりやすい。放射組織は同性で4細胞幅。

ウルシ属 (*Rhus*): 中形で丸い管孔が単独ないし2,3個複合して1-3列ならび、その後やや小さい管孔が散在する環孔材。道管は単穿孔で小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で3細胞幅くらい。

カエデ属 (*Acer*): 小型の管孔が単独ないし数個複合して散在する散孔材。木繊維の壁厚の違いによりしばしば横断面で波状模様を呈する。管孔内にはらせん肥厚があり、単穿孔、放射組織は同性で4-5細胞幅。

シナノキ属 (*Tilia*): 小型の角張った管孔が単独ないし数個不規則に複合し均一に分布する散孔材。道管には着色物質が見られ、単穿孔でらせん肥厚がある。放射組織は同性、1-3列位の角張った矢尻型。

ケンボナシ属 (*Hovenia*): 大型で厚壁の管孔が単独ないし2,3個放射方向に複合して1-3列配列し、緩やかに径を減じながら散在する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は異性で5細胞幅程度。

グミ属 (*Elacagnus*): 小型でやや厚壁の管孔が単独で年輪はじめに3列ほど並び、その後径を減じた管孔が単独で散在する環孔材。道管は単穿孔。放射組織はほぼ同性で、放射組織の上下端に方形直立細胞がある。

ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley): 小さい管孔が単独ないし2,3個放射方向に複合して散在する散孔材。本遺跡で出土した材は年輪数が多い大径木のようで、成長が悪く年輪内の管孔密度が高くなっている。道管の穿孔板は段数の多い階段穿孔。放射組織は異性で紡錘形。

タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann): 中形で丸い管孔が単独ないし2,3個複合して年輪はじめに2列くらいならびその後径を減じて小さい管孔が散在し、晩材部では小さく角張った管孔が数個複合して接線方向ないし斜めに配列する環孔材。道管は単穿孔。放射組織は上下端が直立細胞の異性で、5細胞幅くらい。

コシアブラ (*Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav.): 年輪はじめにやや大きな道管がまばらに1列並び、その後急に径を減じて数個複合しながらさらに径が小さくなる半環孔材。道管は単穿孔でチロースがみられる。放射組織は異性で3細胞幅程度。

ウコギ属 (*Acanthopanax*): ごく小型で丸い管孔が多数複合して接線方向ないし斜めに配列する散孔材。道管は単穿孔でチロースが多い。放射組織は上下端が直立細胞の異性で、8細胞幅くらいで背が高い。

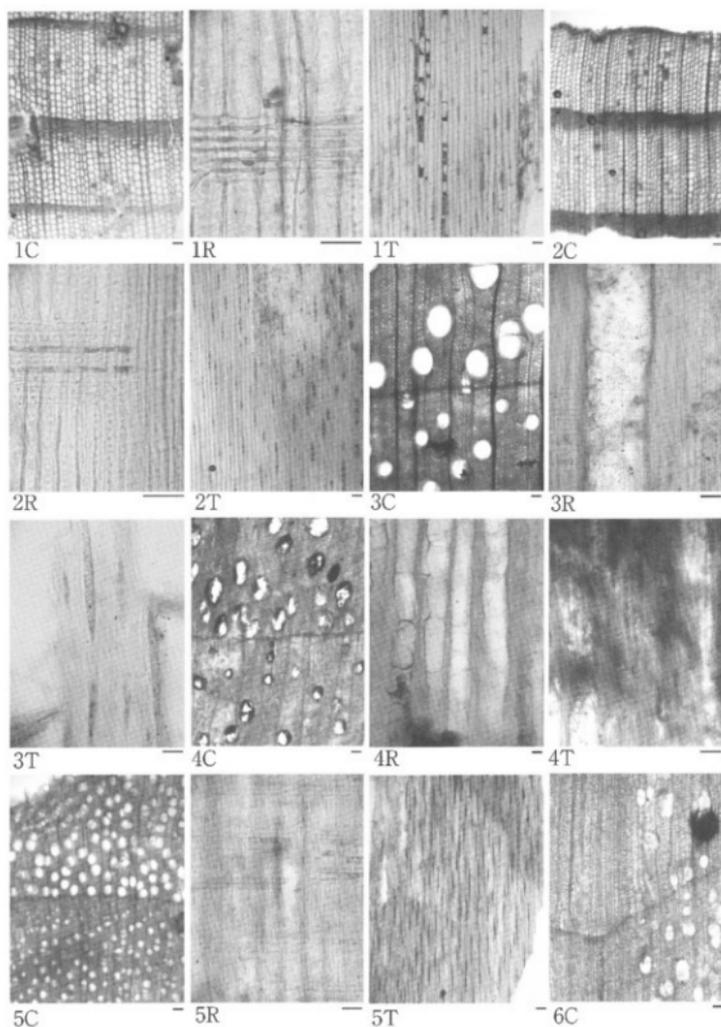
エゴノキ属 (*Styrax*): 小型で丸い管孔が単独ないし放射方向に数個複合して散在する散孔材で、晩材部に向かって径は減少する。道管の穿孔板は10段くらいの階段状。放射組織は異性で4細胞幅くらい。

トネリコ属 (*Fraxinus*): 年輪はじめに大きい道管が数列、単独ないし数個複合して分布し、その後急に径を減じて壁が厚く小さい管孔が単独ないし放射方向に数個複合して配列する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は同性で1-3細胞幅である。

ガズミ属 (*Viburnum*): 小型でやや角張った管孔が単独でまばらに散在する散孔材。晩材部に向けて径は減少する。道管の穿孔板は段数の多い階段状。放射組織は異性で、単列部が長い。

引用文献

- 山田昌久, 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文獻集成-用材から見た人間-植物関係史. 植生史研究特別第1号. 植生史研究会, 1-244.

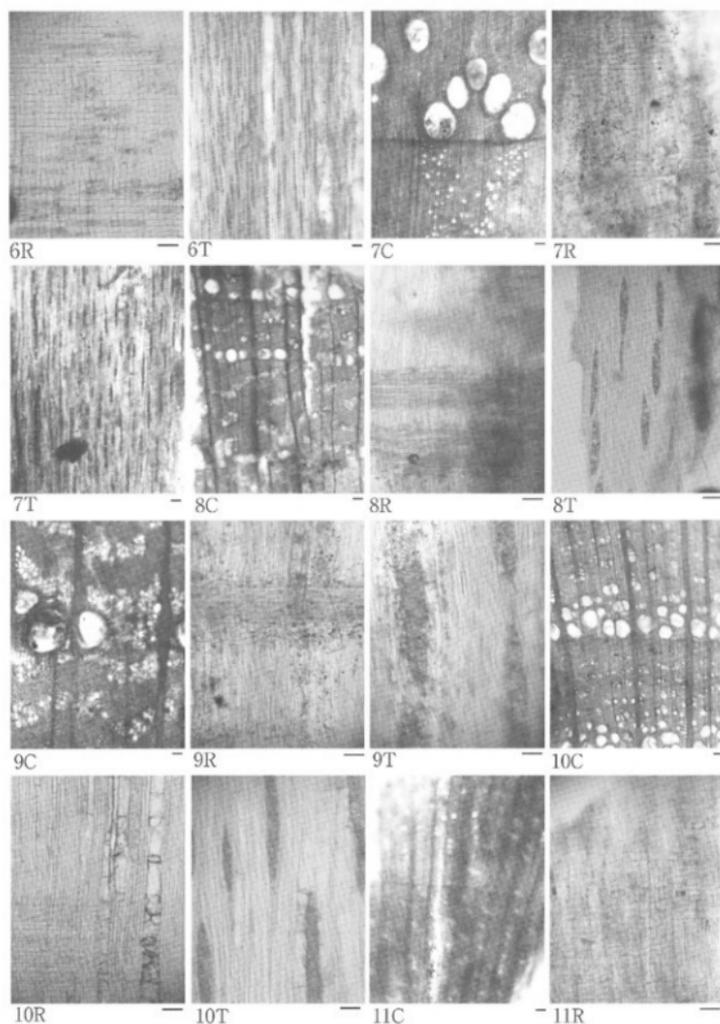


図版1 道上遺跡より出土した加工材の顕微鏡写真(1)

1.スギ(No.203曲げ物側板) 2.ヒノキ(No.201板状加工品) 3.オニグルミ(No.150杭)

4.サワグルミ(No.120杭) 5.ヤナギ属(No.233杭) 6.イヌシデ節(No.158杭)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

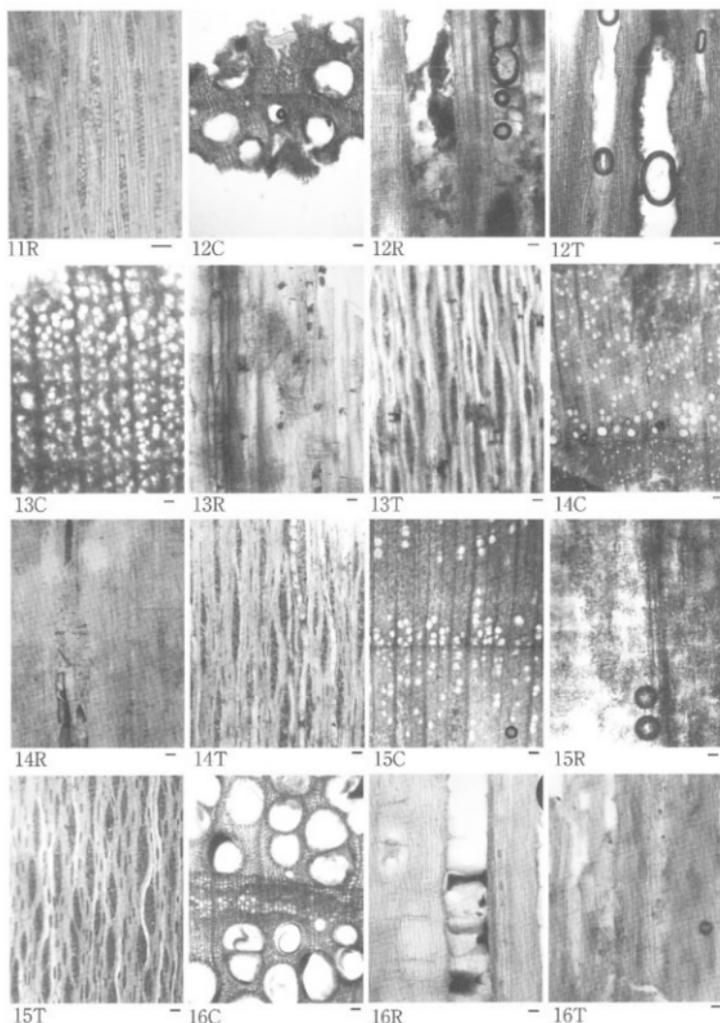


図版2 道上遺跡より出土した加工材の顕微鏡写真(2)

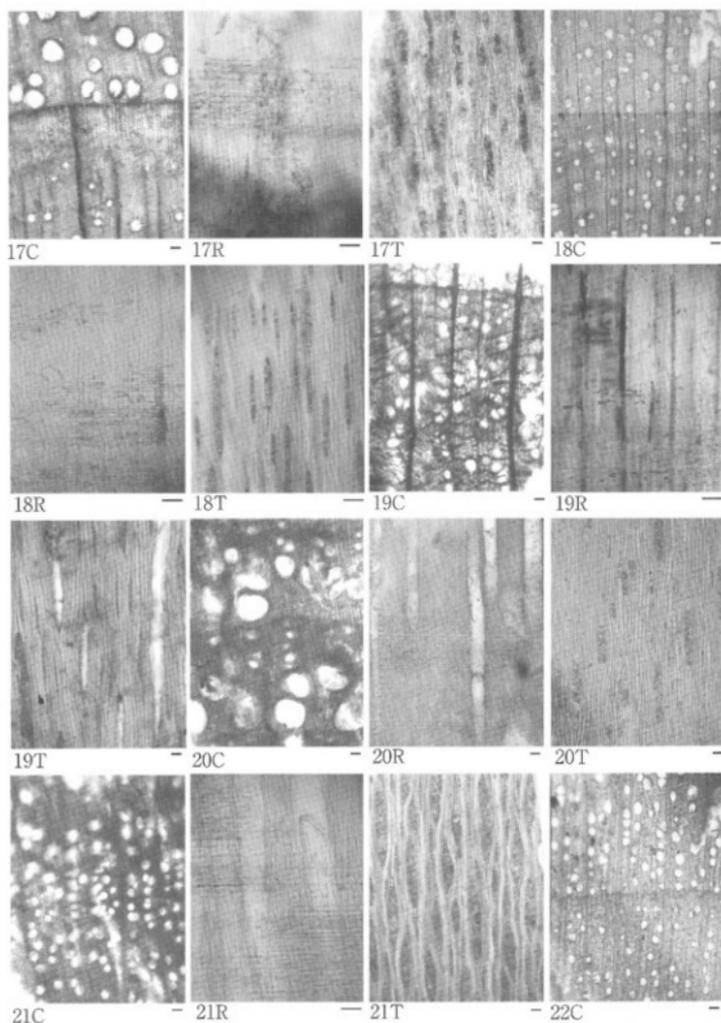
6.イヌシデ節(No.158杭) 7.クリ(No.100伐採痕ある木片) 8.ニレ属(No.10-2杭)

9.ケヤキ(No.12鋤先?) 10.ヤマグワ(No.192杭) 11.クロモジ属(No.256棒状加工品)

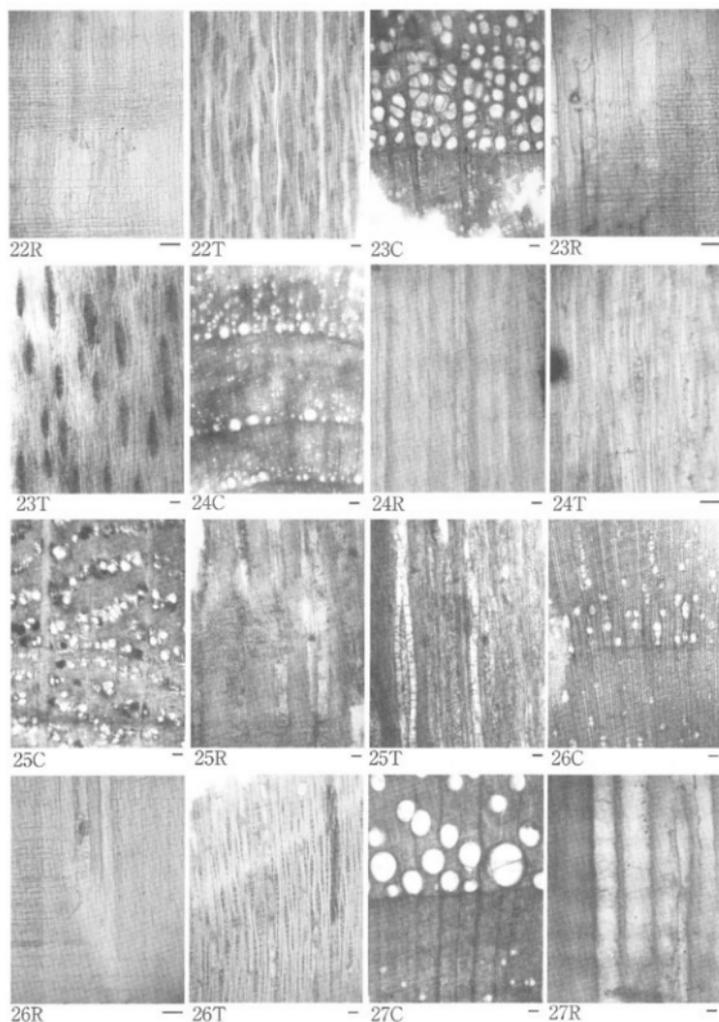
C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



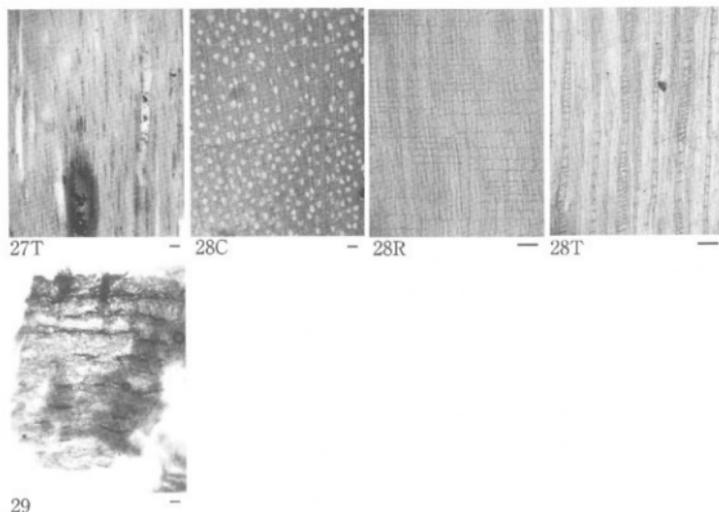
図版3 道上遺跡より出土した加工材の顕微鏡写真(3)
 11.クロモジ(No.256棒状加工品) 12.マタビ(No.118杭) 13.ヤマザクラ(No.158-2杭)
 14.モモ(No.6杭) 15.サクラ属(No.106杭) 16.キハダ(No.205板状加工品)
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版4 道上遺跡より出土した加工材の顕微鏡写真(4)
 17.ウルシ属(No.97杭) 18.カエデ属(No.10杭) 19.シナノキ(No.225槽)
 20.ケンボナシ属(No.75杭) 21.グミ属(No.155杭) 22.ミズキ(No.249杭)
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版5 道上遺跡より出土した加工材の顕微鏡写真(5)
 22.ミズキ(No.249杭) 23.タラノキ(No.4杭) 24.コシアブラ(No.45杭) 25.ウコギ属(No.57杭)
 26.エゴノキ属(No.90杭) 27.トネリコ属(No.50伐採痕ある木片)
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版6 道上遺跡より出土した加工材の顕微鏡写真(6)
27.トネリコ属 (No.50伐採痕ある木片) 28.ガズミ属 (No.245杭) 29.広葉樹樹皮
(No.218板状加工品) C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

4 道上遺跡の平安時代頃の植生と生業

吉川昌伸 (古代の森研究会)

(1) はじめに

道上遺跡は奥州市前沢区白山に位置する。本遺跡は北上川右岸の沖積平野にあり、平成18年度の第2次調査では平安時代の堅穴住居跡や溝跡など、今年度の第3次調査区は主に旧河道と湿地からなり平安時代の杭列、木質遺物などが検出されている。また、第2次調査では湿地面より約1m高位の陸地部分から水田の痕跡が確認され、植物珪酸体分析からもそれを裏付けるような結果がでてきているようである。ここでは低地における稲作の検出と、平安時代頃の植生や生業を明らかにすることを目的に、花粉化石群と植物珪酸体の調査を行った。

(2) 試料と方法

調査は、基本土層Cと3号杭列小枝集中の2地点で行った。各調査地点の位置とセクション図、堆積物の詳細な記載等については考古の関係する章を参照されたい。ここでは分析試料の堆積物の特徴のみを示す。

基本土層C地点は、低湿地性堆積物からなり下位よりⅦ～Ⅰ各層の7層に区分され、中部には十和田aテフラ (To-a; AD915) (V層) がレンズ状に狭在する。花粉化石と植物珪酸体はTo-aを挟むⅦ～Ⅲ層で調査した。堆積物は、Ⅶ層はオリブ黒色有機質細粒砂質シルト、Ⅵ層は黒褐色有機質極細粒砂質シルト、Ⅴ層は黒褐色有機質シルト、Ⅳ層は黒色泥炭質泥 (分解～弱分解質) からなる。3号杭列に絡む堆積物は、黒褐色有機質シルトからなり、To-aテフラが分布しないため明確でないが、層位的にはⅥ層上部からⅣ層下部に相当すると考えられている。

a) 花粉分析

花粉化石群の調査は基本土層Cの5層準と、3号杭列に絡む堆積物の1試料で行った (図1)。花粉化石の抽出は、試料約1-2gを秤量し体積を測定後に10% KOH (湯煎約15分)、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48% HF (約15分)、重液分離 (比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリシス処理 (濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分) の順に処理を行った。プレバラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分攪拌後、マイクロピペットで取り重量を測定 (感量0.1mg) しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量、泥分 (シルト以下の細粒成分)、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレバラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで微粒炭の積算面積を測定した。

b) 植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、花粉分析と同試料を用い6層準で行った。植物珪酸体化石の抽出は、試料約1

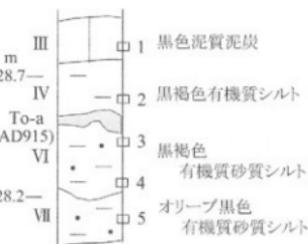


図1 基本土層Cの地質柱状図と分析試料採取層準

gをトールビーカー(300ml)にとり、過酸化水素水、6N塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により $10\mu\text{m}$ 以下の粒子を除去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロピペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、主にイネ科機動細胞起源とイネ科短細胞起源珪酸体の同定・計数を行った。植物珪酸体の分類は近藤・佐藤(1986)に基づき、タケ亜科植物機動細胞珪酸体は杉山・藤原(1986)、タケ亜科植物短細胞珪酸体は近藤・大滝(1992)による。タケ亜科植物短細胞珪酸体は、ササ類型とタケ類型に区別され、ササ類型には葉身が大型のササ属、スズタケ属など、タケ類型には葉身が小型のメダケ属、マダケ属などが属する(近藤・大滝, 1992)。

(3) 結果

a) 花粉化石群

花粉分析試料の堆積物の特性を表3に示す。基本土層C地点は、下位で無機物が卓越するが上位では有機物量が多くなる。下位のⅦ・Ⅵ層では細粒～極粗粒砂とシルト以下の細粒成分を主とし、上位のⅣ層では砂分が減少し有機物量が増加、Ⅲ層では有機物を多く含む泥からなる。3号杭列に絡む堆積物は、テフラが混入するため砂分量が多くなっているがシルト以下の細粒成分を主体としⅣ層に類似する。

出現した分類群のリストとその個数を表4に、主要花粉分布図を図2に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究舎に保管してある。

基本土層C地点の主要樹木花粉の層位的産出傾向にもとづき、下位よりDu-I、Ⅱ、Ⅲの3つの花粉化石群帯を設定する。Du-I(No.5)では、トチノキ属が75%と高率に出現し、コナラ亜属ヤクリ属、ケヤキ属などを伴う。また鞭虫卵が僅かに検出され、微粒炭は $2162\text{mg}/\text{cm}^2$ と夥しい量が含まれる。Du-II(No.2-4)では、著しい優占を示す分類群はなく、ハンノキ属やヤナギ属、コナラ亜属、クワリ属、ケヤキ属、針葉樹のスギなどを伴い、トチノキ属は低率になる。ハンノキ属は減少し、ヤナギ属は増加する。草本ではクワ科やヨモギ属が幾分多い。また、イネ科(イネ属型)が低率ながら連続して産出し、ヒルムシロ属やサジモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒツジグサ、サンショウモなどの多種の水生植物を伴う。No.2では破損したベニバナ属花粉が僅かに産出している。微粒炭量は $1259\text{mg}/\text{cm}^2$ から $371\text{mg}/\text{cm}^2$ と減少する。Du-III(No.1)では、コナラ亜属が比較的高率に占め、ブナヤクリ属、ケヤキ属、針葉樹のスギ属を伴う。草本ではイネ科(野生型)が高率に産出し、カヤツリグサ科や、水生植物のオモダカ属やサンショウモを伴う。他にソバ属が僅かに産出し、微粒炭が $4025\text{mg}/\text{cm}^2$ と夥しい量が含まれる。

3号杭列(No.6)では、著しい優占を示す分類群はなく、ヤナギ属ヤクリ属、コナラ亜属、針葉樹のスギなどからなる。草本は低率で、イネ科(イネ属型)やサジモダカ属、オモダカ属など水生植物が僅かに産出する。花粉化石群はDu-IIのNo.2(Ⅳ層)に類似する。

表3 遺上遺跡分析試料の堆積物の特性(重量%)

地点	試料	層位	高さ (cm)	堆積物の特徴	砂	泥	有機物量 (有機物%)
基本土層C	1	Ⅷ	18	褐色泥炭質泥(分～粗分級質)	0.6	52.9	46.5
	2	Ⅵ	20	黒褐色有機質シルト(粘土質)	5.1	70.3	24.6
	3	Ⅴ	22-28	黒褐色有機質粘砂質シルト	13.4	72.3	14.3
	4	Ⅳ		黒褐色有機質粘砂質シルト	20.1	65.5	14.4
	5	Ⅲ	16-20	シロップ黒色有機質粘砂質シルト(粘土質)	20.7	62.9	16.4
3号杭列	6	Ⅳ～Ⅵ	黒褐色粘砂質シルト(粘土質)	23.6	59.3	17.1	

表4 藍本七層Cと3号伏別地より採出した花粉化石の一覧表

科名	学名	試本層C				3号地
		1	2	3	4	
ツグミ	<i>Pingu</i>	-	-	1	-	-
マツ属麻痺科木白尾	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylois</i>	3	-	-	-	1
マツ属具体管葉類	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylois</i>	-	-	1	-	-
マツ属(70%)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	1	-	1	-
ウツギマツ属	<i>Sciadopitys</i>	2	-	-	-	-
スズメ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L. fil.) D. Don	36	16	21	39	2
イヌノテ	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae	-	-	-	-	-
イヌノテ	<i>Taxus</i> type	-	-	-	-	-
イヌノテ	<i>Chamaecyparis</i> type	5	5	3	2	-
ササガ	<i>Selagin</i>	7	59	28	13	-
ササガ	<i>Pterocarya</i>	5	4	4	4	-
ツルハシ	<i>Asplenium</i>	3	2	4	4	-
イヌノテ	<i>Carpinus tchonoskii</i> Maxim.	-	-	-	-	1
クマノシ	<i>Carpinus - Ostrya</i>	6	10	18	13	3
クマノシ	<i>Corylus</i>	-	1	-	-	-
カバノキ	<i>Betula</i>	1	1	2	-	3
ハシノキ	<i>Alnus</i>	4	5	39	47	10
ツグミ	<i>Fagus sylvatica</i> Blane	26	27	13	13	2
イヌノテ	<i>Fagus japonica</i> Maxon	3	5	3	2	-
クマノシ	<i>Quercus</i> sibilens <i>Lepidobalanus</i>	54	25	31	30	33
クマノシ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	2	2	1	1	-
クマノシ	<i>Castanea</i>	18	23	17	18	22
シノノキ	<i>Castanopsis</i>	1	-	-	-	-
シノノキ	<i>Ulmus</i>	-	1	-	-	-
クマノシ	<i>Zelkova</i>	8	8	7	19	7
クマノシ	<i>Gilias - Gleditsia</i>	-	-	-	-	-
ヤドリギ	<i>Ficus</i>	-	-	-	1	1
ツグミ	<i>Fagopyrus</i>	-	-	1	-	-
クマノシ	<i>Cercidiphyllum</i>	2	1	2	1	1
クマノシ	<i>Urtica</i>	-	7	1	4	-
クマノシ	<i>Phallosedron</i>	-	-	1	-	1
クマノシ	<i>Rhus japonica</i> var. <i>resinifera</i>	1	-	-	-	-
クマノシ	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-
クマノシ	<i>Staphylea</i>	-	1	-	-	-
クマノシ	<i>Acer</i>	2	3	3	7	3
クマノシ	<i>Araliacae</i>	-	1	10	12	266
クマノシ	<i>Rhamnaceae</i>	-	-	-	-	2
クマノシ	<i>Fatsia</i>	-	-	1	-	-
クマノシ	<i>Parthenoclelea</i>	-	1	-	-	-
クマノシ	<i>Asteraceae</i>	-	-	-	-	-
クマノシ	<i>Araliaceae</i>	1	1	1	-	2
クマノシ	<i>Cornus</i>	-	-	1	-	-
クマノシ	<i>Symplocos</i>	-	-	-	-	-
クマノシ	<i>Prinosus</i>	-	5	4	1	1
クマノシ	<i>Sambucus</i>	-	-	-	1	-
クマノシ	<i>Typha</i>	1	-	-	2	-
クマノシ	<i>Spartanum</i>	-	-	2	1	-
クマノシ	<i>Potamogeton</i>	-	-	5	2	1
クマノシ	<i>Alisma</i>	1	1	-	-	-
クマノシ	<i>Scirpus</i>	1	4	3	-	4
クマノシ	<i>Gramineae (Oriza type)</i>	4	15	14	6	1
クマノシ	<i>Gramineae (Wild type)</i>	164	30	18	17	3
クマノシ	<i>Cyperaceae</i>	83	7	11	9	7
クマノシ	<i>Commelinaceae</i>	-	-	-	1	-
クマノシ	<i>Asclepias</i>	-	-	-	2	-
クマノシ	<i>Mimosa</i>	-	-	1	-	-
クマノシ	<i>Brassicaceae</i>	9	46	32	18	1
クマノシ	<i>Moraceae - Urticaceae</i>	-	-	2	-	1
クマノシ	<i>Pterocarya</i>	5	4	-	1	4
クマノシ	<i>Fagopyrus</i>	1	-	-	-	-
クマノシ	<i>Chenopodiaceae - Asteraceae</i>	2	3	-	1	2
クマノシ	<i>Caryophyllaceae</i>	1	1	-	2	3
クマノシ	<i>Nymphaea tetragona</i> Georgi	-	-	1	-	-
クマノシ	<i>Ranunculaceae</i>	-	4	-	3	-
クマノシ	<i>Cunilifera</i>	2	2	3	-	3
クマノシ	<i>Saxifragaceae</i>	-	1	-	2	-
クマノシ	<i>Rosaceae</i>	1	1	1	4	-
クマノシ	<i>Raputaceae</i>	2	1	-	-	4
クマノシ	<i>Helosciadites</i>	-	-	-	-	1
クマノシ	<i>Umbelliferae</i>	7	7	3	1	1
クマノシ	<i>Labiatae</i>	-	-	1	1	1
クマノシ	<i>Solanum</i>	-	-	-	-	-
クマノシ	<i>Plantago</i>	-	-	1	1	-
クマノシ	<i>Gaultheria</i>	-	1	-	-	-
クマノシ	<i>Caryophyllaceae</i>	-	1	-	-	-
クマノシ	<i>Convolvulaceae</i>	-	2	2	-	-
クマノシ	<i>Artemisia</i>	55	56	11	13	3
クマノシ	other Tubuliflorae	2	1	2	5	-
クマノシ	<i>Ligulariiflorae</i>	-	-	1	-	1
クマノシ	<i>Diomedeae</i>	2	2	2	1	-
クマノシ	<i>Salvia satsumi</i> (L.) All.	2	1	-	-	-
クマノシ	other <i>Paradiplata</i>	3	2	5	7	1
クマノシ	<i>Tricharis</i>	-	1	-	-	1
クマノシ	Ambrosial pollen	190	213	200	210	221
クマノシ	Nonambrosial pollen	142	169	117	92	119
クマノシ	Fern spores	7	5	7	8	1
クマノシ	Pollen and Spores	539	589	332	310	377
クマノシ	Unknown pollen	14	15	26	25	8
クマノシ	total	45	13.8	10.9	12.7	85.3
クマノシ	total	4625	371	900	1259	2162

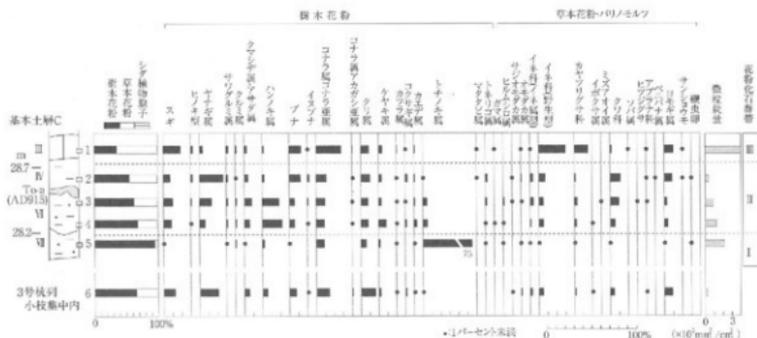


図2 基本土層Cと3号坑列地点の主要花粉分布図
(出現率は樹木花粉数、草本・孢子は花粉孢子数を基数として百分率で算出した)

b) 植物珪酸体

検出した植物珪酸体の分類群のリストとその個数を表5に、植物珪酸体分布図を図3に示す。

基本土層CのTo-aより下位のVI・VII層 (No.3・5) では、機動細胞起源はクマザサ属型やウシクサ族、ヨシ属、ネザサ節型タケ亜科などからなるが、風化粒子も少なくない。短細胞起源では、全般にタケ亜科タケ類型が多く出現し、イチゴツナギ亜科やキビ型、ヨシ属などが検出される。IV層 (No.2) では機動細胞起源は少なく、短細胞起源のイチゴツナギ亜科が多く、次いでタケ亜科タケ類型、キビ型が比較的多い。III層 (No.1) では、短細胞起源のヨシ属が多く産出し、機動細胞起源のヨシ属も検出されている。3号坑列では、機動細胞起源ではタケ亜科やウシクサ族などが検出され、短細胞起源ではタケ亜科タケ類型が多く、次いでイチゴツナギ亜科、キビ型、ヨシ属などからなる。組成は基本土層CのNo.2とNo.3の中間的な組成を示す。

イネの植物珪酸体は、機動細胞起源がNo.1で900粒/g、No.3で1340粒/g、短細胞起源がNo.2・3と3号坑列のNo.6で検出されている。つまりVI層上部より上

位で検出される。一方、全試料から主に沼沢湿地 (*Pinnularia viridis*や*Cymbella aspera*, *Neidium iridis*など) や河川 (*Melosira varians*) に生育する珪藻化石が検出され、特にNo.2には多量に珪藻殻が含まれていた。また、機動細胞起源珪酸体に風化した粒子が多いの比べ、珪藻殻は比較的保存がよい。

表5 基本土層Cと3号坑列の植物珪酸体分析結果一覧表(単位は1000個/g)

分類群	基本土層C					3号坑列
	1	2	3	4	5	6
イネ科機動細胞珪酸体						
イネ	0.90	-	1.34	-	-	-
ヨシ属	5.40	2.13	10.71	3.20	2.75	1.31
キビ型	0.90	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属型	-	-	1.34	-	1.83	-
ウシクサ族	1.80	1.07	6.70	0.80	5.50	5.23
タケ亜科クマザサ属型	2.70	-	12.05	4.80	11.00	3.92
タケ亜科ネザサ節型	0.90	2.13	4.02	0.80	1.83	6.54
他のタケ亜科	5.40	2.13	8.04	5.60	3.67	6.54
不明	10.80	2.13	16.07	4.80	6.42	7.84
イネ科短細胞珪酸体						
イネ	-	4.27	1.34	-	-	3.92
ヨシ属	45.90	6.40	9.38	3.20	3.67	15.69
ウシクサ族ススキ属型	1.80	-	1.34	-	0.92	1.31
イチゴツナギ亜科	14.40	40.53	13.39	11.20	13.75	19.61
キビ型	9.90	22.40	9.38	5.60	10.08	19.61
ヒゲシバ型	-	2.13	2.68	4.00	2.75	2.61
タケ亜科ササ型	3.60	3.20	4.02	4.00	6.42	1.31
タケ亜科タケ型	14.40	23.47	45.54	24.80	28.42	37.91
珪藻殻	259.20	533.33	112.50	88.00	86.17	235.29

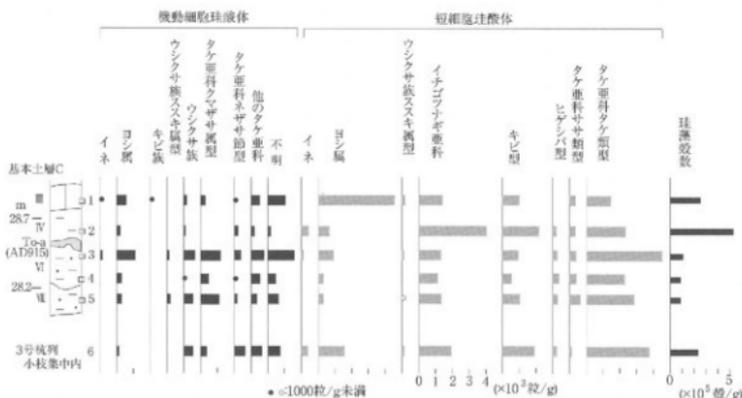


図3 基本土層Cと3号坑列の植物珪酸体分布図

(4) 平安時代頃の植生と生業

a) 周辺の古植生と生業

平安時代頃の植生は、トチノキが周辺に分布した時期、ハンノキ湿地林とヤナギ河畔林及びクリ林期、森林の縮小期の3つの時期に区分される。

トチノキが周辺に分布した時期 (No.5)

この期を特定する資料は得られていないが、調査地点の側にはトチノキが生育していたと推定される。つまり、トチノキ花粉が75%と高率に産出すること、トチノキ花粉は虫媒で極めて散布し難いため、調査地点に樹冠がかかるぐらい近接して生育していたとみられる。しかし、基本土層の1試料のみで時間的、空間的变化が不明であるため、数本のトチノキによるのか、あるいはトチノキ林があったのかを区別することはできない。一方でクリ属花粉が6%検出されている。頻度はそれほど高いわけではないが、トチノキが隣接して分布していたこと、クリ花粉は虫媒で広域に散布し難いことから比較的高い頻度とみなせる。クリ花粉の散布については実証的な資料は得られていないことから、著者ら⁹⁾は実証的なデータを得ることを目的にクリ純林の調査した結果、クリ花粉がクリ純林内では高率に占めるがクリ林外で急減することが明らかになっている (未公表)。その結果に基づくと、この期にはクリは調査地点から数10m程度離れた微高地に生育していたとみられる。新潟平野北部の縄文後期の野地遺跡 (印刷中) や縄文晩期の青田遺跡 (吉川2004) の新潟平野北部でクリ林が形成されていたことが明らかにされており、時代は異なるが岩手県南部の低地においてもクリが生育していたことは、クリ林の形成が沖積平野の微高地においても普通に行われていたことを示唆し興味深い。

ハンノキ湿地林とヤナギ河畔林及びクリ林期 (No.2-4, 6: 平安時代)

この期の堆積物には十和田aテフラが狭存するため平安時代と考えられる。周辺の植生は、少なくとも樹冠がかかるほど側にあったトチノキは無くなったが離れた所にはまだ生育し、クリ属花粉は8-11%で連続して出現しているため微高地には前時期から継続してクリ林が形成されていたとみられる。また、周辺の低地にはハンノキ湿地林、河川沿いにはヤナギやケヤキの河畔林が分布し、微高地には落葉広葉樹のコナラ亜属やクマシデ属-アサダ属、クルミ属、コクサギ属、カエデ属などや針葉

樹のスギ等の小規模な林分があったと推定される。なお、ブナ花粉は山地などの遠方から飛来したと考えられる。一方、低地には沼沢地が形成され、抽水植物のヨシ属やカヤツリグサ科、サジオモダカ属、オモダカ属、イソクサ属、ミズアオイ属、浮葉植物のヒルムシロ属やヒツジグサ、浮水植物のサンショウモなどが生育していたようである。また、微高地の日あたりのよいところにはカナムグラやネザサ節型のタケ類（アズマネザサなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）なども生育していたと考えられる。ところで、Ⅵ、Ⅶ層は砂やシルトの無機物に富み機動細胞起源珪酸体の保存も悪いことから、植物珪酸体の一部は堆積物を構成する他の粒子と伴に挙動して再堆積したと考えられる。

森林の縮小期（No.1）

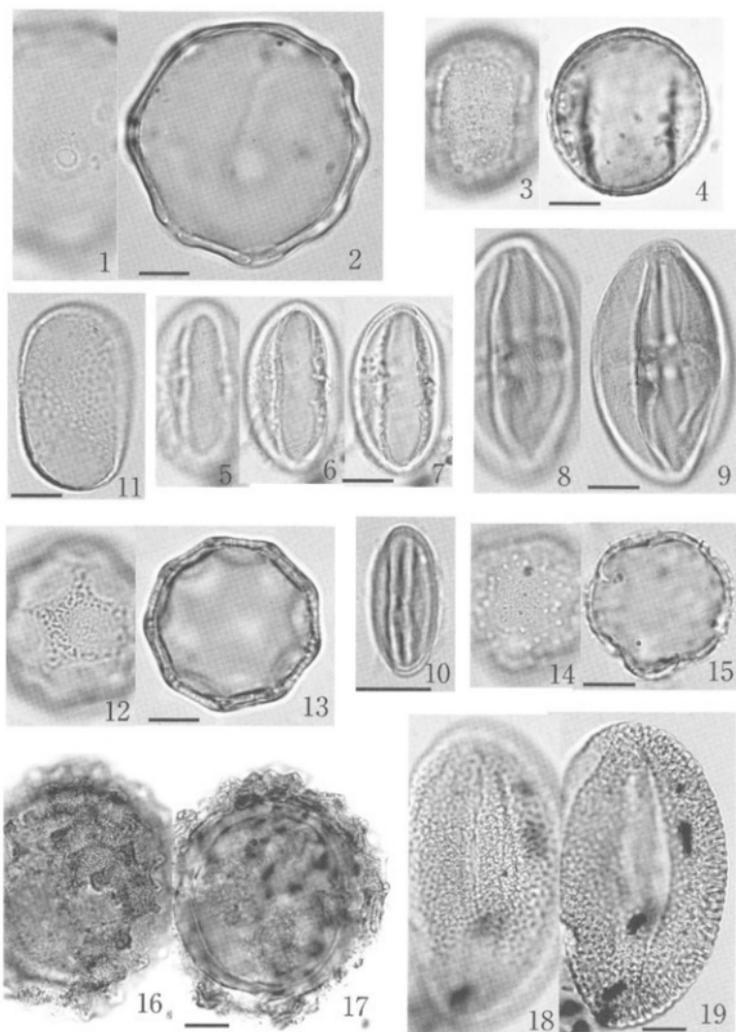
この期には周辺の樹木と低地の草本植生の両方で変化が認められる。すなわち、樹木花粉の全体に占める割合が低下し多くの分類群が減少することから、周辺の樹木が縮小したとみられる。しかし、クリ林は前期に引き続き存続していたと考えられる。また、コナラ亜属やスギは疎らに分布し、ブナは山地からの飛来花粉と考えられる。一方、低地ではヨシ属やカヤツリグサ科が繁茂する草本湿地に変化したようである。調査地点の低地で水田耕作が行われていた可能性は低いが、夥しい微粒炭が含まれるため周辺で何らかの生業が行われていたようである。

b) 水田稲作について

イネの機動細胞珪酸体がⅥ層上部より上位で900-1340個/gと僅かに出現している。イネの機動細胞珪酸体が5000個/g以上の密度で検出された場合にはそこで稲作が行われていた可能性が高く、密度が3000個/g程度でも水田跡が検出される場合がある（杉山、2000）とされている。密度は水田の継続期間や堆積物等により変化するためおおその目安でしかないが、ここでは1340個/g以下と少なく、さらにイネ属型花粉も稀であることからこの場所における水田耕作は行われていなかったか、あるいは行われていた場合でも短期間であろう。また、Ⅲ層（No.1）ではヨシ属の短細胞珪酸体が多く検出され、さらに機動細胞起源やイネ科（野生型）花粉も多く出現することから、Ⅲ層の堆積期にはこの場所にはヨシ属などが繁茂していたとみられる。

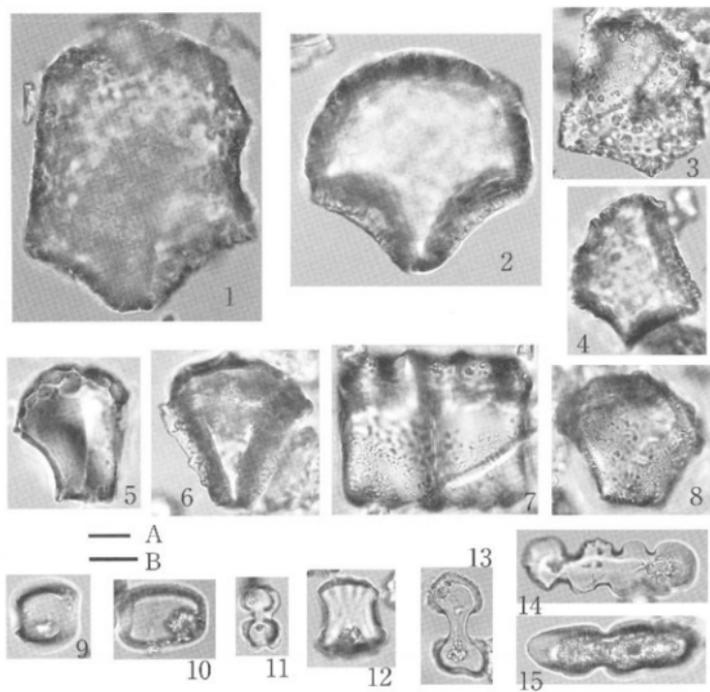
引用文献

- 近藤純三・大滝美代子. 1992. タケ亜科植物葉身の短細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第36号, 23-43.
 近藤純三・佐瀬 隆. 1986. 植物珪酸体, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-63.
 杉山真二. 2000. 植物珪酸体 (プラント・オパール). 「考古学と植物学」(江誠・郎編) 189-213. 同成社.
 杉山真二・藤原宏志. 1986. 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -. 考古学と自然科学, 19, 69-84.
 杉山真二・松田隆二・轟原宏志. 1988. 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 - 古代農耕遺跡のための基礎資料として -. 考古学と自然科学, 20, 81-92.
 吉川昌伸. 2004. 青田遺跡における縄文時代晩期以降の花化石群. 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ (新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団編), 35-42.
 (*1) 新潟県立歴史博物館および独立行政法人日本学術振興会の科学研究費補助金「縄文時代におけるクリ利用に関する考古学・民俗学・植物学的研究」(代表 荒川隆史)



図版7 道上遺跡より産出した花粉化石

1-2: クルミ属 (*Juglans*), 1, AFR.MY 1768. 3-4: コナラ亜属 (*Lepidobalanus*), 3, AFR.MY 1775.
 5-7: トチノキ属 (*Aesculus*), 2, AFR.MY 1769. 8-9: スルデ (*Rhus japonica* var. *roxburghii*), 1,
 AFR.MY 1767. 10: クリ属 (*Castanea*), 3, AFR.MY 1774. 11: ツリフネソウ属 (*Impatiens*), 2,
 AFR.MY 1776. 12-13: サジオモダカ属 (*Alisma*), 2, AFR.MY 1777. 14-15: オモダカ属 (*Sagittaria*),
 6, AFR.MY 1778. 16-17: ペニバナ属 (*Carthamus*), 2, AFR.MY 1770. 18-19: ソバ属 (*Fagopyrum*),
 1, AFR.MY 1766. スケール=10 μ m.



図版8 道上遺跡から産出した植物珣酸体

1.ヨシ属機動細胞, No.3. 2.ヨシ属機動細胞, No.1. 3.クマザサ属型機動細胞, No.5.
 4.クマザサ属型機動細胞, No.1. 5.イネ機動細胞, No.3. 6.タケ亜科機動細胞, No.1.
 7.タケ亜科ネササ節型機動細胞, No.3. 8.タケ亜科機動細胞, No.1. 9.ヨシ属短細胞,
 No.3. 10.ヨシ属短細胞, No.1. 11.イネ短細胞, No.6. 12.タケ亜科タケ類型短細胞,
 No.2. 13.キビ型短細胞, No.3. 14.イチゴツナギ亜科短細胞(ウシノケグサ型), No.1.
 15.イチゴツナギ亜科短細胞, No.1. スケール=10 μ m (A:No.1-8, B:No.9-15)

Ⅷ 総 括

本章では、道上、合野、小林繁長の3遺跡をまとめて記述していく。

1 ま と め

詳細な遺構・遺物種とその検出・出土数はⅣ～Ⅵ章を参照いただきたい。ここでは、時代ごとに概要をまとめてみる。

(1) 遺 構

縄文時代 合野遺跡1区の高位部で溝形の陥し穴状土坑が1基確認された。

平安時代以前 道上遺跡2区北端の高位部で柱穴列1列と柱穴状土坑3個が確認されている。上限年代は不明である。

平安時代 道上遺跡2区の旧河道①北岸付近で杭列3箇所、遺物捨て場20.5㎡、河南岸付近で杭1本、溝1条、整地層23㎡が確認されている。なお、旧河道跡範囲は全域が遺物包含層である(1号)。包含層は北端高位部でも53㎡確認されている(2号)。合野遺跡では、2区高位部で堅穴住居2棟(重複)と溝2条、1区高位部で溝1条が確認されている。堅穴住居のカマドはいずれも北東壁に構築されている。

近世以前 合野遺跡1区高位部で溝が1条確認されている。平安時代の溝の北側に、これを巻くように位置している。なお、上限年代は不明である。

近世～近世以降 近世の掘立柱建物が、合野遺跡1区北東端の高位部で3棟、小林繁長遺跡1区高位部で1棟確認されている。この他、合野遺跡では各区で近世以降の溝が確認され、その数は8条を数える。規模はさまざまであるが、1区西端のSD04を除き、南北に流れる。

(2) 遺 物

縄文時代 今回出土した縄文土器の大半は、道上遺跡2区の低湿地である旧河道①北岸付近、特に旧河道②範囲で出土したものである。文様や胎上の特徴から、前期初頭、中期末葉、後期中葉～末葉、晩期前葉～中葉の所産と推定される。ただし、いずれも平安時代の遺物と混在する状態で出土しており、原位置を保ったものではない。石器についても同様である。

平安時代 土師器(99%がロクロ成形)、須恵器、陶磁器(常滑産大甍片)、鉄製品(鉸具)、木質遺物(皿、椀、鉢、桶、曲げ物、斧柄、鋤先?、組み合わせの鋸柄、砧、木錘、大量の杭など)、自然遺物(獣骨片、堅果類の種実)が出土した。やはり大半は道上遺跡2区の低湿地である旧河道①北岸付近で出土したものである。土師器・須恵器の坏の製作年代については本章2節で詳述する。

その他 鉄製品として、中世末から近世初頭の模倣銭と推定される祥符元寶、時期不明の仏飯器、近世～近代の陶磁器細片が出土している。

2 各事象の検討

(1) 土師器・須恵器の製作年代と遺構形成年代

a) 分類 (第86図)

道上・合野の両遺跡から出土した土師器・須恵器の坏に対して、その製作年代推定を目的として形態・焼成・調整の面から分類を行った。分類基準は土師器・須恵器とも同一である。年代検討の際、全体形から判断することが基本となるが、口縁から底部まで全体形の判別可能な資料はすべて残らず掲載していることから、分析対象試料=掲載資料ということになる。

以下、分類基準を示す。

焼成・調整

- I 土師器。ロクロ調整で内面もしくは内外面黒色処理の一群 (以後、便宜的に「内黒」と呼称)。
- II 土師器。ロクロ調整で黒色処理が施されない酸化炎焼成の一群 (「非内黒」と呼称)。
- III 須恵器。

形態

- A 体部、口縁部ともに内彎するもの。これを底部形態で細分する。
 - 1 底部側縁が窪まないもの。
 - 2 底部側縁が窪むもの。
 - B 体部は内彎しながら立ち上がるが、口縁部が外反するもの。底部形態で細分する。
 - 1 底部側縁が窪まないもの。
 - 2 底部側縁が窪むもの。
 - C 体部が直線的に立ち上がるもの。底部形態で細分する。
 - 1 底部側縁が窪まないもので、体部と底部の境目が明瞭でなく丸みを帯びるもの。
 - 2 底部側縁が窪むもの。
 - 3 底部側縁が窪まないもので、体部と底部の境目が角ばるもの。
 - D 体部が大きく外反するもの。底部側縁は窪まない。
- ※須恵器は、口縁部が外反するばかり、体部は内彎せず直線的である。
この形態分類基準に法量の様相を加味し、検討を行う。

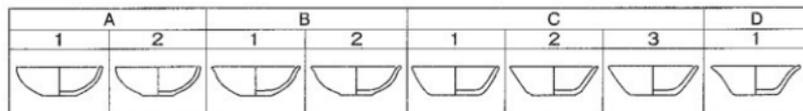
b) 遺構・層位ごとの出土傾向

全体形復元図体を基に、遺構・層位ごとの出土傾向・特徴を見ていく。

道上遺跡

1号整地層 I点のみ (IA2) のため詳細な検討はできない。

1号遺物捨て場 内黒・非内黒の土師器のみ出土し、須恵器は共伴していない。内黒:非内黒の比率はおおよそ7:3である。内黒にはA・B両方が同数程度認められ、Aの底部側縁形態は2が、Bは逆



第86図 土師器・須恵器形態分類図

に1が多い。法量の面では、内黒に器高3.5cm以下、口径12cm前後のものが3割程度認められる点特徴的である。非内黒では、同様の法量でDが1点出土している。また、高台部が「ハ」字形を呈する高台坏があることも特徴となる。

1号遺物包含層Ⅶ層 非内黒の復元個体がないため、これとの比較はできない。内黒はA1で、底部周縁にヘラケズリの再調整が入る。須恵器はいずれもCで、切り離し技法は回転ヘラ切りである。

1号遺物包含層Ⅵ層 内黒の復元個体がないためこれとの比較はできないが、底部周縁から体部下半にかけてヘラケズリの再調整が入るものが認められる。非内黒、須恵器ともに器高は4cm以上、口径は13cm以上である。器形は、非内黒にC3が1点あり、他はすべてA1である。

1号遺物包含層Ⅴ層 須恵器の復元個体がないため、これとの比較はできない。内黒はA1とB2があり、いずれも口径15cm超・器高5cm前後である。体部下半復元個体は周縁が窪む2が多数を占める。非内黒はB2が1点のみである。なお、内黒・非内黒ともに高台坏が存在し、前者は偽高台風のいわゆる三角高台を、後者は「ハ」字形を呈する。

1号遺物包含層Ⅳ層 内黒はB2が1点のみ。器高は4cm以下である。体部下半復元個体は、周縁が窪む2と「ハ」字形を呈する高台坏に限定される。非内黒にも高台坏が見られる。坏は、口径12cm前後、器高3cm強のA2が複数ある点特徴的である。須恵器はAとCがある。なお、非内黒と須恵器の器形は内黒度合いが弱く、Aに分類したのも極めてCに近い。

1号遺物包含層旧河道②Ⅲ層 内黒・非内黒ともに復元個体がないのに対し、須恵器は多数出土している。須恵器は形態と調整の面で2種に大別される。1つはCで底部切り離し技法が回転ヘラ切りもしくは再調整されるもの、もう1つはBで底部が回転糸切り後無調整のものである。前者は体部の立ち上がり方が極めて直線的で逆台形状を呈し、色調が灰色ではなく白色系である点も特徴的である。

1号遺物包含層旧河道②Ⅱ層 内黒・非内黒・須恵器とも複数確認されたが、その比率は5:5:9と須恵器が多い。内黒は、A1が多数を占める点、底部再調整が半数に認められる点特徴的である。非内黒にはAとCが見られる。Aは1・2、Cは1・2・3と多様であるが、Cに底部再調整が複数あるのが特徴的である。須恵器にはBとCが認められるが、Cが多数である。前述Ⅳ層と同様に、底部切り離し技法が回転ヘラ切りもしくは再調整され色調が灰色ではなく白色系である一群が確認される。これらは同様に逆台形状で、口径13cm以上で器高3cm台と広く浅い。

1号遺物包含層旧河道②Ⅰ層 内黒・非内黒・須恵器とも複数確認されたが、その比率は5:2:3と内黒が多い。内黒にはAとCが見られ、A2の1点を除き底部再調整が入る。非内黒は統計的な傾向を見いだせないが、底部切り離し技法に回転ヘラ切りを用いたものが存在する。須恵器の器形はAとCがあり、底部再調整個体も存在する。

1号遺物包含層旧河道②Ⅳ層 復元数が少なく、内黒と非内黒各1点のみである。両者ともA2で、法量も口径13cm後半・器高3cm後半・底径5cm後半と共通している。

1号遺物包含層旧河道②Ⅲ層 比率は内黒:非内黒:須恵器=4:1:4と非内黒が少ない。内黒はA1が多く、底部再調整比率も高い。須恵器はCが多いが、法量はまちまちである。

合野遺跡

S101 竇穴住居 出土量が少なく全体形の把握できるものもないため、断片的な各個体の部分的な特徴を挙げる。坏はいずれも上師器で、I B、I 2が各1点あり、Iで底部回転ヘラ切りが1点ある。
c) 年代推定

今回の調査で、人為的に構築された遺構内から当該遺物が一括出土した事例は皆無であり、よって独自案検討の材料は持ち合わせていない。いっぽう、旧河道跡に屈序を成して堆積した土壌中からは

大量の遺物が出し、ここにはTo-aテフラも介在していることからその堆積時期をある程度まで特定することが可能である。ただし、いかんせん主体は流入・再堆積土であるため堆積時期より古期の遺物も混在する状況であり、時期ごとの様相を示す資料足り得るものではない。よって、今回は先学の研究成果による遺物年代観と前述した特徴と比較し、大まかな遺構形成年代を想定するに留める。

主な比較対象とするのは、胆沢城跡における検出遺構のうち、To-aテフラが介在しその前・後期の遺物が層位的に確認されているSE1050の出上遺物（水沢市教育委員会1987）、同テフラ降下以後の遺構重複関係が確認されているSK158・SK155・SK152・SX126の各出土遺物（水沢市教育委員会1977）、胆沢城跡調査成果を中心に構築された伊藤博幸氏の一連の論考（伊藤1996・1998）、同じく高橋千晶氏の論考（高橋2006）、八木光則氏によるロクロ土器導入期の論考（八木2006）、井上雅孝氏による10～12世紀土器の論考（井上1996・1997）、奥州市水沢区中平入遺跡、北上市西川目遺跡、堰向Ⅱ遺跡、新平遺跡、芦荻遺跡の調査成果（助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2004・2005・2007）である。

道上遺跡To-aテフラ降下前 該当するのは、1号遺物包含層Ⅷ～Ⅵ層出土分および旧河道②Ⅷ～Ⅵ層出土分である。下位層から見ていく。Ⅷ層は底部周縁再調整の内黒A1と底部回転ヘラ切りの須恵器Cが特徴的である。前者のような傾向は9世紀でも古い段階のものと指摘されているところであり、後者のような傾向の須恵器は平安時代の中でも古手と考えられ、口径・底径比が1.8・2.1である点を八木氏の指摘（八木前掲）に当てはめれば9世紀初頭～前葉となる。旧河道②Ⅷ層の特徴は須恵器が多数を占める点で、底部回転ヘラ切りもしくは再調整の入るCと、Bで底部回転糸切り後無調整の2群が存在する。旧河道②Ⅷ層でも同種が一定量を占めるほか、通常のⅧ層と同じく底部再調整の入る内黒A1が一定量ある。単純にⅧ層とⅥ層の中間的位置付けと見てよからう。Ⅵ層・旧河道②Ⅵ層は層序的にテフラ降下直前期にあたる訳であるが、Ⅷ層と同様に底部再調整の内黒が確認されるいっぽう、非内黒が存在すること、須恵器の器形がA主体であり口底比が2.1以上であること、器高が4cm以上と下層より高くなる事が挙げられる。後二者の傾向は9世紀後半の様相を示すものである。以上のことから、同包含層最下層であるⅧ層の堆積は9世紀初頭以降に始まったといえる。また換言すれば、遺物流出元となった旧河道北岸に存在するであろう集落の開始時期が9世紀初頭ということが可能である。まとめると、Ⅷ層・旧河道②Ⅷ～Ⅵ層は9世紀前半、Ⅵ層・旧河道②Ⅵ層は9世紀後半の堆積としてよさそうである。

道上遺跡To-aテフラ降下後 該当するのは、1号遺物包含層Ⅳ～Ⅲ層、同旧河道②Ⅳ～Ⅲ層、1号遺物捨て場出土分である。1号遺物包含層Ⅳ層・旧河道②Ⅳ層はテフラ降下直後期にあたる。ここで注目されるのは、内黒の体部下形は2類が多数である点と、内黒の高台坏（いわゆる三角高台）、非内黒の高台坏（「ハ」字形）が存在する点である。体部形態2類は10世紀初頭～前葉に主体的となるとされ（西澤 2002）、高台坏の出現はテフラ降下以前の10世紀初頭頃以降後その割合が高まるとされており（高橋前掲）、層序的年代観と合致する。Ⅲ層は内黒の体部形態が2類主体であること、非内黒は口径12cm前後、器高3cm強と小形のA2類が複数ある点、非内黒の器形は内彎度合いが弱く、Aに分類したものも極めてCに近いことが特筆される。法量の小型化傾向がみられるいっぽうで口径10cm前後の小型坏が存在しないことから、10世紀中葉までは下らず、前葉の年代観が導出される。いっぽう、非内黒体部形態C類の増加は胆沢城SE1050の第2～1層でも確認され、同遺構の堆積はTo-a層と第2層の間に第3層を介在することから本遺跡の堆積状況と共通する。よって、C類増加の傾向はTo-aテフラ降下後ある程度の時間を経てから進んだと言える。

1号遺物捨て場は、1号遺物包含層Ⅲ層と同様の傾向を示すことから10世紀中葉までは下らないも

のと考えられる。

合野遺跡 S 101・02 復元個体がなく全体量も少量であるため、積極的な推定はできない。ただし、非内黒が見られないこと、底部回転ヘラ切りの個体が存在することから、9世紀でも前半代の可能性が考えられる。

(2) 道上遺跡で検出された杭列の性格

道上遺跡で検出された3つの杭列について、立地、杭材の規模、杭列の形態と規模から検討し、その性格を考えてみる。なお、構築年代については、検出層位および杭材の放射性炭素(¹⁴C)年代測定結果から、1号が9世紀末から10世紀初頭頃、2号が9世紀末から10世紀後葉頃、3号が10世紀前葉から後葉頃と推定している。

立地 いずれも旧河道①北岸の緩～極緩斜面に立地している。うち、1号は周囲より若干窪んだ場所にある。2号は旧河道②上に構築されており、これと直交する方向に列を成す。

杭材の規模 1号と3号は基本的に類似しており、直径4cm前後の丸木材が用いられている。長さは残存長で63cm以下だが本来の規模は不明である。樹皮が残存するもの、しないものが混在する。2号は幅10cm前後の割材が用いられており、主杭に沿うように補助的に設置されているNa19補(242)のみ丸木材である。本来の長さは不明で、残存長は114.5cm以下である。

杭列の形態と規模 いずれも部分的に検出したものであるため全体形が不明で、本格的な議論はできない。1号の配置に規則性は見出せなかった。2号は北東―南西方向に2条並列している。条間隔は1.8～1.9mである。南西側にはこれと直交する北西―南東方向の1条が存在するが、その交点が調査区外であるためどのような交わり方をしているのか不明である。3号は東西方向に細長く点在し、同方向に列を成していたものと考えられる。東側は比較的密集しており、単純な列状ではなかったことを示す。また、東部には杭列に沿うように径1cm以下の小枝が密集し、幅35cm程度に東となり2条並列する状況が確認された。

性格 以上の特徴から、各杭列の性格を考えてみる。いずれに関しても共通するのは、湿地や流路に構築されたという点である。どのような活動に関係するにせよ、この環境を利用するあるいは克服するために設置されたものといえよう。2号は旧河道②と立地が重なり、これと直交し幅2m弱で2条並列する点から、橋の支柱と考えられる。ただし、橋上部の構築材が確認されておらず、この理由を考えねばならないがその材料は持ち合わせていない。3号は断面E-E'(第11図)から溝状に幾分窪むことが確認されており、東西方向に延びる小溝とその構築物であった可能性が高い。小枝集中の存在が目されるものの、これがどのような役割を果たしていたのかは不明といわざるを得ない。可能性として、漁労に使う籠形漁具(絞)的なもの、水路の土留め材の2種を想定している。なお、杭No 7(勝示木簡からの転用材)の墨書が田に関係する内容であること、本遺跡第2次調査において水田痕跡が確認されていることを加味すれば、後者としての可能性、すなわち水田に関連する水路に使用された構築材という性格が浮かび上がる。

(3) 木製品の遺棄年代

木製品の遺棄年代について、確定できる範囲で提示する。対象となるのは、To-aテフラより下位にあたるVI層以下出上分である。なお、形態で編年できるほどの材料を現時点では持ち合わせていないため、土師器・須恵器の検討結果を援用する。

9世紀初頭～前半までに遺棄されたもの(VI層・旧河道②VII～VII層) 本層に含まれるものは、9世

紀前半以前の製作と推定されるものである。掲載番号284の漆塗櫛、286の鋤先?、293・298の板状加工品、301・302の端部加工品、304~308の杭、317の伐採痕ある木片がこれにあたる。

9世紀後半~10世紀初頭（To-aテフラ降下直前）までに遺棄されたもの（Ⅴ層・旧河道②Ⅴ層）木層に含まれるものは、To-aテフラ降下以前=10世紀初頭以前の製作と推定されるものである。掲載番号266・267・269・270の皿、268・271の高台皿、272の高台椀、274の櫛、275・276の曲げ物側板、280~282の曲げ物皮紐、278・279の容器蓋板、283の容器側板?、285の斧柄、287の組み立て式鋸柄、288の木錘、289の砧、290・291の棒状加工品、292・294~296の板状加工品、299・300・303の端部加工品、309~313・316の杭、318~321・323・324の伐採痕ある木片がこれにあたる。

ここまでの引用・参考文献（「岩手県文化振興事業団」は「岩文振」と省略）

伊藤博幸1996「岩手県の10世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣

伊藤博幸1998「後半期の集落」『岩手考古学』第10号 岩手考古学会

井上雅孝1996「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相（素描）」『中世土器の基礎研究』X I 日本中世土器研究会

井上雅孝1997「陸奥における10・11世紀の土器様相」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』

利部 修2006「出羽北半の須恵器器種」『吉田康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房

清水和明1996「大阪・兵庫遺跡」『木簡研究』第18号 木簡学会

高橋千品2006「城権の終末一胆沢城を中心として」『第35回岩手考古学会研究大会発表資料』

埋蔵文化財研究会1996「古代の木製食器—弥生期から平安期にかけての木製食器」第1・2分冊 第39回埋蔵文化財研究集会

村田 淳2006「製作技法からみた須恵器と灰帯陶器一頁の圃I遺跡出土須恵器の再検討から—」『紀要』XXV (財)岩文振埋蔵文化財センター

八木光潤1998「陸奥における土師器の地域性」『岩手考古学』第10号 岩手考古学会

八木光潤2006「陸奥北半における機軸上層器の導入」『吉田康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房

岩手県教育委員会1980「落合II遺跡」『東北折衝機関埋蔵文化財調査報告書VI 岩手県文化財調査報告書第50集

鹿兒島県立埋蔵文化財センター2005「京田遺跡」鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告(81)

北上市立博物館1982「北上川の魚とり」北上川流域の自然と文化シリーズ(4)

(財)石川県埋蔵文化財センター2001「発見! 古代のおしゃべり書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡部示札」

(財)岩文振埋蔵文化財センター2004「中平入遺跡第2次発掘調査報告書」岩文振埋蔵文化財調査報告書第443集

(財)岩文振埋蔵文化財センター2005「西川日・畑向II遺跡発掘調査報告書」岩文振埋蔵文化財調査報告書第464集

(財)岩文振埋蔵文化財センター2007「新平遺跡・芦萱遺跡発掘調査報告書」岩文振埋蔵文化財調査報告書第498集

札幌市教育委員会2001「K39遺跡第6次調査」札幌市文化財調査報告書05

仙台市教育委員会1999「富沢遺跡—第104次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第235集

仙台市教育委員会2004「富沢遺跡—第126次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第273集

多賀城市教育委員会2003「市川橋遺跡」多賀城市文化財調査報告書第70集

奈良国立文化財研究所1985「木器集成図録 近畿古代編」奈良国立文化財研究所史科第27冊

兵庫県教育委員会2000「袴伏遺跡」兵庫県文化財調査報告第197冊

北海道大学埋蔵文化財調査室1986「サクシュコトニ川遺跡」

前沢町教育委員会1998「町内遺跡詳細分布調査報告書I 古城・白山地区」岩手県前沢町文化財調査報告書第6集

水沢市教育委員会1977「胆沢城跡—昭和51年度発掘調査概報—」

水沢市教育委員会1987「胆沢城跡—昭和61年度発掘調査概報—」

宮城県教育委員会1996「山王遺跡Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第170集

宮城県教育委員会2001「市川橋遺跡の調査」宮城県文化財調査報告書第184集

- ①材の調整 本資料は一般的な木簡のような札状ではなく、棒状を呈している。しかし、表面はかなり綿密に削られているので、文字を記すために調整したものと考えられる。また、カエデ属の木が用いられているが、同時に出土した杭にはヤナギ属が多いことからすると、木簡の作成には特にカエデ属の木を選んだとも推測できる。
- ②文字の記載 平滑に調整された棒状の材に、細字で丁寧な楷書の文字を記している。道土遺跡の近くに位置する胆沢城跡から出土する、鎮守府官人の手によるものと変わらない。文字を記すことにより習熟している者によって記されたのだろう。
- ③掲示 一般の木簡と違って札状ではなく棒状を呈していること、書き出しが「禁制」とあり、何らかの行為を禁じるために作成されていることから、この木簡は屋外に突き刺して掲示されていたと考えるのが自然だろう。ただし、加茂遺跡（石川県津幡町）出土木簡（いわゆる加賀郡防示札）とは違い文字の墨が部分的に残存することから短期間の掲示だったと推測される。
- ④回収 掲示が必要でなくなった時点で、回収されたであろう。
- ⑤転用 木簡の上部を斜めに切り込み、大地を逆にして杭として転用。10世紀初頭に位置づけられている十和田 a 降下火山灰の堆積層を切り込んでいるので、転用はそれ以降のこととなる。
- ⑥埋没 杭として使用されたまま埋没した。

(4) 木簡の機能と内容

a) 機能

冒頭に「禁制」とあり、屋外に掲示されたことが想定できることから、この木簡は、公子廣守丸が某人に寄進した三段の田を独占的に占有し、他人が利益を得ることを禁ずる旨を広く告知したものである。

ところで本木簡と同じように書き出しが「禁制」とある袴袂遺跡（兵庫県豊岡市出石町）出土木簡については、吉川真司氏が前述のような機能に加え、検田が実施されたことに伴い「田地の所有権が安定した」ため、郡司が抜き取り、郡家に回収して「帳簿のチェックなどに用いられた」としている。また、「禁制」木簡に条里坪付が書かれることについて、他者の権益を排除するだけならば、木簡は「現地に立っているのだから、所有者もしくは耕作者を明示すれば、それで十分なはず」で、「にもかかわらず条里坪付をわざわざ記していたのは、検田帳簿や国図との関わりを考えれば理解しやすい」としている（吉川真司「9世紀の国郡支配と但馬国木簡」『木簡研究』24号pp.234-235 2002年）。

禁制木簡は、あえて現地に掲示し、権益保持を告知することに特有の意義がある。字（あざ）名を記載し、地点を明記することもそのための必要条件である。いわば禁制木簡は違反行為に対する事前告知として処断するときの重要な根拠となるものであろう。

そもそも、古代日本の文字文化の実態を考えたときに、10世紀段階の地方社会において漢字・漢文体の禁止札をどれほどの人が解読できたであろうか。石川県津幡町加茂遺跡出土の防示札（9世紀半ば）の場合、その要旨が郡の田領によって村人に口頭で伝えられた事例でも明白であろう。

それ故に、読まれることを目的とするより、事前告知することに重要な目的があった禁制木簡が、小型で棒状の杭のような形状のものであっても全く問題なかったといえよう。吉川氏が袴袂遺跡出土木簡で指摘したような検田や国図などの帳簿との照合を想定する必要はないのではないか。むしろ、本木簡は鹿児島県薩摩川内市京田遺跡出土の告知木簡に形状・用途などの面で類似していると指摘しておきたい。

b) 内容

字 金田章裕氏は地名の字について、次のように述べる。まず、原初的な地名が存在し、そこに条里プランが設定され、条里呼称が導入されると、条里坪番号と原初的な地名を合わせて地点表示されるようになる。やがて、条里呼称が定着すると、地点は条里坪付のみで表される。その後、10世紀頃から坪内の細かい位置を示す必要性が生じると、条里坪に小字地名を加えて表記ようになる。さらに、(条里坪による表記が不要となると)小字地名だけが残るようになるという。

こうした小字地名が見られる10世紀～11世紀の史料としては、次のような史料を例示した上で、以下のように述べている。

- 条里呼称に付加された字
- ① 延喜九年(九〇九) 民安占子家地處分狀
上縣二條給理單八道祖田坪中北邊字小南地(大和国宇陀郡)
 - ② 天慶三年(九四〇) 美作眞生等治田賣券案
(阿日井園三里)二坪五段字柳田(筑前国穗浪郡)
 - ③ 天曆七年(九五三) 伊勢國近長谷寺資財帳
(十六條四疋田里)二坪貳段 字長田(多気郡)
 - ④ 永承元年(一〇四六) 僧長仁公願紛失狀案
大和國平群郡坂門郷八條九里廿九州兩坪之内島四段字小
 - ⑤ 康平五年(一〇六二) 讃岐國曼陀羅寺田地宛行狀案
吉原郷七条九里廿三坪字柳田(多度郡)
 - ⑥ 嘉保二年(一〇九五) 山城國賀茂莊別符立券案
財津里七坪四段字柳田(相楽郡)

「以上はいずれも、条里呼称に「字」が付加されている例であり、「平安遺文」ではそれぞれの国における初見例である。ただし、大和国の場合は山間部の例①と盆地部の例④を掲げた。後述のように、条里呼称による表示は本来坪内の位置を示していない。すなわち方がないのが普通であったから、これらの例は坪内位置を示す必要に応じて生じたものである可能性が高い。しかし、いずれにしろ、このような例が10世紀に出現し始めることに留意したい。」(金田章裕「条里と村落の歴史地理学研究」大明堂 1985年)

これらは畿内やその周辺国あるいは筑前国に関わるものであり、そのため金田氏は「条里プランと小字地名との関係がすべて適合するのは、条里プランの完成・定着の程度が高かった地域に限定される」としている。しかし、本木簡では二段の田の所在地を明らかに「字」によって特定しており、①～⑥でなされているのと同じような地点表示をしている。よって、古代東北地方においても早い段階から小字地名が定着していたことを想定しておくべきである。

垂楊池 現存する小字地名には合致するものはなく、近い読みのももない。なお、本資料もその一部だった杭列だが、杭の樹種同定をしたところ、多くはヤナギ属である(Ⅷ章3節を参照)。手近にある樹木を杭の材料としたのならば、遺跡の周辺にはヤナギ属の樹木が繁茂していたのだろう。地名

もそうした景観を表現した可能性が高いであろう。

公子 吉弥侯とも表記され、「蝦夷」に特徴的なウジナである。胆沢城跡 S E 1050からは「勘書生吉弥侯豊本」と記された10世紀初頭に位置づけられる木簡が出土している（胆沢城跡—昭和61年度発掘調査概報—）。この木簡は鎮守府の書生が何らかの物品等の数量を帳簿類と照合したことを記すものである。森公章によれば、書生は現地の者が採用されていたようであるから（森公章「国書生に関する基礎的考察」『日本律令制論集』下 吉川弘文館 1993年）、豊本は胆沢郡出身と考えられる。

進田 10世紀前半における耕地をめぐる状況は、次のようなものだった。

諸国の軒蓋の百姓は課役を逃れんために、ややもすれば京師に赴き、好んで豪家に属く。あるいは田地を以て許わりて寄進と称し、あるいは舍宅を以て巧みに売与と号す。遂に使を請いて課を取り、封を加えて勝を立つ。国史は矯筋の計を知るといえども、権貴の勢を憚りて、口を鉗じ舌を巻き、あえて禁制せず。（延喜2年（902）3月13日太政官符「類聚三代格」巻19所収）

本資料からは垂楊池の三段の田の寄進（もちろん寄進田はこの三段のみではないだろう）を受けた人物は不明だが、まず、当該地の有力者（寺社を含む）が想定できる。あるいは、東北地方北部には8世紀後半から院宮王臣家が勢力を伸ばしていたことはつとに知られており（延暦6年（787）6月24日太政官符、延暦22年10月25日太政官符）、中央の院宮王臣家などが寄進先として考えられよう。

契状 『沙汰未練書』は「約束状の事也」とする。平安時代ではそれほど用例がなく、管見では昌泰四年（901）閏六月二五日太政官符（『類聚三代格』巻20）や嘉祥元年（1106）五月二九日官宣旨案（『平安遺文』1660）などに見られる。後者は、長渚御厨をめぐる東大寺と鴨御祖社との相論の裁定文書で、その中で「件の御厨の地は、宜しくかの寺に本のごとく領掌せしむ。ただし、在家に至りては、法家の勸文ならびに前の皇太后宮職の契状に任せて鴨御祖社領となすべし」とある。この相論のきっかけは、本来東大寺領だった長渚荘が、皇太后宮職が鴨御祖社の栗柄野郷の田と相博したことにあった。つまり、「皇太后宮職の契状」とは、皇太后宮職と鴨御祖社とが相博の際に取り交わした文書のこと、相論の一連の文書の中では「券」とか「契約状」とも記されているもので、具体的には「領長渚御厨状、副進相博田坪付一通」のことである。つまり、ここでは土地の相博を証明する文書と坪付のことを「契状」としているのである。このことを参考にすれば、本木簡の契状は公子廣守丸が某人に田三段を寄進した際に取り交わした文書のことを指していると推測される。

（5）本資料の意義

最後に本資料の意義について、簡単にふれておきたい。

条里の坪内の位置を指し示す必要性から小字地名が出現したとの金田説に依拠するならば、「字」が記された木簡が出土したことにより、道上遺跡周辺に条里プランが（部分的でも）施行されていた可能性を指摘できる。これまで東北地方北部太平洋側においては仙台平野が条里の北限とされていた。しかし、道上遺跡周辺の胆沢扇状地周辺は8世紀段階で朝廷に「水陸万傾」の地と認識されており、近年の発掘調査においても水田遺構の検出は珍しいことではない。これらのことから、今後は北上盆地においても条里プランが施行されていた可能性を想定しておくべきではなかろうか。

「禁制」木簡に、その対象となる田の詳細な地点表示をしていることについて、これまで、当該地域の田の支配のあり方についてはそれを窺わせる史料に恵まれていなかったこともあり、その検討が加えられることはほとんどなかった。このように本木簡は、陸奥国北部において拠点的かもしれないが、畿内や周辺地域とはほぼ同時期に寄進田の禁制や守呼称などが実施されていたことを確実に立証する貴重な資料の発見といえよう。

写 真 图 版

写真図版凡例

- 1 野外調査写真については縮尺不定である。
- 2 遺物写真については縮尺を揃えるよう努めたが、厳密ではなくあくまでも概数である。



遺跡遠景（南西から）



道上遺跡第3次調査・合野遺跡・小林繁長遺跡調査区全景（南西から）



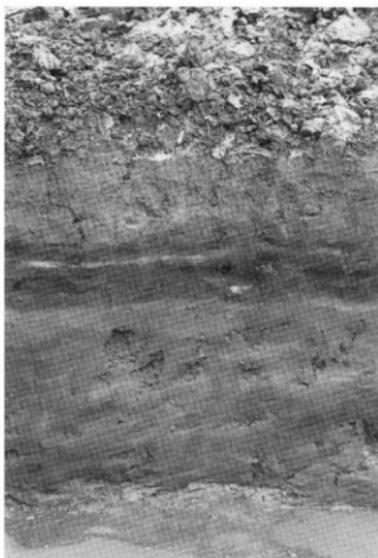
VI Eグリッド付近（北西から）



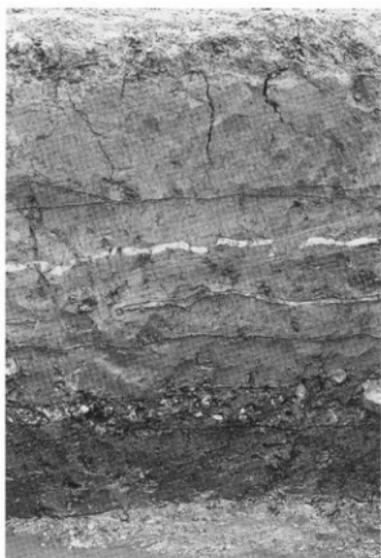
VI Fグリッド付近（北東から）



低湿地・旧河道路調査風景 (VII Eグリッド付近 北東から)

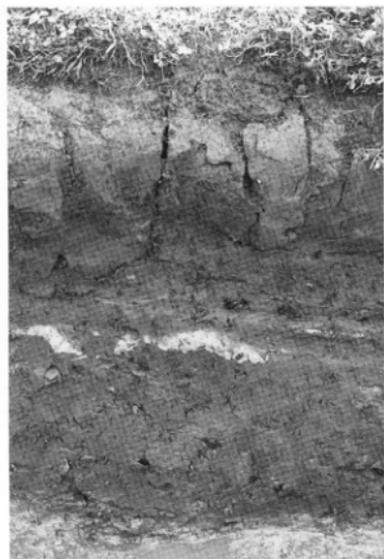


基本土層A (北西から)



基本土層B (北西から)

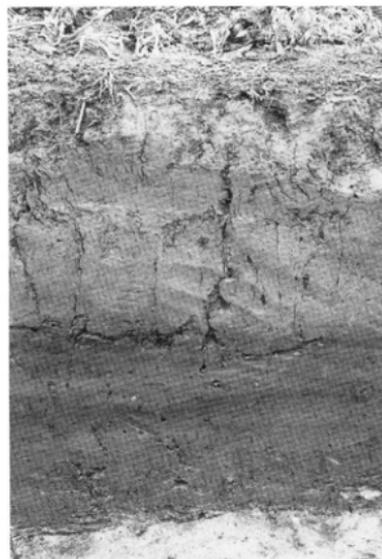
写真図版3 調査風景・基本土層 (1)



基本土層C (北東から)



基本土層D (北南東から)

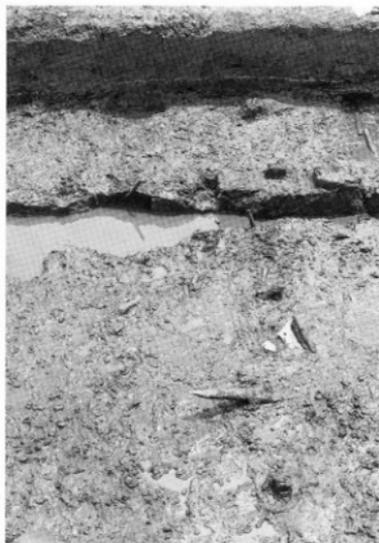


基本土層E (南西から)



基本土層F (南東から)

写真図版4 基本土層 (2)



平面 (北西から)



No.6断面 (北東から)



No.1断面 (北西から)



No.5断面 (北東から)



No.7断面 (北東から)



平面 (南西から)



No.1 断面 (南東から)



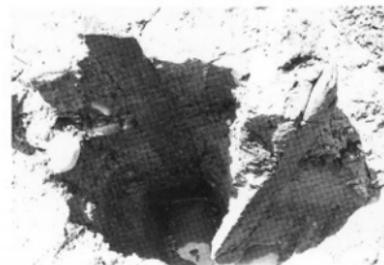
No.2 断面 (南東から)



No.3 断面 (南東から)



No.4・5 断面 (南東から)



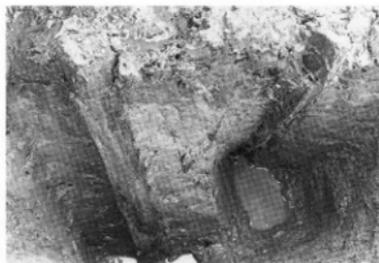
No.6・7 断面 (南東から)



No.8 断面 (南東から)



No.9・10断面 (南東から)



No.13・14断面 (南東から)



No.17・18断面 (南東から)



No.27・28断面 (北西から)



No.16断面 (北西から)



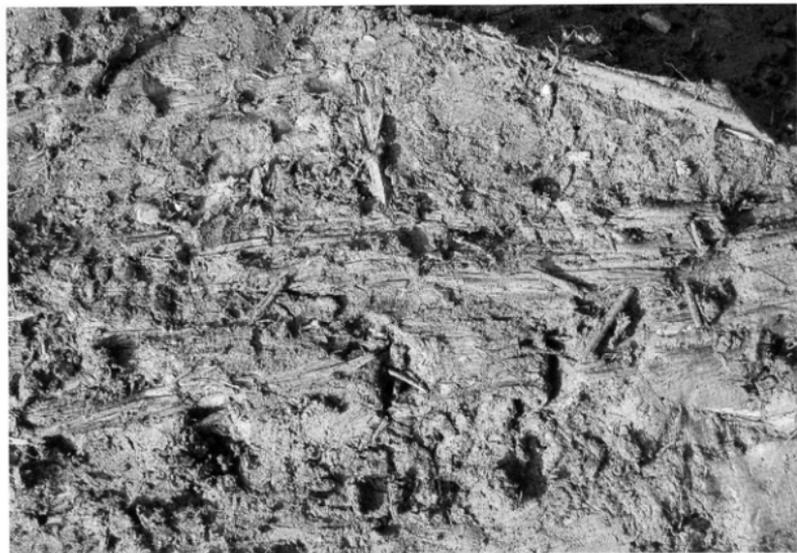
No.20断面 (北西から)



平面 (東から)



No. 7付近検出状況 (東から)



小枝集中近写 (南から)



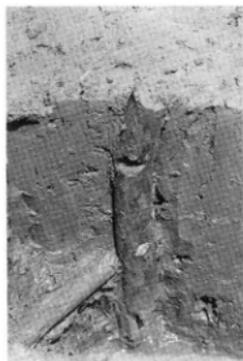
No.5 付近断面E (東から)



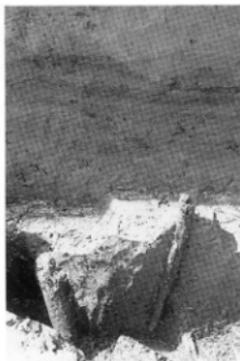
No.6・小枝集中付近断面O (東から)



小枝集中付近断面P (東から)



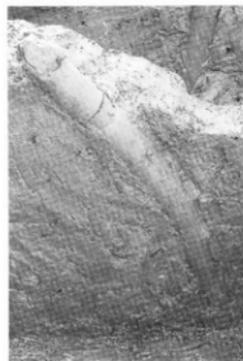
No.2断面 (西から)



No.3断面 (南から)



No.5断面 (東から)



No.7断面 (東から)



No.8断面 (南から)



No.10断面 (西から)



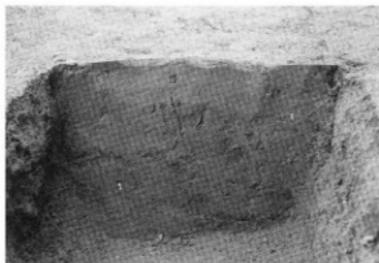
No.11断面 (西から)



No.12断面 (北東から)



1号杭断面 (南西から)



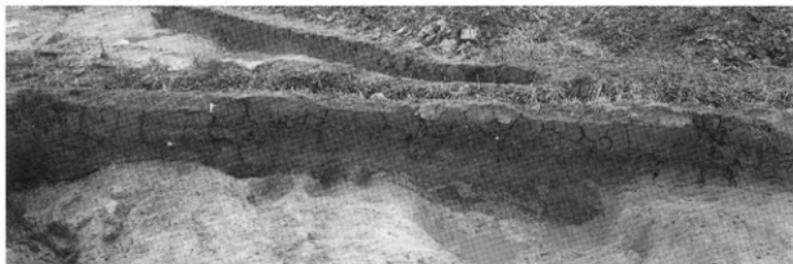
SD01溝断面（南西から）



SD02溝断面（南から）



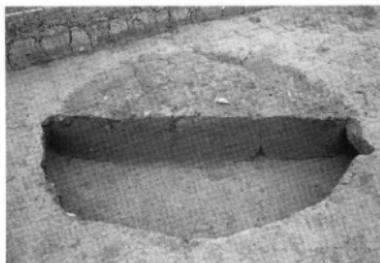
SD02溝・1号整地層平面（南東から）



1号整地層断面（南から）



平面 (南から)



SK01土坑

断面 (南から)



PP1・2平面 (南西から)



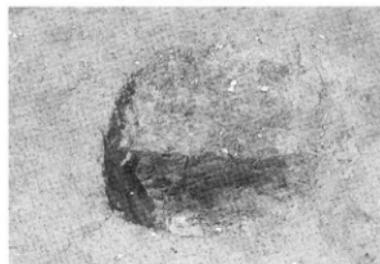
PP1断面 (南西から)



PP2断面 (南西から)



PP3断面 (南東から)

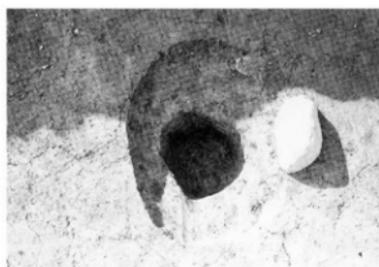


SA01柱穴列PP4断面 (南西から)

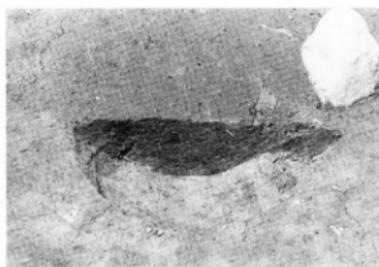
写真図版12 土坑・柱状土坑・柱穴列 (1)



SA01柱穴列平面（北東から）



平面（南東から）



PP9

断面（南東から）



平面（南東から）

PP10



断面（南東から）

写真図版13 柱穴列（2）

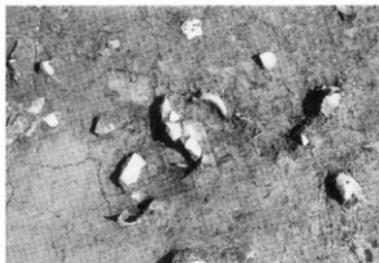


1号捨て場（南西から）

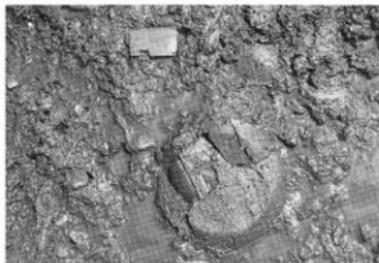


確認調査区ⅥE 5～6u付近（南西から）

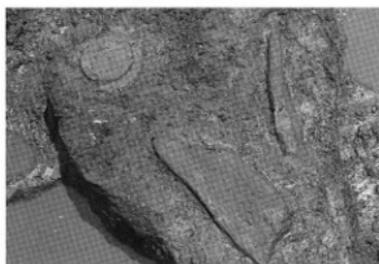
写真図版14 遺物出土状況（1）



1号捨て場（北西から）



木質遺物No.32・33



木質遺物No.35~37



木質遺物No.76・77



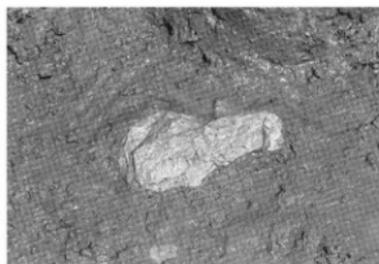
木質遺物No.225



木質遺物No.203



陶文土器No.978



石器No.114



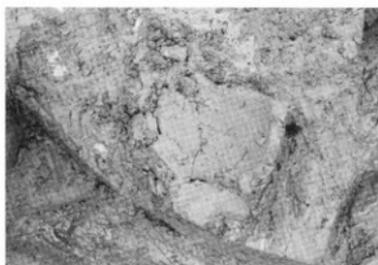
VI E～Fグリッド V層 (To-aテフラ) 上面検出状況 (南東から)



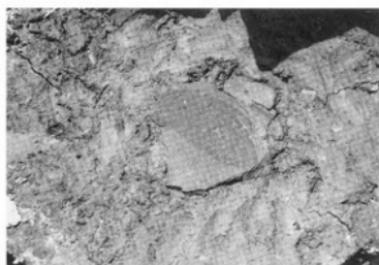
VI E～Fグリッド VI～VII層 木質遺物出土状況 (南東から)



ⅦE 7 x グリッドⅥ～Ⅶ層木質遺物出土状況（北東から）



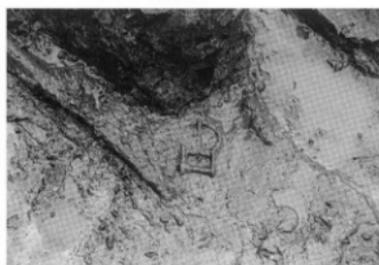
木質遺物No.52



木質遺物No.74



木質遺物No.319・320



鉄製品No.325

写真図版17 遺物出土状況（4）



VIF グリッド中央部Ⅳ～Ⅵ層木質遺物出土状況（北西から）



VIF 16g グリッド付近Ⅳ～Ⅵ層木質遺物出土状況（北東から）

写真図版18 遺物出土状況（5）



VI F・VI E～Fグリッド確認調査区（西から）



VI Fグリッド北邸宅地排水部分（南西から）



VI~VII F グリッド (南西から)



VI E グリッド追加調査区 (東から)



VI G・VI F～Gグリッド（南西から）



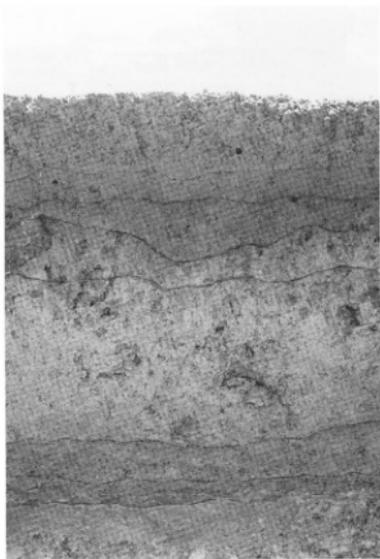
VI Fグリッド低湿地調査風景



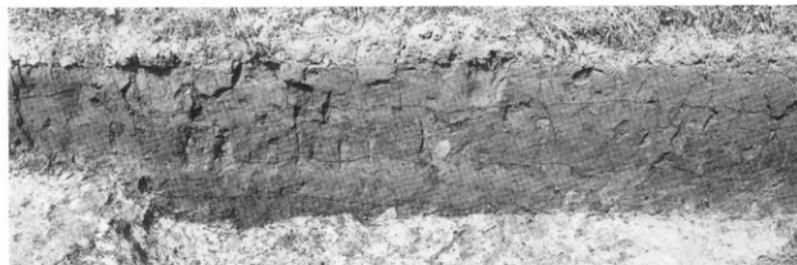
調査前風景 (VICグリッド付近 東から)



調査風景 (VBグリッド 西から)



基本土層A (北から)



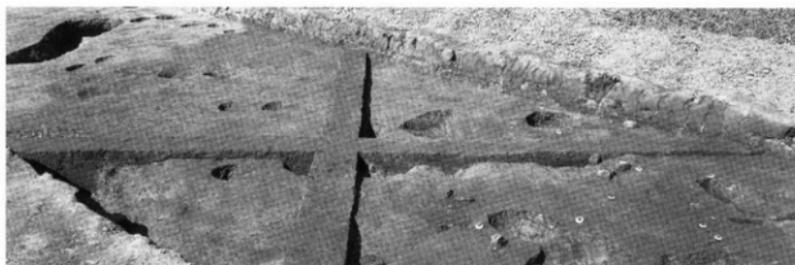
VBグリッド旧河道跡土層 (南から)



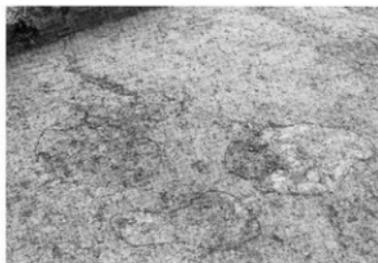
白山小学校児童遺跡見学



SI 01・02 竪穴住居平面 (南西から)



断面 (南東から)



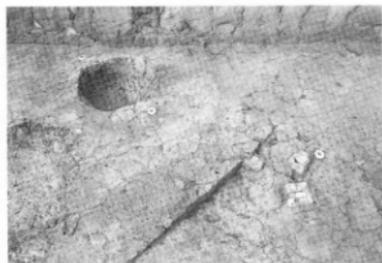
検出状況 (南西から)



完掘状況 (南西から)

SI 01 竪穴住居カマド

写真図版23 竪穴住居 (1)

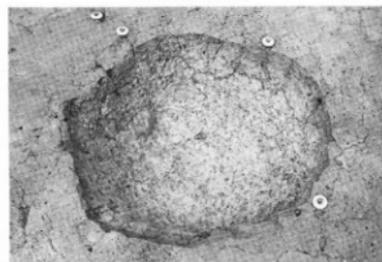


検出状況 (南から)



断面 (南東から)

S102 竪穴住居カマド



平面 (南西から)

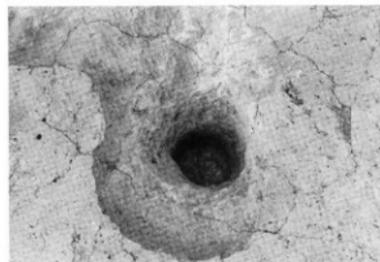


断面 (南東から)

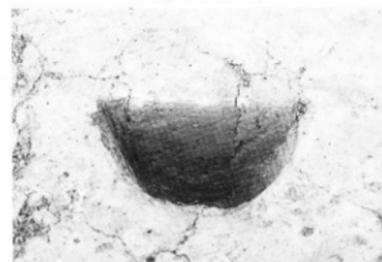
P2



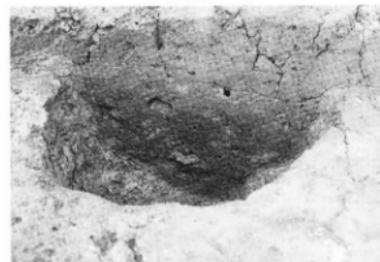
P3 断面 (南西から)



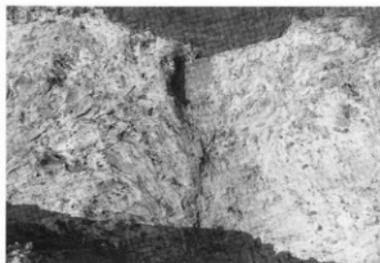
P4 平面 (南から)



P6 断面 (南東から)



P7 断面 (南東から)



平面 (南から)

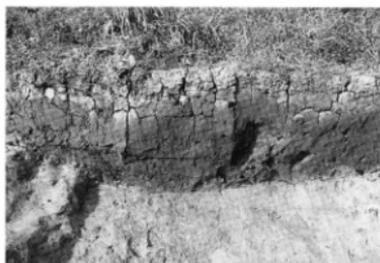


断面 (南から)

SD02溝



平面 (南から)



断面 (南から)

SD03溝

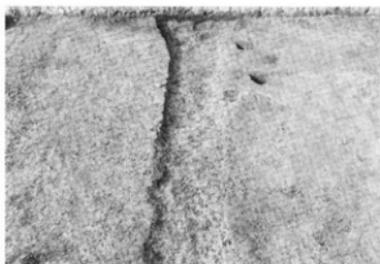


平面 (南東から)



断面 (南東から)

SD05溝

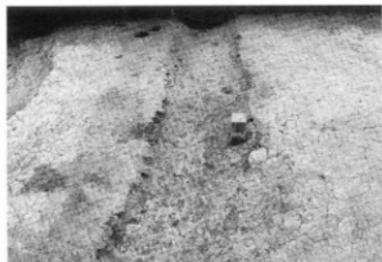


平面 (南から)

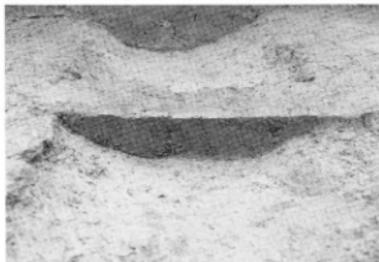


断面 (南から)

SD06溝



平面 (南から)

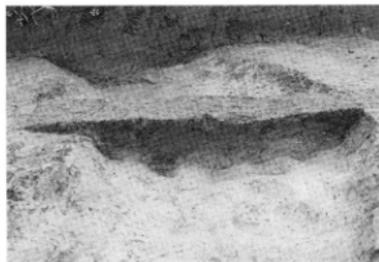


断面 (南から)

SD07溝



平面 (北から)

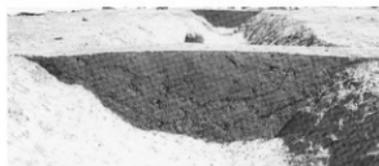


断面 (北から)

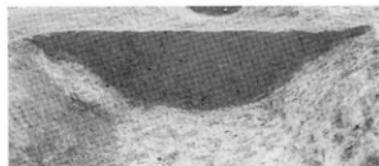
SD08溝



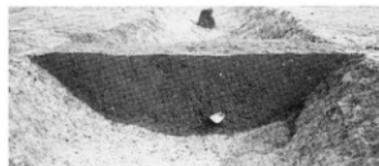
平面 (北西から)



断面A (北西から)



断面B (北西から)

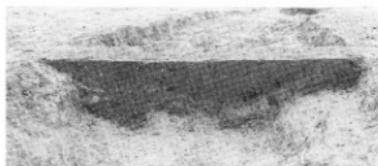


断面C (北西から)

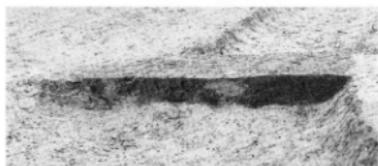
SD09溝



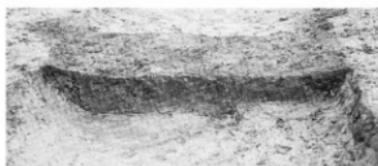
SD10溝平面 (南西から)



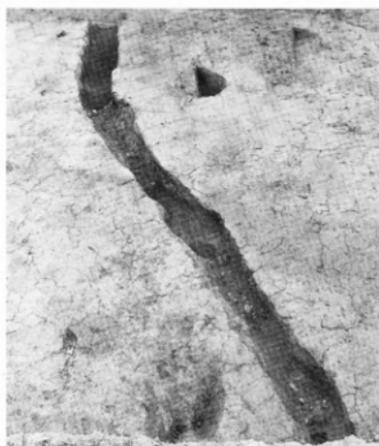
SD10溝断面A (南西から)



SD10溝断面B (西から)



SD10溝断面C (北西から)



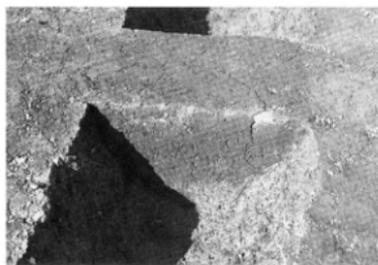
SD11溝平面 (北西から)



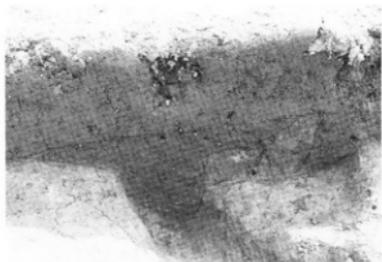
SD11溝断面 (南東から)



SD12・13溝平面 (東から)



SD12溝断面 (南から)

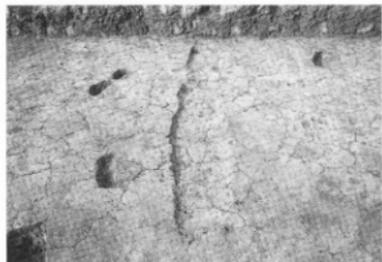


断面 (北から)



SD 13 溝

遺物出土状況 (南東から)



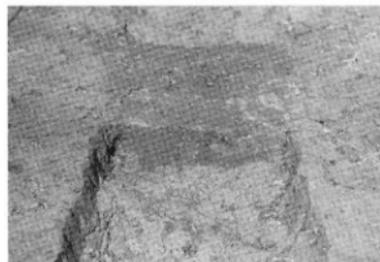
SD 14 溝平面 (南から)



SD 15 溝平面 (南東から)



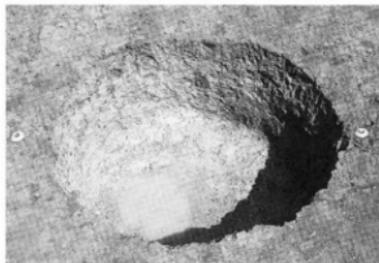
SD 14 溝断面 (南から)



SD 15 溝断面 (南東から)



VB グリッド中央部旧河道調査状況 (東から)

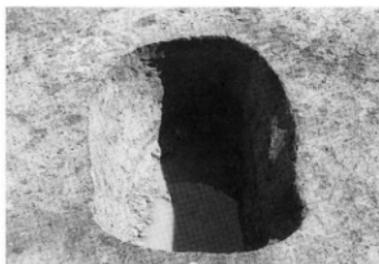


平面 (南から)

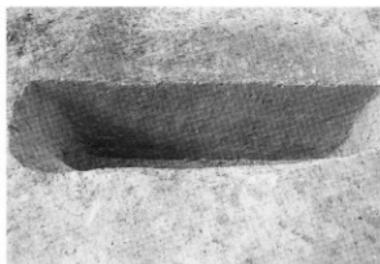


断面 (南から)

SK02土坑

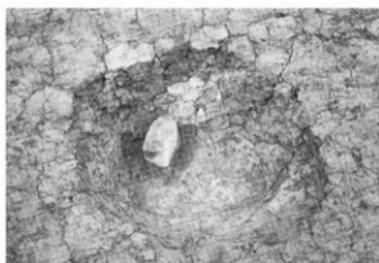


平面 (西から)



断面 (南から)

SK03土坑



平面 (南東から)

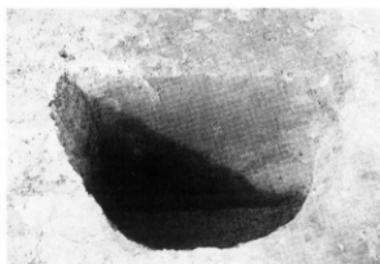


断面 (南西から)

SK04土坑



平面 (南東から)

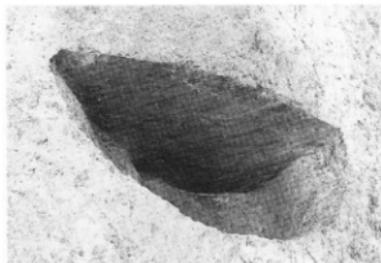


断面 (南西から)

SK05土坑



平面 (南西から)



断面 (南西から)

SK06土坑

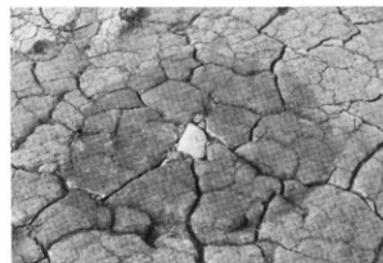


平面 (南東から)



断面 (南東から)

SK08土坑



SK07土坑検出 (確認調査 南から)



SK09土坑平面 (南から)



平面 (南東から)

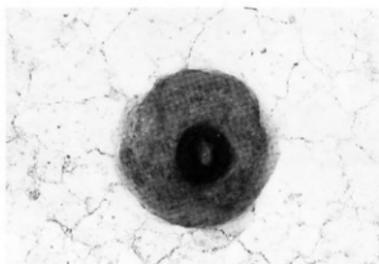


断面 (南東から)

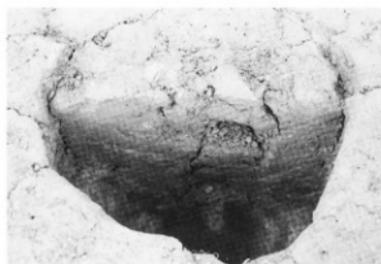
SK01隔し穴状土坑



SB01~03 掘立柱建物平面 (南西から)

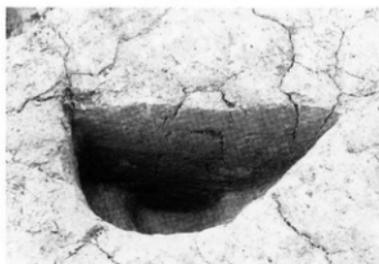


平面 (南西から)

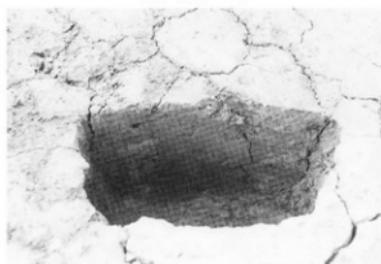


PP5

断面 (南西から)



PP6 断面 (南東から)



PP8 断面 (北西から)

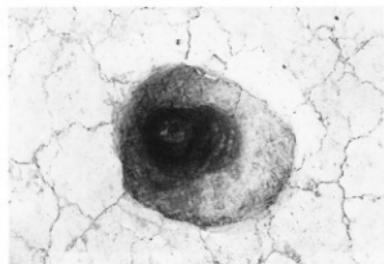
写真図版31 掘立柱建物 (1)



PP16断面(南東から)

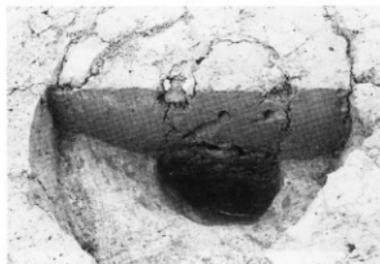


PP19断面(南東から)

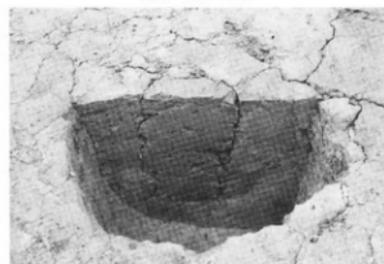


平面(南西から)

PP20



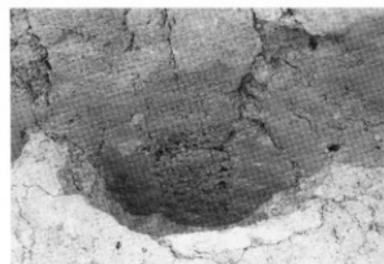
断面(南東から)



PP24断面(南西から)



PP25断面(北東から)



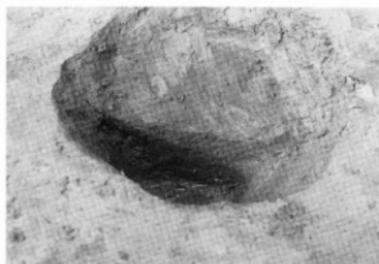
PP29断面(北東から)



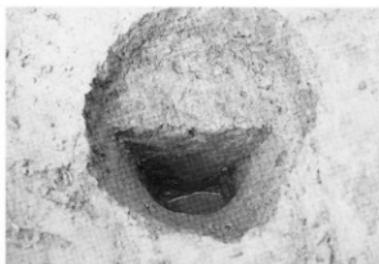
木製品No.25出土状況



平面（北西から）



PP3断面（南西から）



PP4断面（南西から）

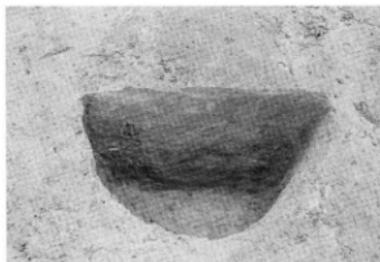
SA01柱穴列



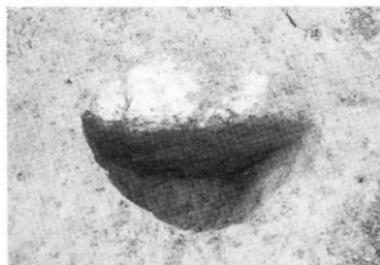
VIAグリッド北東部柱穴状土坑平面（北西から）



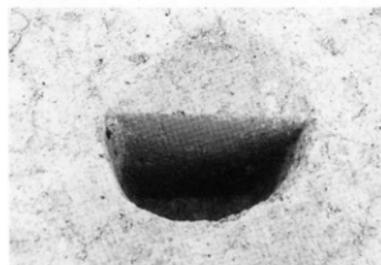
2区西部 (MC~Dグリッド) 柱穴状土坑平面 (西から)



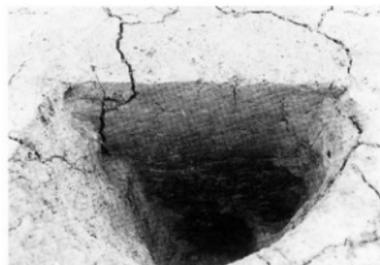
PP20断面 (南西から)



PP21断面 (南東から)



PP23断面 (西から)



PP37断面 (南から)



(北から)

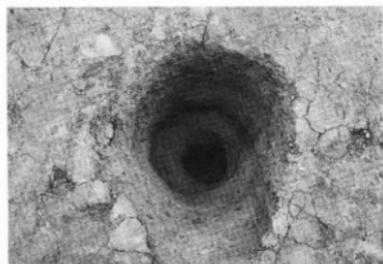


(南から)

2区全景



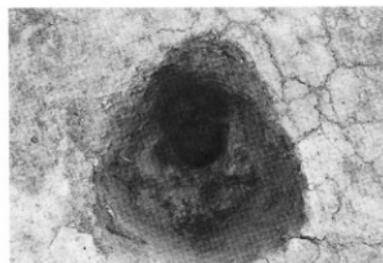
1区全景・掘立柱建物平面 (西から)



PP2平面 (南から)



PP6断面 (南から)

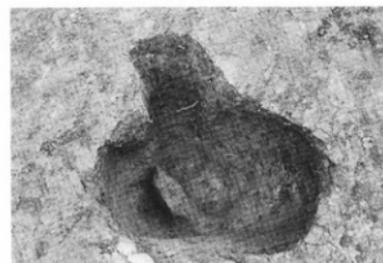


平面 (南から)

PP5



断面 (南から)

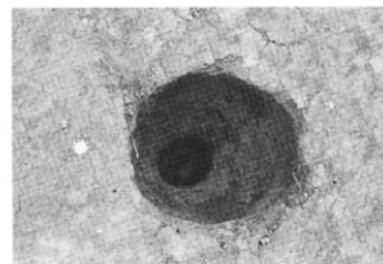


平面 (南から)

PP7



断面 (南から)

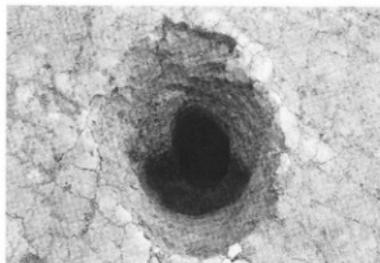


平面 (南から)

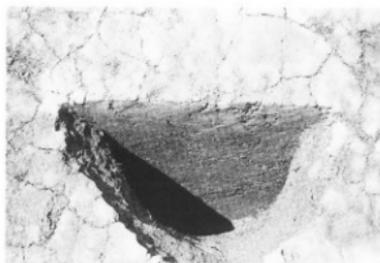
PP8



断面 (南から)

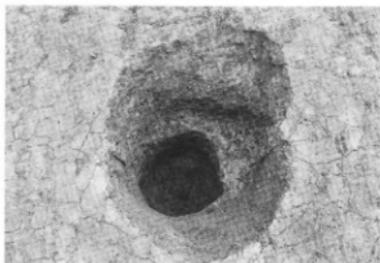


平面 (南から)



PP10

断面 (南から)

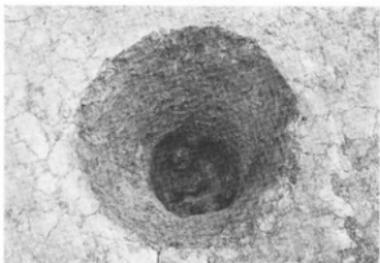


平面 (南から)

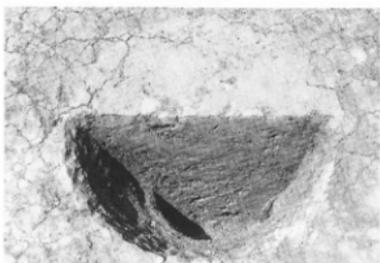


PP11

断面 (南から)



平面 (南から)



PP12

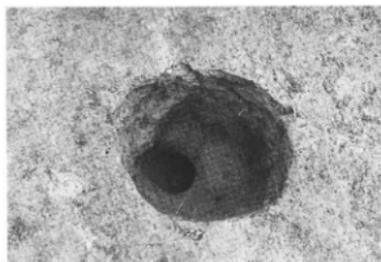
断面 (南から)



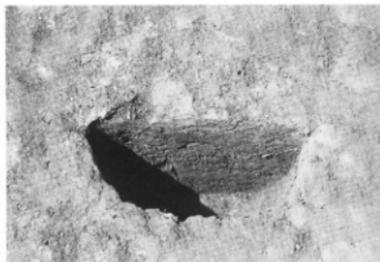
PP13断面 (南から)



PP14断面 (南から)

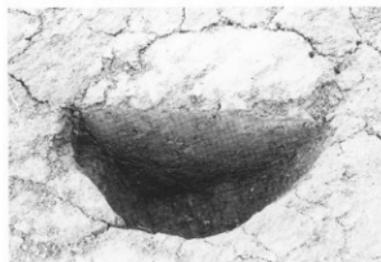


平面 (南から)

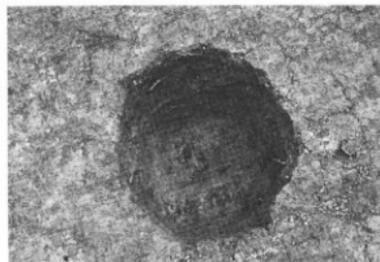


断面 (南から)

PP16



PP21断面 (南から)



PP23平面 (南から)



平面 (北西から)

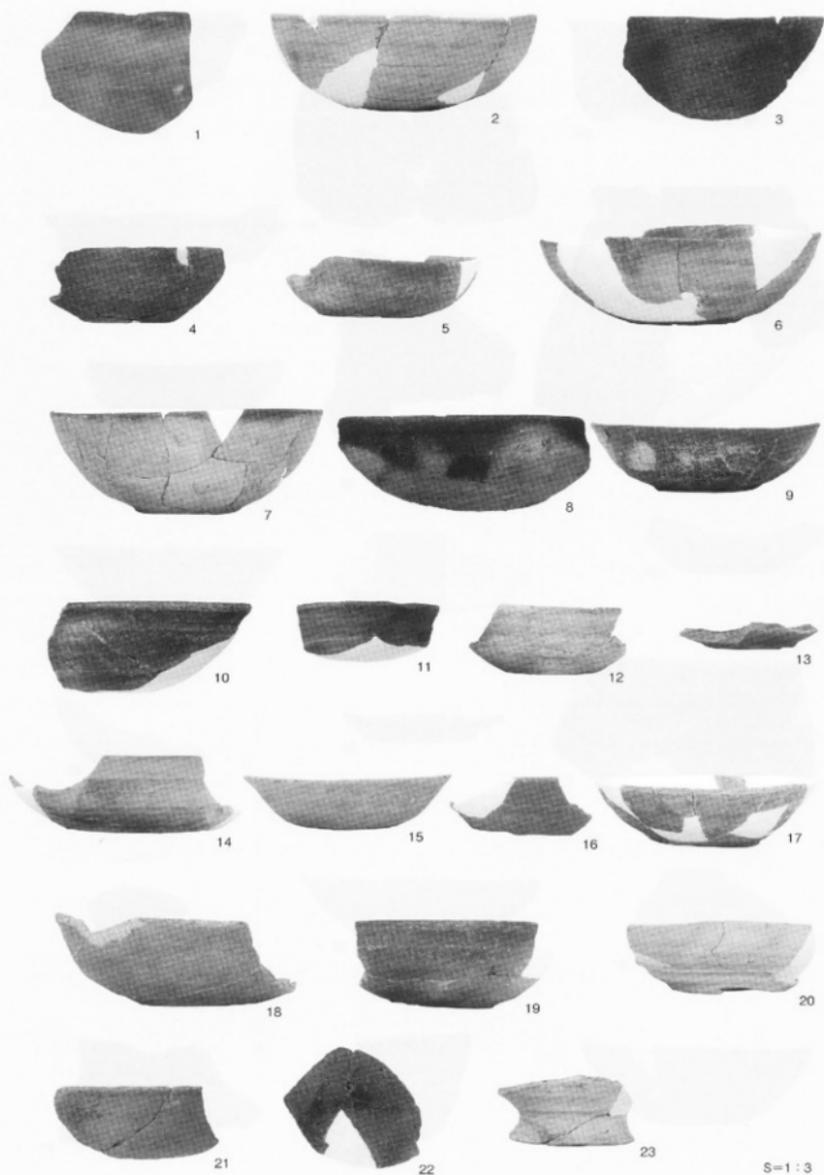


PP24断面 (西から)

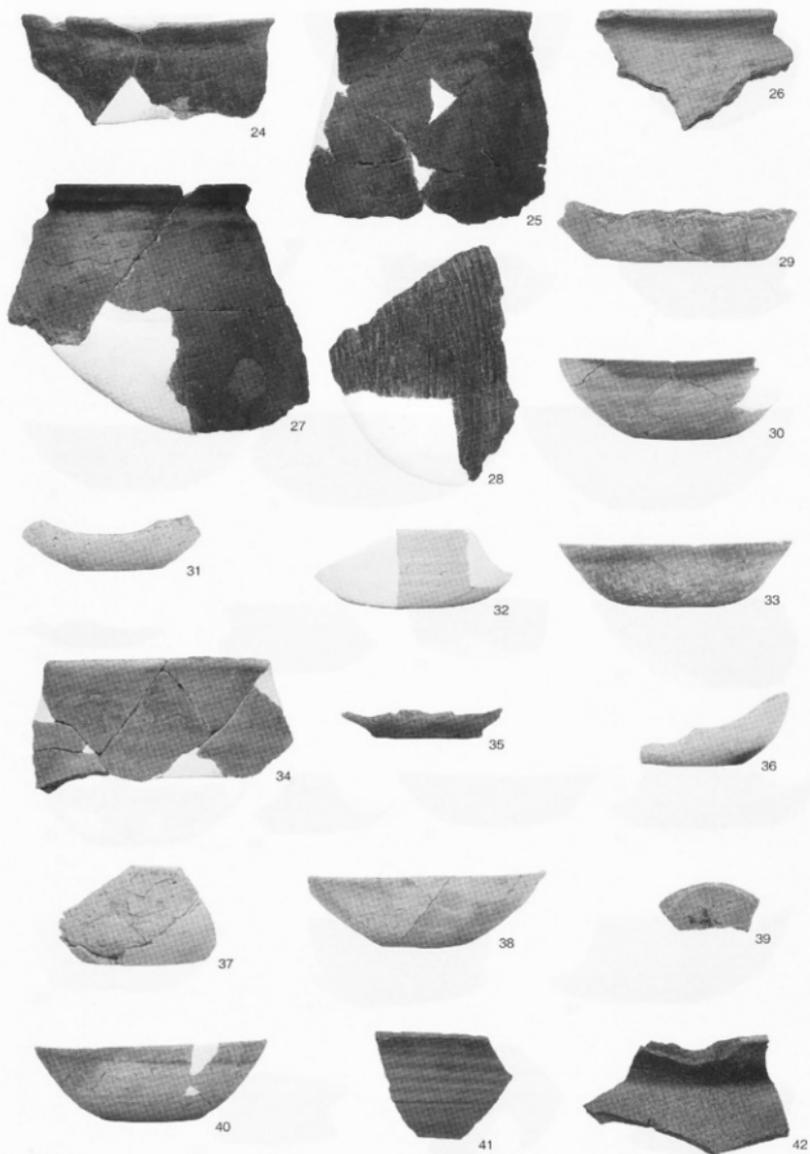


断面 (北西から)

SD01溝

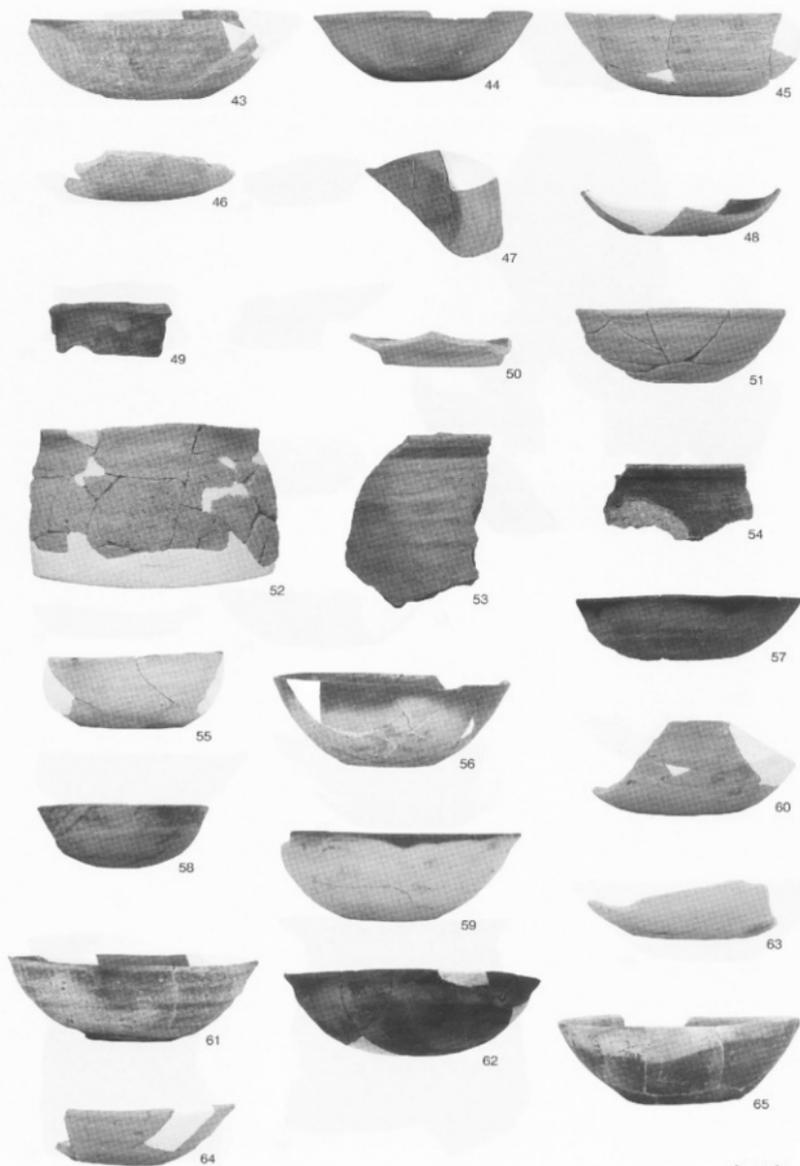


写真図版39 道上遺跡出土遺物(1)



S=1:3

写真図版40 道上遺跡出土遺物(2)

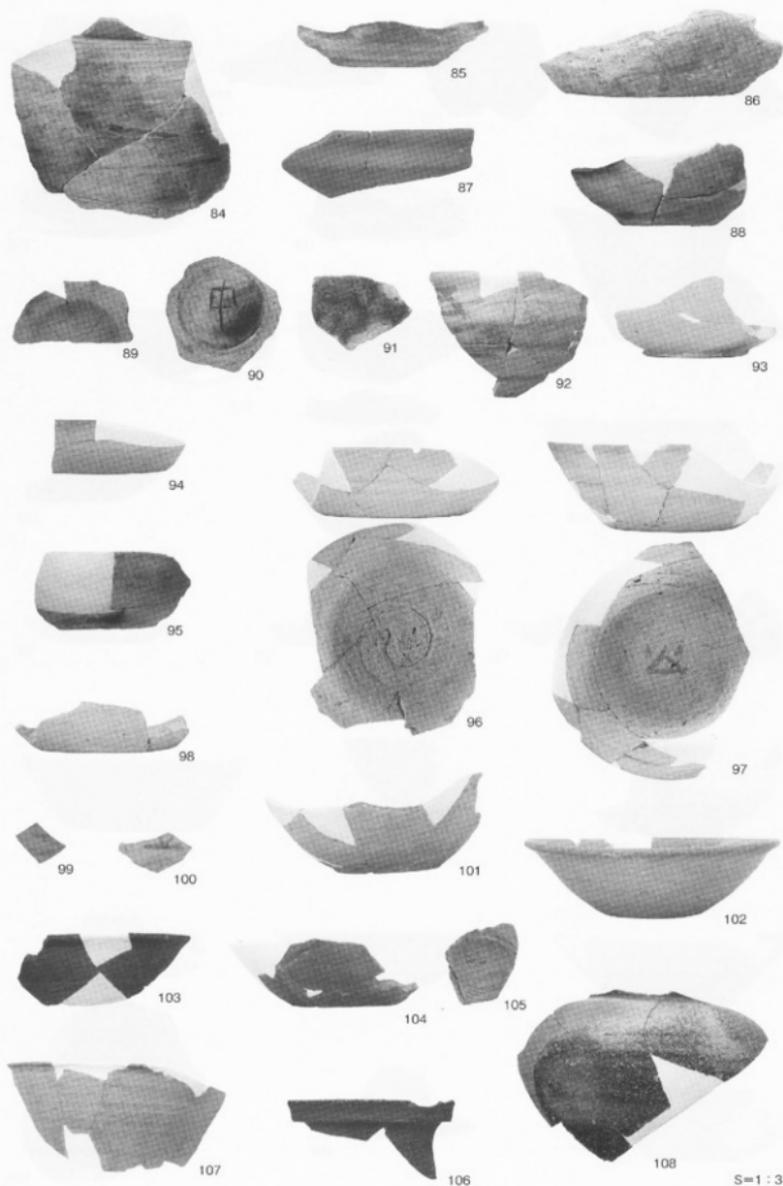


S=1:3

写真図版41 道上遺跡出土遺物(3)

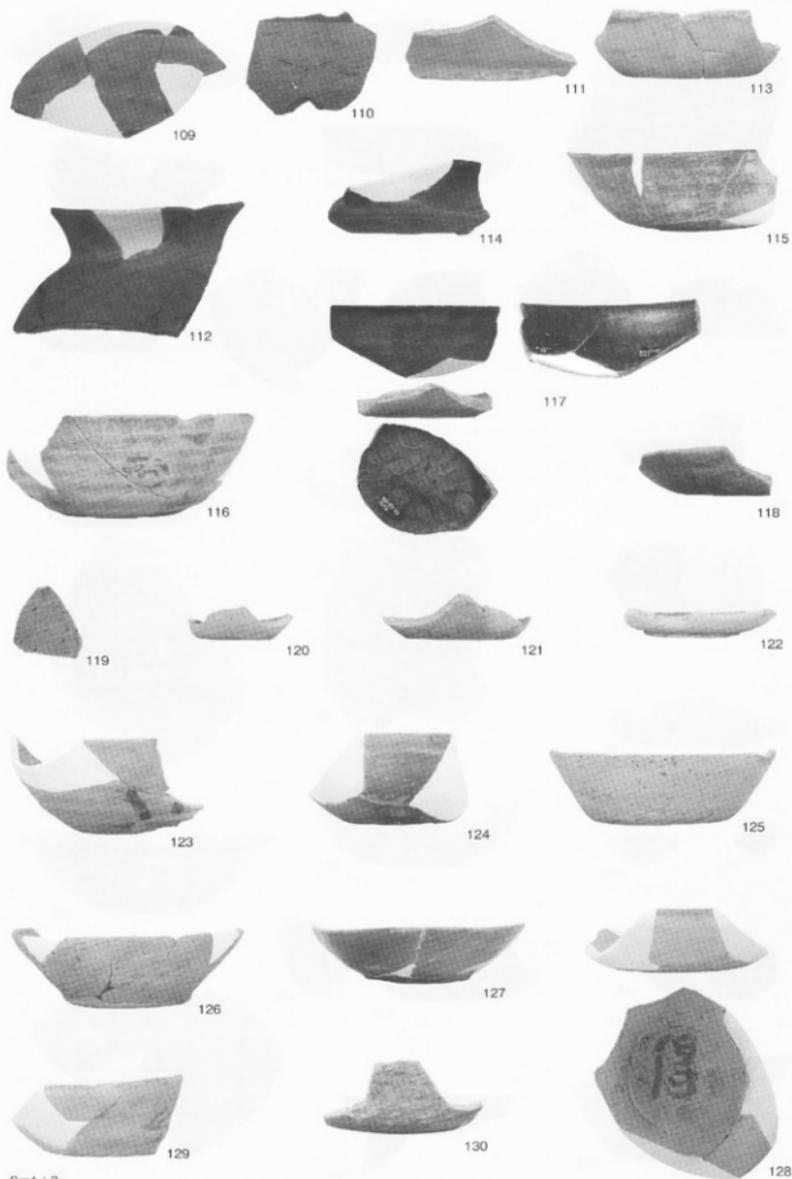


写真図版42 道上遺跡出土遺物(4)



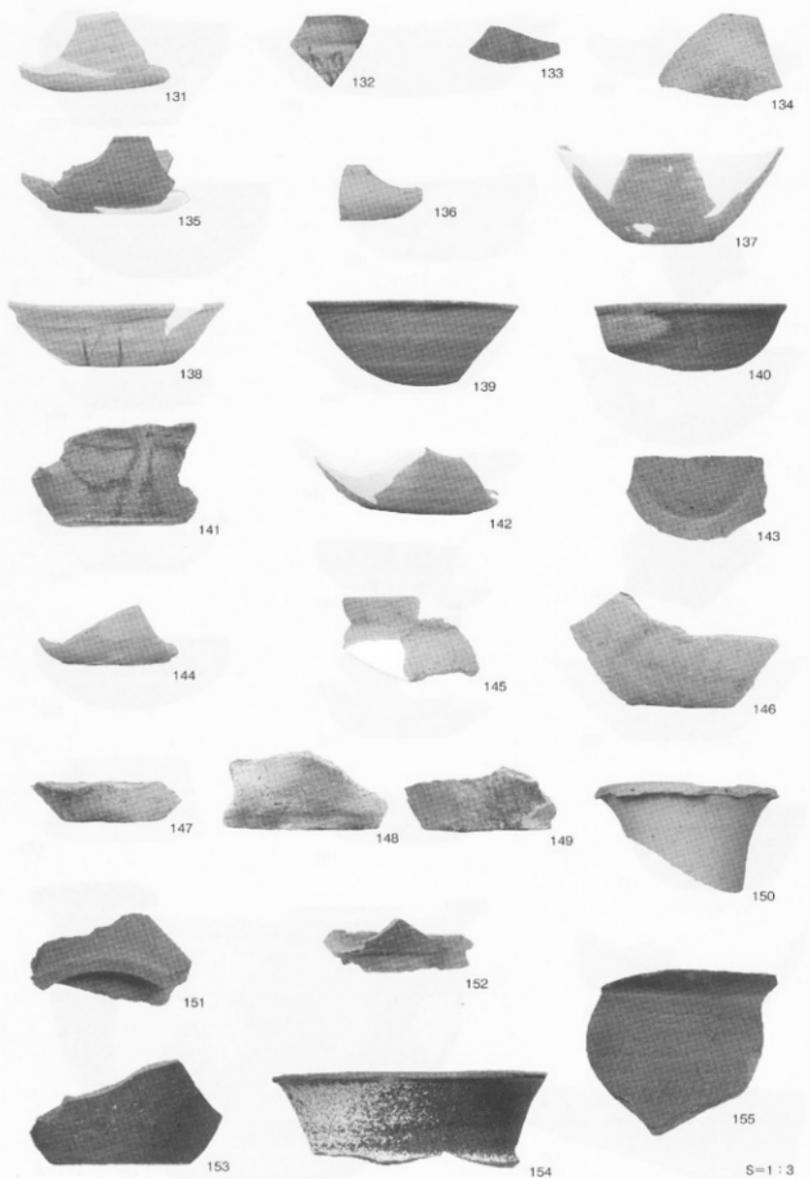
S=1:3

写真図版43 道上遺跡出土遺物(5)

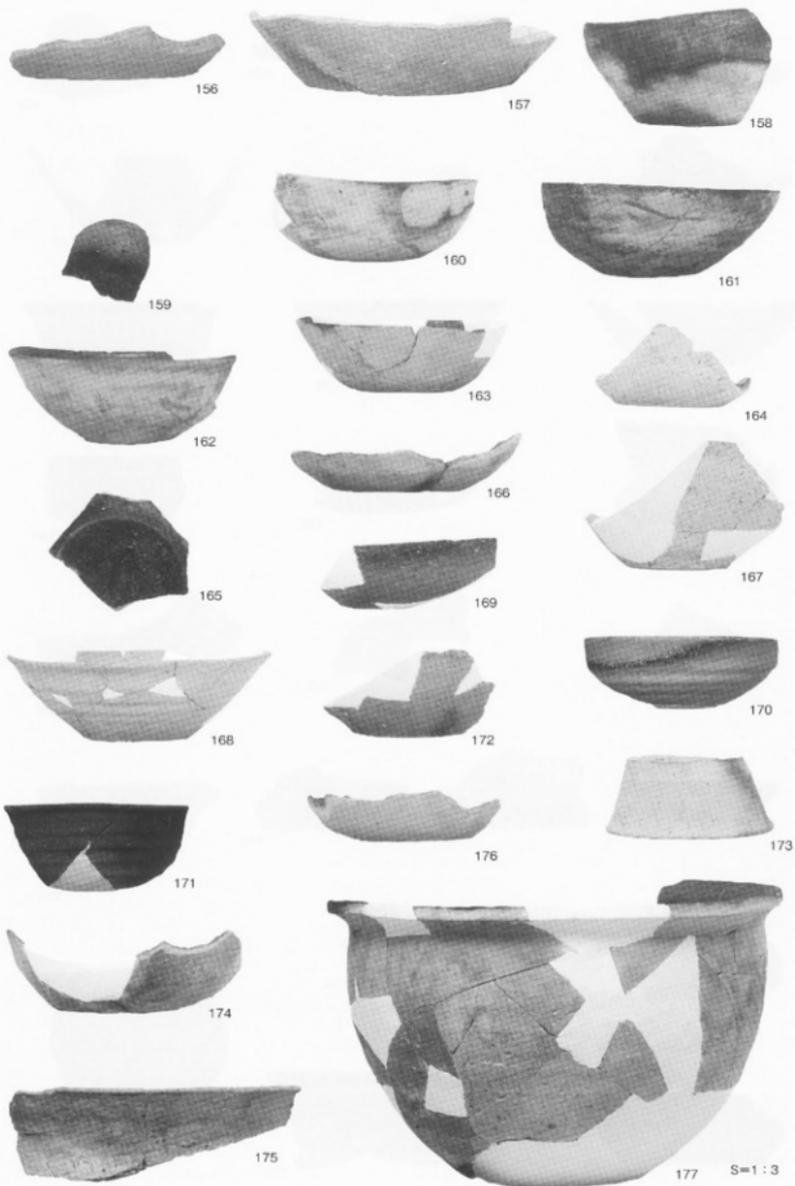


S=1:3

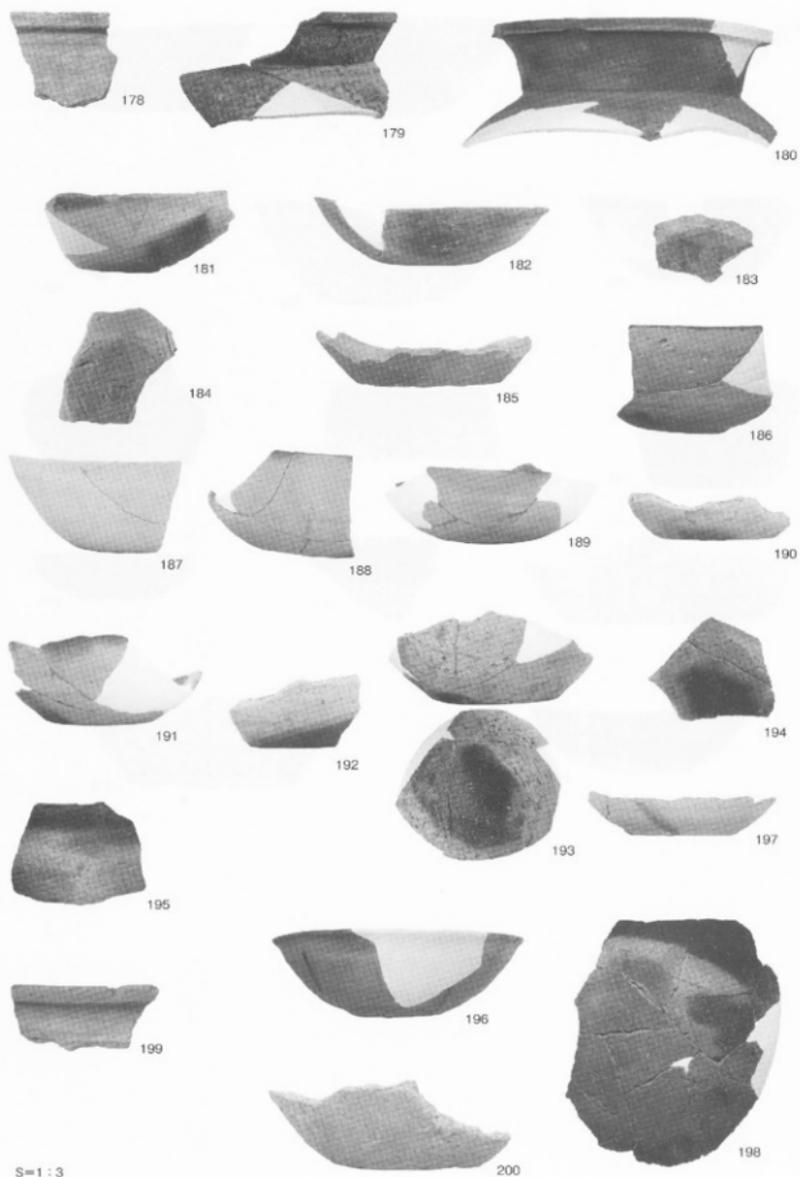
写真図版44 道上遺跡出土遺物(6)



写真図版45 道上遺跡出土遺物(7)

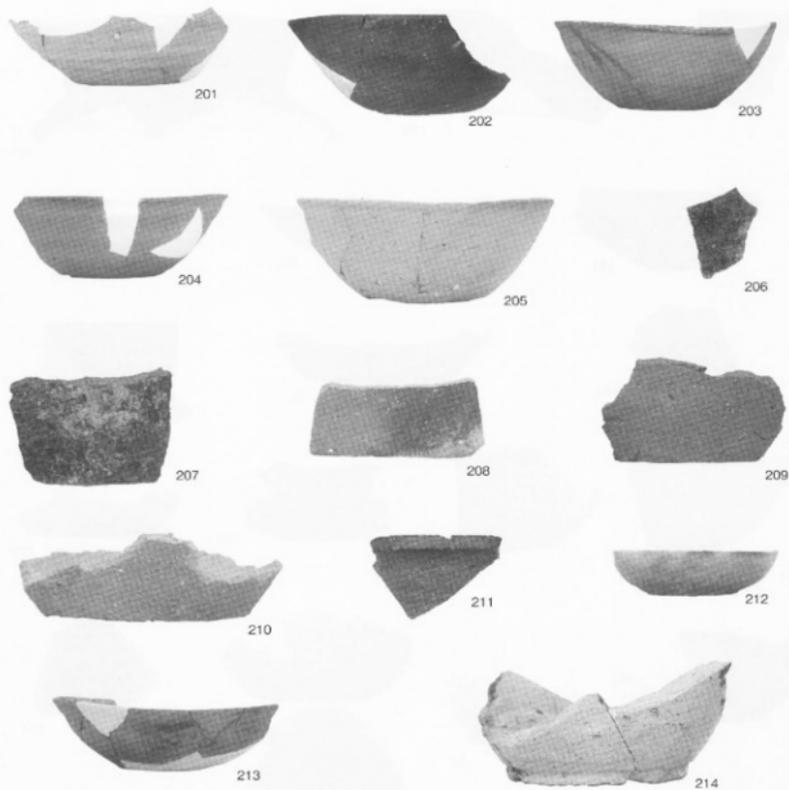


写真図版46 道上遺跡出土遺物(8)



S=1:3

写真図版47 道上遺跡出土遺物(9)



S=1:3

写真図版48 道上遺跡出土遺物 (10)



216



217



218



219



221



220



222

S=1:4



223



224



225



226



227

S=1:8



228



229



230



231



232



写真図版51 道上演跡出土遺物 (13)



242



243



245



246



247

242~250...S=1:8
251・252...S=1:4



248



249



250



251



252

写真図版52 道上遺跡出土遺物 (14)



写真図版53 道上遺跡出土遺物 (15)



2行H4



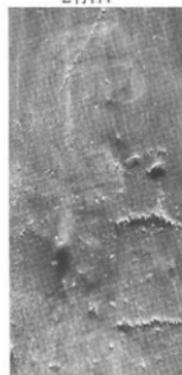
2行目1



1行H4



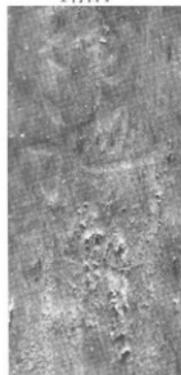
1行目1



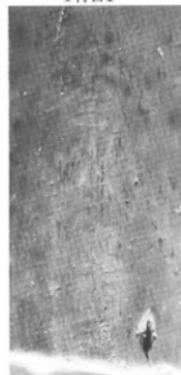
2行目5



2行目2



1行目5



1行目2



2行目6



2行目3



1行目3

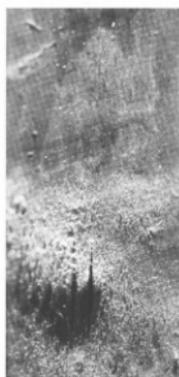
写真図版54 道上遺跡出土遺物 (16)



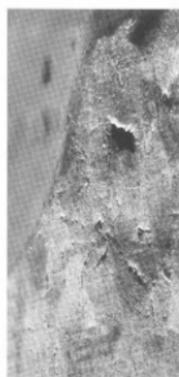
5行目2



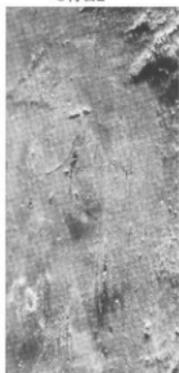
4行目1



3行目4



3行目1



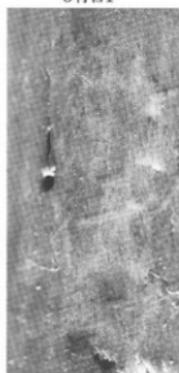
6行目1



4行目2



3行目5



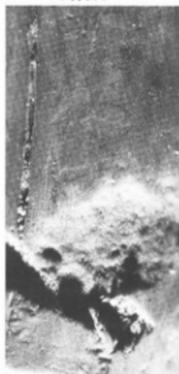
3行目2



6行目2



5行目1



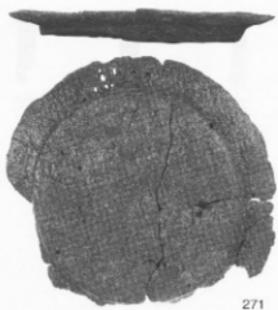
3行目6



3行目3



写真図版56 道上遺跡出土遺物 (18)



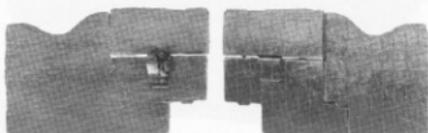
271



274



272



275

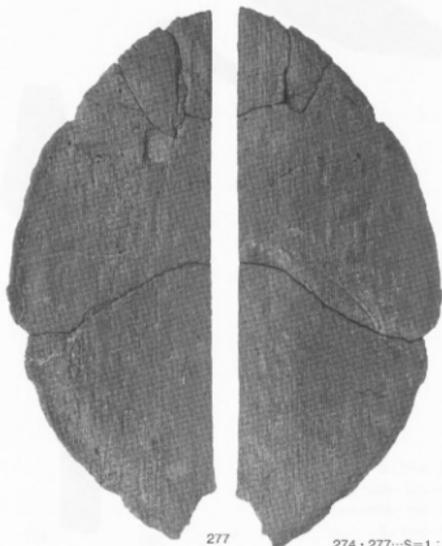
271~273・275・276…S=1:3



273



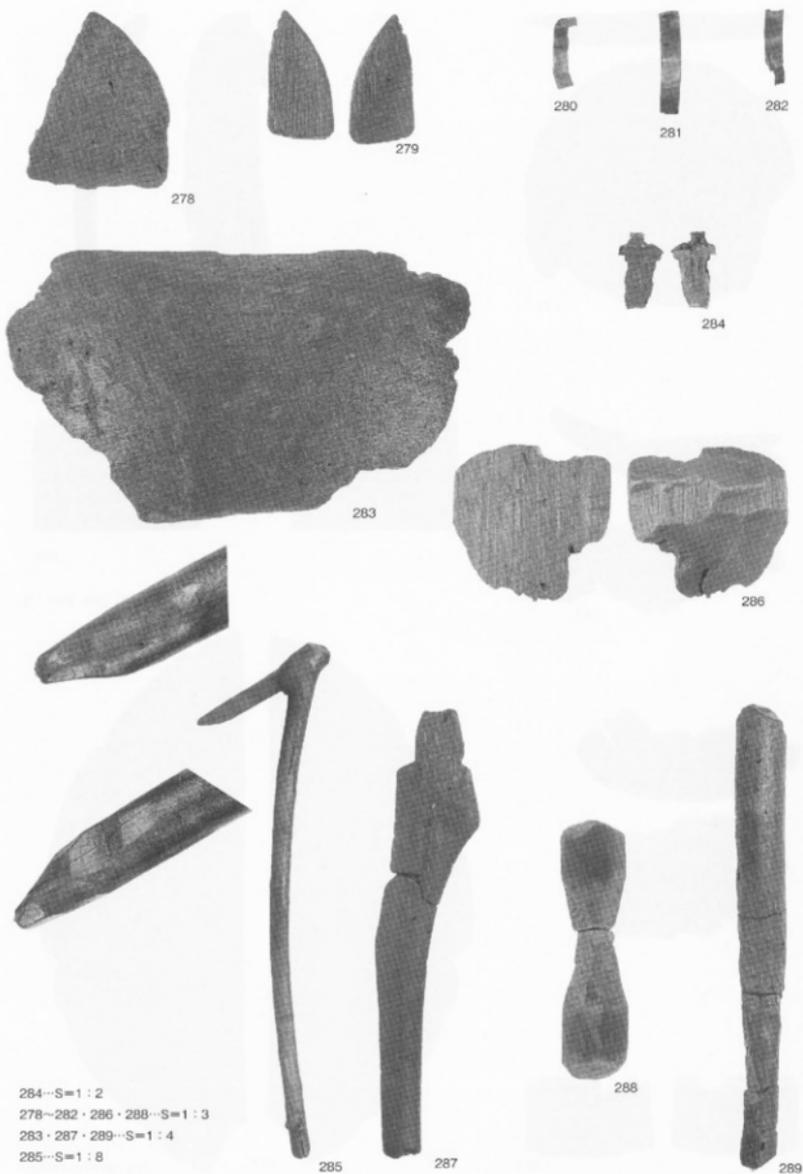
276



277

274・277…S=1:4

写真図版57 道上遺跡出土遺物 (19)



写真図版58 道上遺跡出土遺物 (20)



写真図版59 道上遺跡出土遺物 (21)



303



304



305



306



307



308



309



310



311

303~305…S=1:4

306~311…S=1:8



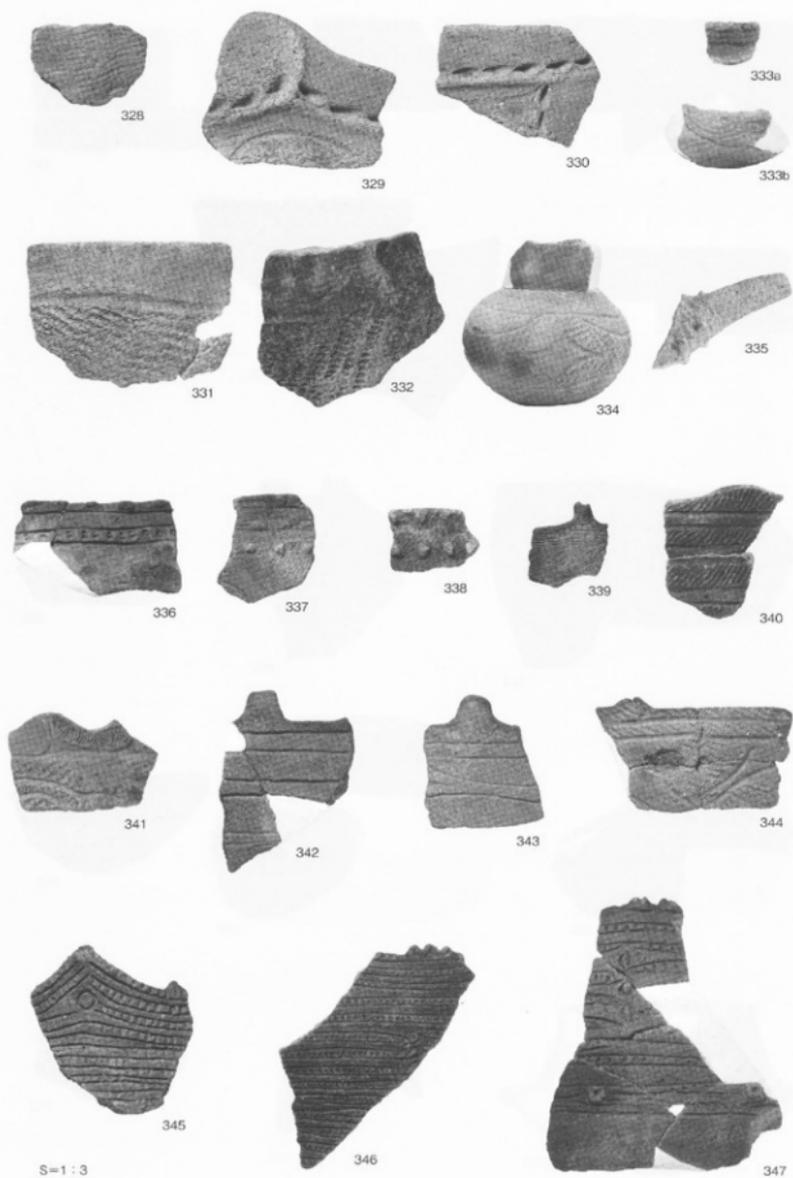
写真図版61 道上遺跡出土遺物 (23)



320-323-S=1:8

324-S=1:3

写真図版62 道上遺跡出土遺物 (24)



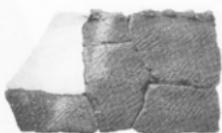
写真図版63 道上遺跡出土遺物 (25)



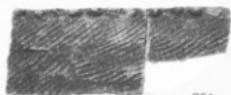
348



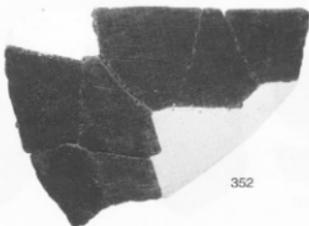
349



350



351



352



353



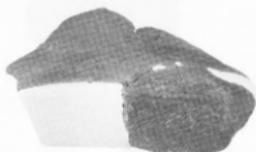
354



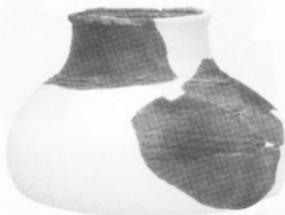
355



358



356



357



360



359

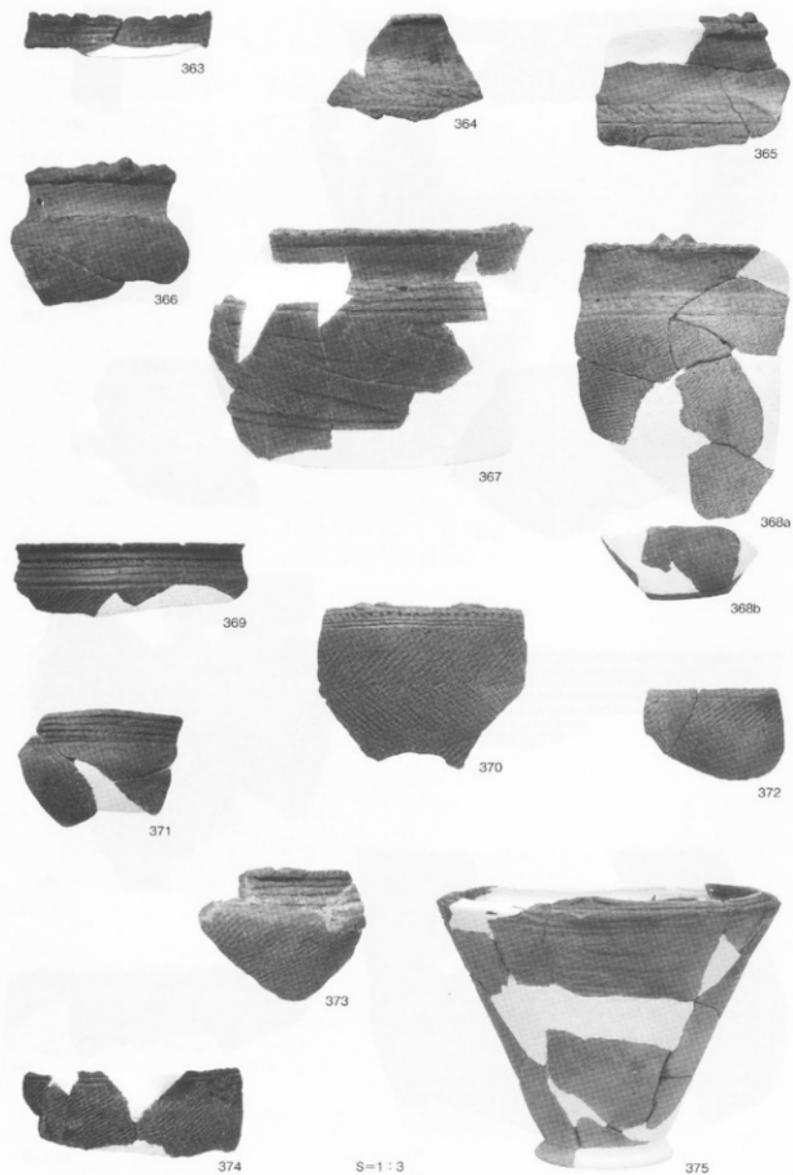


361

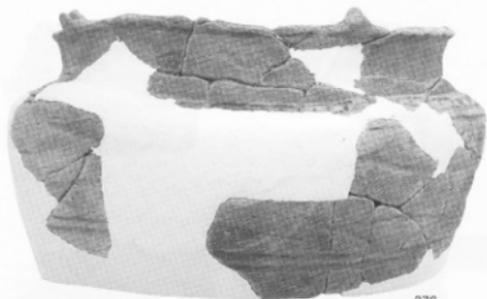


362

S=1:3



写真図版65 道上遺跡出土遺物 (27)



376



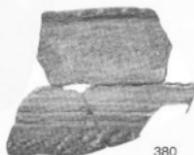
377



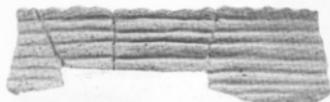
378



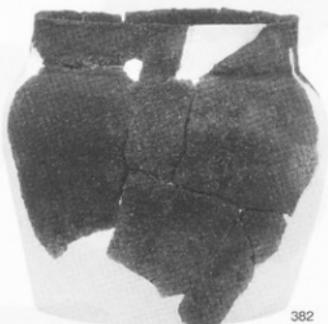
379



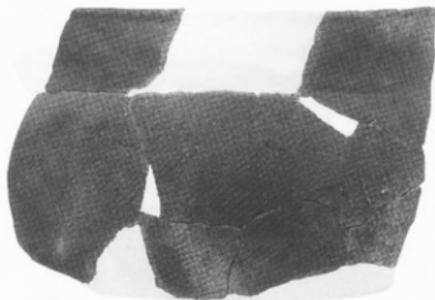
380



381



382

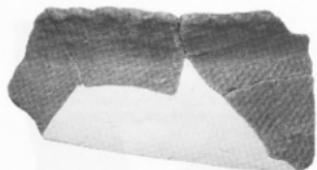


383



384

S=1:3



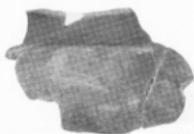
365



386



387



388



389



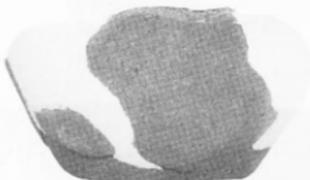
390



392A



391



392B



393



394



395



396



396



397

S=1:3



399



400



401



403



404



402



407



406



405

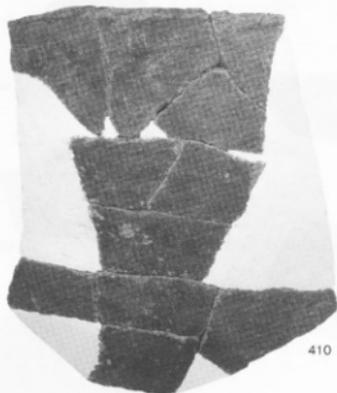
S=1:3



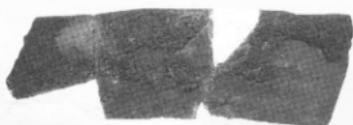
408



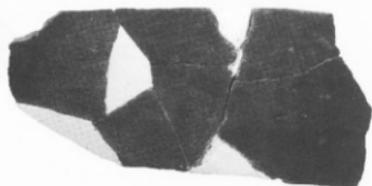
414



410



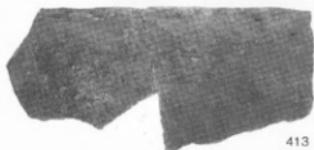
409



411



412



413



415



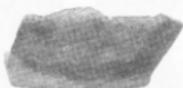
417



419



416



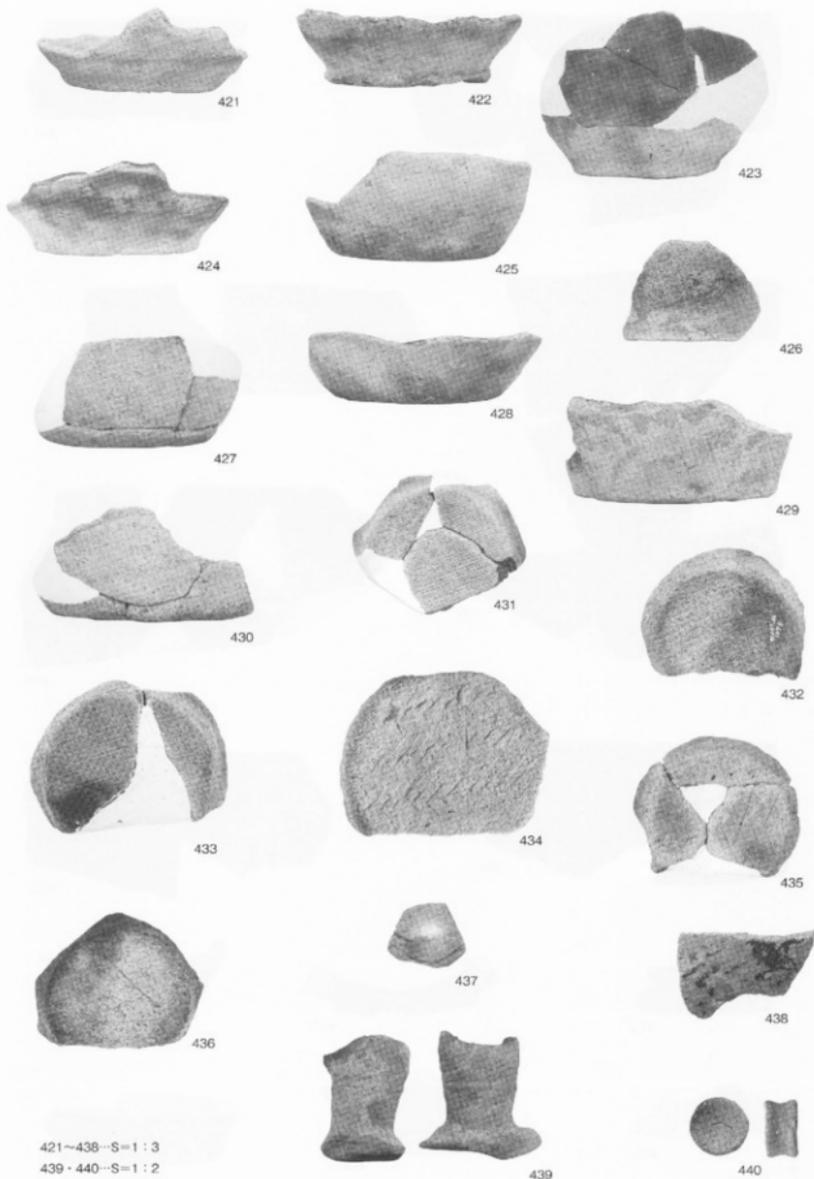
418



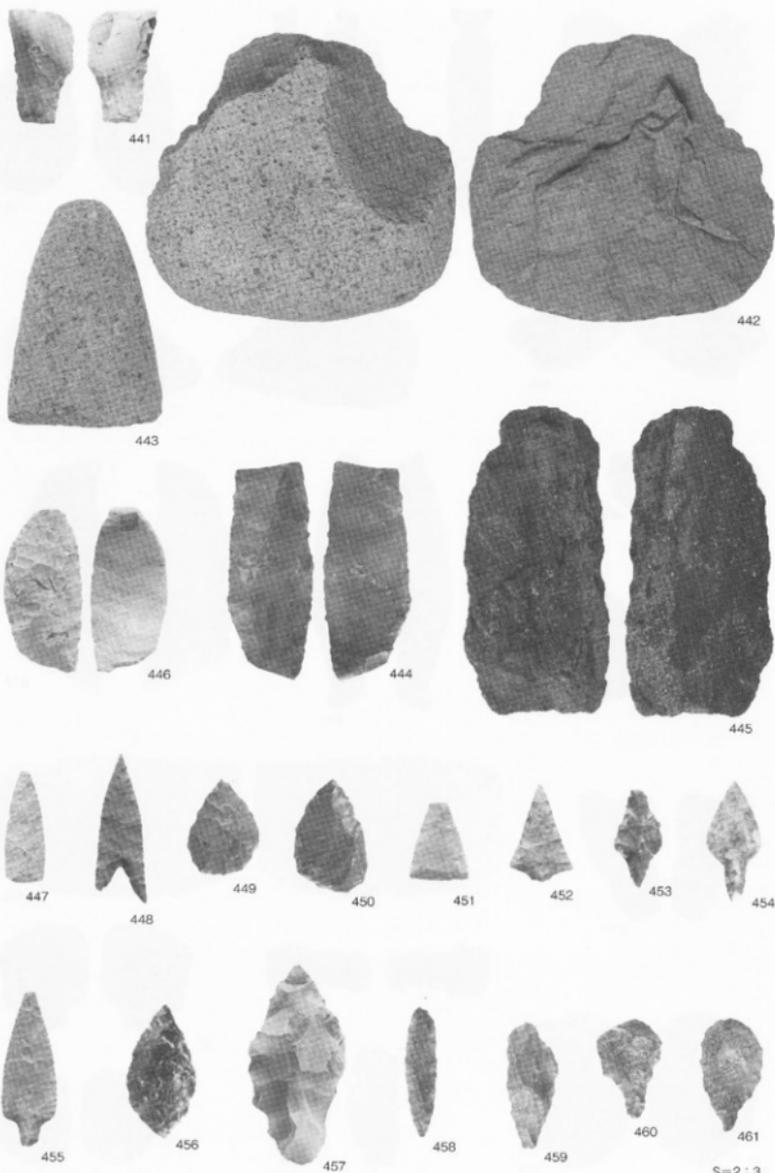
420

S=1:3

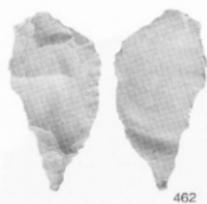
写真図版69 道上遺跡出土遺物 (31)



写真図版70 道上遺跡出土遺物 (32)



写真図版71 道上遺跡出土遺物 (33)



462



463



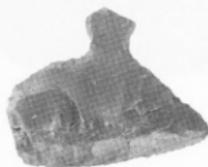
464



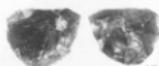
465



466



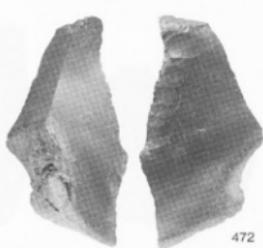
467



468



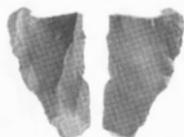
470



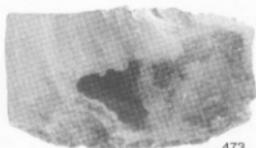
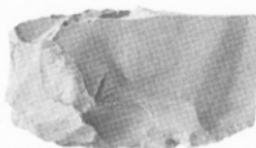
472



469



471



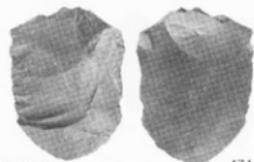
473



475



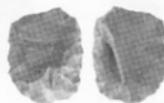
476



474



477



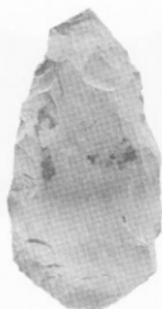
478

S=2:3

写真図版72 道上遺跡出土遺物 (34)



479



480



481



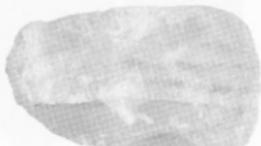
484



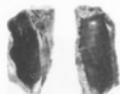
485



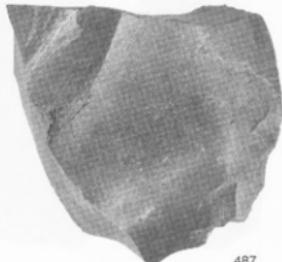
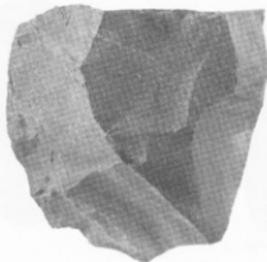
482



486



483



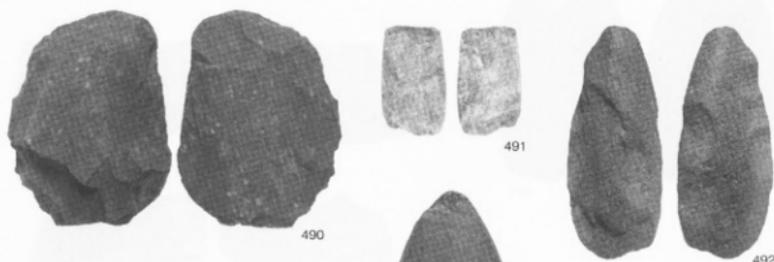
487

S=2:3



488

489



490

491

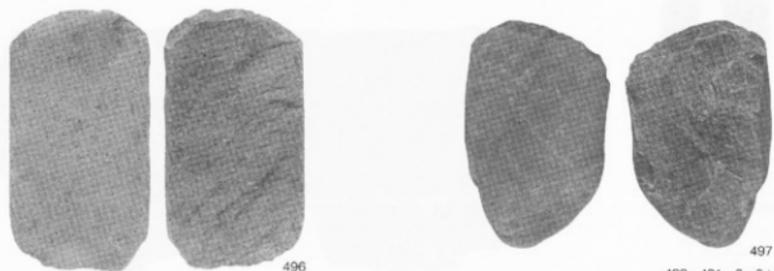
492



495

494

493



496

497

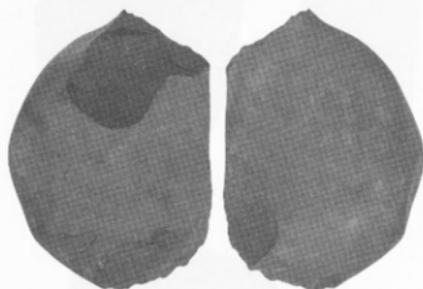
488・491--S=2:3

489・490・492--497--S=1:3

写真図版74 道上遺跡出土遺物 (36)



496



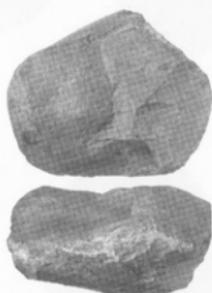
499



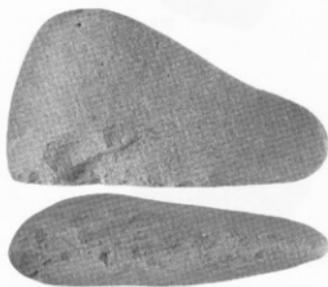
502



500

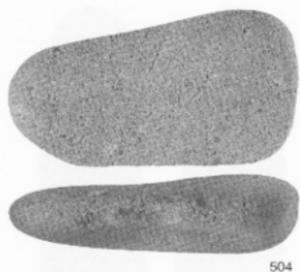


501



503

S=1:3



504



505



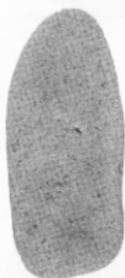
506



507



508



509



510



511



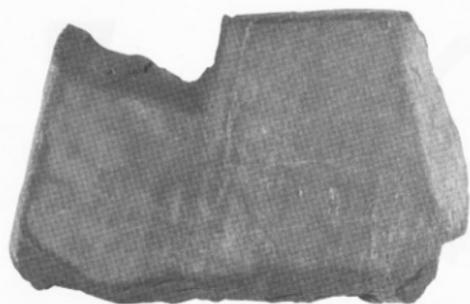
512



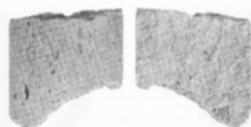
513

S=1:3

写真図版76 道上遺跡出土遺物 (38)



514



515



516



519



517



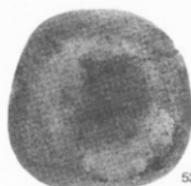
520



518



521



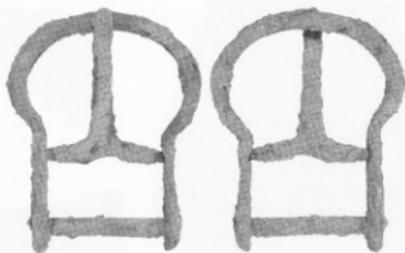
522

515-522-S=1:3

514-S=1:4



215



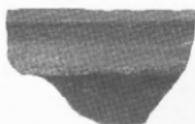
325



326



327

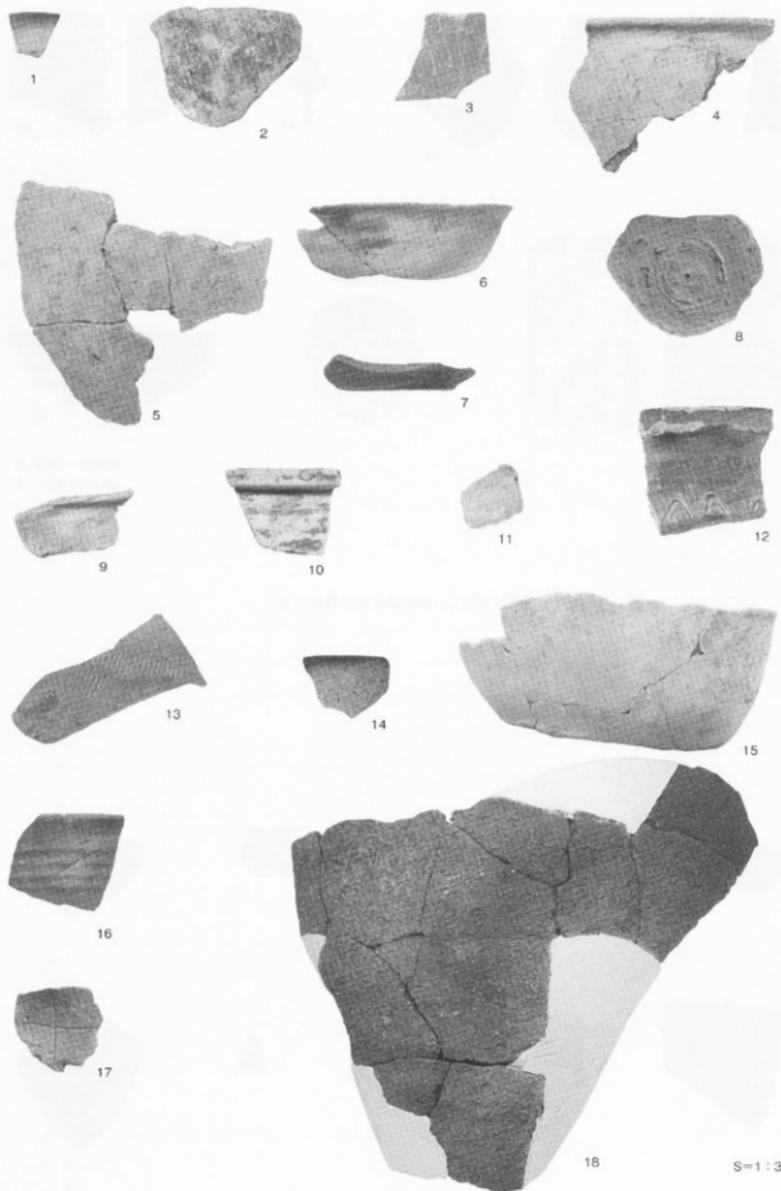


523



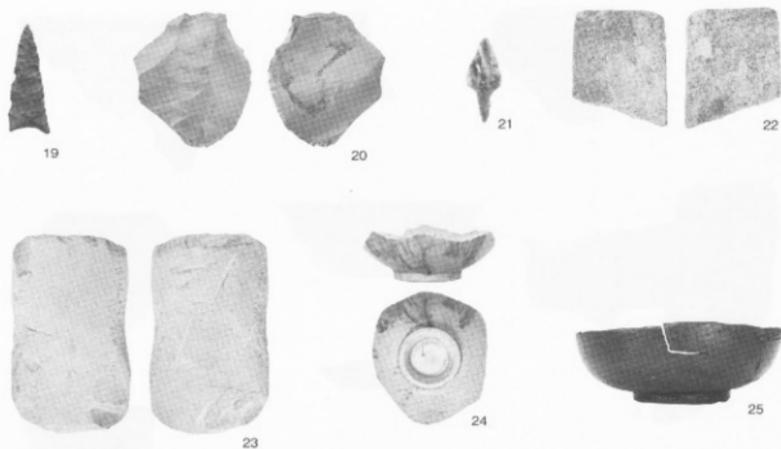
524

327--S=1:1
その他--S=2:3



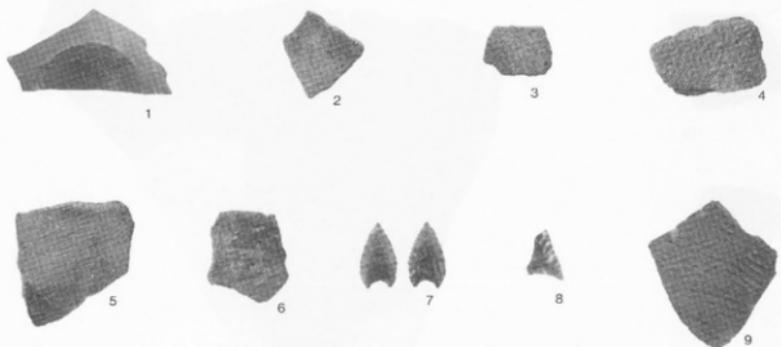
写真図版79 合野遺跡出土遺物(1)

S=1:3



19~21--S=2:3
22~25--S=1:3

写真図版80 合野遺跡出土遺物(2)



1~6・9--S=1:3
7・8--S=2:3

写真図版81 小林繁長遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	どうのうえいせきだいさんじ・あいのいせき・こばやししげながいせきはつつちようさほうこくしょ							
書名	道上遺跡第3次・合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第544集							
編著者名	丸山浩治・菊池昌彦							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡1地割185番地 TEL.(019) 638-9001							
発行年月日	2009年2月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
道上遺跡第3次	岩手県奥州市 前沢区白山字 白山前50はか	03382	NR47-0045	39度 04分 27秒	141度 09分 41秒	2007.04.11 ～ 2007.08.30	1,889㎡ (本調査: 1,499㎡ 確認調査: 390㎡)	経営体育成基盤 整備事業白山地 区に係る緊急発 掘調査
合野遺跡	岩手県奥州市 前沢区白山字 合野4-1はか	03382	ME47-0084			2007.07.02 ～ 2007.10.12	5,324㎡ (本調査: 4,350㎡ 確認調査: 974㎡)	
小林繁長遺跡	岩手県奥州市 前沢区白山字 繁長19はか	03382	LE47-1046			2007.04.16 ～ 2007.07.18	352㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
道上遺跡第3次	集落跡	平安時代	杭列 整地層 遺物捨て場 遺物包含層	3箇所 1箇所 1箇所 2箇所	土師器・須恵器片 木質遺物(木簡など) 鉄製品(鉾具) 縄文土器・石器	*杭列構成材から木簡検出 (転用品) *杭列構成材の放射性炭素 年代測定(AMS)を実施 *遺物包含層(泥炭層)から 木質遺物を含む多量の遺 物が出土		
合野遺跡	散布地	縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構 竪穴住居	1基 2棟	土師器・須恵器片			
		近世	竪立柱建物	3条 3棟				
小林繁長遺跡	散布地	近世	竪立柱建物	1棟				
要約	<p>道上遺跡・合野遺跡・小林繁長遺跡は、北上川(北西)岸に形成された沖積平野の微高地上および低位の旧河道・湿地跡に立地する。標高は31m前後で、現況は水田、畑地、道路である。道上遺跡第3次調査区は、1・2次調査区の南側にあたり、これまで調査の及んでいなかった旧河道・低湿地を主な範囲とする。発掘調査の結果、同範囲には平安時代に形成された遺物包含層が形成されていることが判明した。この包含層は本成層のため自然遺物も多く残存しており、縄文・平安期の土器・石器のほか、平安期の木質遺物が多量に出土している。また、該期の杭列が検出され、その構成材の1つに墨書が施されていることが判明した。これは「禁制」木簡で、田の所有に係わる内容が記された揭示用の杭である。それが揭示後に杭の構成材に転用されていた。平安期まで遡る禁制木簡の出土例は国内2遺跡・3例口となる。また、「字垂橋池」という字を用いた地名が記されており、当該地域における支配のあり方を考える上で極めて貴重な資料といえる。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第544集

道上遺跡第3次・合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成21年2月23日

発行 平成21年2月27日

- 編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
- 発行 岩手県南広域振興局農林部農村整備室
〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7-13
電話 (0197) 35-8443
- (財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235
- 印刷 株式会社 熊谷印刷
〒020-0066 岩手県盛岡市上田1丁目6番49号
電話 (019) 653-4151

